受け継がれる伝統と現在
―高岡・福岡に生きる人々―

地域社会の文化人類学的調査 24

2015

富山大学人文学部文化人類学研究室

はじめに

富山大学文化人類学研究室（現在正式には人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979 年の研究室創設以来、北陸の一地域で毎年調査実習（現在「文化人類学実習」）を行い、得られた知見を報告書「地域社会の文化人類学的調査」にまとめてきました。本報告書はその第 24 巻になります。

県北西部に位置する高岡市については、これまで第 12 巻『高岡市の井戸水文化』と第 19 巻『高岡市調査記録』でとりあげてきました。ただ、2005 年に高岡市に合併した福岡町についてはこれまで一度も扱ったことがなく、今回初めてとりあげることができました。

2013 年秋に学生と話し合って調査地域を高岡市中心部と同福岡町と決めてから 2014 年夏まで 10 回ほど通い、9 月には現地で一週間の泊まり込みの合宿を行って調査を進めてきました。そして秋からその成果を執筆し、本報告書にまとめてきました。

このスケジュールは例年通りのものでしたが、今年度は 2 人の教員が交互に指導するしくみを導入しました。具体的には、4、5 月は野澤、6、7 月は藤本、夏合宿は主に藤本、10 月は野澤、11 月からは藤本が担当しました。教員の負担は多少増したかもしれませんが、特に混乱や滞りもなく遂行でき、学生にとっては両教員からアドバイスが得られるなど、メリットは大きかったように思います。そのおかげではないと思いますが、13 人の学生は調査と執筆に最後まで粘り強く取り組んでくれました。

学生は各自の関心にしたがって調査地・テーマを決めていったところ、最終的に調査地は福岡町 7 人（うち平野部 3 人、山間部 4 人）、高岡市中心部 6 人になりました。テーマも例年同様幅広く、祭礼や生業、社会慣習、芸能、宗教といった文化人類学の典型的なテーマはもちろん、高岡市中心部で調査した学生は B 級グルメ、教育、NPO、企業など、より現代的なテーマにも挑んでくれました。このように本報告書の調査地は複数にまたがり、テーマも多様ですが、それでもその中には期せずして通底しているものもあるように思います。この数十年間に社会が大きく移り変わってきている中、そこに暮らす人々はそれぞれの「伝統」にどのように向き合っているのかを各学生は熱く描き出してくれているように思います。

思い起こすと、1 年前の今頃は高岡・福岡という調査地域こそ決まっていたものの、各自のテーマはあいまいなままで、実質的な調査は今年度に入ってからでした。学生たちは春におぼつかない足取りでフィールドワークを始めました。それでもほぼ隔週のペースで出かけるたび、何かをつかんで帰ってくる学生が徐々に増え、学生たちは調査を

進展させていきました。半年ほどの間に学生たちはずいぶんたくましくなりました。

またこれまで数枚程度のレポートしか書いたことのなかった彼らが、10 月末に執筆構想を立ててから毎週少しずつ書き進め、最終的には教員の予想をはるかに上回る充実した報告原稿を仕上げ、本報告書に寄せてくれました。分析・考察はまだまだとはいえ、調査データだけでいえば、すでに卒業論文の域に達するものも今年は散見されました。

本報告書は各人の調査テーマだけでなく、報告書のタイトルや章立て、表紙写真などすべて学生たちが話し合いを通じて決めていったものです。私は参考意見を述べることはあってもその通りになることはめったになく、学生たちが最終的に判断して決定していきました。最終原稿を各学生から集め、集まった原稿の書式をそろえ、それらを一つのファイルに統合し、ページ番号をいれ、目次や表紙を作成する、、、。これらの作業も学生たちが基本的に行い、教員は助言し、できあがったものを確認したにすぎません。その意味で本報告書は学生たちの手作りといえるものです。それぞれの学生にとり、実習でのフィールドワークの経験は学生時代のかけがえのない思い出となるだけでなく、この報告書は一生の宝物となることでしょう。本研究室における教育の実質的な中心は、学生が主役のこの実習の授業にあることはまちがいありません。

とはいえ、本報告書の文中には初歩的な誤りが含まれているかもしれません。学生たちの原稿を教員は幾度となく目を通し、不明瞭な文章や事実関係の誤認などないかチェックしてきましたが、必ずしも十分でないと思います。道半ばの成果であることはたしかで、そこに含まれる未熟な点などについては指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただけると幸いです。

最後になりましたが、このたびの調査の過程ではじつに多くの方々にお世話になりました。そのすべての方のお名前をここにあげることはとてもできません。章末の謝辞でお世話になった方を学生が個々にあげていますが、ここでは昨夏の合宿でお世話になった道苗達夫さんと神庭あゆみさんに感謝の意を表したいと思います。大変ありがとうございました。

2015 年 2 月 5 日

富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野
藤本　武／野澤　豊一

※これまでの実習報告書は紙媒体と電子媒体で同内容のものでしたが、今回、電子版を発行するに際して、細部に修正を施し、改訂第二版としました。また、高岡市ふくおか総合文化センターにおいて3月9日に実施した成果報告会の案内も末尾に添付しました（2015 年 3 月 31 日）。

目次

はじめに（藤本武／野澤豊一）

地域の概要

1.　高岡市の概要 1

2.　福岡町の概要 7

第 1 部　福岡町中心部の調査報告

1.　伝統と観光が融合するつくりもんまつり（能登琴乃） 15

2.　無形文化財の継承・保存活動―民間雅楽団体「洋遊会」を中心に―（本多梓）　49

3.　菅笠製作技術の保存・継承の現状―様々な立場・視点―（中村則恵） 77

第 2 部　福岡町山間部の調査報告

4.　福岡町小野の獅子舞の伝承（三島紗弓） 96

5.　寺院と地域社会のつながり―小野の西照寺を例に―（馬川法子） 116

6.　小野集落における結婚式および結婚観の変化（鳥田萌子） 133

7.　中山間地の農業―沢川の昔と現在の稲作―（中島佳祐） 146

第 3 部　高岡市中心部の調査報告

8.　成功する B 級ご当地グルメとは―『高岡流お好み焼きととまる』を事例に―（山下恵実） 166

9.　地域コミュニティーが作る高岡七夕まつり（船越楓） 192

10.　金屋町御印祭に見る祭りの存続の意義（前畑和彦） 216

11.　高岡の鋳物文化の現状―伝統と革新―（宮川玲奈） 235

12.　「ものづくり・デザイン科」における伝統工芸と職人の想い（尾谷沙霧） .. 246

13.　本町における空き家と住民の意識（上野慎司） 262

（資料）実習成果報告会「富大生の目線でふるさとを再発見！」（2015 年 3 月 9 日）案内

地域の概要

1.　高岡市の概要

1-1.　高岡市の自然と地形

高岡市は富山県西部に位置し、県下第二の市である（図 1)。北側に隣接する氷見市との境から福岡地区にかけて山々が連なり、二上山を中心に二上山丘陵と西山丘陵には高い山が集まっている。二上山は高岡市の最高峰で、標高 274m の山である。

庄川と小矢部川を有し、小さい川も含めると、十数本の川が市内を流れている。北側には日本海があり、水運に恵まれている。庄川と小矢部川は江戸時代より木材の運搬に利用されている。特に小矢部川は県内 7 大河川のうち最も流れが緩やかな川であり、水量が豊富なため、その河口は古くから港として利用されてきた。

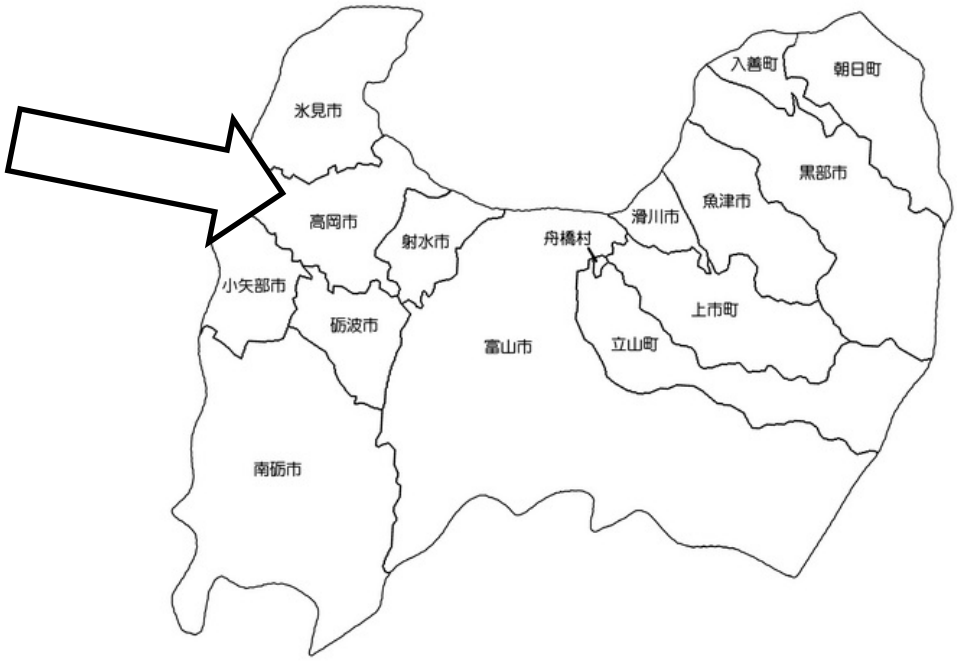

図 1.　富山県内における高岡市の位置（ウェブサイト「富山県映像センター」を参考）

気候は日本海側気候に属している。冬には、寒冷で乾燥した季節風が暖流の対馬海流上で水蒸気を蓄え、日本アルプスにぶつかるため、曇天の日が多く、降雪量も多い（図 2)。

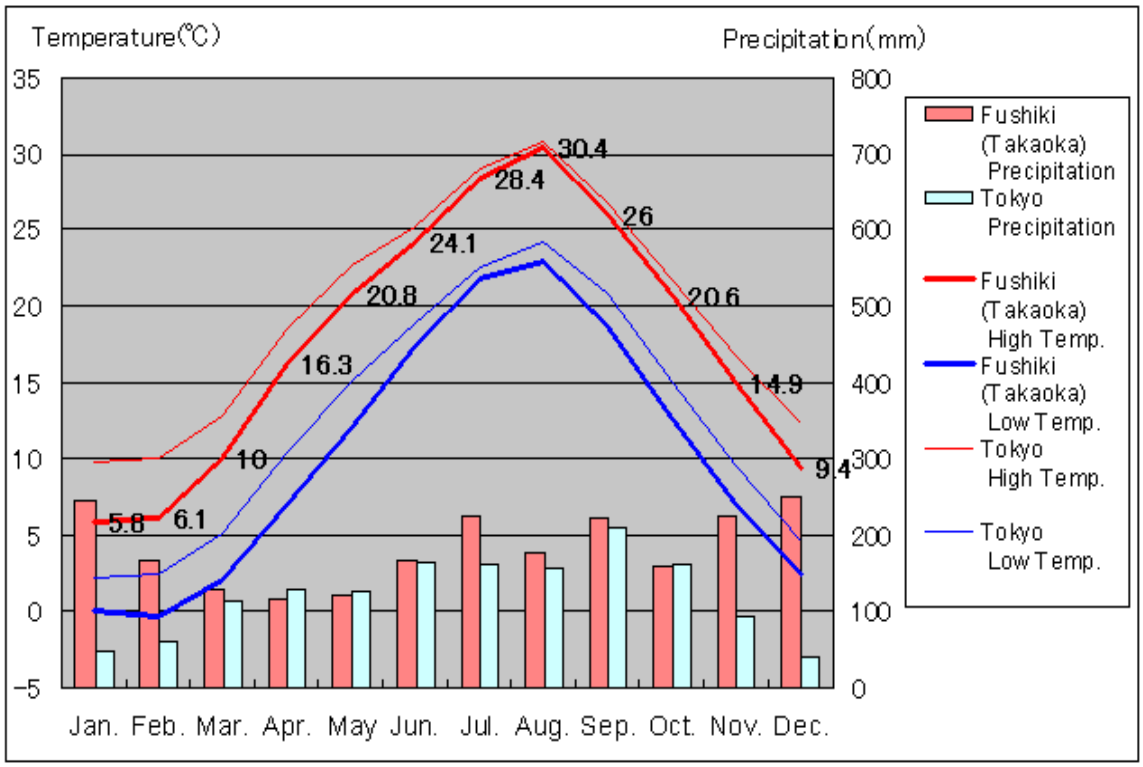

図 2.　高岡市の気温および降水量のグラフ

（http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/kion/Japan/Fushiki_Takaoka.htm より）

1-2.　高岡市の歴史

高岡は、奈良時代に伏木の台地に越中国府が置かれ、この地方の政治経済の中心地として栄えていた。そのため、天平 18 年（746 年）に国司として大伴家持が赴任した。家持は在任した 5 年間に、この地の自然などを詠んだ 220 首余りの秀歌を残している。これが、高岡市が『万葉の里』と呼ばれている由来である。現在行われている、高岡万葉まつりのメインイベントである万葉集全 20 巻朗唱の会は、この文化を受け継いだものである。

江戸時代、高岡の地は『関野』と呼ばれていた。この頃に富山を統治していたのは、加賀藩 2 代目藩主前田利長（1562～1614）（以下、利長公とする）である。利長公が高岡の町を開いた慶長 14 年（1609 年）より、近世高岡の文化が始まることとなる。当時は、5000 人にも満たない人々で町が構成されており、高岡城の周囲や南の台地に、侍屋敷が配置されていた。

『高岡』の地名は、利長公が慶長 14 年（1609 年）に、詩経『鳳凰鳴矣、于彼高岡』【鳳凰鳴けり彼の高き岡に】からとって『高岡』と名付けられたと伝えられている。高岡という名が史料に記載された当初は『高おか』と表記されたが、後に『高岳』と記さ

れていた。

元和元年（1615 年）、高岡城は江戸幕府が出した一国一城令によって廃城されてしまう。当時、「城の無い城下町は衰退していく」と言われていたが、3 代藩主前田利常の「高岡の人々の転出を規制し、商業都市への転換を図る」という政策が功を奏したため、高岡は発展の道を辿り始めた。こうして高岡の『商工業の町』としての歴史が始まっていく。古城跡には藩米蔵が置かれ、多くの商人により米相場が形成されるようになった。そうして、高岡は加越能三国（加賀・越中・能登）では最大のコメの生産量を誇り、江戸や大坂まで流通した越中米流通の中心地として繁栄した。さらに、その専売品であった塩や鳥、魚類は高岡に集められ、藩内各地へ供給された。綿、布、鋳物などの生産、流通も町経済の発展にとって重要なものであった。

明治時代には、高岡の市域は何度か変化していった。明治 2 年（1869 年）藩籍奉還が行われ、高岡は金沢藩に属することとなる。明治 4 年（1871 年）には廃藩置県が行われ、金沢藩は金沢県へと変わった。また、明治 16 年（1883 年）に『明治 16 年太政官布告第 15 号 富山佐賀宮崎三縣設置』により、旧越中国一円（礪波郡・射水郡・婦負郡・新川郡）を富山県として設置し、高岡は富山県に属することとなる。その 6 年後の明治 22 年（1889 年）4 月 1 日に市制が施行され、高岡市となった。

昭和に入ると、高岡は多くの合併を繰り返していく。戦後の高岡市は、食糧難に苦しみ、その解決策として野菜産地の西砺波郡福田村に合併を働きかけ、昭和 24 年（1949 年）に合併した。この頃から高岡は次々と合併を行い、さらに大きな市となっていく。昭和 41 年（1966 年）2 月には、現在高岡市の南部に位置する戸出町、中田町を編入合併し、平成 17 年（2005 年）11 月 1 日に西砺波郡福岡町と合併し、現在の高岡市が発足した。

これまで述べたように、高岡は古代から政治経済の中心地のひとつとして栄えてきた。しかし現在、事業者数及び従業者数の減少や空き店舗の増加など、商業地としての魅力や市全体としての活力は衰えてきている。そこで近年、2015 年春の北陸新幹線開通に向け、高岡駅の整備や、駅前でのイベント開催など、高岡駅を中心として市を盛り上げようとする様々な取り組みが行われている。

1-3. 高岡市の人口

高岡市の平成 26 年（2014 年）の人口は 171,629 人(外国人は含まれない)である。1920 年から 2010 年までの高岡市の人口推移を、以下の図に示した。第一次ベビーブームが起こった 1947 年から 1949 年にかけて人口は急増し、その後も増加の一途をたどっている。しかし、1985 年をピークに減少傾向にある（図 3）。人口の減少には少子高齢化による自然減に加え、転出超過による社会減も大きく影響している。射水市への転出が減少する一方で、富山市への転出が続いているとのことだ。

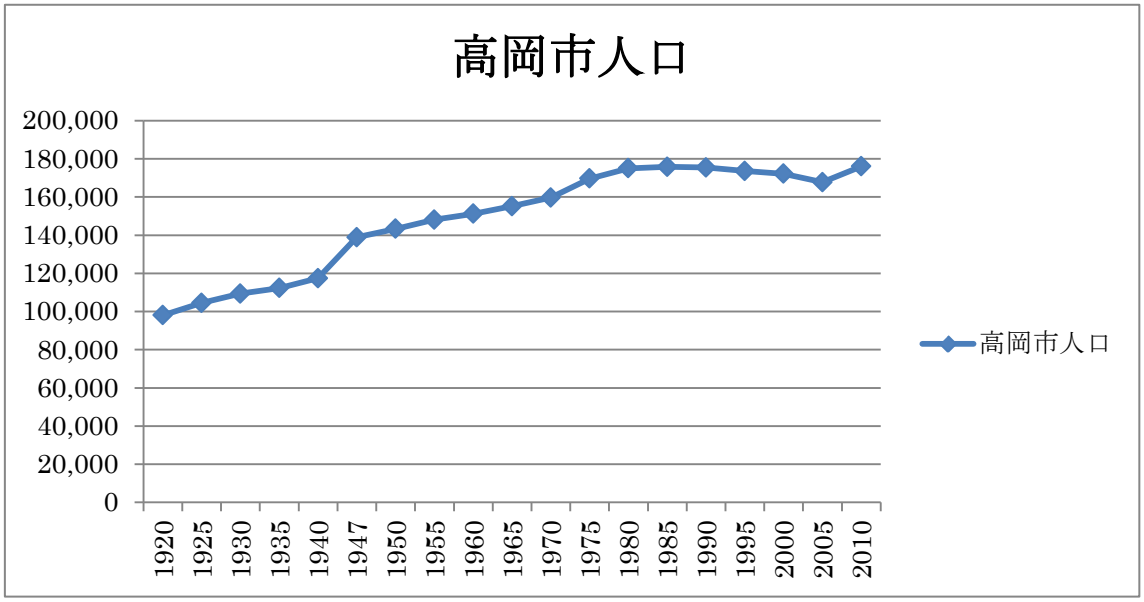

図 3.　高岡市人口の推移（ウェブサイト「人口・面積・人口密度」を参考に作成）

次に、高岡市における 2012 年 12 月 31 日現在の年齢別人口の割合を、図 4 に示した。この図 2 からわかるように、高岡市では少子高齢化が進み、65 歳以上の人口の割合が 21%を超える超高齢社会であると言える。

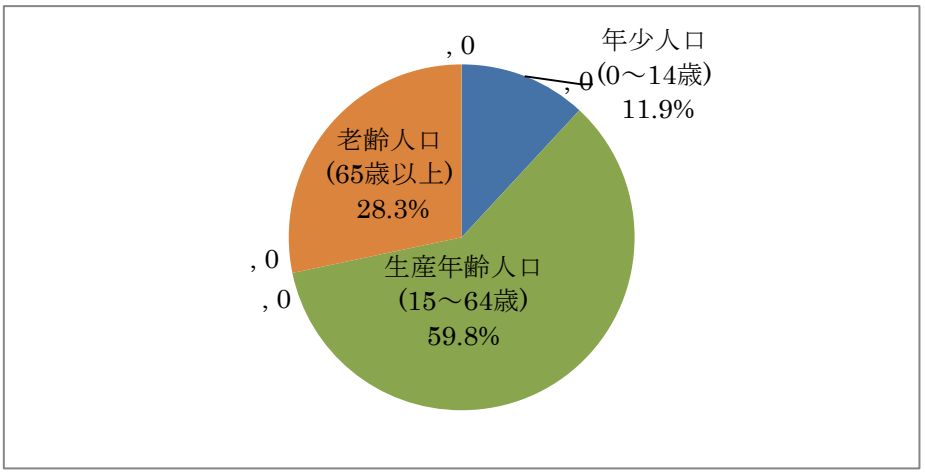

図 4.　2012 年の高岡市年齢別人口割合（高岡市ホームページより作成）

1-4.　高岡の産業

高岡市の産業別就業人口の割合を図 5 で示したが、第 2 次産業と第 3 次産業の割合が全体の 98%を占めている。第 1 次産業の就業人口は 531 人、第 2 次産業は 28505 人、第 3 次産業は 65304 人となっている。これを見ると、第 3 次産業に従事する人が 6 割以上を占めていることが分かる。第 3 次産業の中でも、卸売業・小売業に従事する人が最も多く 20200 人、続いて医療・福祉に従事する人が 10027 人とこの 2 つで第 3 次産

業のうちの約 4 割を占めている。

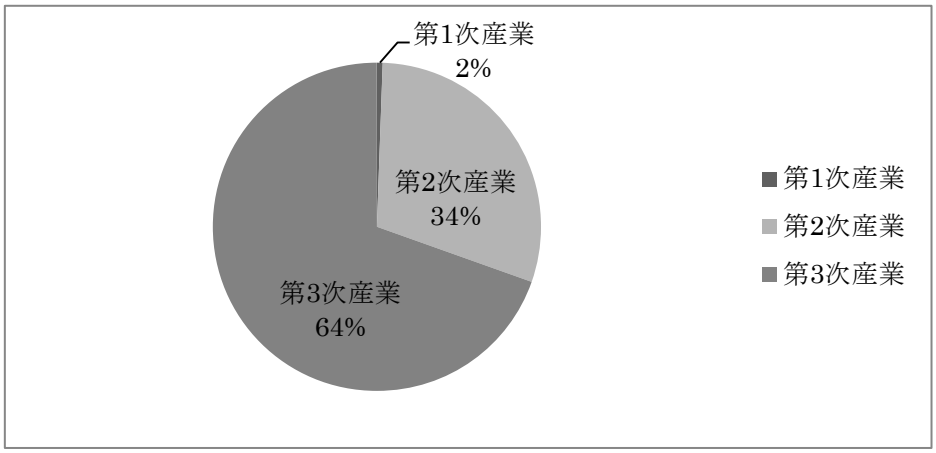

図 5.　高岡市の産業別就業人口の割合
（高岡市 HP『高岡市統計書平成 25 年度版』をもとに作成）

また、第 2 次産業の中では伝統工芸の高岡銅器に代表される鋳物産業が古くからさかんであり、その技術を活かして発達したアルミニウム産業も現在ではさかんである。

1-5.　高岡市の年中行事・祭り・イベント・文化

高岡市では、年間を通じて様々な行事が行われている。次の表 1 では、代表的なものをいくつか挙げた。

表 1. 高岡市の年中行事・祭り・イベント

1 月	射水神社左義長、日本海高岡なべ祭り、勝興寺御満座法要
2 月	
3 月	
4 月	気多神社春季例大祭(にらみ獅子)、二上射水神社築山行事
5 月	高岡御車山祭、伏木曳山祭り(けんか山)
6 月	国泰寺開山忌、御印祭
7 月	戸出七夕まつり
8 月	高岡七夕まつり、伏木港まつり
9 月	前田利長公顕彰祭、中田かかし祭、高岡大仏まつり、福岡町つくりもんまつり
10 月	高岡万葉まつり
11 月	庄川鮭まつり
12 月	

表 1 にあるように、高岡市では、さまざまな年中行事が行われている。その中のいく

つかを紹介する。

気多神社の春祭りは、毎年 4 月 18 日に行われる。神様が越中の国を巡るという意味を持つ「御神幸の儀」、その後に獅子が邪気をはらいながら、みこしを先導して境内を二周半周り、みこしが終わると「にらみ獅子」の舞が行われる。

5 月の高岡御車山は、毎年 5 月 1 日に行われる。前日 4 月 30 日には宵祭がある。5 月 1 日には、7 基の御車山が決まった順路に従って、町の中を巡行する。高岡市民はじめ、多くの観光客が訪れている。昭和 35 年（1960 年）に重要民俗資料に指定されており、昭和 42 年（1967 年）には、富山指定有形文化財（工芸）に指定されている。

5 月 15 日に行われる伏木曳山まつり（けんか山）は、伏木神社例大祭の別称で、若連中が伏木の街中、勇壮な曳台を引き廻し、日本海に春が来たことを告げる重要な祭りである。最大の見所は、夜に行われる「かっちゃ」で、やま同士が全力でぶつかり合い、お互いの見栄を切りあうという、荒々しくも神々しい、この祭りのクライマックスである。

6 月の 19 日、20 日には、金屋町で御印祭が行われる。鋳物の町である金屋町で前田利長への感謝の祭りである。前夜祭では、石畳と格子造りの町並みを、町民らが「弥栄節（やがえふ）」を歌い、踊り流す。

8 月は、高岡七夕まつりがある。JR 高岡駅前の商店街を中心に行われる。七夕祭りとしては日本海側でも有名なもののひとつである。6 メートルから 20 メートルの高さのササを、短冊や吹き流し、赤い提灯などで飾りつけて通りに飾る。毎年 8 月 1 日から 7 日の一週間続く、長くこの地で親しまれてきたまつりである。

10 月の頭には高岡万葉まつりがある。『万葉集』の代表的歌人である大伴家持が国主として在任していたことから行われる行事である。なかでもメインイベントの「万葉集全 20 巻朗唱の会」は、連続 3 昼夜にわたって万葉集全 20 巻を、2,000 人を超える人がリレー方式でうたい継ぐというものである。市内はもとより県内外からも多くの人々が参加する。また市内には、日本で初めて『万葉集』の「歌」に関して本格的な展示を試みた施設である「高岡市万葉歴史館」がある。

2. 福岡町の概要

2-1.　福岡町の自然・地形

福岡町は、平成 17 年（2005 年）に高岡市と合併した町で、富山県北西部の石川県との県境に位置している（図 6）。総面積は約 58.7 ㎢であり、約 4 分の 1 が平地、4 分の 3 が丘陵地である。福岡町の総人口の約 90%が平地に住んでいる。この平地は砺波平野の北端部にあたり、ここに町の中心部がある。旧北陸道の両側に町家が立ち並び、町並みを形成している。砺波平野は庄川と小矢部川及び小河川によってつくられた扇状地平野であり、福岡町の平地は小矢部川と庄川との複合的扇状地となっている。福岡町内には小矢部川、岸渡川、黒石川、子撫川などが流れており、町を潤している。岸渡川は町の中心部を流れる川で、岸辺には桜並木があり、桜の名所として名高い。西部丘陵地は元取山を中心に北に二上山、南に稲葉山と砺波山を配し、石川県と富山県に跨る宝達丘陵の主峰宝達山に連なっている。この宝達丘陵地内には地すべり地形や多くの滝が見られ、子撫川の侵食によりできた落差 2m の階段状に落ちる滝は五位滝の沢と呼ばれる。別名「神の渋」とも呼ばれ、その付近は「ほたるの里」としても知られている。

図 6.　福岡町の地図（高岡市公式ホームページより作成）

2-2.　福岡町の歴史

福岡町では小野（後に詳しく記す）や五位から縄文時代後期のものと推定される石器が見つかっている。約 1～2 万年も前から福岡の地では人が暮らしていたことが分かる。

福岡の名前が具体的に記録に現れるのは、明暦 2 年（1654 年）の「明暦元年分、利波郡福岡新町、地子米之事」と記された町税の帳簿である。町成立当時は、新町と称していたが、いつからか福岡町と呼ばれるようになった。

この当時の福岡町は「町」と称してはいるが、石動・高岡のような「町方」ではなか

った。住民の身分はあくまで農民で、住民たちは年貢米を納めていた。しかし、この福岡町の住民には商業を営むことが許されていた。このような農村でありながら町的な性格を与えられた村を「町立」の村と呼んだ。

昭和 15 年（1940 年）から昭和 29 年（1954 年）にかけて町村合併が行われ、福岡町、山王村、大滝村、西五位村、五位山村、赤丸村が合併し、現在の福岡町に至る。

その後、平成 16 年（2004 年）に「高岡市・福岡町合併協議会」が発足される。そして、平成 17 年（2005 年）11 月 1 日に福岡町は高岡市に編入され、現在の高岡市が誕生した。

2-3. 福岡町の人口

平成 26 年（2014 年）11 月末の時点で、高岡市の人口 175,807 人のうち旧福岡町の人口は 13,106 人となっている（図 7）。

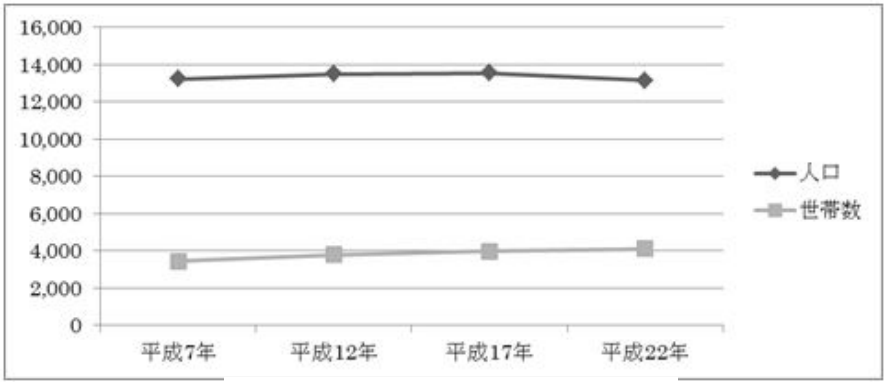

図 7. 福岡町の人口推移

人口は平成 7 年（1995 年）に 13,220 人、平成 12 年（2000 年）に 13,498 人、平成 17 年（2005 年）に 13,544 人、平成 22 年（2010 年）に 13,150 人とほぼ横ばいに推移している。一方、世帯数は平成 7 年（1995 年）に 3,426 世帯、平成 12 年（2000 年）に 3,781 世帯、平成 17 年（2005 年）に 3,956 世帯、平成 22 年（2010 年）に 4,091 世帯と、若干の増加傾向にある。

2-4. 福岡町の産業

福岡町周辺の小矢部川沿岸一帯には古くより菅が繁殖しており、寛文 10 年（1670 年）に藩主の前田綱紀が菅の栽培を推奨してから、農家の副業として菅笠の生産が盛んになり、全国に販売されていた。江戸時代には「加賀の菅笠」という名は全国に知れ渡るようになり、現在も全国シェアの殆どを福岡でつくった菅笠が占めている。明治 12 年（1879 年）の『町分限見込入札扣』（寿原家文書）には、福岡町で町万雑[1]を負担し

[1]用水路や農道などを整備するために町民から集める税。

ている 235 人の内、71 人が菅笠の商人であり、それらの人々が町万雑の 67%を負担していた、と記されている。そのため、菅笠商を営んでいた人々は裕福で、旧北陸街道沿いには立派な千本格子を持つかつての菅笠商家が残っている。明治期～大正期にかけて菅笠生産量はピークに達したが、戦後から現在にかけては減り続けている。

大正 6 年（1917 年）、上向田地区で鶏の人工孵化の成功を皮切りに、福岡町では養鶏が盛んになった。昭和に入ると、よく卵を生む鶏を作り出す研究が始まり、昭和 5 年（1930 年）には年間 338 個、翌 6 年（1931 年）には年間 316 個の産卵に成功し、農林水産省の産卵検査において二年連続産卵数日本一を記録した。その後、孵化した雛を日本全国だけでなく朝鮮や台湾、中国まで出荷していたが、戦争の激化に伴う飼料事情の悪化により、鶏の数はだんだん減っていった。戦後は戦前のような発展はみられなかったが、伊勢養鶏園は昭和 33 年（1958 年）に年間 365 個の産卵世界新記録を作った。

慶応 2 年（1866 年）に矢部の茂古沼太郎吉が大和郡山から大鯉数十尾を買い入れ、福岡の豊富な水資源を利用して、養鯉の増殖を始めた。大正の初期頃には収益や規模が拡大した。戦争とともに養鯉を営む家は減っていったが、昭和 22 年（1947 年）ごろから矢部を中心に復興しはじめた。その後、高松宮殿下の視察もあり、再び大きく発展し始めた。食用の鯉の出荷はすべて富山県内であるが、近年国民生活の向上とともに鑑賞鯉の出荷が北陸を中心に増えてきた。昭和 42 年（1967 年）には町営養鯉センターが作られるなど、福岡の養鯉を発展させるための工夫がなされている。

2-5. 福岡町の年中行事とイベント

福岡町の年間行事では、まず 4 月中旬に岸渡川沿いで福岡さくらまつりが開催される。岸渡川舟くだりや能楽公演、屋台村やフリーマーケットなどさまざま催しが行われている。この他にも、特設ステージを設け、雅楽の舞楽公演も行われる。また、夜には岸渡川沿いの約 1000 本の桜がライトアップされ夜桜鑑賞も楽しむことが出来る。

7 月下旬に行われるふくおか七夕納涼祭は福岡町の中心市街地で行われている。「越中福岡名物つくりもん焼き」や地元の夏の食材を使った夜店等が多数出店している。

8 月第一日曜日に土屋親水公園（小矢部川左岸土屋橋詰）にて、リバーサイドフェスタが開催される。昼の部は「鯉のつかみどり大会」等の体験イベント、夜の部では特設舞台での催しのほか、花火大会が行われる。

9 月 23 日と 24 日には、福岡町の中心部でつくりもんまつりが行われる。野菜や草花などの農作物を利用して作られた「つくりもん」が町の至る所に展示され、人々はそれを見ながら町を歩き回る。もともと町の村々で行われる小さな祭りであったが、現在では例年 10 万人以上の来客数を誇る祭りとなっている。つくりもんのコンテストも行われ、その特色ある祭りは“奇祭”として全国に知られる福岡町の観光名物となっている。

11 月上旬にはふくおか総合文化センター（U ホール）で「ふくおか産業フェスティバル」が行われる。福岡町地域で収穫された「安納いも」でつくったスイーツの即売や

富山県総合養鯉品評会が行われ、鯉なべも振る舞われる。

3 月上旬には「ふくおかひなまつり」が行われる。旧家に保存されている段飾りや歴史ある雛人形を雅楽の館をはじめとした町中の町屋に展示している。

また、福岡さくらまつり、つくりもんまつり、ふくおかひなまつりでは民間雅楽団体「洋遊会」による雅楽演奏や舞楽公演が行われている。福岡町の雅楽は市の無形文化財に指定されており、洋遊会はその保持団体として認定されている。

表 2. 福岡町の年間行事

4 月中旬	福岡さくらまつり
7 月下旬	ふくおか七夕納涼祭
8 月上旬	リバーサイドフェスタ
9 月 23 日、24 日	つくりもんまつり
11 月上旬	ふくおか産業フェスティバル
3 月上旬	ふくおかひなまつり

2-6. 小野（この）の概要

2-6-1. 小野の人口と地理

小野は富山県高岡市福岡町の中心部から北西約 6 キロメートルに位置する山間集落である。小野の人口は、平成 26 年 4 月 1 日の時点で、135 人、世帯数は 47 世帯で構成されている。高齢者人口は 61 人で、高齢化率は 45.5%となっている。面積は約 500 ㎢とされている。

図 8. 福岡町における小野の位置（ウェブサイト「グーグルマップ」より作成）

2-6-2. 小野の地形

小野は、福岡町の五位山地区に分類される。五位山地区は、栃丘、五位、沢川（そうごう）、小野、

西明寺の 5 集落からなる。

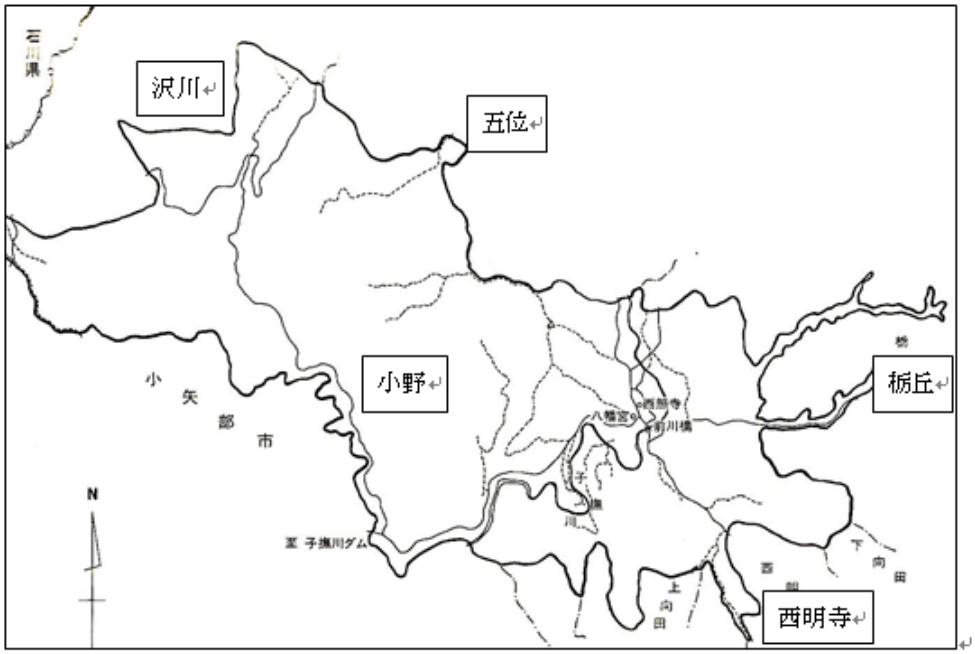

図 9.　五位山地区の地図（『乎乃卿の今昔』より作成）

2-6-3.　歴史

小野を流れる子撫川流域地帯から、剥片石器、打製石器、石斧、須恵器破片などが出土しており、縄文時代頃から古代人が居住していたことが証されている。

平安時代の延長 8 年（930 年）、能登守であった源順（みなもとのしたごう）が編纂した、『倭名類聚抄』に初めて「乎乃（おの）（小野）」と記されている。これが、「小野（この）」の地名が記録された最初である。小野に伝わる伝説では、文明 2 年（1470 年）、現在の西照寺所在地から、香り良い煙が立ち上っていたことから、「香野（こうの）」と呼ばれるようになり、それが、現在の「小野（この）」の地名の由来だとされている。

大正期より、農産物の生産量が増加したため、牛馬車による運搬道が必要になってきた。そのため、西明寺から小野、五位、沢川を繋ぐ道路が整備された。昭和 23 年（1948 年）、戦後復興の政策によりこの道路の一部が県道に昇格され、これによって輸送事業が拡大した。

昭和 29 年（1954 年）9 月 10 日より、加越能鉄道株式会社の運営によって五位山線循環バスの運行が始められたが、昭和 53 年（1978 年）4 月 30 日の最終バスを最後に廃止された。昭和 53 年（1978 年）5 月 1 日から、町営バス並びに中学生用スクールバスの運行が始まった。平成 17 年（2005 年）に福岡町が高岡市と合併すると、高岡市公営バスが設置され、運行は福新交通に委託された。

現在では休校となっている淵ヶ谷小学校は、明治 6 年（1873 年）、小野の西照寺に小

淵小学校として開設された。その 6 年後、淵ヶ谷（現在は棚原と併合され、五位となっている）に拡淵小学校が開設され、明治 27 年（1894 年）に、小淵・拡淵両校を併せて淵ヶ谷小学校となった。大正 3 年（1914 年）に、現在地に校舎が移転した。平成 15 年（2003 年）3 月に休校となり、以降はスポーツ少年団の合宿、高岡フィルハーモニー管弦楽団の練習場所として利用されている。現在では、校舎を利用した交流館を新設するための工事が行われている。閉校になってからは五位地区の児童は、福岡町にある福岡小学校に町内バスで通っている。

2-6-4. 小野の産業

明治時代には、当時の西照寺の住職が、石川県小松市の僧侶に山林開発の技術者の派遣を依頼した。丁度その寺の檀家に、石川県能美郡大杉村の黒炭生産に従事する一族が存在したので、そこから 5，6 名の熟練者が派遣された。こうして、小野で炭焼きが行われるようになった。大杉の技術が取り入れられた小野の黒炭は、燃焼時間が長時間続く特殊な性質により名声を高め、昭和期には出荷数を増やした。しかし、現在では後継者が途絶え、製炭は行われていない。

小野で養蚕が始まったのは江戸時代初期とされる。明治、大正初期にかけて生産は多くなかったが、第一次世界大戦の影響で絹糸は日本唯一の輸出産業として飛躍を続け、これに順応して小野村養蚕組合が組織された。桑園の開拓と飼育蚕具の調達が行われ、養蚕体制が整備されたが、昭和 12 年（1937 年）、日中戦争の開戦によって国際情勢が不安定化し、生糸の輸出が停止され、昭和 15 年（1940 年）、養蚕組合は解散した。

藩政時代には田畑が狭く人力農耕であったが、明治期に入って、いままでの畑地やゆるやかな山裾に開田が盛んに行われた。一反以上の大型の水田が次々と開かれ、馬による畜力農耕が進められた。この馬は、3、4 戸での「共同飼い」であり、約十頭の馬が村内で飼われていた。また、この馬は農耕に利用されるほか、農閑期の木炭搬出の重要な動力源でもあった。戦時中には、馬が次々と徴発され、代わりに牛が導入されたが、まもなく耕作はトラクターなどの機械農業になっていった。

2-6-5. 小野の集落の文化

伝承された時代も場所も分からないが、糸岡神楽といわれた大神楽の演技が保存され、西照寺の向かいに位置する八幡宮の慶事や寺院の法要の際に奉納されていた。

また明治 20 年前後には近隣の三日市獅子方連中を招き、獅子舞を教わったとされる。獅子舞については 4 章で詳しく記述する。

8 月 10 日には盂蘭盆会という盆踊りが西照寺の境内において行われていた。大正になると 9 月 16 日に、八幡宮の境内にて行われるようになる。しかし、盆踊りの唄い手の後継者を得ることが出来ず、昭和初期に断絶した。終戦後、西照寺境内や淵ヶ谷小学校の校庭で、レコードによる盆踊りの会が開催されたが、数年で開催されなくなった。

他にも、12 月 9 日に山仕事を休み、道具にお供え物をする山祭りや、7 月 7 日の地蔵祭りなどがあったが、現在ではほとんど行われていない。この地蔵祭りに関して、また他に、現在でも行われている報恩講など、西照寺の行事については 5 章で記述する。

参考文献

梅沢直正（2004 年）『とやままつりガイド』（北日本新聞社）
高岡市市制一〇〇年記念誌編集委員会（編）（1991）『たかおか―歴史との出会い』
福岡町役場発行（1969）『福岡町史』
山本善次(1988)『乎乃卿の今昔』

参考 URL

「いこまいけ高岡」
（http://takaoka.zening.info/fukuoka/index.htm；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「けんかやま　伏木曳山祭」
（http://www.kenkayama.jp/；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「高岡開町 400 年記念事業公式ホームページ」
（http://www.takaoka400th.com/index.php；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「高岡市公式ホームページ』
（http://www.city.takaoka.toyama.jp/kanko/bunka/shisetsu/index.html；2015 年 1 月 19 日閲覧)
「高岡市・福岡町合併協議会」
（http://www.city.takaoka.toyama.jp/somu/0301/gappei/index.html；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「高岡市立博物館」
（http://www.e-tmm.info/jyousetu.html；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「ほっとホット高岡」
（http://www.city.takaoka.toyama.jp/index.html；2015 年 1 月 19 日閲覧）
「旅行のとも、ZenTech」
（http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/；2015 年 1 月 19 日閲覧）
特定非営利活動法人日本地域福祉研究所「過疎化進行する中山間地におけるソーシャルワークによる支援の今後支援を探る」
（http://www.jicw.jp/seminar01/20-1.html；2015 年 1 月 8 日閲覧）'

第１部　福岡町中心部の調査報告

伝統と観光が融合するつくりもんまつり

能登　琴乃

はじめに

つくりもんまつり。その名前を聞いただけでは、何をする祭りなのか見当もつかない。しかし実際にその作品を目の当たりにすれば、誰もが感嘆の声を上げるに違いない。

「つくりもん」とは野菜や草花などの農作物を利用して作られた造形物である。私は2013年の夏に初めて福岡町を訪れた際、福岡駅の土産物屋に展示されていたつくりもん作品のレプリカ（複製）を見て衝撃を受けた。今までに見たことのない、非常にユーモラスな芸術作品に心を奪われたのである。その2ヶ月後に開催されたつくりもんまつりに足を運び、迫力ある本物のつくりもんを眺めながら、平凡な祭りとは異なる独特の雰囲気を味わった。この祭りは一体どんな人たちがどんな思いで作り上げているのだろうか…。この祭りに対する興味はますます大きくなり、私はつくりもんまつりを本格的に調査することに決めた。

調査では、実際につくりもんを祭りで出展しているさまざまな団体に聞き取りを行い、作品の制作現場を視察した。また、祭りに訪れた一般住民の方にも聞き取りを行った。この調査報告では、住民の方々に伺った昔と現在のつくりもんまつりの様子を比較しながら、伝統行事と観光事業としての両方の面を合わせ持った祭りの魅力を伝えたい。

1.　「つくりもんまつり」の概要

「つくりもんまつり」とは、毎年9月23日と24日に高岡市福岡町の駅周辺で行われる祭りである。露店が並び、ステージで歌謡ショーや吹奏楽の演奏などが行われ、町内外の人々が賑やかに集う様子は通常の祭りと変わらないが、その最大の特色は町の至る所に置かれた「つくりもん」作品である。野菜や草花、果物といった農作物を利用して、人物や動物、キャラクターなどに見立てた作品をグループで展示し、賞を競う。参加団体の数は例年40前後あり、同じ団体が2つ以上作品を出していることもある。2013年、2014年は共に全部で42の作品が出展された（表1）。町の各所にある作品を人々は歩いて見て回る（図1）。天気に多少左右されることもあるが、毎年23日が祝日であることもあり、例年10万人以上の来客数を誇っている。2014年は23日に祝日と晴天が重なったこともあり、2日間で約13万人が訪れ、近年では多い方であったという。その特色ある祭りは“奇祭”として全国に知られ、福岡町の観光名物となっている。

表 1.　2014 年のつくりもん作品名と参加団体一覧

No.	作品名	団体名
1	曳山	爆笑会とゆかいな仲間たち
2	ドクターイエロー	西日本鉄道OB会　高岡支部
3	午（うま）	西日本鉄道OB会　高岡支部
4	富山銀行60周年　番犬トミーとフナッシー	富山銀行　福岡支店
5	僕らの街に新幹線がやってくる	高岡法科大学　学生会
6	末広藤娘	末広町自治会
7	W7末広鯱	末広町自治会
8	‘絆’おかえり	地域女性ネット福岡　福岡地区婦人会
9	ワールドカップ	京都文教大学
10	祝　北陸新幹線	高岡信用金庫　福岡支店
11	風林火山	橋上町つくりもん有志の会
12	さわやか上高地	橋上町寿会
13	橋上っ子わくわくツアー	橋上町児童クラブ
14	期待と懐かしさ	表元町自治会
15	100匹の羊を見守る少年	福岡町キリスト教会
16	世界最速の男	西町自治会
17	ナイルの秘宝	西町自治会
18	地球の仲間たち	キラッと福岡ネット
19	秋	堀川町自治会
20	かさぼんこ	堀川町自治会
21	全国ご当地キャラ大集合！	高岡向陵高等学校　生活系　情報系
22	中庭の1コマ	富山県立福岡高等学校
23	かがやけ3年生！Sunshine －新しいグラウンドうれしいな—	福岡小学校3年生
24	無楽（迦陵頻）	中央通自治会
25	福を運ぶ新幹線	中央通自治会
26	北陸新幹線とその愉快な仲間たち	北陸銀行　福岡支店
27	キティー＆ライティー	(株)北日本新聞サービスセンター
28	コイ風	中島町青年会
29	ふなっしー	富山第一銀行　福岡支店
30	まぁ！ライオン？	新栄町自治会
31	ななつ星in富山	中町自治会
32	伝統のスゲ笠作り	中町自治会
33	新生「福岡グラウンド」	桜木町自治会
34	つくりもんビフォア—アフター	大蔵町自治会
35	アナと雪の女王	大蔵町自治会
36	うさぎとふく福かめ	富山型デイサービス　ふく福
37	かぼちゃ地蔵	福岡公民館
38	雨晴から立山連峰を望む	早稲田町自治会
39	軍師官兵衛	旭町自治会
40	大きなカブ	旭町自治会
41	旭町　第九	旭町自治会
42	官兵衛と高松城	旭町自治会

（表中の番号は図 1 の地図中の番号と対応）

図 1.　つくりもんまつり会場図（2014 年版）

つくりもんまつりの歴史について、『福岡町史』（福岡町史編纂委員会、1969 年）、『福岡町鳥倉村の物語』（岩崎照栄、島倉英彦、1999 年）、『つくりもんまつり 2』（京都文教大学人間学部文化人類学科、2002 年）を参考に以下に述べていく。

つくりもんまつりの始まりは、今から約 300 年前の江戸時代に現在の福岡町土屋地域でワラを用いて制作した「つくりもの」を田んぼに並べたことだと言われている。それが発祥となり、お盆から 8 月いっぱいの間、村々で行われた「地蔵まつり」が現在まで続くつくりもんまつりの主なルーツであるとされる。「地蔵まつり」とは、村ごとに地蔵を一軒の家に集め、餅や野菜、果物、お菓子などをお供えしていたものである。夜には人々が詠歌を唱え、盆踊りをするなどして楽しんでいた。やがて五穀豊穣に感謝して秋の収穫物が供えられるようになり、働き手となった牛や馬にも感謝する意味からその形に似せて供えられるようになっていった。これが「つくりもの」の起源となり、農作物は形を変え、やがて現在のようなユニークな「つくりもん」が生まれた。

地蔵まつりは 1960 年頃「観光地蔵祭り」と名称を変え、商工会が祭りの運営を担うようになった。1965 年頃からは人々がつくりもんの出来栄えを競うコンテストも導入された。この頃から徐々に、メディアによってその名が全国に知れ渡るようになった。その後、祭りの名称から「地蔵」の文字が消え、1970 年頃「つくりものまつり」という名称に変わった。祭りの運営組織も商工会から観光協会に移り、より観光が意識されるようになった。そして 1975 年に「つくりもんまつり」という名称が誕生し、露店が立ち並ぶ大きな祭りとなっていった。

写真 1.　現在も続く地蔵へのお供え（2014 年 9 月 23 日筆者撮影、表元町にて）

2.　「つくりもん」とは

「つくりもん」とはもともと、人が作り出した物という意味の「造り物」が訛ってできた言葉である。『ハレのかたちー造り物の歴史と民俗ー』（笹原亮二、西岡陽子、福原敏男、2014 年）によると、民俗行事における「造り物」は“偽物”や“まがい物”と

しての造形物を作ることで、本物との距離感を楽しもうとするものである。近世後期に町場で流行し、現在でも全国各地の祭りやイベントで親しまれている。全国の「造り物」の例として、島根県出雲市の平田天満宮祭における陶器や容器などの日用品で作られた「平田一式飾」や、熊本県山都町の矢部八朔祭における松かさなどの植物で作られた「大造り物」がある。これらは日本の「造り物」文化の代表として、福岡町の「つくりもん」と共に国立民族学博物館で展示されている。

造り物には大きく分けて 2 つの類型がある。1 つ目は「一式形式」で、共通の場面で使用される日用品などの道具や、野菜などの自然物を材料として何かに見立てたものである。2 つ目の「人形つくり」は、紙やワラ、粘土などの変形しやすい材料を用いて歌舞伎や物語の一場面を再現したものである。福岡町の「つくりもん」や「平田一式飾」、「大造り物」はいずれも前者にあたり、全国でもこの類型による造り物の割合が後者よりも高い。以下、福岡町における「つくりもん」について説明していく。

普段私たちが食物として口にする野菜や果物が、動物や人間の営み、キャラクターなどを模した造形物に形を変えたものが福岡町の「つくりもん」である。作品に使用される農作物は多種多様だが、カボチャ、サツマイモ、ナス、トウモロコシなどが最もよく使われる。例えば、熊を作るのに、カボチャ 2 つを組み合わせて顔と胴体を作り、サツマイモで腕と足を表現し、ジャガイモで耳を 2 つ取り付ける、といった具合である。顔の各部分は豆やトウガラシなどの小さな農作物で作る。文字や細かいイラストは、豆で貼り絵のように作ることが多い。背景としての山などを表現するときは、色のグラデーションが美しいネギや白菜が多用される。また見た目が華やかになるように、花の形をした色付きの麩など加工品が飾りとして使われることもしばしばある。つくりもんの面白いところは、売り物にならないようないびつな形の野菜や食用でない野菜が活躍するところである（写真 2）。生き物のより精巧な動きを表現するためには、食材として料理に使いにくいようないびつな形のサツマイモなどが身体のパーツとしてむしろ重宝されるのである。

つくりもん作品は生の農作物を多く使用して作られるため、事前に作り置きをしておくことはできない。そのため祭りの数日前に一気に仕上げ、祭りが終わると一気に処分する。このような特徴があることから、福岡町民による“瞬間芸術”と表現することもできるだろう。

写真 2.　作品に多用されるジャンボカボチャ（越井食品店）

今日のつくりもん作品は、単に人々に鑑賞されるだけではない。その出来栄えを競うコンテストも行われている。現在行われているつくりもん作品のコンテストでは祭りの実行委員や地元の中学・高校の美術教諭などが審査し、上から順に優勝（2 団体）・次勝・参勝・技能賞・努力賞が各団体に授与される。その評価基準は以下の通りである（表 2）。素朴性が他の項目より重視されている背景には、地蔵祭りの頃から参加し、伝統的なつくりもんの形を守ってきた自治会の持ち味を評価してほしいという、地元の年配の方々が抱く思いを反映させるという事情があるようだ。

表 2.　つくりもんコンテストの評価基準

素朴性	100 点
全般的構成の魅力効果	30 点
材料技術の評価	30 点
製作努力の評価	30 点
着想	10 点

この他にもサントリー財団が審査する「サントリー賞」や、北日本新聞社が企画する「あなたが選ぶつくりもん」という賞がある。つくりもんまつりが 2006 年にサントリー財団による地域文化賞を受賞したのをきっかけに創設されたのがサントリー賞で、2015 年までの 10 年間実施されることとなっている。「あなたが選ぶつくりもん」という企画は、祭りの来場者がそれぞれ好みの作品に投票するもので、結果はコンテストの次勝までの団体と重なることが多い。

祭りのポスターもコンテストが始まった頃から作られている。以前はデザイン業者に頼んでいたが、2009 年から前年のつくりもん優勝作品の写真を使うようになったという（写真 3）。

写真 3.　前年の優勝作品を載せた宣伝ポスター（2014 年版）

3.　つくりもん制作に携わる人々

現在のつくりもんまつりで作品を出展している団体は様々であるが、最も主要な団体は橋上町や旭町など地域の自治会で、2014 年は 42 作品中 25 作品が自治会によるものであった（表 1 参照）。10 年前の 2004 年も同様に、43 作品中 26 作品が自治会のもので、全体の約 6 割を占めていた。次いで北陸銀行や高岡信用金庫などの企業、福岡高校や高岡法科大学などの学生による出展が多く、全体の約 3 割を占めている。残りの 1 割は婦人会や介護福祉施設など多様である。

このように祭りを盛り上げるつくりもん作品を出展している団体は、地蔵まつりの流れを受け継ぐ自治会や青年会をはじめ、駅周辺の企業や学校など多岐にわたる。この節では数多くの出展団体の中から 4 つの団体に注目し、それぞれのつくりもん制作における実態をまとめた。その団体とは、「末広会」、「（株）北日本新聞サービスセンター」、「福岡小学校」、「富山型デイサービスふく福」の 4 つである。

まず 1 つ目の末広会は、末広町自治会の中の若年層が結成した会であり、毎年大型作品を制作している。2 つ目の北日本新聞サービスセンターは、会社のイベントの一つとして社員が出展している。3 つ目の福岡小学校では、3 年生になった児童が全員つくりもん制作に挑戦している。そして 4 つ目の富山型デイサービスふく福は、職員と利用者が協力してつくりもんを制作している介護福祉施設である。以下、それぞれについて詳細を述べていく。

3-1.　地域の仲間で作る大型つくりもん

福岡駅前に位置する末広町自治会の若者たちからなる「末広会」は大型の作品を例年出展しており、昨今のつくりもんまつりにおいて絶大な人気を博し、毎年優勝している。前出の写真 3 にあるポスターに載っているのは、2013 年に末広会が出展した作品である。高さ 5～6m にも及ぶ大型作品を出展しているのはこの末広会のみであり、人々の大きな話題を呼んでいる。

末広会は現在 17 人程からなっており、若者の会といっても年齢層は 20 代前半から 50 歳近くまでと幅広い。中島さんは 40 代後半で、末広会のリーダー的存在である。同じ 9 月に催される獅子舞の祭りは末広会だけでなく、中島町・表元町・新栄町・下蓑町と合同で参加しているが、つくりもん制作は末広会単独で参加している。2000 年代前半まで町の子ども向けに七夕やクリスマス会も行っていたが、現在は子どもが減りそれらはなくなってしまった。

調査には、この大型作品制作の担い手として活躍されている中島秀恭さんに主に協力していただいた。中島さんは、福岡駅前にある「お食事処中藤」という食堂を営んでいる。

(1) 大型作品制作に至るまで

大型作品の制作は 1998 年から始まった。その年、末広会会長となった方が、「やっぱり末広はでかいもんつくらんと！」と発心したことがきっかけであった。当時の末広町自治会も 2～3m ほどの大きなつくりもんを制作することで有名だったが、その約 2 倍の大きさにもなる現在のような大型作品に挑戦したのはこの年が初めてである。中島さんにとってこの大型作品を作る大プロジェクトは、獅子舞の延長で“お祭りが続くぞ！”という感覚であったため、ためらいなどは感じなかったという。

(2) 大型作品制作の流れ

その年話題のキャラクターや出来事を題材に出品しているわけではないにも関わらず、末広会の大型作品は毎年人々を賑わせている。大型作品は骨組みなどを考えて設計図を作っていく必要があり、想像だけでは限界があるため置物などのしっかりとした題材の実物が必要となる。しかし会長が題材のレプリカとして置物などを持ってきてもメンバーに却下されたりするため、作品案はいつもなかなか決まらないという。『つくりもんまつり 3』（京都文教大学人間学部文化人類学科、2003 年）には、2002 年のテーマ設定で題材がスムーズに決まらなかったことが書かれている。その年の会長が考えていた「松と鷹」をモチーフにした作品が、設計の都合上難しいと断られ、他の候補であった「宝船と七福神」が採用された。また、『つくりもんまつり 4』（同上、2005 年）においても、2004 年に「ゲゲゲの鬼太郎」を題材にしたいと考えていた会長の意見が却下され、比較的作りやすい「大黒天」という全く別物の題材に決まった様子が記されている。作品の完成図を具体的にイメージできる模型が不可欠な大型作品では、失敗しないよう慎重にテーマ決めが行われているようである。

作品制作の期間は本番までのおよそ 1 か月間で、毎年 8 月 20 日頃から始める。しかし、全体の 8 割くらいは直前の 3 日間で制作する。もちろん野菜が腐るからということもあるが、大型作品なりの強いこだわりがあるからという。実は祭り直前までの 1 か月間は、土台をしっかりと作ることにひたすら専念しているのである。

発砲スチロールのような軟弱な素材で作った土台の上に仕上げで野菜を取り付けてもし失敗したら、もう取り返しがつかないことになる。そのため、木の皮で頭部を覆ったりベニヤ板を使ったりと、土台作りに手間をかけることで、最後の集中作業で野菜部分を取り外して何度でもやり直すことができるようにしている。仕上げまでの約 1 ヶ月間は、この作業をじっくりと、ワイワイやりながら制作している。そして直前の 3 日間でその土台に野菜などを装飾していき、3 体に分けていたパーツを組み立てて一つの作品を完成させる。祭りが終わった後も、その年に使った珍しい野菜の種をとっておいて栽培し次の年の段取りを行ったり、休みの間は次の題材を探したりと、頭の中では 1 年中、常につくりもんのことを考えているという。

それでも作品制作における苦労は絶えない。体積がとにかく大きいため、材料の野菜

を揃えることがまず大変である。まともに揃えると莫大な費用がかかるため、なるべくお金をかけないよう集めているが、毎年 10～20 万円は野菜代に費やしている。目当ての野菜を作っている農家に直接足を運んで安く売ってもらったり、年によって欲しい野菜が異なるが、野菜作りをしている人に無償でもらったりと、今までの経験や人脈を最大限に活用してなるべく安く手に入るように工夫している。牧場から仕入れている家畜用のトウモロコシは食用のものより安い上に水分が少なく腐りにくいため、毎年重宝しているという。また、重さが馬鹿にならないため、3 体を組み合わせる時も苦労する。作品が倒れたりしないよう裏に工夫を施さなければならないし、強度計算などもしているとちょっとした建築作業に思えてくる、と中島さんは語る。食堂を営んでいる中島さんにとって、強度計算は常日頃うどんをこねていることが役に立っているという。

(3) つくりもん制作に捧げる思い

このように通常のつくりもん制作とは比べ物にならない苦労があるにも関わらず、16 年も大型作品を作り続けているのはそれ以上の喜びや楽しみがあるからである。末広会での大型作品制作について中島さんはこう語る。

> 毎年、会の仲間とお酒を飲みながら夜遅くまでワイワイ制作し、祭りの最後には入賞祝いにその年の会長を駅前の池に落としたり、池がなくなってからは水をかけたりしてお祝いしている。しかし、危険なことはしないで“精一杯楽しむ”ことをモットーにしている。
>
> このように制作を何年も続けてこられたのは、「近所の付き合い」以上に祭りがつないでくれた人と人とのつながりがあるから。自分が会長になった 2001 年は、獅子舞を優先してしまったため、10 日余りで作品を制作しなければならなくなった。そんなピンチにも仲間の救いがあり、他の自治会からも手伝いが来てくれて毎晩 20~30 人で制作し完成させた。祭り本番では突如、獅子舞を街中で踊ることになって大きな注目を浴び、とてもいい思い出になった。自分が会長の時にこんなにも楽しい思いをさせてもらって、周りから助けてもらったのだから、今さら逃げるわけにはいかない。倍返しで周りの仲間を助けてあげたい。
>
> つくりもんまつりに熱を注いでも儲かるわけでなく、家や仕事を犠牲にして制作していると周りから「やめてしまえ」と嫌みを言われることもあるが、楽しい仲間がいるからやめられない。しかし、その仲間たちが「やめる」と言い出したら自分も一緒にやめる。

(4) 2014 年の作品テーマ「末広藤娘」

末広会の 2014 年の作品テーマは「末広藤娘」であった。藤の花を手に持った着物の

女性をモデルとした大作である。筆者は、制作も大詰めの祭り 2 日前と前日に作業場にお邪魔し、迫力ある制作現場を見せていただいた。作品のほとんどを直前の 3 日間で仕上げるため、現場はとても忙しく、真剣な雰囲気が流れていた（写真 4)。

写真 4.　大型作品制作現場（3 体を組み立てる前）

今回は女性が題材の作品ということもあって、その装飾はかなり細かいところまで凝っていた。中島さんは髪飾り一つの取り付け位置にも注意を配り、私たち女子学生の意見を聞くなどして慎重に行っていた（写真 5-6)。

写真 5-6.　娘の髪飾り（柿の枝、草花など）を真剣に取り付ける中島さん

実は、娘が手に持つ藤の花に使われているのは“本物”の藤の花ではなく、サツマイモの皮であった。サツマイモの皮を塩水や酢水などに浸して、どうすればより自然な花びらに近付けるか、という実験も行ったという。その結果、一枚一枚油で揚げたものを採用することにした。

つくりもんまつりでは決して本物を使わず他の物で表現するのが基本で、そうでない

と「つくりもん」とは言えない、と中島さんは主張する。よく見ると、藤の葉にも本物の植物の葉ではなく大きなオクラを使ったり、着物の花柄などにはホオズキを広げて花の形に模したものを使ったりしていた。中島さん率いる末広会のつくりもんに対する強い“こだわり”が感じられた。

写真 7.　サツマイモ皮の実験（一番左が油で揚げたもの）

写真 8-9.　祭り前夜に行われた組み立て作業（3 体から 2 体へ）

写真 10.　完成した「末広藤娘」

大型作品を制作していると、やはり 3 体を組み立てて上に乗せる瞬間に毎年感動させられると中島さんは言う。2014 年の作品は素人目から見ても傑作中の傑作である（写真 10）。祭り中はこの巨大な美しい娘を、人々が見上げながら賑やかに鑑賞していた。そして 2014 年も優勝を果たし 17 年連続の最高賞獲得となった。また、来場者人気投票の「あなたが選ぶつくりもん」でも 164 票を獲得して 1 位となった。中島さんは 2014 年の制作を振り返ってこう語る。

> 今年の作品は会心の出来だった。野菜をうまく着物の模様として活用したところが末広会らしくてよかった。顔は設計図がないためいつも苦労するが、今回の端正な女性の顔立ちを作るのは特に難しかった。しかし自分が担当したこともあって、今年の作品の中では顔の輪郭がとりわけ気に入っている。前年のように大きなカボチャ一つを顔にあてることもあるが、小さすぎて失敗することもある。今年も新しい加工法を発見し、長年続けていると毎年違うことがあって勉強になる。毎年次の課題が見つかるが、野菜の形を活かすという「素朴性」は永遠の課題である。これからは野菜の身になって考えなければならない。題材から野菜を選ぶよりも、野菜から題材を考えていく方が本当のつくりもんのあり方かもしれない。

来年以降の制作に思いを馳せる中島さんだが、一方で末広会は大きな課題も抱えている。末広町に住む若者がなかなか入って来なくなり、一年ごとに交代する会長が 2014

年で一番若い者まで一周してしまったという。高校卒業後に本人の意思さえあれば末広会に入会できるが、近所付き合いの希薄化や娯楽の変化など様々な要因で若者が参加しなくなっている。昔は祭りがコミュニケーションの核であったが、今は若者を誘っても、「仕事が忙しい」「家でゲームしている方が楽しい」などと言われて断られるという。また、昔の末広会は30代後半で脱退するのが普通だったが、今ではメンバーが減ってしまったため本人がリタイア宣言するまで脱会したことにならない。中島さんが会長を務めた2001年からは、末広町の若者の代わりに末広町以外の人が制作に参加することが増えたという。2014年も町外から新たに3人の仲間が加わったが、その一方で町内の若者が加わることはなかった。

毎年、祭りの片付けの際に次の会長が挨拶するが、2014年にはそれがなかった。そのことでちょっとした言い合いになり、祭りの1ヶ月後に改めて反省会を開いた。2015年以降は、年長者から順に3人ずつ、会長2人、会計1人という体制で続けていくという。来年から制作できるかどうか懸念されたが、差し当たり今後数年は続いていくことになった。末広会が積み上げてきた大型作品の功績が後継ぎの問題で絶えてしまうのはあまりにももったいない。「つくりもん制作は人間関係をつくる最上のコミュニティ。末広会はこれからますますいい会になっていくだろう」と、中島さんは末広会の更なる繁栄を願っている。

3-2. 職場の仲間と作るつくりもん

祭り中、つくりもんを眺めながら歩いていると、誰もが親近感を抱く作品に出会う。それは、北日本新聞サービスセンター福岡支店が自社の前で出展しているキティちゃんのつくりもんである。初めて福岡町に訪れた際、「北日本新聞の人たちは毎年キャラクターのつくりもんを作っている」と聞いた通りだ。そこで私は、銀行や信用金庫など職場グループで出品している団体の中から、町の噂になるほど有名な北日本新聞サービスセンターのつくりもんも調査した。調査には、2013年に福岡支店に来たという所長の山下努さんに主に協力していただいた。

(1) 会社のイベントとしてのつくりもん制作

県内一のシェアを誇る地方紙「北日本新聞」を販売する北日本新聞サービスセンター。この販売所がつくりもんの制作を始めたのは2006年からである。つくりもんまつりが北日本新聞社の推薦でサントリー財団の地域文化賞に選ばれたのをきっかけに、その協賛として出品を始めるようになった。制作には福岡支店だけでなく、高岡や太閤山など近隣の販売所からも職場の仲間が集まり応援する。8年間続く祭りへの参加は会社の9月のイベントとして、団結力を高めるものとなっている。制作は祭り直前の3日間ほどで集中して打ち込むが、トータルすると1週間ほどかかる。徹夜して作ることもあり、仕事と制作の両立が難しい。他の販売所も同様で、営業時間外に制作するのは大変であ

る。当初は仕事が一つ増えたと負担に感じたが、それ以上に得るものがあることがわかった、と山下さんは語る。各販売所から集まった仲間といろいろ話ができ、コミュニケーションの場として活用しているという。

北日本新聞がキティちゃんなどの人気キャラクターを毎年題材として取り上げるようになったのには、次のような経緯がある。北日本新聞が購読世帯に配布するタオルやティッシュのキャラクターにキティちゃんが使われており、これが好評だった。つくりもんまつりで人気キャラクターのキティちゃんを作ることは、「キティちゃん＝北日本新聞」というイメージをさらに強める絶好の広報活動だったし、形がシンプルなキティちゃんはつくりもんとしても非常に作りやすかった。こうして出展した最初のキティちゃんの評判がとても良かったため、毎年作るようになった。住民や観光客の中には単にキティちゃんを眺めるだけでなく、一緒に写真を撮る人もいる。その後も、“キティちゃんとゆかいな仲間たち”というテーマで、北日本新聞社が後援しているサッカーチーム「カターレ富山」の「ライカくん」や、野球チーム「富山サンダーバーズ」の「ライティー」など他のキャラクターを一緒に作るようにもなった（写真 11）。北日本新聞の公式キャラクター「ブン太くん」（写真 12）のつくりもんとキティちゃんを一緒に出展した年もあったが、そのときは、祭りに訪れた子どもたちにブン太くんを知ってもらい、子どもにもっと新聞と触れ合ってもらいたいという願いを込めていたという。

山下さんはつくりもんまつりへの参加について以下のように語る。

> これからも作品制作はぜひ続けていきたいし、会社のイベントなので続けていかなければならない。住民が支える祭りなので、参加者がやめたら終わってしまう祭りである。入賞することには重点を置かず、デコボコな作品ができても構わない。参加することに意義がある。作品の前で当日の新聞を配ったりブン太くんの着ぐるみを着たりと、企業の宣伝としてでもあるが、一つのイベントとしてつくりもんまつりを楽しんでいる。

(2) 2014 年の作品テーマ「キティー＆ライティー」

北日本新聞サービスセンターでは 2014 年も例年通り、直前の 3 日間で集中して制作し、祭り前日の 21 時に完成させた。山下さんによると、ハイレベルな作品を仕上げることよりも専ら作品を間に合わせることを目的として制作したという。お馴染みのキティちゃんと一緒にライティーを制作したのは、今年福岡町に富山サンダーバーズの支部ができたからである。山下さんは、新聞販売所らしく新聞と針金で型を作り、ナスの葉で固めたライティーのヘルメットに思い入れがあるという。また、キティちゃんとライティーの間にはブン太くんと同じく北日本新聞公式キャラクターのブン子ちゃんも一緒に並んだ（写真 11）。

写真 11.　「キティー&ライティー」（2014 年）
（左：ライティー　中央：ブン子ちゃん　右：キティー）

展示場の周辺は「あなたが選ぶつくりもん」の投票箱が置かれており、ブン太くんが時々登場して客と記念撮影を行っていたため賑わっていた（写真 12）。山下さんは客にブン太くんとの記念撮影を勧め、小さな菅笠を持たせるなど北日本新聞と福岡町をアピールしていた。

祭り 2 日目の 24 日はルートイン BC リーグ北陸地区チャンピオンシップの決勝戦で富山サンダーバーズが出場する予定だったが、雨天中止となり優勝できなかった。チームのマスコットキャラクターを制作したからには優勝してもらいたい、とライティーのつくりもんに願掛けしていたが、思いが届かなかったため残念だったと山下さんは嘆いていた。

写真 12.　作品前で住民と触れ合うブン太くん

3-3.　子どもたちとつくりもん

数ある作品の中で素朴さが光るのが、小学生のつくりもんである。これは、福岡小学校の 3 年生がクラスで制作したものと児童が個人で制作したものとを合わせた作品である。福岡小学校では毎年 3 年生になった児童がつくりもんの制作に挑戦している。福岡小学校では 1999 年から「総合的な学習の時間」を利用してつくりもんの出品が始ま

った。小学校の教育カリキュラムにある「総合的な学習の時間」は、福祉や環境、地域などに目を向けることを目的とした範疇内で各学校が授業内容を決めることになっている。福岡小学校では 3 年生が地域について学ぶことになっており、特につくりもんまつりに重点を置いて活動している。調査では、2013 年度の 3 年主任であった岡田由起子先生と、3 年生および 4 年生の児童に協力していただいた。

(1) つくりもん作品ができるまでの流れ

総合学習の具体的なテーマは「福岡町のたからものを大切にしよう」である。まず 3 年生は福岡町のたからもの（つくりもんまつりの他、菅笠や雅楽など）について各自で調べ、発表する。その内容はいろいろあるが、直接祭りを通して地域への愛着を持てるようにと、次につくりもんまつりの学習を深めていく。つくりもんを詳しく知るために、“つくりもん名人”とも呼ばれる末広会の中島さんを招いてつくりもんの由来や制作時の工夫、苦労、気持ちなどについて教えてもらう。その後、今年はどんなテーマでつくりもんを作るかをまず先生同士で考え、各クラスからつくりもん実行委員を決める。その実行委員でクラスごとの作品の振り分けを決め、クラスの共同作品制作に取り掛かる。そして、再度来校してもらった中島さんにつくりもんの作り方を実演してもらい、児童も持参した野菜を使って試作する。

祭り直前になると、親子で本番の作品制作に取り掛かる。前回中島さんに教えてもらったことを、今度は子どもが親に教えて作る。親子共同で個人作品を作り、事前に作っていた共同作品と一緒に展示場に並べたら完成である。祭り当日は、児童が訪れた観客に感想を聞いたりアンケートを行ったりする。

先生がつくりもん出品までに一番苦労することは、テーマを決めることである。毎年タイムリーなものを取り上げようとしているが、クラスの共同作品と児童の個人作品を兼ね合わせたテーマを決めなければならない。その一貫性や統一性を保つことが大変であるが、そのためとても工夫している。「難しい」と「工夫する」は表裏一体だと思う、と岡田先生は語る。

共同作品に使うジャンボカボチャは、用務員の方が近くの川の土手で育てており、児童は水やりと収穫のみを行っている。児童たちは用務員の方に手紙を書いてお礼をしている。また、校舎内でひょうたんも育てており、児童が当番で水やりをしている。

(2) 2013 年の作品テーマ「ハッピーで広がる　えがおの輪」

2013 年は、富士山が世界遺産に登録されたことやイギリスのウィリアム王子に第一子が誕生したことなどを踏まえて「ハッピーで広がる　えがおの輪」というテーマで制作した。当時のつくりもん制作について、3 年生で体験し 2014 年度に 4 年生になった児童 5 人から話を聞いた。富士山などの大きなものは豆を貼り付けてクラスの共同作品として作った。個人作品としては、“ハッピー”や“笑顔”という言葉がテーマになっ

ていることから、富士山に登って喜んでいる自分やみんなで笑ったり喜んだりしているところ、笑顔をイメージした人などを作ったという。作品を作る上で大変だったことは、野菜や豆で目を付けようとしても落ちてくることやパプリカの中が空洞で安定しないこと、手をつまようじで体につなげることなどで、野菜ならではの苦労を感じたようだった。それに対して楽しかったことは、「こんなものにもできるんだ」という野菜があったこと、中から汁が出てこない野菜を使うといいという発見があったことなど野菜ならではの面白さに加え、笑顔の人を作っていると自分も笑顔になったという子どもらしい見方もあった。

また、4 年生一クラス分の 35 人にアンケートに協力してもらい、より多くの児童につくりもんまつりについての思いを尋ねることができた。つくりもんを作ることは楽しいか、という質問では、35 人中 33 人が「はい」と答えた。その理由は様々だったが、主に 4 パターンに分類することができた。

最も多かったのが、「作品を作るときどんなのにしようかと考えているうちに変なのが出来ること」、「胴体を作ってから目や口を作るところ」、「いろんな工夫が出来るところ」など、【作品を作っていく過程】に関する意見で、15 人の児童が挙げていた。次に多かったのが、「ほかの人のつくりもんが見られること」、「毎年一クラスごとに大きな作品を作ること」、「みんな作り終わったらにこにこ笑っていること」など、10 人の児童が挙げていた【みんなと一緒に作ること、みんなの作品が見られること】だった。中には、「失敗したところをまたやり直したりできて親子の絆を深められる」という少し大人びた意見を述べた児童もいた。「野菜同士をくっつけるところ」、「アイディアを出して野菜で作るところ」、「野菜で人などを作るなんてつくりもんまつり以外ではできない」など、【野菜、果物などの食べ物を使って作品を作ること】を挙げていた児童が 6 人。そして、「福岡町のみなさんが見てくれると思ったら嬉しくなる」、「難しいところもあるけれど見てくれたお客さんの笑い顔をイメージすると楽しくなってくる」、「作品を作るのは楽しいし見てもらえばもっと嬉しくなる」といった【自分の作品をみんなに見てもらうこと】を挙げた児童も 6 人いた。それに対して、「いいえ」と答えた 2 人は、「作っても手が取れたりしてしまう」、「もっと大きいものを作りたかった」と制作面で不満を持っていることがわかった。

調査中には、2 ヶ月後につくりもんまつりへの出品を控える 3 年生の児童 6 人にも話を聞くことができた。4 年生が昨年作ったつくりもんを見てどう思ったか尋ねると、「ちゃんと工夫して作っている」、「こんな野菜で作れるんだなあ」、「次はぼくの番だ」などと答えてくれた。今年実際につくりもんを作るのは楽しみだとみんな答えたが、「初めての経験なので野菜がくずれないか」、「テーマに合ったものが作れるかどうか」、「昨年のような作品が作れるかどうか」という不安もあるようだった。中には、「今の 4 年生の作品を見たからちょっと安心した」という児童や、「2 年前に 4 年生だったお姉さんと一緒に家で作ったことがあるから大丈夫」という児童もいた。

（3）2014 年の作品テーマ

「かがやけ 3 年生！Sunshine－新しいグラウンドうれしいなー」

祭り 2 日前の 9 月 21 日（日）、例年通り福岡小学校の体育館で親子共同のつくりもん制作活動が実施された。体育館にはクラスごとにブルーシートが敷かれ、その上で親子ごとに新聞やピクニックシートを敷いて制作した（写真 13）。体育館の中心には豆や麩など学校が用意した細かい材料（写真 14）と、手などをケガした場合のために救急箱が置かれていた。作品の土台はある程度できあがっており、この日は野菜を組み立てる仕上げ作業といった具合である。予定通り 9 月上旬にはカボチャ同士のくっつけ方や 4 日間腐らない野菜を知るための試作を行ったという。

写真 13.　体育館でのつくりもん制作

写真 14.　つくりもんの材料

2014 年の作品全体のテーマは「かがやけ 3 年生！Sunshine－新しいグラウンドうれしいなー」であり、2014 年春に小学校のグラウンドが新しくなったことが由来となっている。

約 1 時間半に及ぶ活動の間、数人の児童が聞き取り調査に協力してくれた。鉄棒をしているうさぎを作っていた女子児童は、鉄棒が好きだからこの作品にしたという。前のグラウンドには鉄棒がなかったが、今のグラウンドには鉄棒があるらしい。制作していて難しいのは、野菜を切ったら腐るから切って使えないことで、気に入っているのはうさぎの耳に小さなナスを使ったことである。胴体には、鉄棒をしているときのえびぞりの形に見えるからと、お母さんがそれに似た形のサツマイモを選んでくれたという（写真 15）。つくりもん制作に対しては、工作が好きだから作るのは楽しいけどつくりもんは見る方が好きだと言っていた。

ユーモラスな作品は他にも続々と生み出されていた。ある男子児童の作品は一見、寝ている自分を再現しているかのように思われたが、綱引きをして倒れたところを作っているとのことだった（写真 16）。なぜ綱を引いているところではなくて倒れたところなのか聞くと、運動会の綱引きで勝てなかったからという。野菜を組み立てることが一番

難しかったと言っていた。倒れたときの手や足をエリンギで表現しているところが、とても上手いと思った。

写真 15.　鉄棒をしているうさぎ

写真 16.　綱引きをして倒れたところ

また、他の男子児童は運動会のリレーをしているところを作っていた。作った理由は、面白そうだと思ったから。気に入っているところは、パン粉を使ってグラウンドを作ったところとのことだった（写真 17）。ここでもサツマイモは大活躍である。料理に使いづらい、いびつな形のサツマイモが走っている人の腕の動きを絶妙に表現している。また、玉ねぎの皮を剥いて顔を作ったところもとても面白い。この児童は高岡市内の別の小学校に通っているが、家は福岡町のつくりもんまつり会場付近で、祖父が毎年つくりもんを作っているという。1 年生のときから何度か福岡小学校と交流しており、今回も同じ 3 年生としてつくりもん制作に参加し、本番でも福岡小学校の児童たちの作品と一緒に展示された。つくりもん制作に打ち込む祖父をとても慕っており、「作品が完成したらおじいちゃんに見てもらいたい、これからもおじいちゃんと一緒に作品を作ってみたい。」と胸を弾ませていた。

写真 17.　運動会のリレーをしているところ

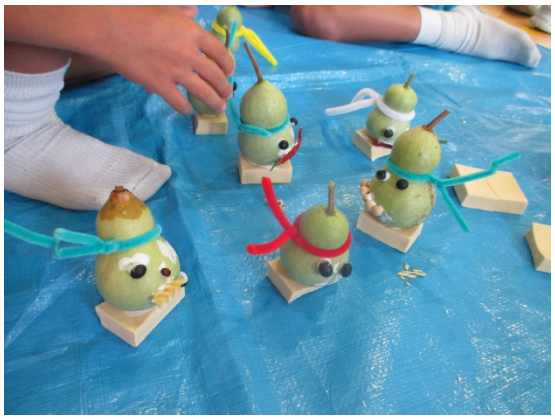

写真 18.　小さなひょうたんの応援団

1 時間ほど経つと児童は次々と作品を完成させていった。終わった児童は片付けたり体育館を走り回ったり自由にしている。まるで肩の荷が下りたかのように、友達と思う存分はしゃいでいた。一部の児童は共同制作を手伝っていた。クラスでジャンボカボチャの応援団長を作ったので、学校で育てた小さなひょうたんで応援団のメンバーを作るのだという（写真 18）。

テーマのサブタイトルが「新しいグラウンドうれしいな」であったため、子どもたちの作品はグラウンドで運動する様子を表したものが多かった（写真 19）。子どもたちは恥ずかしがってあまり積極的に話してくれなかったが、親御さんと一所懸命“世界に一つだけ”のつくりもんを作っていた。

親子活動の解散式では、3 年主任となりその年初めてつくりもん制作に携わった久保村美紀子先生が「普通の工作ではわからない“かわいらしさ”が野菜を通して作れるということがわかった」「力作ぞろい」と語っていた。

祭り当日のコンテストでは、子ども達の個性が光る作品が評価され見事参勝に輝いた。

写真 19.　福岡小学校 3 年生の作品展示場（2014 年）

3-4.　お年寄りとつくりもん

数年前からつくりもん出品に挑戦し、優秀な賞を何度も獲得している強力な団体がある。福岡町中心街から少し外れたところにある「富山型デイサービス　ふく福」という介護福祉施設である（写真 20）。「富山型デイサービス」とは、年齢や障害の有無にかかわらず赤ちゃんからお年寄りまでがみな一緒に過ごすことで充実した生活を送り、地域に根差したサービスを提供するという取り組みである。ふく福は 2009 年に開設し、この「富山型」の理念にある“地域の行事に参加する”という考えに基づいて開設当初

からつくりもんまつりに出品してきた。この施設では毎年、職員と利用者が協力して制作を行っており、双方ともに調査に協力いただいた。

写真 20.　介護福祉施設「富山型デイサービスふく福」外観

（1）利用者と職員のつくりもん共同制作

1 年目は段ボールにもみがらを貼り付けただけの平面作品を出展したが、入賞するにはもっと立体的なものがいいと周りから言われ、その後はもう少し大規模な作品を作るようになった。初めて立体作品を制作した 2010 年は優勝に、さらに大きな作品に挑戦した 2012 年は次勝に選ばれた。ふく福でのつくりもん制作の趣旨は「みんなで作る」ことである。利用者のお年寄りは稲ワラを編むなど昔の知恵を活かして制作に取り組んでいる。

ふく福では、職員の中で毎年つくりもん係が代わり、その人の指示によって約 1 ヶ月半前から制作が始まる。まず利用者にどんな作品がいいかアンケートで案を募り、下絵や図案を描く（写真 21）。そして、職員は腐らない豆などの乾物からまず調達し始める。材料は越井食品店のジャンボカボチャを買ったり、山に登って棕櫚の木から実を採取したり、道の駅で観賞用の食べられない野菜などいろいろな形の野菜を集めたりする。制作しながらイメージが膨らみ、野菜もどんどん増えていくという。制作していて特に苦労することは、材料が生野菜のため作り置きができず、間際の作業になってしまうこと。カボチャや冬瓜などは比較的よくもつが、ナスなどは腐りやすく、穴を開けてしまうとだいたいの野菜は駄目になってしまうという。

利用者はつくりもん制作に意欲的に取り組む人が多く、制作が始まると「今年も（この季節が）来たがいね～」と言う人もいる。玉ねぎの皮などを貼る作業は椅子に座りながらできるため、お年寄りも楽しめる。普段から施設の仕事を手伝っているため、同じように作品制作にも積極的に取り組んでいる。利用者のあるお年寄りの女性は、毎年つくりもん制作を楽しんでおり、大変とは思わないという。「今年はふく福も他のところもどんな作品が出来上がるのかなあ」といつも楽しみにしている。一方、「つくりもん

は簡単に作れないから大変だ」と言う利用者の女性もいた。しかし「みんなで作るのは楽しいし、駅前など遠くに展示されている作品は見に行けないけれどもふく福の近くに展示されているものなら見に行けるので楽しみだ」と語っていた。

同じ福岡町にある「デイサービスセンター　サンエール」が職員だけでつくりもんを制作しているのに対して、ふく福では職員と利用者が一緒に一つの作品を完成させるというのが特長である。入賞狙い一筋で出品しているわけでもないのに何度も好成績を収めているクオリティの高さも驚きである。そこにはやはり職員の方の努力だけでなく、利用者の方の“長生きの知恵”が光っている結果なのであろう。

(2) 2014 年の作品テーマ「うさぎとふく福かめ」

ふく福の 2014 年の作品テーマは、童話の「うさぎとかめ」の場面を再現した「うさぎとふく福かめ」であった（写真 25）。2013 年に制作した「ふく福茶釜」の動物が好評だったため、今年も動物を作ろうということになった。うさぎとかめなら作りやすそうだったことと、誰が見てもわかりやすいという点もちょうど良かった。祭り本番 4 日前の制作現場にお邪魔したが、周りの風景や山など半分くらいが完成していた。

写真 21.　作品の下絵

写真 22.　うさぎの制作

うさぎは段ボールで作った型にパン粉をまぶし、ススキや乾燥したヘチマを使ってふかふか感を出していた（写真 22）。かめはジャンボカボチャにカボチャの種を貼り付けて模様を描いていた（写真 23）。かめの足をレンコンで作るか、うさぎの鼻や頬を何で作るか、と試行錯誤しながら職員の方はとても熱心に制作に取り組んでいた。利用者の方は段ボールの型にカンピョウの紐を切って貼り付け、カゴに見立てたものを作っていた。中にはカンピョウを三つ編みにするという器用さを発揮していた女性もおり、その部分はカゴの縁に使われていた（写真 24）。

この施設の利用者は普段話したりテレビを見たりして自由に過ごしており、職員が利用者それぞれの様子を見ながら不定期に小物作りを誘ったりということはあるが、多数

の利用者と職員が共同で作品を作るということが頻繁に行われているわけではない。高齢になると周りと協力して一つのものを生み出すという機会も減るだろう。そのため「ものを作る」ことだけでなく、他の人と「一緒に作る」ことが利用者にとっての楽しみであり、優れた作品を生み出す理由でもあるだろう、と私は感じた。

写真 23.　カボチャの甲羅を背負ったかめ

写真 24.　カンピョウでカゴ作り

写真 25.　完成した「うさぎとふく福かめ」（2014 年）

3-5.　つくりもん制作のまとめ

自治会、企業、学校、介護福祉施設と全く異なるタイプの 4 つの団体で調査を行ったが、そのそれぞれで共通していることは、仲間と協力して作る過程が魅力的な作品を生み出すということである。1 人きりで制作しても、味のある作品は生まれないだろう。何人もの知恵が集まって、ユーモラスなつくりもんが出来上がる。作品を見ると思わず顔がほころんでしまうのは、制作している人々の楽しそうな様子やたくさんの笑顔がそ

のつくりもんから溢れているからである。人々が育てた農作物を用いているため、制作者は自然と優しい気持ちになれるのかもしれない。野菜などの生ものは保存がきかないため毎年新しいものを作らなければならないが、むしろそのことが人々に「一緒に作る」という喜びをもたらしているのではないか。長期間保存がきくものであれば、一度作ってしまうと人々のつながりを繰り返し実感することは難しいだろう。また、直前に集中して制作しなければならないことも、人々の団結力を高める重要なポイントになっている。つくりもん制作の醍醐味は、このように色褪せない文化を通して町の人々が結束するところにあるといえるだろう。

4. 伝統か観光か

(1) 伝統行事としてのつくりもんまつり

300 年以上形を変えて継承されてきたつくりもんまつりは、現在このように様々な参加者と観客によって盛り上げられている。福岡町民にとっての楽しみである一方、町外や県外からの観光客も数多く訪れるため、現在のつくりもんまつりの位置づけは伝統行事と観光事業の両方の面があると考えられる。では、町の人々はこの祭りについてどのような意識を持っているのだろうか。同じ福岡町で暮らす人々でも、その意見は多岐にわたった。

1960 年代後半（昭和 40 年代）に現在のようなコンテスト形式となった理由は、青年団の衰退によって出展する「つくりもの」の数が減ったため、祭りを盛り上げようと商工会が住民に呼びかけたことによると言われている。それに先立つ 1950 年代後半（昭和 30 年代）から徐々に、商工会が新聞社やテレビ局などに働きかけたことで外部からも客が訪れるようになった。それまで家の座敷などに飾られていた質素なつくりものは屋外に展示され、徐々に出来栄えが重視される「見せもの」となっていった。コンテスト形式となり、観光化された祭りによって町は盛り上がり、人々は“庶民芸術”を楽しむようになったが、すべての住民がこの祭りの変化を喜んだわけではない。昔の素朴な作品に比べ、現在は大量の野菜を加工して終わった後は捨てるため、「野菜虐待祭り」と表現するお年寄りもいるという。

福岡駅近くに住む、昔から祭りを見てきた 90 代の男性はかつての「地蔵まつり」を懐かしんでこう語る。

> 昔は“ありがとうございました”という一心で地蔵様に秋の収穫物をお供えし、供養していた。コンテスト形式となってからは、あくまでお供え物であった「つくりもの」の方に重点が置かれるようになり、地蔵様への感謝の気持ちが薄くなってしまった。商工会の人が「つくりもんまつり」と名前を変えてしまい、地蔵様が二番目の存在になってしまったから、地蔵様に“申し訳ないなあ”という気持ちである。

コンテスト形式になる前は、バケツや茶碗など野菜以外のものやその辺で拾ってきたススキやワラなども多く使用しており、動物や風景をちょっと作っては楽しむ程度だった。それが今は「野菜でなけりゃあかん」などと難しいことを言うようになり、お金はかかるし、入賞したらいくらもらえるとかイヤな感じになってきた。昔は青年団が地蔵を飾らせてもらう家を探して頼んでおり、今年はどこの座敷に飾られるのかと考え、家の中を見せる、町の人の宿を見るのも一つの楽しみだったが、それもなくなってしまった。昔は極端な話、野菜ではなくねずみとりやちりとりなどの現物を並べて『とりやさん』というつくりものを出していたりもしたが、今は凝った作品に光をあてたり、水を出したり、音を出したりと何かビックリするようなことをしなければならなくなった。最近はどんどん新しいことが増えていく。

子どもの頃の思い出や慣習を大切にしているからこそ、現在のつくりもんまつりに対して懐疑的な思いがあるのだろう。当時の地蔵まつりを知る数少ない町民の貴重な意見である。町の長老者が寂しそうに語っている姿を見て、伝統あるつくりもんまつりとしてその名を売っていくならば、祭りのルーツである「地蔵まつり」のよさを消滅させてはならないと感じた。

伝統行事としての意識が強いのは町のお年寄りだけではない。北日本新聞サービスセンターの山下さんは、「福岡町で働いている身としては、福岡町の誇れる祭りとして残していかなければならない、伝統行事として続けていく、という思いが強い。福岡が潤えば販売所も潤うため、つくりもんまつりと相互に協力し合っていると思う」と町の伝統行事として祭りを継承していかなければならないという責任を強く感じているようだった。

同様に、ふく福で働く職員の方も「『地域の行事』として参加させていただいている、という考えが強いため、観光客を意識したことなどはあまりない」と言っている。しかし、観光事業として売り出していくことは悪いことではないとも感じているようだ。

(2) 福岡つくりもん囃子

伝統行事や観光事業というトピックを持ち出す際に欠かせないのが、「福岡つくりもん囃子」の存在である。この囃子は、2005 年に福岡町と高岡市が合併したのをきっかけに福岡町の住民によって作られた。作詞を担当したのは、毎年祭りで活躍するジャンボカボチャなどの野菜を提供している越井食品店の越井政雄さんである。越井さんは徐々に繁盛してきたつくりもんまつりを、合併に伴ってさらに PR するため歌を作りたいと考え、自らこの囃子制作の話を持ち出したという。福岡町にはすでに菅笠音頭などの音楽があったが、そればかりではつまらない、ニュースで宣伝すればますます繁盛するのでは、と考えた。

福岡町出身の歌手である北野ゆきさんが歌い、CD もリリースされている（写真 26）。2014 年は雨天のため中止となったが、つくりもんまつりで 2 日目の夜にまちながしが行われ、実行委員会の依頼で福岡小学校 6 年生の児童が毎年踊りを披露している。また、8 月のリバーサイドフェスタというイベントでもこの曲が流れる。

写真 26.　「福岡つくりもん囃子」の CD

つくりもん制作者にこの囃子についての知名度を確認したところ、北日本新聞サービスセンターの山下さんは「耳に残る曲だと思う。こういうものが作られるほど、でかい祭りなんだと思う。これがかかると“祭りだ”と思うし、余韻が残る」という好意的な印象を持っていた。その一方で、ふく福の職員や利用者の方々には全く認知されておらず、「浸透性がないことが残念」「（つくりもんまつりは）野菜だけじゃなかったんだなあ～」という正直な意見が多かった。住民への認知度は完全ではないようである。

越井さんは八百屋を営んでいるためつくりもんに使う野菜の注文を受けることも多く、野菜が作品の中でどのように使われているかという材料の活かし方に注目して祭りを見ている。自分の用意した材料が実際に作品に面白く使われていたら嬉しいという。現在作品に多用されているジャンボカボチャは、町外から借りたものを店に飾っていたら住民の目に留まった。そこで 1996 年頃から越井さんが仕入れたところ、使用する団体が増えていったという。それまでは家で採れた普通のカボチャや冬瓜、ナスなどがよく使われていた。越井さん自身は伝統か観光か、という思いよりも一般の住民とはまた違った目線でつくりもんを楽しんでいるようだ。

また、お囃子の中に「みんな総出の誇りの祭り」という歌詞があるが、子どもから大人まで一緒になって祭りを作り上げているのがこのつくりもんまつりの魅力で、子どもが経験を活かして祭りを継承させていけるのはよい循環であると越井さんは語る。イベントは静かなものよりは歌や音を張った方が祭りらしく繁盛する、というスタンスである。越井さんは福岡町が繁盛することに対してはとても積極的で、お囃子の他にも駅前のつくりもん風地蔵（写真 27）やつくりもん囃子 T シャツ、ステッカー（写真 28、ス

テッカーは中央左）など越井さんの要望で実現したものは広範囲にわたる。越井さんはこのお囃子を通して、「伝統あるつくりもんまつりをこれからも継続していってほしい、地元の若い客が減ってきているため音楽という媒体を通して若者や子どもたちに興味をもってもらいたい」と考えている。

写真 27.　つくりもん風地蔵

写真 28.　つくりもん囃子 T シャツ、ステッカ

（3）観光事業としてのつくりもんまつり

このような町の人の願いに対して、子どもたちは祭りをどのように捉えているのだろうか。福岡小学校の 4 年生に協力してもらったアンケートには、「富山県だけでなく日本中からつくりもんまつりを見にくることは嬉しいか」という質問も設けたが、これには 35 人全員が「はい」と答えた。その理由は様々で、次の 4 つのパターンに分類することができた。

まず一番多かったのが、「自分たちで作ったものをいろんな人に見てもらえる」、「自分が作ったものを見せてあげたいから富山県だけでなく日本中から来てほしい」など【観光客が来て作品を見てもらえる喜び】で、13 人の児童が挙げていた。「つくりもんまつりが有名になっているんだなと思ったらなんか嬉しい」、「福岡町のことをすごいなと思ってくれるかもしれない」など【地元やつくりもんまつりの名が広まることへの期待】を抱いている児童も多く、12 人が挙げていた。「賑やかだから」、「日本中から人が来ると盛り上がるから」など【祭りに求める賑やかさや盛り上がり】を挙げている児童は 4 人だった。また、「つくりもんまつりのために日本中や外国から来てくれるから」、「富山県の文化なのに日本中の人や海外の人などいろんな人がいてとっても嬉しい」、「日本のことをもっと知ってもらいたい」など【海外からも観光客が来ることへの関心】を持つ児童が 11 人もいた。「福岡町のたからもの」である伝統行事の祭りであるのに、外国人までもが祭りに訪れているのは子どもにとって余程衝撃的なのだろう。子どもたちが観光に対して発見や関心を持つことは、祭りが今後も継承されていく大きな原動力

になると思う。

「児童がつくりもんまつりに触れるきっかけは『福岡のたからもの』という“伝統”の面からだが、自分たちの作品をつくりもんまつりで展示してお客さんに書いてもらうアンケートを読んで、子どもたちが実際に感じるのは“観光”という面が多い」と岡田先生は語る。しかし制作活動の際に行った聞き取りでは、作品が完成したら友達や祖父母に見てもらいたいという回答が多かったため、子どもたちはまだ積極的に観光客を意識しているわけではなさそうだ。

それに対して、「つくりもんまつりは観光名物だ」と胸を張る人もいる。末広会の中島さんは、祭りを専ら“観光”や“エンターテインメント”として捉えている。素朴さで祭りの伝統を続けていくよりは、「でかいもん」を作って観光客を驚かせたいという思いの方が強い。かつては他の団体も大型作品を作っていたが、今は末広会しか作っていない。そういう新しいものが一つもなくなってしまうのもどうかと思う、というのが中島さんの主張である。昔ながらの素朴な「つくりもの」を好む住民がいる一方で、「小さいもんと大きいもん、それぞれの特長や自治会のいいところが光っている」と、祭りの変化を肯定的に捉えている。

近年、観光客が増えてきていることも嬉しく、もっと全国から来てほしいと中島さんは願っている。そこには「商売をやっている身としては人が来て困ることはない」という現実的な見方もあるが、つくりもんまつりは富山県の一つの観光資源であり住民の財産である、という思いも抱いているようだ。昔は存在しなかった多くの露店も肯定している。「露店があるから人が来る。持ちつ持たれつだと思う。露店を完全に廃業してしまって失敗した祭りも中にはある。露店が一緒に祭りを盛り上げているし、露店がないと祭りの魅力は半減する。露店目当ての客のことも全然悪いと思わないし、作品を一つも見ないという人はまずいないだろう。祭りの雰囲気や空気を楽しんでもらえて、例えば恋人との初デートで来たなどどんな形であれ思い出に残ってもらえればいいと思う」と中島さんは言う。つくりもん囃子についても、「これも一つの文化ではないかと思う。革新的なことをやることも文化であるし、“伝統”ばかりにこだわっていてもよくない。いろいろと新しいことに挑戦することはいいことだし、変化していくのも文化である。祭りのもっとディープなところまで知ってもらえる入口になるかもしれない」と、新しい文化にもかなり積極的な見方をしているようだった。

観光客が増えたことに伴い、2013 年から露店の商品と並んで「つくりもん焼き」も売り出されるようになった（写真 29）。これは、ナスやレンコンなどの野菜をモチーフにしたキャラクターの焼き菓子で、まちづくり会社のウェルカム福岡が企画したものである。祭り当日屋台に出向くと、1 個 100 円で売られており、中身の味はあんこ・カスタードクリーム・クリームチーズの 3 種類があった（写真 30 はカスタードクリーム味）。

写真 29.　つくりもん焼きの屋台

写真 30.　つくりもん焼き

また、2012 年からはまちづくり福岡工房「いっぷく処」にて乾燥菓子の「つくりもんまつり」も販売されるようになった。この菓子は卵と砂糖でできたシンプルな菓子だが、食感が独特である。生地にはカボチャが練り込まれており、カボチャが大活躍するつくりもんまつりをイメージしている。「いっぷく処」の店員にこの菓子について尋ねたところ、福岡町外に住む人の所に持っていく土産や福岡町外から客が来た時のお茶菓子として買っていく地元住民が多いという。

このように、お囃子だけでなく銘菓としても売られるなど、様々な形で祭りの商品化が進んでいる。他にも「いっぷく処」には野菜のイラストがプリントされたネクタイが売られており、福岡町外の人と接することが多いタクシーの運転手がよく身につけているとのことだった。祭りの商品化は、町を外部に PR する媒体ともなり、観光化と大きく結びついていると考えられる。

祭りの観光化に対しては多くの参加者がプラスに捉えているようだ。祭り直前の制作期間中、いくつか他の団体の制作現場を歩き回ったが、「観光客が来てマイナスなことはない。完成した時に見てもらえるのは嬉しいし、治安も悪くならないから」「祭りの観光化は町の活性化につながるため、作っている側としても町の一員としても観光客に来てもらえるのはいいことだと思う」「関心を持ってもらうことは悪くないと思う。観光客の人たちが祭りを盛り上げてくれる」という積極的な意見を聞くことができた。さらに、堀川町自治会が出展した「かさぼんこ」という作品には顔出し穴がついており、記念撮影ができるようになっていた。「かさぼんこ」とは、菅笠制作の際に使用された道具の名前から生まれた福岡町のキャラクターであるが、地元の人々が自ら、伝統的な地蔵まつりとは明らかに異なる方向である観光要素に目を向けていることがわかる。

また、参加者自体にも観光化が進んでいる。地蔵まつりは町内の人たちが町内の家に集められた地蔵を見る、内輪で楽しむ祭りであったのに対し、昨今では遠く離れた京都の大学生も作品を出展するようになった。京都文教大学総合社会学部（2011 年以前は人間学部）の学生は、2000 年から毎年授業の一環でつくりもんまつりのフィールドワ

ークと作品制作を行っている。調査は 2007 年以降行っていないが、福岡町の人々に歓迎されるため現在でもゼミでつくりもんを出品している（写真 31-32）。毎年 3 年生の学生が制作することになっており、学生は一から始める初心者ばかりのため苦労する、と指導に携わる鵜飼正樹教授は語っていた。

2014 年の制作に参加した女子学生は「思っていた以上に大変で、自分の考えている通りには作れないことがわかった。野菜の形を選ぶのも難しいけれど、八百屋のおっちゃん（越井食品店の越井さん）たちとワイワイ話したことが楽しかった。このように地元の人との交流ができたことがつくりもん制作では思い出深い」と、つくりもん制作を振り返っていた。つくりもんまつりのことをよく知らなかった外部からの参加者でも、祭りへの参加を通して感じるところは地元の人々と共通しているようだ。学生たちは 2010 年から祭り当日に作品展示テント内で宇治茶の試飲サービスを行い、宇治の宣伝をしている。実際に昨年、つくりもんまつりで宇治のイベントを知って宇治市に足を運んだ人がいたという。このように福岡町の祭りで宇治市の宣伝をする代わりに、宇治市の祭りでは福岡町の醤油やお菓子、菅笠などを販売している。

写真 31-32.　初めてのつくりもん制作に苦戦する京都文教大学の学生

長い間つくりもんまつりに参加してきた鵜飼先生は、つくりもんまつりに対して鋭い見解を示している。「町の人口が約 1 万人なのに対して、毎年訪れる客は約 10 万人。祇園祭のような有名な祭りでも訪れる客は人口以下なのに、こんなに小さな田舎町で人口に対する客の比率が大きい祭りはとても珍しく凄い。その理由は、つくりもんの作品が毎年変わることにある。祭りに来てみて面白かったら来年はどんな作品を作るのだろうと興味を持つ客が増える。そのためリピーターが多い。祇園祭は毎年同じようなことをやるので一回行けばもうしばらく行こうとは思わないが、つくりもんまつりは毎年行っても飽きない。つくりもんまつりと他の祭りの大きな違いはここにある。」

また祭りへの意識について、参加者だけでなく祭りを訪れて作品を見て回っている人々にも聞き取り調査を行った。23 日（土）の祭りで 10 代～80 代の男女 10 人に協力

していただいたが、これで 3 回以上祭りに来ているという人ばかりだった。毎年来ているという人も多く、その理由に「毎年作品が楽しみだから」「その年の世相を表しているのも面白い」という意見が挙げられた。しかし若い女子高校生は「なんとなく、（露店を回って）遊ぶため」という理由であったり、「菅笠を作っているところ（実演）を見に来た」というご夫婦もいたり、必ずしも作品目当てではない人もいることがわかった。それでも今年初めて来たという人がいなかったことは、鵜飼先生の指摘する通り“リピーターが多い”証拠なのだろう。

つくりもんまつりが“奇祭”として PR されている理由を尋ねると、「野菜で作っているから」とみな共通の認識があるようだった。野菜をモチーフにした商品が作り出されたのもここに理由があるだろう。中には「町全体を使っているから」と越井さん同様、住民総出の魅力に注目している人もいた。また、幼いお子さんを連れていた男性は祭りに来た理由を「子どもに見せたらいいかなと思った」と述べており、つくりもんのユーモラスな作品は子どもにも良い刺激となると感じているようだった。魚津市から来た 50～60 代のご夫婦も、「今年久しぶりに来たが、とてもよかったので来年また孫を連れて来ようと思った」とおっしゃっていた。

このご夫婦は 7，8 年前ぶりにつくりもんまつりを訪れ、その劇的な変化に驚いたという。「以前来たときに比べて祭りがかなり大きくなっていてビックリした。露店の数がものすごく増えたし、以前は作品の前にも人が少なかった」という。しかし実行委員会の話によると、実際には露店の数は急激に増えたわけではないといい、福岡駅前に露店が集まり店同士の間隔が狭まったためそう感じるのではないかと思われる。以前は東西に延びる旧北陸街道沿いに露店が広く立ち並び、南北の福岡駅前通りには現在と異なりあまり露店がなかったらしい。

聞き取りを行った範囲では、日本中から、世界中から観光客が来ていることは感じられなかったが、福岡町外や高岡市外から来ている人の方が福岡町の駅周辺に住む人よりも圧倒的に多く、金沢から 4 回ほど見に来ているという男性もいた。「来年も祭りに来たいと思うか」と尋ねたところ全員が来たいと答え、“リピーター宣言”をしていた。70 代や 80 代の年配の方は「生きているうちはずっと見に行きたい」と語っていた。

制作者、祭りの客に加えて、9 月に調査合宿を行った福岡町の山間部に位置する五位地区と小野地区の人々にもつくりもんまつりについてお話を伺った。五位地区や小野地区の住民は高齢化しており聞き取りに協力いただいた住民も 80 代の方が多く、町の中心部から離れた山奥からわざわざつくりもんまつりに行く人は少ないだろう、と私は推測していた。

しかし聞き取りを行うと、毎年祭りを見に行っているという住民がほとんどで、少ない人でも 2，3 年に一回は必ず行くということだった。2 日間のうち 1 日訪れるが、あまり歩けないため 1 日中いることはないというパターンが多い。自治会役員のため駐車場の整備に行くついでに作品を見るという人や、普段からバスで買い物に行くため町に

はよく出ているという人もいた。ある女性は、つくりもんを出品している町の郵便局の人が以前山に来て作品に使う野菜を欲しがっていたので、ナスやジャガイモ、変わった形のカボチャなどをよくあげていたという。しかしそれを使って完成した作品は見ておらず、作品よりもステージの歌謡ショーなど見せ物の方が楽しみだという。

20～30 年ほど町の方に住んでいたという方もいたが、ほとんどの住民が生まれた時から山間部に住んでいるにも関わらず、毎年のように祭りに足を運んでいることは意外である。やはり同じ“福岡町民”として、この伝統ある行事を大切にしているのであろう。観光化が進んでいることについて、「伝統と観光がミックスして初めて祭りになる」「福岡のために観光はいいものだと思う」「観光を重視するようになったのは時の流れだから仕方がない。外部から客が入ってくるのはいいことだと思う」と肯定的に捉えている意見が多く聞かれた。否定的な意見は聞かれなかったが「伝統のイメージが強い。町のためには『続ける』ということが何より大事」という女性もいた。また、「子どもたちの作った素朴な作品が一番心を打たれる」と伝統的なつくりもんを好む男性もいた。「今年はどこが優勝したかなどに関心があり、観光についてはあまり関心がなく、よくわからない。昔は観光客はあまりいなかったと思う」という女性もいた。

(4) 観光化による課題

祭りの観光化に伴って発展するつくりもんまつりだが、一方で住民が感じる様々な問題もある。五位地区自治会員の男性は作品展示について、駅前の中央ばかりに集中しており、外の方に展示されている作品が注目されていないのは問題だと指摘している。祭り当日、筆者は実際に全作品を歩いて見て回ったが、確かに駅周辺と外の方の賑わいに大きな差があった。例えば駅近くの倉庫に展示された作品や露店の通り沿いに展示された作品などには絶えず人が集い、感嘆の声を上げたり写真を撮ったりして盛り上がっていたが、露店の通りから外れた道や住宅街に入るととても良い作品なのに一人も見ている人がいなかったり、ふく福の傑作にも足を運ぶ人があまりいなかったりと残念に思うことがあった。

しかしそれをプラスに受け止める住民もいる。この章の冒頭で紹介した 90 代男性の息子さんは、父親同様に現在のつくりもんまつりを冷静に捉えている傍ら、毎年ほとんどの自治会の作品を見て楽しんでいるという。町外の知り合いから「作品を一ヶ所に集めればいいのに」と言われたが、「一ヶ所に集めたら面白くない。町の中をふらふら歩き回るからこの祭りは面白いのであって、一ヶ所に集めたら今ほど客も来ないと思う」と息子さんは主張している。

その点よりもむしろ、息子さんは祭りによる福岡町の利益が少ないことを問題視している。「高岡の祭りでは青年団が店を出しているため地元に金が落ちていくが、つくりもんまつりでは露店ばかりだから客が来ても地元に全然金が落ちない」ということだ。確かに、つくりもんを制作していても福岡町の景気が直接良くなるわけではない。露店

の営業者から多少料金を徴収しているだろうが、祭りの運営や宣伝などに費用がかかるため、町民が報酬を得ることはほとんどないと考えられる。“みんな総出”の祭りであるならば、観光化する際に今以上に地元の福岡を潤すことも視点に入れるべきだろう。

また、西日本鉄道 OB 会と西町自治会で長年つくりもん制作に携わってきた年配の男性は、コンテスト形式になった後の問題について「昔は作品の審査を町長が行っていたが、えこひいきをする傾向があった。今は審査員に学校の美術の先生など公平な立場の人がいるが、学校の先生は異動があるためつくりもんまつりのことをどれだけ知っているのか疑問である。祭りの伝統を知らず、自分の美的センスだけで評価を決めるのもそれはそれで問題だと思う。」と指摘している。伝統的な祭りの素朴性を維持することを求める声も上がっているのが現状である。伝統行事として地元の住民と、観光行事として観光客と双方がそれぞれの面で祭りを楽しめるように、バランスよく祭りを継承していかなければならない。

おわりに

つくりもんまつりは 300 年以上続く祭りであるが、その内容は長い歴史の中で大きく形を変えてきた。地元の人たちの間でしみじみと楽しまれていた祭りは、近年福岡町の観光名物として外部に PR されるようになった。その変化に喜ぶ住民もいれば不満を持つ住民もいる。現在のつくりもんまつりは、つくりもん作品の制作に思いを捧げる人々とその作品を楽しみに集まる人々とがうまく調和して作り出されている。それは子どもからお年寄りまでが祭りを楽しむことで福岡町が一体となる瞬間であり、代々受け継がれてきている。

これほど祭りが長い間続いているのは、やはりつくりもんの制作が楽しいからである。食物を用いて一つの作品を作り上げていくという非日常的な体験には、他では得られない感動や躍動感、仲間との結束感があるということを、つくりもん制作に携わる人々を見てきてわかった。そして、その楽しさが伝わってくる作品を見ることもまた同様に楽しいのである。

調査を終えて感じたことは、伝統の希薄化や利潤追求など観光化に伴う課題と向き合いながら現在の形を維持していけば、つくりもんまつりは今以上に魅力的な祭りとして今後も必ず継承されていくのではないかということである。子どもがつくりもんの作り方を覚えれば、大人になってから再び祭りに参加する機会が必ず訪れるだろうし、年々新たな団体や久しぶりに復活した団体がつくりもんを出品していることは、祭りがまだまだ廃れていないことを示唆している。今後さらにつくりもんまつりを福岡町の名物として継承・発展させていくためには、祭りの核となる伝統的な部分はしっかり残しつつ、古い形式に縛られない柔軟な姿勢で祭りの魅力を町内外の人々へ最大限に伝えていくことが重要ではないか、と私は考える。

謝辞

今回つくりもんまつりの調査にご協力いただいたすべての方々に、心からお礼を申し上げます。お忙しい中で丁寧に対応してくださり、貴重なお話を数多く聞かせていただきました。福岡町には何度も訪れましたが、その度に福岡町民の方々のあたたかさに触れ、調査を繰り返す度に“福岡町は魅力的な町である”ということを実感しました。今回皆様から伺ったお話を文字に起こし、報告書という形で大切にまとめさせていただきました。拙い文章ですが、お世話になった福岡町の皆様がこの「つくりもんまつり」について改めて何か感じるきっかけになれば大変嬉しく思います。本当にありがとうございました。

参考文献

岩崎照栄、島倉英彦　1999 年　『福岡町鳥倉村の物語』　岩崎照栄
鵜飼正樹編　2002 年『つくりもんまつり 2』　京都文教大学人間学部文化人類学科
同上　2003 年　『つくりもんまつり 3』　同上
同上　2005 年　『つくりもんまつり 4』　同上
北日本新聞　「中島町と末広町最高賞」　2014 年 9 月 25 日付朝刊 28 面
笹原亮二、西岡陽子、福原敏男　2014 年　『ハレのかたちー造り物の歴史と民俗ー』岩田書院
福岡町史編纂委員会　1969 年　『福岡町史』　福岡町役場

参考にしたウェブサイト

「サントリー文化財団ブログ　地域ナビ」
（http://sfnd.blog.suntory.co.jp/005754.html；2014 年 2 月 2 日閲覧）

無形文化財の継承・保存活動―民間雅楽団体「洋遊会」を中心に―

本多　梓

はじめに

私が福岡の雅楽に興味を持ったのは、福岡町にある雅楽の館に訪れたことがきっかけである。それまでは、初詣に行った際に雅楽を耳にすることはあったが、実際に演奏しているところを見たことはなかったし、雅楽についての知識もあまりなかった。しかし、雅楽が古くから日本の文化と密接に関わっていること知り、また、福岡町の雅楽は高岡市の無形文化財に指定されていることを知った。それだけでなく、福岡町には寺社の後ろ盾なしで 100 年以上もの間、雅楽を継承し続けている民間雅楽団体が 2 つあることも知った。

そのひとつである「洋遊会」は市から福岡の雅楽の保持団体として認定されている。このことから、民間の雅楽団体がどのように雅楽を継承してきたのか、そしてこれからどのようにして雅楽を継承していくのかということについて特に関心を抱いた。

以上のことを踏まえ、本章では福岡町の雅楽の継承について、洋遊会の活動を中心にまとめ考察していく。

1.　雅楽の概要

本節では日本に伝えられた雅楽の歴史と現在日本で演奏・演舞されている雅楽の概要を『はじめての雅楽：笙（しょう）・篳篥（ひちりき）・龍笛（りゅうてき）を吹いてみよう』（笹本武志、2003 年、pp.12-22）と『雅楽入門』（増本伎共子、2010 年、pp.28-45）からまとめる。

1-1.　日本の雅楽の歴史

日本にはじめて雅楽が伝えられたのは飛鳥・奈良時代で、朝鮮半島から仏教と共にもたらされた。

589 年に中国が隋王朝のもとに統一されると、中国の文化を積極的に取り入れるようになる。この時、雅楽も同時に輸入され、「唐楽（とうがく）」と呼ばれた。その後、「唐楽」が日本の雅楽の主流となる。

大宝元年（701 年）、大宝律令が完成し、太政官治部省（だじょうかんじぶしょう）に日本ではじめての本格的な音楽機関、雅楽寮（うたまいのつかさ）が置かれる。また、経済力のある寺院では独自に楽人を抱え、様々な法要で演奏させていた。その後、雅楽寮は律令国家の解体と共に衰退していくことになる。

雅楽寮の衰退後も、平安時代に入ると雅楽への関心はさらに盛んになっていく。それ

に伴い、外来の音楽であった雅楽が、日本化していく。9 世紀にはいると楽器編成、演目等に変化が現れ、現在の雅楽の形とほぼ同じになる。雅楽の最盛期は平安中期とされ、この頃の雅楽は王朝文化の中心に位置しており、日本人が作った曲も登場し始める。それでも、雅楽はあくまで貴族の文化で、庶民にはなじみのない高貴な文化であった。

鎌倉時代に入って政治の中心が武家へ移ると、雅楽もそれまでの時代ほど目覚ましい発展は見せなくなる。しかし、武家の中には公家の雅やかさに憧れを持つ者もおり、特に雅楽に対しては大いに関心を持っていた。武家が雅楽の関係する催しのスポンサーになるなど、雅楽は武家社会の中でもその庇護を受けながら継承されてきた。

しかし、応仁元年（1467 年）に応仁の乱が起こると、京都が主戦場となり、雅楽は伝来以来最大の危機を迎える。楽人の離散や死亡で、多数の宮中行事が取りやめとなった。

この危機を救ったのは豊臣秀吉である。秀吉は京都方の楽人を補うために天王寺楽所から楽人を召し出し、雅楽の復興と保護を行った。また、南都の寺社の楽人も京都方に呼び、その結果、京都・南都・天王寺の楽所は完全に対等な立場となった。その後、この 3 楽所は「三方楽所（さんぽうがくそ）」と呼ばれるようになる。

江戸時代に入ると雅楽に関する研究や普及が進み、公家や武家、僧侶や神官たちだけでなく、町民や農民の間にも次第に雅楽が普及しだした。しかし、当時はまだ雅楽の修習を受けることができたのは代々雅楽を受け継いでいる家（楽家（がっけ））の者のみで、一般人が雅楽を習うことは公的には禁じられていた。ただし実際には、後出する洋遊会（暢日連）の創設が文久元年（1861 年）であることを考えると、地方の地主のような財力を持った者にはある程度普及していたことがわかる。それでも、真正な雅楽を継承しているわけではないので、楽家からすれば地方のそれは「雅楽」と認められるものではなかったのかもしれない。

その後、明治時代になると皇居が京都から東京に移り、それに伴い楽人たちも東京に移ることになる。明治 3 年（1870 年）には宮中の太政官内に「雅楽局」が設けられた。この「雅楽局」は現在の「宮内庁式部職楽部（くないちょうしきぶしょくがくぶ）」の前身にあたる。

しかし、三方楽所の楽人のほとんどが東京に出向いたことで、近畿地方の雅楽は人手不足に陥ってしまった。そのような状況を踏まえ、明治 6 年（1873 年）にようやく一般人への雅楽の修習が認められた。

2. 福岡町の雅楽

2-1. 洋遊会

2-1-1. 歴史

本項では、『悠久の雅～洋遊会百五十年の響き～』（洋遊会百五十年記念編纂委員会

2011）と洋遊会の会員から聞き取った話をもとに洋遊会の歴史についてまとめていく。

文久元年（1861 年）に長安寺住職の朝順恵氏が福岡町の旦那衆に呼びかけて集まったのが、現在の洋遊会の前身にあたる暢日連（ちょうにちれん）の始まりである。当時は末友村（現在の小矢部市末友）の僧の月海師に雅楽を習っていた。その時は、親鸞聖人の六百忌法要のときであり、主な活動はお寺の付楽（つけがく）[2]としてであった。

明治 11 年（1878 年）に明治天皇の北陸御巡幸の際、福岡町の島田七郎平邸に天皇の休憩の場が設けられた。その際に、暢日連の会員が天皇の到着の際には五常楽を、出発の際には越天楽を演奏した。また、このときに紋章入りの標旗を会場の軒頭に掲げることを許された。この標旗は今も保存されている（写真 1）。

しかし、大正期に入ると会員数が徐々に減少し、わずかな人数で会を保つような状態になってしまった。このような状況を遺憾に感じた、当時の会員の川島静哉氏は大正 8 年（1919 年）に宮内省楽師の東儀俊義氏と相談し暢日連を「洋遊会（ようゆうかい）」として改めて組織しなおした。この時、東儀氏から会の前途を祝って「洋遊」の掛け軸（写真 2）が送られた。この掛け軸は現在も残っている。

写真 1.　明治天皇御巡幸の際の標旗

写真 2.　「洋遊」の掛け軸

大正 9 年（1920 年）には 5～6 名が新たに入会し、同 11 年（1922 年）にはさらに 6 名が洋遊会に加わった。また大正の末期から昭和の初期にかけて新たに 6 名が加入し、洋遊会は会員の若返りと再興に至った。

[2]お経に雅楽を合わせること

この間に川島氏は管弦の演奏だけでなく舞楽を洋遊会に導入した。宮内省の楽師の方に万歳楽（まんざいらく）、蘭陵王（らんりょうおう）、春庭花（しゅんていか）の演目の教授を受けた。この時、楽師の方から教わった舞の踊り方を川島氏は独自に考察した楽譜（写真 3）に残し、これは現在の洋遊会の舞の修習の際にも使用されている。このような独自の舞の楽譜があるのは洋遊会だけだとされる。

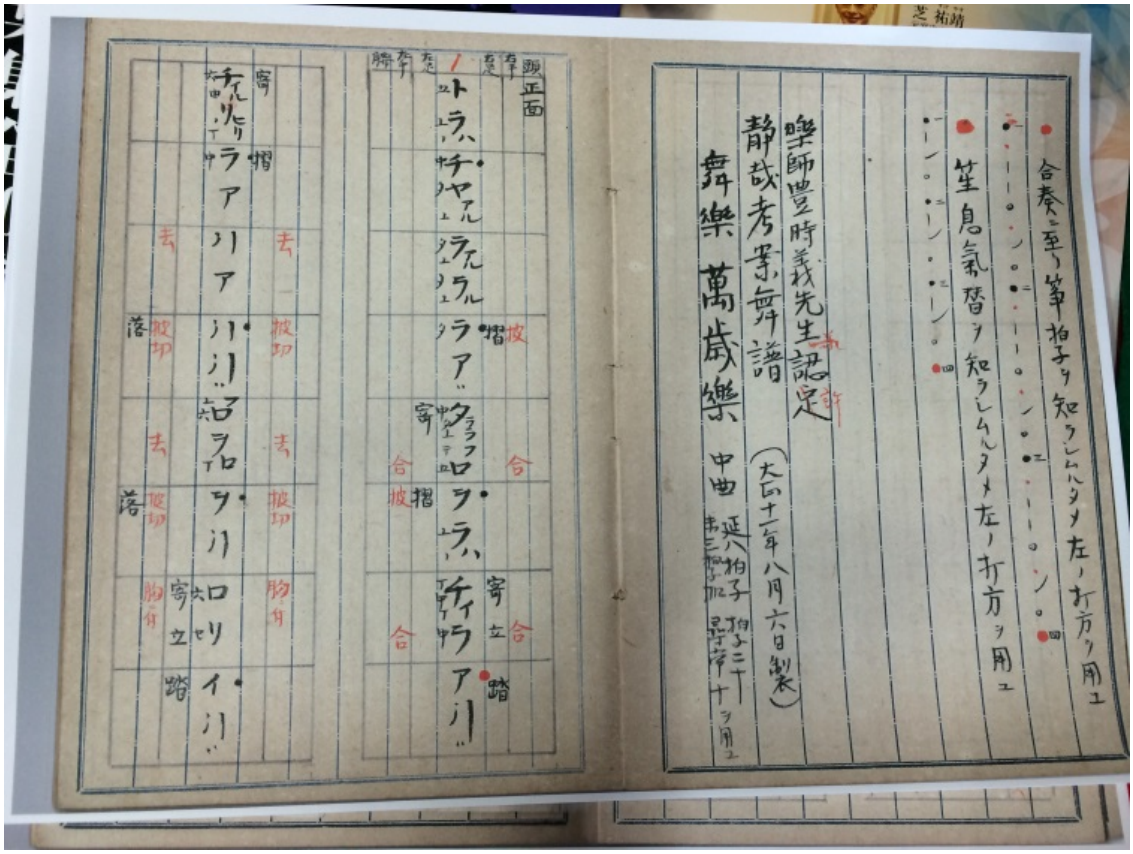

写真 3.　川島氏作成の楽譜

その後、洋遊会には演奏の依頼が各所から届くようになり、その名は中央にまで届くようになった。

そんな洋遊会も存続の危機を迎えることとなる。昭和 40 年（1956 年）頃から主要な会員が相次いで亡くなり、洋遊会は徐々に衰退していった。とりわけ、洋遊会の舞楽演目の一つである「蘭陵王」（以下、陵王）の舞人が亡くなり、後を継ぐ者もいなかったため、陵王の演舞はしばらく途絶えることとなる。昭和 45 年（1970 年）11 月 17 日に福岡町教育委員会は、福岡町の無形文化財に「雅楽」を指定し、その保持団体として洋遊会を認定した。このことをきっかけに一時期、中学校のクラブ活動を通して舞楽練習の取り組みが行われた。当時このクラブ活動に参加していた生徒 2 名が現在、洋遊会の会員として活躍している。

昭和 60 年（1985 年）には、また別の主要な会員 2 名が相次いで他界し、会員は 9 名になった。それまで洋遊会の会員は、親が洋遊会の会員だから自分も入会したという人が多く、厳格な世襲制を取っていたわけではないが、洋遊会や福岡町と全く縁のない人が新たに入会することはほとんどなかった。雅楽をやりたいという人に洋遊会を勧めても「とんでもない、あそこは旦那衆のやるところですから」というように当時の洋遊会は多くの人たちには縁のない格の高い会という印象を持たれていたようだ。

しかし、大学への進学が一般化してくると、県外へ進学、就職し、地元へ帰ってこない若者が増えてしまった。このことにより、洋遊会に新たに入会する若者が減ってきた。

そのため、昭和 63 年（1988 年）にこれまでの事実上の世襲制を改めるべく、広く会員を募る旨の広告を北日本新聞に掲載した。また、町在住の福岡中学校吹奏楽部OBに声掛けが行われ、30 代から 40 代の 7 名が集まった。この時の活動がなければ、洋遊会はなくなっていただろうと、現在の会員の人（50 代女性）は語る。しかし、当時の洋遊会は会員の担当する楽器が、笙と篳篥（ひちりき）に偏っており、また、現在のように一人が複数の楽器を演奏できるわけでもなかった。加えて、当時の会員の多くは仕事が忙しく、楽器指導のために仕事を休むことが困難であったために、しばらくは小矢部市の洽声会（こうせいかい）から楽器の指導を受けることになった。洽声会とは古くから交流があり、洋遊会が下火になった時は洽声会（こうせいかい）から人手を借り、時には洋遊会が洽声会を手助けするなど、持ちつ持たれつの関係にある。この時はまだ、新たな洋遊会の会員として集められた人は「洋遊会」と名乗ることは出来ず、ある程度、楽器の技術を習得するまでは洋遊会とは別の「雅楽同好会」として、雅楽の修習に励んだ。彼らの中には自分たちがまだ洋遊会のメンバーでなかったことを知り、驚く人もいたと話す。

平成 4 年（1992 年）から行われた「ふるさとみらい 21[3]」では昭和 43 年（1968 年）年から途切れていた宮内庁式部楽職との関係を再び築くことが出来た。このおかげで、陵王の演舞が、宮内庁の楽師によって、23 年ぶりに披露されるとともに、洋遊会所有の陵王の装束が再び日の目を見ることとなった。洋遊会に舞を取り入れた川島静哉氏の子孫の方から、この時「陵王をまた復活させてくれてありがとう」と大変感謝されたと言う。

本来なら宮内庁の楽師の方を呼ぶには 2～3 年かかるものだが、洋遊会の場合はたったの 1 年という期間で呼び戻すことが出来た。洋遊会の理事を務めている山田美恵さんは、「これはとてもすごいこと」と言う。古くから関係があったからこそ実現することが出来たのかもしれない。しかし、楽師の方々は、地方で雅楽を盛り上げようしているのであれば、たとえ洋遊会でなくとも来たと述べる。当時指導を受けた山田さんは宮内庁の楽師の方々の心の広さを感じたと話す。その後、雅楽同好会のメンバーは平成 8 年

[3] 北日本新聞社が取り組んだ地域総合イベント。平成 4 年（1992 年）から 11 年かけて富山県内 35 市町村をめぐり、各地の伝統文化や自然、産業を踏まえた上で、富山の魅力を再発見しようとする試み。

（1996 年）の「国民文化祭[4]とやま」の参加後に正式に洋遊会の会員となった。それ以降は雅楽同好会が組織されることはなかった。この国民文化祭での成功を受け、さらに洋遊会への入会を希望する者が増えた。

国民文化祭とやま後の洋遊会の活動は平成 9 年（1997 年）7 月の「福岡総合町民センター（U ホール）竣工記念式」での舞楽公演が中心となった。しかし、この時、洋遊会では舞人が不足しており、新たに会員を募る必要があった。そこで、新たに 4 名が勧誘され、洋遊会で舞楽の修習に励むこととなった。この時、洋遊会に入った 50 代女性は、当初、竣工式での舞楽公演のみの限定的な入会だったそうだ。この女性は雅楽の経験がなく、始めたばかりの時は雅楽の用語など、分からないことがたくさんあって苦労したそうだ。しかし、会員の指導を受け次第に理解していったという。最初は一時的なつもりだったが、これも何かの縁と思い現在も続けている。演奏が上手くいかない時は落ち込むこともあるが、それでも雅楽は楽しいと述べていた。

平成 10 年（1998 年）からは、それまで洋遊会の舞楽演目になかった「陪臚」の演目を福岡町からの要望に応え、新たに修習することになった。陪臚を新たに修習するためには、装束を新調しなくてはならず、福岡町が装束の補助を出した。しかし、町からの補助金だけでは足りず、会員でお金を出し合った。このとき、古参の方々はより多くお金を出したそうだ。この新たな舞楽演目への挑戦に関して、洋遊会には福岡の雅楽の保持者として「伝統を残す」使命だけでなく、「新たなことに挑戦すること」も使命にあると山田さんはいう。そのためにも、常に若く、常に新しく、常に生きているという意味である「常若・常新・常生」を大切にしているとのことだ。

平成 12 年（2000 年）にはイギリスで雅楽公演が行われた。それぞれハル市、ヨーク市、ベバリー市で 3 日間公演を行った。また、洋遊会は平成 19 年（2007 年）にも再び英国を訪れ、雅楽公演を行っている。

この英国公演を機に、洋遊会の活動は多岐にわたるようになり、近隣都市でも演奏会の機会が増えた。石川県金沢市で公演を行った後には、石川県から洋遊会への加入を希望する人が見られるようになった。その多くは神主の方であったそうだ。

また平成 25 年（2013 年）に行われた伊勢神宮の式年遷宮では、全国諸芸能奉納では一番最初に奉納を行った。上野さんは後世に残すことができ、先代の方々にも「ここまで来ました」と報告できるような功績を残せてよかったと話している。

2-1-2. 現在の洋遊会

現在、洋遊会には約 40 名が会員として所属している。男女比は 7：3 で男性の方が多い。また、主に演奏会等に出向くのはそのうちの 20 名ほどであり、50 代から 60 代

[4] 国民文化祭とは全国各地で様々な文化に親しんでいる個人や団体が、日ごろの成果を披露するとともに、交流する国内最大の文化である。昭和 61（1986）年から毎年開催されている。

の方が中心となっている。残りの 20 名は高齢で実質的には演奏を引退したメンバーと、まだ技術の修習の途中である新参のメンバーである。

現在、福岡町在住の上野慶夫さんが会長を務めている。会員には学生もおり、中には小学生の頃から雅楽を続けている方もいる。洋遊会では会員から会費を徴収しているが、大学生以下の人に対しては免除している。また、洋遊会が法要や依頼公演に出向いた際は、いくらかの謝礼を受け取るが、これは参加した会員に配るだけでなく、洋遊会にもいくらかお金を必ず入れるようにしているという。他にも、洋遊会では個人で活動することに対して特に制限はないが、洋遊会が保有している楽器や装束を使用する場合は、個人が受け取った謝礼のうち、いくらかは会に入れることになっている。雅楽を継承してゆくためにはお金がかかるので、福岡の雅楽の保持者である洋遊会としては、いざという時のために会にお金を積み立てておく必要があり、現在このようなシステムがとられている。

練習は曜日によって内容が異なる。月曜日は笙[5]（写真 4）と篳篥[6]（写真 5）、水曜日は箏（写真 6）、木曜日は合奏練習が行われ、土曜日には龍笛[7]（写真 7）と舞の練習が行われている。琵琶（写真 8）、鞨鼓[8]（写真 9）、太鼓[9]（写真 10）、鉦鼓[10]（写真 11）の練習日は特に設けられていない。個人が都合によって練習を休むことはあるが、それぞれの練習自体がなくなることはないそうだ。

---

[5] 細長い竹管を 17 本、頭と呼ばれる椀型の円周上に縦に並べた、独特の形をした楽器。発音構造はハーモニカやパイプオルガンに近い。合竹という、5～6 音からなる和音による演奏が主で、雅楽の中では全体を包むような広がりを持っている。

[6] 竹製で表に 7 つ、裏に 2 つの、計 9 つの指孔がある縦笛。雅楽の中では最も大きい音が出る楽器で、主に主旋律を演奏する。

[7] 横笛の一種。篳篥が主旋律を演奏するのに対して、龍笛は主旋律を彩る役割を持っている。唐楽の管絃の曲では、龍笛の音頭から始まるので、雅楽合奏では重要な役割を担っている。

[8] 鞨鼓は打楽器で鼓の一種である。西洋音楽でいう指揮者のような役割を雅楽合奏では担う。

[9] 雅楽では釣り太鼓が使用される。雅楽では時間は周期的に繰り返すという考えがあり、太鼓が時間の周期を表わす。2 本の桴を両手に持って打ち、左手のやや弱い打ち方を、右手の強い打ち方するというように、左右の桴で叩き方が決まっている。

[10] 雅楽では唯一の金属楽器で、太鼓の音色にアクセントをつけ、また、小拍子を告げる、などの役割がある。

写真 4.　笙

写真 5.　篳篥

写真 6.　箏

写真 7.　龍笛（左）

写真 8.　琵琶

写真 9.　鞨鼓

写真 10.　太鼓

写真 11.　鉦鼓

（写真 4-11 は『雅楽：千三百年のクラッシック』（上野慶夫、2003 年、富山新聞社）より引用）

練習場所はふくおか総合文化センター（U ホール）の一階和室で行われており、和室の使用料は市からの援助で無料である。洋遊会は完全な実力主義をとっており、年齢や性別は関係なく、演奏が上達すれば合奏に加わることが出来る。雅楽を経験したことがない人が洋遊会の演奏を聞くと、「自分が練習してもこんな上手に演奏できるようになるかわからない。」と話す人が多いそうだが、初心者でも約 1 年の修習で舞台に上がれるよう指導を行っていると上野さんは言う。楽器は自分の演奏したいものを選べる。洋遊会の方の多くは複数の楽器を演奏できるが、雅楽の世界では管楽器が 1 種類、弦楽器も 1 種類演奏でき、また舞楽も一つ舞うことが出来るようになってようやく一人前として認められる。

以下では筆者が見学した合奏練習の様子（2014 年 6 月 5 日、26 日、7 月 17 日の計 3 回）についてまとめる。

練習は 19 時 30 分から約 2 時間行われている。しかし、練習に参加する会員の多くは仕事が終わってからの参加となるため、全員が揃うのは 20 時頃となった。50～60 代の方が中心とだったが、30 代や 40 代の会員も何名か見受けられた。

6 月 5 日は 12 名が集まり、うち 10 名が男性だった。この日は 4 曲演奏していた。一曲終わるごとに会長の上野さんを中心に年長の方が若手の方に指導していた。時折、笑いが起こるなどし、緊張感もありながら、終始穏やかに練習が行われていた。また、休憩の時間には世間話をするなど、交流の場にもなっているように感じられた。その後、練習が終わると 30 代や 40 代の会員が率先して太鼓等の重い楽器の片づけに取り掛かっていた。

6 月 26 日の練習では演奏会を間近に控えていたために、5 日の時より緊張感のある雰囲気で練習が行われた。この日は男性が 10 名、女性 4 名で後から舞の方が 2 名加わり、計 16 名が集まった。練習は演奏会で演奏する曲を中心に行い、後半は舞の練習も行った（写真 12～15）。

写真 12.　合奏練習
（正面：鞨鼓、手前左：太鼓、
奥右：笙、奥左：篳篥）

写真 13.　龍笛を演奏する洋遊会の方（正面）

写真 14.　太鼓（右）と鉦鼓（左）

写真 15.　舞楽の練習をする洋遊会の方々

7 月 17 日の練習は演奏会が終わった後の練習であったため、これまで見学した練習の中で参加人数が一番少なかった。毎回、演奏会後の練習は参加人数が少ないそうで、この日は男性 5 名、女性が 3 名で行われていた。また、この日は龍笛の演奏者が一人もいなかったため、普段は鞨鼓を演奏する方が代わりに龍笛を演奏していた。しかし、その方も久しぶりに龍笛の演奏をしたため、なかなかうまく演奏できずに苦労していた。さらに、太鼓の方も新たに太鼓の修習を始める方で、主にこの日は太鼓の方への指導がメインになっている。

洋遊会では年に 3 回、宮内庁の楽師の方が訪問し、直接指導を受ける機会がある。これは平成 4 年（1992 年）から続いており、2014 年度は 5 月と 7 月に行われた。本来ならば 9 月から 11 月の間にもう一回行われるが、宮内庁の都合により 3 回目の指導の機会は叶わなかった。それでも宮内庁の楽師の方が一緒に演奏会に参加してくれるのは洋遊会だけという。それは、洋遊会の雰囲気が良いからと言われたと上野さんは話す。楽師の方は他の雅楽団体にも指導に行くが、他の雅楽団体は 1 度指導したことが身についておらず、再び指導に行くと前回指導したことをもう一度教えなければならないことが多いが、洋遊会では一度教えたことはしっかり身につけて、次の講習会に臨んでくるので、楽師の方も洋遊会へ指導に来るのは楽しみだと言っているそうだ。

その甲斐あって、洋遊会はここ 15 年で格段にスキルアップしたという。上野さんは、このような差が出るのは、他の雅楽団体は合奏練習を重視していないからではないかと言う。その点、洋遊会は合奏の場を大切にしており、これは文化財として保護するために行っているのではなく、雅楽は合奏ありきという考えがあるからだと上野さんは言う。

2-2.　照栄連

本項では福岡町にもう一つある雅楽団体の照栄連について、『日本の小さなロマン―福岡町鳥倉村の物語―』（岩崎照栄　鳥倉英彦、1999 年、pp.72-87）の記述と聞き取り調査から得られた情報をもとにまとめていく。

照栄連は福岡町土屋の住民の方が中心となって活動している雅楽団体である。創設は明治の中頃で、当時村長をしていた窪谷与一郎氏が村の地主に呼びかけたのが始まりである。当初は、洋遊会の前身である暢日連（ちょうにちれん）に教えを受けて、練習していた。会員のほとんどは地主であったため、集まるのは容易で、加えて金銭面でも雅楽をはじめることに苦労はなかったようだ。この時に、暢日連から照栄連へ寄贈された太鼓（写真 16）が現在も雅楽の館に展示されている。現在は与一郎氏の子孫にあたる窪谷政雄さんが会長を務め、会員数は会長を含めて 7 名である。中には洋遊会と掛け持ちしている方もいる。

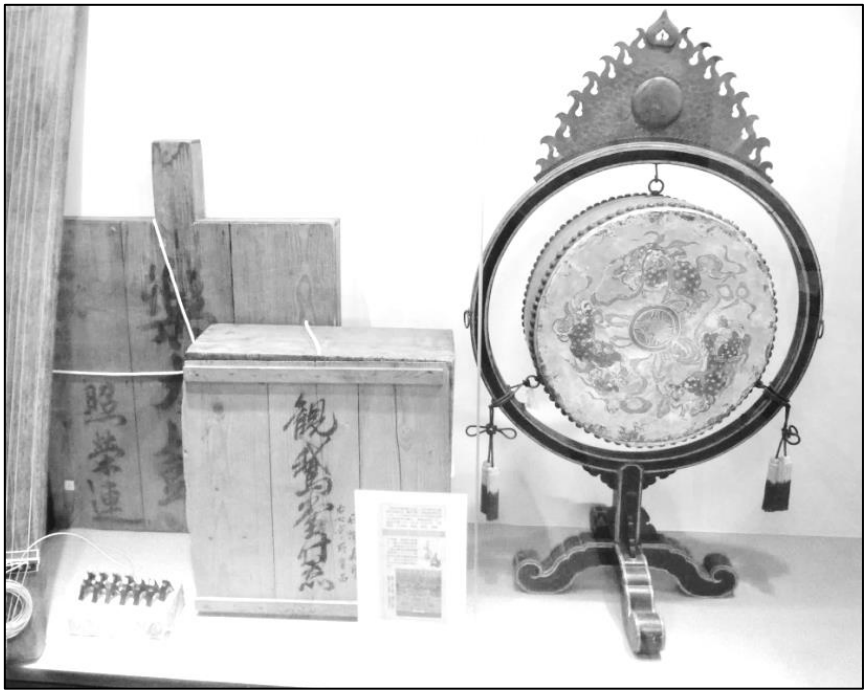

写真 16.　暢日連（洋遊会）より寄贈された太鼓

窪谷さんによると洋遊会と照栄連では同じ雅楽団体でも異なる特徴をもつという。洋遊会の活動のメインが演奏会を行う「見せる雅楽」、「聞かせる雅楽」であるのに対して、照栄連は法要や冠婚葬祭の式典で演奏する「盛り立てる雅楽」であると述べ、すなわち照栄連は、自分たちのことを裏方であると考えているそうだ。そのため、窪谷さんは演奏会等で主役として表舞台で活動している洋遊会とは、同じ雅楽団体でも趣旨が全く異なると言う。また、窪谷さんは今後、照栄連が洋遊会のように演奏会を行うことはまずないだろうと断言している。

活動のメインは寺社での付楽であるため、照栄連では雅楽の純粋な技量よりも、寺や神社におけるしきたりを覚えることを重視していると窪谷さんは話す。例えば、法要で

儀礼のしきたりにそむくようなことをすれば、その批判を受けるのはその寺の住職であり、彼らの顔に泥を塗ってしまうことになるからだと窪谷さんは言う。また、演奏は儀式の進行に合わせるため、演奏中は住職らの方を見ながら演奏しなければならないそうだ。また、経に合わせて演奏するため、だいたい曲の 3 分の 1 程度で終わってしまうという。このほかにも法要では、住職のお勤めの合間に休憩も兼ねて雅楽の演奏をするが、それも一曲の半分程度の演奏で十分だそうだ。このようなことも、照栄連ではしきたりが重視される所以であり、窪谷さんは「雅楽の演奏だけできても儀式でのしきたりを知らなければ照栄連ではやっていけない」と述べた。

また、洋遊会について窪谷さんは、「見せる雅楽である洋遊会は真正の雅楽を継承しなければならない、また、演奏会は雅楽に興味がある人が来ているのだから、中には演奏の失敗に気づく人もいる。そのため練習をしっかりしなければならないだろうから、洋遊会は洋遊会で、照栄連とは異なる大変さがあるのではないか」と述べていた。

他にも、洋遊会との大きな違いとしては、照栄連では舞は行わず、管絃の演奏のみ行っていることが挙げられる。

現在、練習は月に 1 回、第 2 火曜日に高岡市福岡町土屋にある「木楽館（きらくかん）」と呼ばれるコミュニティーセンターで午後 19 時から 21 時の 2 時間行っている。洋遊会は楽譜通りに演奏しているが、照栄連は法要などの儀式のなかで住職や宮司の行為に合わせて演奏しなければならないため、昔は住職や宮司の方に練習に来てもらって実際の進行に合わせて練習したが、現在はCDを使って練習している。

照栄連の活動が盛んになるのは春祭りと秋祭りの時期で、多い時には月に 7～8 回活動し、射水神社や護国神社、高岡関野神社等に出向いている。まず基本的には寺社から依頼を受けて、先方の要望に応える形で管絃を揃えるとのことだ。大きな法要になると 1 年前から依頼がくるそうだ。基本的に照栄連ではお寺や神社の大きさに関係なく、連絡が早く来た順に依頼を受けているという。

以前、大きなお寺から法要に依頼が来た時、すでに他のお寺から法要の依頼が入っていたため断ったことがあった。その際、大事な法要なのでどうしても来てくれないかと頼まれたそうだが、寺に応じて優先順序を変更することは照栄連と他のお寺との信用にかかわることであり、また、仏様にも寺の大小によって優劣をつけることはおかしいということで断ったという。また、出来るだけ会員の予定を合わせて、照栄連のメンバーで出向くようにしているが、どうしても人数が揃わない場合は小矢部の洽声会から人手を借りるそうだ。

戦後、農業から他産業へと移行する者が増え、徐々に照栄連は衰退していった。そして、創設当時は奉仕活動として行っていたが、昭和 30 年（1955 年）頃から会社勤めをする人たちが増加するようになって以降はお礼も増え始めた。法要等には普段の仕事を休んで参加しなければならないので、会社勤めの人が雅楽を続けることは厳しいと窪谷さんは言う。

また、衣装代 5 万円は各自が用意することになっており、若い人には金銭的に厳しく、なかなか参加してくれないと述べていた。窪谷さんは「雅楽団体を続けるにはお金がかかるため、神事・仏事の祭典儀式に出向くことは必要である」と述べていた。
昭和 20 年（1945 年）頃には 13 名いた会員も現在は 7 名と、会員数は徐々に減少傾向にある。また、現在の会員のほとんどは窪谷さんの身内にあたる方である。このような現状から、照栄連はいずれなくなってしまうか、洋遊会と一つになるだろうと窪谷さんは考えている。

2-3. ここまでのまとめ

ここでいったん洋遊会と照栄連の比較をまとめる。照栄連と洋遊会の違いで、まず重要なのは、洋遊会が文化財の保持団体として指定されているが、照栄連は指定されていないことである。このため、洋遊会では活動の謝礼を会員に配布するだけでなく、会にも一定額納め、いざという時のために積み立てを行っている。

次に、洋遊会では演奏と舞楽を継承しているが照栄連では演奏のみを継承している。洋遊会が舞楽を継承していることから、より宮内庁が継承している雅楽に近い、真正の雅楽を洋遊会は受け継いであると言える。また、照栄連では各寺社に合わせた演奏を行っているため、その雅楽が独自の変化を遂げて継承していると考えられるが、洋遊会では年に 3 回宮内庁の楽師の方から指導を受けている。これにより、独自の変化をすることはなく、真正の雅楽を継承することができる。

洋遊会では昭和 63 年（1988 年）に会員数の減少に伴い、それまでの世襲制を改める旨を新聞に掲載し、会員を広く募集した。洋遊会は会の存続のためにそれまでの伝統の一部を改革したが、照栄連ではそのような活動は行っていない。そのため照栄連では会員数の減少と高齢化が徐々に進んでいる。一方で洋遊会では、少しずつではあるが新たな会員を獲得している。

また、洋遊会では代々継承されてきた演目に加えて、平成 10 年（1998 年）に新たに陪臚の演目の修習に挑戦している。このように、新しいことにも挑戦していることも洋遊会と照栄連の違いの一つとして考えることができる。

以上のことをふまえ、このような差異が生じるのは、文化財の保持団体と認定されていることで生まれる「保持団体としての使命感」が要因であると筆者は考える。

3. 洋遊会の活動

洋遊会では福岡の雅楽を継承していくために、演奏活動以外にも様々な普及・保存活動を行っている。また、その活動の中には文化財の保持者である洋遊会ならではのものもある。以下ではその一部を紹介していく。

3-1.　「雅楽の館」における活動

雅楽の館は、正式には高岡市福岡歴史民俗資料館雅楽展示分室「雅楽の館」である。雅楽の館は商家であった滝家が昭和初期に建造した家を再利用しており、館内には雅楽で使用される楽器や装束が展示されている（写真 17・18・19）。

写真 17.　雅楽の館（外観）

写真 18.　雅楽の館（内装 1）

写真 19.　雅楽の館（内装 2）

雅楽の館は、物販と展示のコーナーに分かれているが、物販はまちづくり活動を行っている、株式会社ウェルカム福岡が担当し、洋遊会は展示コーナーの管理を行っている。平成 12 年（2000 年）に、ウェルカム福岡の初代会長が洋遊会にゆかりがあったことから、福岡の雅楽についてもっと多くの人に知ってもらいたいということで、雅楽の館の創設に乗り出した。しかし、創設にかかる費用を一企業だけで負担することは困難であった。そこで、福岡町が費用の一部を負担してくれることになった。そのために、雅楽の館は商業施設ではなく、福岡歴史民俗資料館の分室という形で運営を行うことになっ

た。また、公的な博物館施設として雅楽の館を運営していくために、福岡の雅楽の保持者である洋遊会に協力が依頼された。

通常は午前 9 時から午後 16 時 30 分まで会館しており、入場料は無料である。スタッフの方が来館者に展示の解説を行っている。また、雅楽の館では展示を行うだけでなく、年に数回洋遊会が演奏会を行っている。年間の来館者数は約 10,000 人で、「つくりもんまつり」の際に行われる演奏会には約 3,000 人もの人が訪れる。来館者の中にリピーターが多いのが特徴である。

現在、雅楽の館では楽器（笙、篳篥、龍笛、太鼓）と舞楽で使用される面と装束が常設展示されている。装束はもともと、様々な演舞で使用されるものをかわるがわる展示していた。しかし、演舞のなかでも人気の高い蘭陵王（以下、陵王）の装束を常に展示してほしいという声に応え、陵王の装束が常設展示されるようになった（写真 20）。

雅楽の館では上で述べた常設展示とは別に、期間限定の特別展示やイベントも行っている。例えば、2014 年の 7 月下旬から 8 月上旬まで中国の七夕である、乞巧奠（きつこうでん）に関する展示が行われた。また、乞巧奠の説明が書かれたレジュメが配布されていた。ちなみに、この時の展示物はみな洋遊会の会員の私物であった。普段は使用していない部屋を、特別に許可を得て、展示が行われた（写真 21）。

写真 21.　乞巧奠展示

特別展示期間中の 8 月 3 日（日）には、夏の雅楽演奏会が催された。演奏会が終わった後に展示を見ている人がいると、会員の方が丁寧に展示物の説明をしていた。また、このときから常設展示に簡単な解説文が新たに添えられていた。

また、9 月 23 日（火）からは、つくりもんまつりの際に行われる秋の雅楽演奏会に合わせて、洋遊会の舞楽の成り立ちついての特別展示が行われた。この時は、明治天皇

の北陸御巡幸の際に掲揚することを許された標旗（写真 1）や、暢日連から洋遊会へと新たに組織し直した際に楽師東儀俊義師から洋遊会に贈られた「洋遊」の掛け軸（写真 2）、洋遊会に舞楽を最初に取り入れた川島静哉氏の随録（写真 3）が展示された。どの展示物も非常に価値のあるものであるが、特に「洋遊」の掛け軸はこの時初めて一般に公開された。

過去には特別展示だけでなく、イベントも催されている。数年前、福岡町で毎年春に開催されるひなまつりの際、雅楽の館にて十二単の試着体験が行われた。以前、放送されていた「篤姫」で使用されていた和宮の装束であったこともあり、企画は大変賑わったそうだ。

このように雅楽の館では様々な展示、時にはイベントが行われている。しかし、雅楽の館が博物館施設としてここまで機能し始めたのはここ数年のことである。それまでは来館者が来ても展示を簡単に見て、すぐ出ていってしまう状態で、来館者数も年間 3000 人と、現在の 3 分の 1 程度であった。この状況を当時、福岡町の担当であった副市長が「人が 3 分で出ていってしまうようではいけない」と言ったことがきっかけで、雅楽の館の改善が課題となった。しかし、なかなか良い改善策が出ず、手をこまねいていた時に、現在洋遊会の理事を務めている山田さんが作成した雅楽の館の改善案が目に留まり、そのまま山田さんに雅楽の館の改善を任せることになった。雅楽の館の改善について山田さんは以下のように語る。

> 改善を任された後、知り合いの学芸員に連絡をとり、博物館施設の運営方法について独自に情報を集め、雅楽の館の運営に応用していった。その甲斐あって、改善に乗り出した平成 21 年（2009 年）から 3 年間の間に、来館者数は約 3,000 人から約 7,000 人にまで倍増した。改善を任された当初は、自分への手当は支払われるものの、事務費等は支給されていなかった。そのため資料を展示するためにかかった費用は洋遊会の会員で負担していた。また、雅楽の館で演奏会を行う際には、演奏が午後からでも準備も含めると午前中から取り掛からなければならない。その時の会員のお弁当代は、自分の手当の中から出していた。雅楽の館での活動のほとんどはボランティアであるが、洋遊会の会員は嫌がることなく参加していた。特にお金のことに関しては誰も不満を言ったりしなかった。このように不満を言ったりしないのはみんな雅楽のことが好きだったからで、福岡の町の人は伝統的な文化を大切にする気質があるからだと思う。その後、そのような状態にあることを知った役所に勤める知り合いが、「その費用はここの部署が出すよ」と声をかけてくれるようになり、次第に行政も関わる活動となっていった。

このように山田さんは話し、以上のことを踏まえると、雅楽の館がここまで活性化し

たのは山田さんの努力だけでなく、周囲の人々からの応援があったからだと言える。

特別展示は毎回新しいものを用意しているが、洋遊会には貴重な資料がたくさん残っているため、展示の題材には困らないと山田さんは言う。これは多くの資料が個人の所有物だからと考えられる。公的な施設に保管しておくことが必ずしも悪いわけではない。しかし、個人の所有物ではなく、博物館施設等の所有になると、展示され、人の目に触れる機会が増えることになる。それ故に、破損したり紛失したりする可能性が高くなる。福岡町に雅楽に関する貴重な資料が多く残っているのは、人目に触れる機会が減る代わりに、個人が大切に保管していたからである。

しかし、展示物がたくさんあるといっても、その中から来館者の興味を引く展示を毎回考えるのは大変な仕事である。それでも山田さんは、雅楽の館での展示やイベントを通して、少しでも邦楽のルーツになっている雅楽について知ってもらい、興味を持ってもらいたいと考えている。

また、雅楽には常に「高尚な文化」というイメージがついて回る。過去に講演に出向いた際に、年配の方に「こんなお宮の音楽を聴くことできてありがたいです」と言われ、洋遊会の方が「私たちは民間の団体なので」と説明しても「ありがたい、ありがたい」と何度もお礼を言われることがあった。山田さんは雅楽をもっと身近に感じてほしいと考えており、そのための工夫を心がけていると言う。福岡の雅楽についてだけではなく、一般的な雅楽についても知らない人が増えてきている今、雅楽の館を通して雅楽について親しんでもらう活動をこれからも続けていかなければならないと述べた。

3-2. 児童への雅楽の普及

洋遊会は児童への雅楽の普及活動にも力を入れている。平成 18 年（2006 年）10 月 7 日に高岡市民会館で行われた「万葉と舞楽の世界　ワークショップ」では、洋遊会より舞楽の指導を受けた児童 4 名による舞楽「迦陵頻（かりようびん）」の演舞が行われた。迦陵頻は童舞と呼ばれる子供 4 名で行う舞である。装束には鮮やかな羽を着け、両手には「銅拍子」という小さなシンバルのような楽器を持って舞う演目である。当時、洋遊会は迦陵頻の装束を保有しておらず、借用した装束を使用していた。生徒の募集は前年の平成 17 年（2005 年）に行われ、約 1 年の修習を経てのお披露目となった。その後、迦陵頻は洋遊会の舞楽演目として取り入れられるようになり、平成 19 年（2007 年）10 月 28 日に行われた富山市水墨美術館公演、平成 20 年（2008 年）6 月 21 日の石川県立音楽堂で行われた芸能万華鏡源氏物語千年紀舞楽公演でも、迦陵頻の演目が行われた。また、迦陵頻だけでなく、もともと洋遊会の演目としてあった「納曽利（なそり）」の修習にも励んだ。納曽利は二匹の龍が楽しげに戯れている様子を舞った二人舞で、これは納曽利に限った事ではないが、本来は面を着けて舞い、女性と子供が舞う場合は花をあしらった冠を着けて舞う。大人子供各一人の計 2 名の二人舞で公演を行ったこともあった。

現在でも児童への指導は続いている。市の教育委員会が行っているプレミアム講座で

洋遊会は雅楽の指導を児童に行っている。この講座は高岡駅前のウィングウィング高岡内の生涯学習センターで毎年 5 月から 11 月の間に 11 回行われている。このプレミアム講座に参加した児童の中には講座が終わった後でも、引き続き今も洋遊会の練習に参加している生徒がいる。

プレミアム講座から続けている生徒も含めて、現在洋遊会で練習している生徒のほとんどは高校生である。学校の授業や部活動との兼ね合いから、毎週土曜日の夕方から、Uホールの一階の和室で練習を行っている。

このような活動は洋遊会の将来の後継者獲得としての意味を持つだけではない。舞楽の修習の際には舞楽について教えるだけでなく、目上の人を敬う礼儀作法の習慣も大切にしているとのことだ。最近の若い人は目上の人に対する礼儀を知らない人が多いと山田さんは感じており、その要因としては、彼らの親の世代が礼儀を知らないからだと述べていた。昔は、習い事などを通して目上の人に対する接し方を教えられたが、現在はそうした機会が減っているため、そうした礼儀を学ぶことが出来なくなっていると山田さんは言う。だからこそ、洋遊会では雅楽についてだけ学ぶのではなく、そうした活動を通して生徒たちには社会のマナーについても学んでもらいたいとのことだ。また、生徒たちにそうした礼儀を教える手前、自分たち大人もしっかりとしなければならないと述べていた。他にも、修習した成果を舞台で発表することで、それまでは内向的だった生徒が自分に自信を持つようになったということもあったそうだ。このように洋遊会の児童への雅楽の指導は、洋遊会の後継者育成だけでなく、若い世代への教育という役割も果たしていると言える。

上記のことから、近年では洋遊会では若年層への雅楽の普及も熱心に取り組んでいることがわかる。しかし、このような活動は最近になって行われるようになったわけではない。昭和 40 年代後半から 50 年代前半にも、中学校のクラブ活動として生徒へ舞楽を教授する試みを行われていたことがあった。自営業を営んでいた当時の会員、滝田勇治さんが中心となって指導した。洋遊会の会員には、当時、このクラブ活動に参加していた方が 2 名在籍している。うち、A さん（50 代女性）は次のように語る。

> 当時、クラブ活動と言っても 2 種類あり、一つはメインに所属するクラブ活動と、それとは別に従来のクラブ活動では取り扱っていない内容を体験するための週に 1 回のクラブ活動があった。後者は生徒の間で「B部活」と呼ばれ、舞楽体験はこのB部活のうちの一つだった。当時は演劇部に所属していたが、洋遊会の方が顧問の先生に雅楽のB部活に生徒を集めてもらうよう頼んだ。そのため、演劇部の部員全員（約 30 名）が参加することになった。この時、習った舞楽は「春庭花（しゅんでいか）」という演目で、これは大正 13 年（1924 年）に豊時義先生から教授されて以来、洋遊会で引き継がれている、伝統のある舞楽演目だ。半ば強制的に参加することになったが、特に嫌だという感情はなく、当時のこ

とを振り返るとむしろ好きだったし、自分と雅楽、特に舞楽は何か合致するものがあったのかもしれない。最終的に活動を続けたのは自分も含めて 4～5 名だけだった。その後、中学校を卒業した後は雅楽に触れる機会が殆どなく、再び雅楽に触れることになったのは平成 9 年（1997 年）になってからだった。このとき、洋遊会は「福岡総合町民センター(Uホール)竣工記念式」での舞楽公演の舞人を探していて、中学時代に舞楽の修習を行ったことがある自分に声がかかって、洋遊会に加入することになった。竣工式では中学時代に修習した「春庭花」を披露したが、中学校を卒業してから久しく雅楽に触れることはなのに、舞の振りは意外にも覚えていて自分でも驚いた。

この中学校でのクラブ活動を通した舞楽の教授は、A さんの卒業後、舞楽を教わりたいという生徒がいなかったことと、指導する会員の方が忙しかったことが相まって一度、途絶えた。その後どうしても雅楽をやりたいという生徒が現れ、先生に頼み込んだ結果、再び中学校での雅楽が復活することになった。しかし、その後はやはり雅楽を学びたいという生徒は現れず、結局途絶えてしまったそうだ。

このように洋遊会による若年層への雅楽の教授は一時的ではあるが以前も行われており、この活動に参加した生徒が大人になってから洋遊会に加入したことを考えると、こうした雅楽の普及活動は、後継者の育成・獲得という面で少なからず貢献していると言える。

3-3. 演奏会による普及活動

2 節で述べたように洋遊会では法要等に出向くだけでなく、依頼公演に出向いたり、自主的に演奏会を行ったりしている。雅楽の館では年に 4 回、無料の演奏会を行っている。以下では筆者が見学に行った夏の演奏会と秋の演奏会の様子をまとめていく。

夏の演奏会は 8 月 3 日（日）の午前 10 時 30 分から行われた。この日に演奏する曲の説明が書かれた簡単なパンフレットが作製されており、スタッフの方は来館者が来ると手渡ししていた。この日の演奏会の来館者数は 16 名で、今日は少ないと会員の方（50 代男性）は述べた。会員の方が「前の方へどうぞ」と声をかけるが、皆遠慮して前の方へ行く方はいなかった。また、この日は猛暑であったため演奏する洋遊会の方も大変そうであった。

この日は 3 曲が演奏された。一曲目は黄鐘調（おうしきちょう）の「越天楽（えてんらく）」という曲が演奏された。西洋音楽に調があるように雅楽にも調があり、その中の黄鐘調は夏を表す調である。越天楽に入る前には音取りと呼ばれる音合わせが行われていた。音取りには雰囲気を盛り上げる役割もある。2 曲目は同じ黄鐘調で「千秋楽（せんしゅうらく）」という曲が演奏された。最後は平調（ひょうじょう）という秋を表す調の「越天楽」が演奏された（写真 22）。演奏の間には会長の上野さん

による曲の説明が行われた。また、この日にはちょうど乞巧奠の特別展示が行われており、演奏会の最後には洋遊会の会員の方による展示の説明も行われた（写真 23）。

写真 22.　演奏の様子

写真 23.　展示の解説をする会員の方

演奏会が終わると多くの人は展示を軽く見てすぐに帰ってしまったが、中には展示を熱心に見たり、会員の方と話をしたりする人もいた。

高岡市から演奏会に来ていた方（50 代女性）にお話を伺うと、この女性は何度か洋遊会の演奏会に来ているそうだ。今回の演奏会は新聞を見て知り、来たという。演奏については、「とても耳触りがよくて良かった」と述べた。

秋の演奏会は 9 月 23 日（火）の午後 3 時からと午後 5 時からの 2 回行われた。この日はつくりもんまつりも行われていた。午後 3 時からの部は 10 分前には、既に雅楽の館が観客でいっぱいになっていた。立っている見物人も多くいた。今回も夏の演奏会同様に演奏する曲の説明が書かれたパンフレットが作られ、スタッフの方が来館者に手渡ししていた。演奏が始めるころには作製したパンフレットは無くなっていた。

1 回目の演奏会では平調の「越天楽」と「陪臚（ばいろ）」という曲を演奏した。演奏の合間には会長の上野さんが曲の説明をするとともに、9 月 21 日に行われた布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）[11]（写真 24・25）の様子を話していた。布橋灌頂会の話をしている際には「おー」と感嘆の声を漏らす場面などがあった。

[11] 立山信仰のため多くの人が訪れていた立山だが、女人禁制のため女性は立ち入ることができなかった。そのような女性たちを救済するために行われたのが「布橋灌頂会」である。笠をかぶった白装束の女性が目隠ししたまま、あの世とこの世の境界である布橋を渡ることで極楽浄土が可能になるというものである。始まりは江戸時代とされるが、明治時代の廃仏毀釈により開催が中断された。その後、平成 8 年（1996 年）の国民文化祭とやまにおいて 130 年ぶりに復活し、以後、不定期に開催された。平成 23 年（2011 年）から 3 年ごとに行われることになった。

写真 24-25.　布橋灌頂会で演奏する洋遊会

演奏が始まると外にいた人が音を聞いて雅楽の館に入ってくる人が何人も見受けられた。そのような人に対して、入り口近くにいた学芸員の方は積極的に声をかけて演奏会を見ていくように勧めていた。また中で演奏を聞いていた人は写真を撮ったり、演奏の様子を録画したりしていた（写真 26）。逆に 1 曲目が終わって次の曲の説明に入ると退出する方もいた。演奏会は 30 分程度で終わり、すぐ帰る人もいれば展示物を見るもいたが、夏の演奏会より多くの人が展示物を見ている印象を持った。

写真 26.　秋の演奏会 1 部の様子

写真 27.　秋の演奏会 2 部の様子

午後 5 時からの演奏会は 3 時からの部に比べると、多少人が少なかった（写真 27）。2 部では 1 部と演奏する曲が違っており、太食調（たいしきちょう）の「傾杯楽（けいばいらく）」と「輪鼓褌脱（りんここだつ）」の 2 曲が演奏された。太食とは唐時代のアラビア半島のことを指しており、エキゾチックな音階となっている。

演奏会に来た方にお話を聞いたところ、富山市から来た 50 代の男女はこの演奏会の為に福岡町にきたと言う。演奏会は自分たちで調べて知ったそうだ。演奏会の感想を聞くと、厳かな雰囲気だったと話した。

北海道から来た 40 代の女性 2 人と 50 代男性は、以前も雅楽の館に来たことがある

そうだが、その時は実際の演奏は聞けなかったと言う。今回は、高岡市に用事かあって訪れたところ、偶然洋遊会の演奏会が開かれていることを知って来たそうだ。今回、初めて生で雅楽の演奏を聞いたそうだが、とても迫力があったと感想を述べていた。また、高岡市にこのような文化があることをもっといろんな所に宣伝してほしいとも述べていた。

また、射水市から来た 60 代女性も今回初めて生で雅楽の演奏を聞いて、とてもいいなと感じたそうだ。さらに、「こんなことを言っては失礼かもしれないが」と前置きして、こんな片田舎で宮中の楽である雅楽があるのは驚きだと述べていた。

お話を伺った方の中には、つくりもんまつりのついでに演奏会をのぞきに来たのではなく、演奏会を目当てに福岡町にきている方が何人か見受けられ、洋遊会の知名度の高さを実感した。

洋遊会では平成 13 年（2001 年）頃から、年ごとにばらつきはあるものの、依頼公演や演奏会を積極的に行っている（表 1）。こうした活動を積極的に行うことで、さまざまな人に雅楽や洋遊会について知ってもらう機会が増え、福岡の雅楽の普及に大変貢献していると言える。また、依頼公演ではいくらか謝礼をもらっているそうだが、そのような謝礼をもらう中では下手な演奏をするわけにはいかず、練習にもしっかりと臨むようになり、結果的には洋遊会のスキルアップにも繋がっていると言う。

表 1.　洋遊会の演奏会公演数（『悠久の雅』より筆者作成）

3-4.　『悠久の雅～洋遊会百五十年の響き～』の編纂

平成 23 年（2011 年）10 月に洋遊会は発足 150 周年（暢日連時代も含めて）を記念

し、『悠久の雅～洋遊会百五十年の響き～』（以下『悠久の雅』）を出版した（写真 28）。内容は主に洋遊会の 150 年の歴史が記されている。全部で三篇構成になっており、第一篇では昭和 39 年（1964 年）から平成 23 年（2011 年）までの洋遊会の歴史について取りまとめており、第二編では昭和 40 年（1965 年）に発行された『雅楽百年の歩み』（写真 29）から、文久元年（1861 年）から昭和 38 年（1963 年）までの洋遊会の歴史が再録されている。また、第三篇では、これまでに洋遊会と関わりを持った方や洋遊会の会員の寄稿が載せられている。

写真 28.　『悠久の雅～洋遊会百五十年の響～』（表紙）

写真 29.　雅楽百年の歩み（『悠久の雅』より引用）

洋遊会が『悠久の雅』の編纂に至るまでの経緯については、洋遊会の理事を務める山田美恵さんに行った聞き取りを元にまとめていく。

洋遊会の活動は会員の不足により下火になる時期もあったが、多くの関係者の尽力の甲斐もあり、第 11 回国民文化祭とやま'96 が行われた平成 8 年（1996 年）頃から徐々に復活の兆しを見せ始めた。そして、再び「北陸に洋遊会あり」と言われるほどまでに、洋遊会はその活気を取り戻した。しかしながら、当時の会員の方々には発足 150 周年を迎える 1 年ほど前までその意識はほとんどなかったと言う。そんな中、150 周年を迎える 2 年ほど前、山田さんは、福岡町の「雅楽の館」の管理を任された。その時、山田さんは雅楽の館周辺に住んでいた高齢者の方々から福岡の雅楽のことや、その他、福岡町のことについて様々な話を聞いた。そして、高齢者の方に話を聞くにつれ、こうした聞き取りから歴史を遡ろうとしても、明治時代までが限界であることが分かったと話す。このことから、山田さんは、現在からまた 150 年たってしまったら今聞いた話はきっと忘れられてしまうし、現在の洋遊会の様子も忘れられているかもしれないと思い、これまでの洋遊会の歴史を残すために、また、これからの洋遊会を担っていくだろう次世代の後継者たちのためにも、文章にして明確に残しておかなければならないと感じたと語る。

このような経緯から、山田さんを中心として洋遊会の 150 年の歴史を文章にして保存しようという試みがなされた。最初は簡単なパンフレットを予定していた。しかし、財団法人日本教育公務員弘済会富山支部から洋遊会が発足から 150 年を迎えるということで、20 万円の補助金が給付されることになった。通常なら、衣装の修繕等に使用するが、せっかくなら形に残るものに使おうということで、『悠久の雅』の編纂の資金に使うことになった。そのため、当初はパンフレット程度の予定であったが、最終的には書誌と言っても良いほど、ボリュームのあるもの（全 85 頁）が完成した。また、『悠久の雅』の編纂の際には、『雅楽百年の歴史』の裏付けを取る作業もあわせて行われた。

『悠久の雅』の編纂には約 1 年の期間をかけた。編纂に関わった人数は寄稿者も含めると約 10 名にのぼる。中心的に活動したのは 5～6 名で、全員が洋遊会の会員の方である。現在、『悠久の雅』は福岡町雅楽の館にて購入することができる。

4. 洋遊会の今後について

洋遊会の今後の在り方や、新たな会員の獲得とその育成に関して、洋遊会の会員の方にお話を伺ったことをまとめていく。

洋遊会では、各々の会員が気にはしているものの、まだ、まとまって後継者のことについて話し合ったことはないそうだ。会長の上野さんは後継者の獲得について、洋遊会に限ったことではないが古典芸能は若者を獲得することにこだわりすぎていると言う。若い人だけでなく、定年で仕事を退職された年代の方も大歓迎だと、上野さんは話す。実際に、現在の洋遊会の会員の方にもそのような方はいるそうだ。50 代から 60 代の方が新たに入会することで、その家族の方も雅楽に興味を持って、一緒に入ることもあるらしく、こうやって、芋づる式に雅楽の輪が広がっていけばと考えているそうだ。また、今すぐにどうこうしようというものではなくて、長い目で見ていきたいという。

新たな会員の獲得に関して、40 代男性の会員は、実際問題として募集して自ら進んで入会出てくる人はわずかで、多くの場合が会員の方に誘われて入ることが多いという。募集して集まる人数には限界があるのではと述べていた。また別の 50 代男性は若い人に対して、友人などに声をかけて洋遊会に誘ってほしいとも述べていた。

上のような意見もあるが、洋遊会の新たな流れとして、洋遊会のホームページ（写真 30）を見て、入会を希望する人が最近になって見え始めたそうだ。

この他に上野さんは、雅楽というと敷居が高いというイメージを持たれがちだが、そんなことは考えずにお茶を始めるような感覚で来てほしいとも話す。しかし、このようなイメージを変えることはなかなか難しく、地道に雅楽の普及活動を続けていくしかないと上野さんは言う。また、現在洋遊会に在籍している若手の方に関して上野さんは、とても積極的に練習や演奏会に参加してくれていると述べていた。

写真 30.　洋遊会ホームページ

今後の新たな取り組みとしては、宣伝方法を工夫したいと上野さんは言う。これまで洋遊会の活動は新聞などで報じられることがあったが、そのほとんどはこんな活動がありましたというような過去形のものがほとんどだった。しかしそれでは、興味はあっても知らなくて行けなかったという人が出てくる。その改善策として、現在洋遊会は春に福岡町で行われているさくらまつりの際に雅楽公演を行っている。これはさくらまつりの 2 日目に行われているが、1 日目にも簡単な演奏会を行い、これを新聞に取り上げてもらうとともに、翌日のメインの雅楽公演の宣伝をしてもらうのはどうかと上野さんは考えていると言う。2015 年から行うことが出来ればと話す。

B さん（40 代男性会員）は、後継者の獲得に関して、会員を増やすということならワークショップや演奏会といった雅楽を知ってもらう活動を今後も続けていくことが大切だという。50 代女性も同様に、雅楽を普及していく活動はこれからも続けていかなければならないと述べている。現在では、福岡の雅楽だけでなく、雅楽についてそもそもよく知らない人が増えており、やはり雅楽を一般の人に対して発信していくことは、大変重要なことであると言える。また、B さんは若年層の獲得と若手の育成に関して次のようにも語った。

> 若い人の獲得について考えると、もっと窓口を広くしていかなければならない。過去の地元の人だけしかいなかった時からすれば、今は新しい人が入りやすい雰囲気にはなったが、それでもまだ若い人は入りにくいのではないだろうか。このような状況を解決するには、やはり若い人が入りたいと思えるような会にしなければならないし、そのためには若い人の意見を参考にする必要がある。しかし、そのなかでも洋遊会の長い歴史から守らなければならないものは変えずにやっていかなければならず、そのためには若い人とのコミュニケーションを通して意見を交わし、決めていかなければならないと思う。

また、現在は若い人の人数が少ないので叶わないが、若い人たちだけの発表の場を設けることも必要である。現在、若手の発表の場がないわけではなく、毎年石川県音楽堂ホールにて北陸 3 県の若手邦楽奏者、舞楽演者を中心に上演を行う「若き鼓動」を（公財）石川県音楽文化振興事業団が行っている。また、洋遊会でも入会して 1 年がたてば演奏の場には参加できるように教えている。しかし、運営から若手に任せたものを行った方がよいのではないかと思う。

最初からうまくいくことはないので失敗することは必ずあるが、そこから学べることも多いと話し、若いから許されることもある。また、失敗した後に反省会を開けば、そこで先輩方の意見を聞くことができ、次に生かすことができる。若手だけでやるということで、自分たちで自由にできることあり、若い世代にとってはいい経験になるのではないだろうか。もちろん、洋遊会の名前を汚すようなことはできないため、依頼公演のような場では行えないが、雅楽の館で行う洋遊会主催の場では一度試みてみてもよいのではと考えている。上の世代がお膳立てしてくれた場で演奏を行うだけでなく、運営から何まで自発的に行う機会を与えてもいいと思う。

また、このようなことを行っておくことで、いざ代替わりとなった時もスムーズに交代が行えるだけでなく、若手の方自身のモチベーションも上がる。やはり、練習した成果を発表する場を与えることは大切だ。

以上のことをふまえた上で、B さんは現在の若手に対して、もう少し自発性があってもよいのではないかという。しかし、これは若手だけの問題ではなく、若い世代がもっと自発的に動けるような環境を自分たちのような上の世代の人間が作っていかなければならないと述べる。言い過ぎてもやる気を無くすだけかもしれないし、言わなさすぎると何もしなくなってしまうといい、さじ加減がとても難しいところだと B さんは言う。

50 代男性会員の方も、若い人に運営や舞台の段取りからできれば参加してほしいと話しており、洋遊会の今後を見据えると若手の方が運営に積極的にかかわっていくことは重要なことなのかもしれない。

しかし、50 代女性は、運営や先方との交渉のノウハウをマスターすることはやはりすぐにできることではなく、とても時間のかかることで、また、若手の方も頑張ってはいるが自身の仕事が忙しいこともあり、なかなかうまくいかないのではないかと話している。今はまだ若手の成長を待つ時期かもしれないと述べていた。

5. まとめと考察

以上のことを踏まえて、最後に無形文化財の継承・保存活動に関して洋遊会の活動を

中心にまとめ、考察していく。洋遊会ではまず、会の存続のために昭和 63 年(1988)に従来の世襲制をやめ、広く会員を一般募集した。これが洋遊会だけでなく福岡の雅楽の継承と保存とっての大きな転機となったといえる。また、組織の在り方をみても、無形文化財の保持者ということで、照栄連と比較すると公演等での謝礼を出演した会員に配るだけでなく、会にも一定金額入れ、いざという時のために積み立てているなどの点で、雅楽の継承と保存に対しての意識の高さがうかがえる。

現代では福岡の雅楽に限らず、雅楽自体知らない人が増えてきている中で、洋遊会では、雅楽の館での展示やイベント活動を積極的に行ったり、依頼公演に出向いたりすることで、多くの人に雅楽を身近に感じてもらえるように活動している。特に雅楽の館で行っている活動のほとんどは無償で行っており、このことから、洋遊会の方々が地元の文化を後世に残していきたいという純粋な気持ちが感じられる。これは、現在の洋遊会の方だけでなく、先代の洋遊会の会員から脈々と受け継がれているものではないだろうか。理事の山田さんが、今こうして洋遊会があるのは、会が下火になった時も細々とではあるが活動を続けた先代の方々のおかげだと述べていたことからも察することはできる。

さらに、洋遊会の方の文化の継承・保存への意識の高さは、その練習の様子からもうかがうことができる。会員の多くが練習と仕事を両立しながらも積極的に参加している。演奏会前の練習では大変集中した環境で練習が行われていた。また、定期的に宮内庁の楽師の方の指導を受け真正の雅楽を身に着けているだけでなく、楽師の方に受けた修正点などをおろそかにすることなく、しっかりと次回の講習会の時も持続させている点で先生方から高く評価されている。このように、常に質の良い、真正の雅楽を継承することは文化財として今後も認定され続けるためにはとても重要なことであるといえる。

そして、洋遊会では上記のような普及活動だけでなく、洋遊会の歴史を文章で記述し、冊子として発行するという保存活動も行っている。過去の事実は人の記憶だけではどうしても曖昧になってしまうが、このようにして記録しておくことによってより正確に後世へと伝え残すことかできる。

このように、文化財の保持者として洋遊会は積極的に活動を行っている。しかし、調査を行っていくと新たな会員の獲得に関して、いくらかの課題を抱えていることもうきぼりになった。洋遊会のさまざまな活動の甲斐もあり、その知名度も広がり、以前に比べると洋遊会は親しみやすい会になったといえる。それでも、やはり高尚な文化というイメージは根強く残っているようだった。また、先に述べたように、無形文化財に指定されたことによって入会を足踏みしてしまう人もいるようだった。

この洋遊会のもつ格が高いイメージを払拭するのは困難であるとともに、払拭してはいけない面もあるのではないだろうか。雅楽と高尚さは切っても切り離せない関係にあり、高尚だからこそ雅楽が成り立っている部分もあるのではないかと筆者は考える。また、文化財の保持者であるため、洋遊会は「サークル」になることはできない。もちろ

ん、単に雅楽をやってみたいという理由で入会してもらうのでも全然かまわないというように洋遊会の方々も述べている。しかし、いずれは文化財の保持者としての自覚を持ってやっていかなければならず、そのことを考慮すると、やはり洋遊会は「〇〇教室」や「〇〇サークル」とは一線を画した会でなければならないのではないだろうか。しかし、あまり敷居が高いと新たな入会者はなかなか入ってこない。両者のバランスをとることは大変難しいことであるといえる。

世襲制を改めたように、時代の流れに沿って洋遊会も変化していかなければならないこともある。今後、新たな会員の獲得や若手の育成のために、新たな試みが洋遊会では行われることになるかしれない。しかし、その中でも洋遊会に与えられた使命を果たすためには、逆に、変えてはならない部分も新たに可視化されるようになるのではないだろうか。

謝辞

この報告書を書くにあたって行った、フィールドワークでは多くの方にご協力いただきました。筆者自身、本格的なフィールドワークは初めてのことでノウハウもよく分からず、苦戦することも多々ありましたが、そんな中でもやさしく接してくださった洋遊会の方々、照栄連の方には厚く感謝の意を述べたいと思います。練習や演奏会、お仕事等の合間をぬって、調査にご協力してくださり、本当にありがとうございました。

参考文献

岩崎照栄、島倉英彦、1999 年、『日本の小さな町のロマン：福岡町鳥倉村の物語』
上野慶夫、2003 年、『雅楽：千三百年のクラッシック』、富山新聞社.
笹本武志、2003 年、『はじめての雅楽：笙・篳篥・龍笛と吹いてみよう』、東京堂出版.
増本伎共子、2010 年、『雅楽入門』、音楽之友社.
洋遊会百五十年記念編纂委員会、2011 年、『悠久の雅～洋遊会百五十年の響き～』、洋遊会
「洋遊会」（http://youyukai.com/epi.html； 2015 年 1 月 20 日閲覧）

菅笠製作技術の保存・継承の現状―様々な立場・視点―

中村　則恵

はじめに

福岡町に初めて訪れたとき、福岡駅の掲示板に越中福岡の菅笠製作技術保存会が作成した、郷土品菅笠のポスターが貼られているのを見た。富山県内で菅笠が作られていること、そして福岡で作られた菅笠が全国シェアの大半を占めていることを知った。

雪国で生まれ育った私にとって、笠は除雪作業時の雪よけになると祖父母が好んで被っていたため、とても身近なものであった。また、福岡町で作られた菅笠が私の出身地である新潟県のホームセンター等に多く出荷されていることも分かっていっそう関心が高まり、菅笠を調査対象にしようと決めた。

今回は文献や聞き取りなどから得られた情報をもとに、第 1 節で福岡の菅笠製作技術の歴史と概要を、第 2 節で菅笠の材料となるスゲの栽培過程を、第 3 節と第 4 節で「重要無形民俗文化財」である菅笠づくりに携わる様々な人の取り組みや思いをまとめた。

1.　福岡の菅笠製作技術の歴史

1-1.　菅笠製作技術の歴史

福岡地域での菅笠づくりの起源は、以下のように伝えられている。

①天正 13 年（1585 年）11 月、大地震が起こり立野村（現在の柴野内島地区付近）より南側が池沼河川になった。戦国時代までは福岡町で庄川と小矢部川が合流しており、しばしば起こる水害によって低湿地に沼地等ができていた。そうした土地にスゲが自生し、近隣住民はこれを集めて蓑を作っていた。

②慶長 13 年（1608 年）に伊勢国の大野源作が矢部村（現在の矢部地区）に移住し、伊勢笠（野笠）の作り方を伝えた。以降、農村の女性達がこれを盛んに生産するようになった。

寛文 10 年（1670 年）には、藩主の前田綱紀が伊勢及び近江からスゲ苗を大量に買い取り、砺波平野に植えることを推奨した（『福岡町史』内『越中資料』引用部分より）。

③昔蓑島村の東南にあった日尾山が地震で山崩れが起こり、陥没して大沼ができた。この沼にスゲが自生し、農閑期に蓑が作られていた。増加した蓑生産者は簑島という村を作り、それが簑島・上蓑・下蓑（現在の福岡駅周辺）の三つに分離した。

元和元年（1615 年）に庄川で大洪水が起こり、簑島に乱入して現在の岸渡川が出来た。この時の氾濫地にできた沼地にスゲが繁殖した。特に、現在の大野地区にできた沼（南

沢）は土壌の質が良く、上質なスゲがとれたため、これで笠を作るようになった。その後、上蓑の佐伯膳高が、竹製の笠骨を作り始めた（『福岡町史』より）。

年代は多少ずれがあるが、庄川・小矢部川が度々氾濫したことや、小矢部川付近は沼の多い低湿地帯で古くからスゲが自生していたこと、蓑作りから笠作りへとシフトしてきたこと、産業として発達したのは江戸時代になってからということは確かだろう。

明治 12 年（1879 年）、福岡町では 235 人が用水路や農道等を管理するための税金である町万雑（ちょうまんぞう）を負担していたが、そのうちの 71 人の菅笠商人が、町万雑の 67%を負担していた（『福岡町の笠と菅笠』より）。旧北陸街道沿いには、かつて富を得た菅笠商人が建てた、千本格子を持つ大きな屋敷が現在も残っており、隆盛を極めたことがわかる。また、福岡町で文久元年（1861 年）から続いている民間雅楽団体である洋遊会の初期メンバーは菅笠問屋が多く、資金援助を行っていた（「洋遊会ブログ」より）。

1-2. 笠製作技術の特徴—分業体制

このようにして成立した福岡町の菅笠製作は、江戸時代から昭和初期にかけて盛んになり、福岡町の財政を潤した。江戸時代後期にあたる、天保 14 年（1843 年）の記録では 210 万枚、笠骨職人の木村昭二さん（87 歳）によると、昭和 28 年（1953 年）にも 200 万枚以上作られていた。しかし、その後生産が減って、現在は年間 2～3 万枚しか作られていない。木村さんのお話によると今も福岡町では全国の菅笠生産の 85 パーセントのシェアを占めているが、工業製品で作られた雨具や日よけが普及し、菅笠の需要はどんどん減っている。現在は、農作業などで雨具・日よけとして実用的に使われるよりも、民謡・祭りや、時代劇などの小道具として使われることが多くなっている。

菅笠づくりの最大の特徴は、分業体制のもとで製作されていることである。仕事は主に、笠骨づくり、笠縫い、問屋に分業されている。以下それぞれについて見ていく。

笠骨作り

かつて笠骨づくりは男性の冬仕事であった。60 年前には一人一日笠 20 枚分は骨を作っていた。原料は、腐りにくいとされる漢竹（からたけ）・淡竹（はちく）・孟宗竹（もうそうちく）等から選ばれ、小刀で削って滑らかにしていく（『日本の小さな町のロマン　福岡町鳥倉村の物語』より）（写真 1-2）。

写真 1-2.　笠骨職人木村昭二さんの骨作りのようす

菅笠の最も下部にある、円形に曲げた骨が輪竹（がわたけ）、輪竹に対し垂直に組み合わせ、ドーム状に形作っている骨が中竹（なかだけ）、菅笠の頭頂部近くにある、円形に曲げた骨が小輪竹（こがわたけ）という（図 3）。これらを組み合わせて骨組を作っていく。輪竹を円形に曲げたら、中竹の両端を対角線上に輪竹に固定し、形を作る。最後に小輪竹で中竹を等間隔にし、型崩れしないようにしっかりと止めて完成となる。

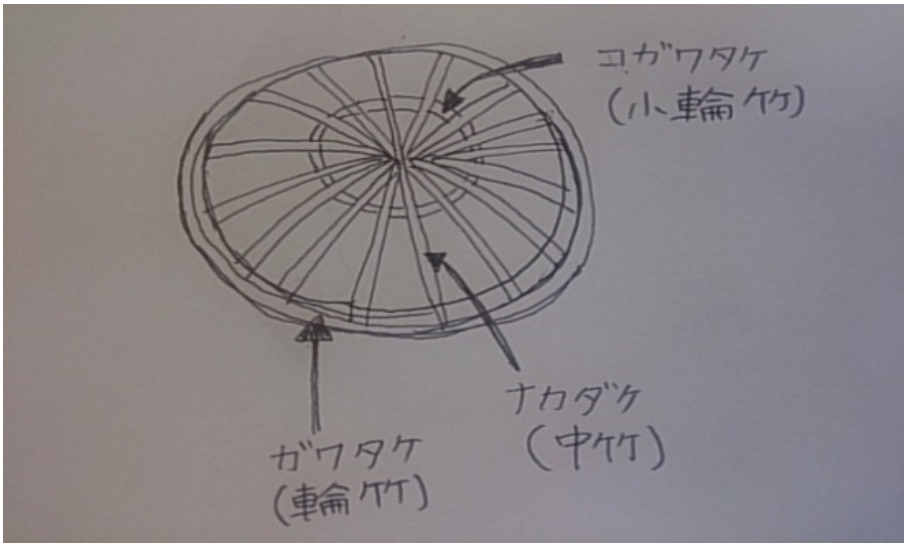

写真 3. 笠骨の部位名（イラスト・筆者）

60 年前には 200 人～300 人の職人がいたが、現在は笠骨を作るのはわずか木村昭二さん一人になってしまった。そのため現在では笠骨職人の減少によるプラスチック骨が増加している。プラスチック骨は、工場で安価に大量生産できるが、楕円形に変形してしまうなど欠点も多い。竹は軽くて強いが単価が高く大量生産がむずかしい。竹製の笠をあえて問屋に注文してくる人も多い。

菅笠といってもじつは様々な種類のものがある（写真 4-8）。三度笠は遠出用の笠である。主に九州や東北の沿岸部など、風の強い場所で使われるため、輪竹から中竹が丸く曲げられてくっついていて、頭頂部は扁平になっており、深くかぶれる形になっている。一文字笠は真横から見るとほぼ一直線になっていて、主に京都に祭礼用として送られている。市女笠は頭頂部に円柱状の骨組みがくっついていて、時代劇や民謡などに使われている。富士笠は富士山のような上部が平で高い円錐台形をしており、農業用に新潟県に出荷したり、山形県の花笠まつりの花笠として使われている。

写真 4.　三度笠（さんどがさ）　　写真 5.　一文字笠（いちもんじがさ）

写真 6.　富士笠（ふじがさ）　　写真 7.　市女笠（いちめがさ）

写真 8.　ヘルメット型の笠骨

木村さんの作る竹製笠骨の量は、平成 20 年（2008 年）10,633 枚分、平成 21 年（2009 年）7,610 枚分、平成 22 年（2010 年）7,263 枚分、平成 23 年（2011 年）6,890 枚分、平成 24 年（2012 年）6,647 枚分、平成 25 年（2013 年）4,572 枚分（この年は、木村さんが骨折してしまったため三ヶ月骨作り中断）、平成 26 年（2014 年）5,300 枚分（予定）と年々減っている。笠の製作枚数は 60 年あまりの間に 200 万枚以上から 2～3 万枚と、約 100 分の 1 になっている。また、竹製の笠骨職人は木村さんしかいないことを考えると、このうちの 1.5 万～2.5 万枚、すなわち全体の 4 分の 3 以上はプラスチック骨製というのが現状である。

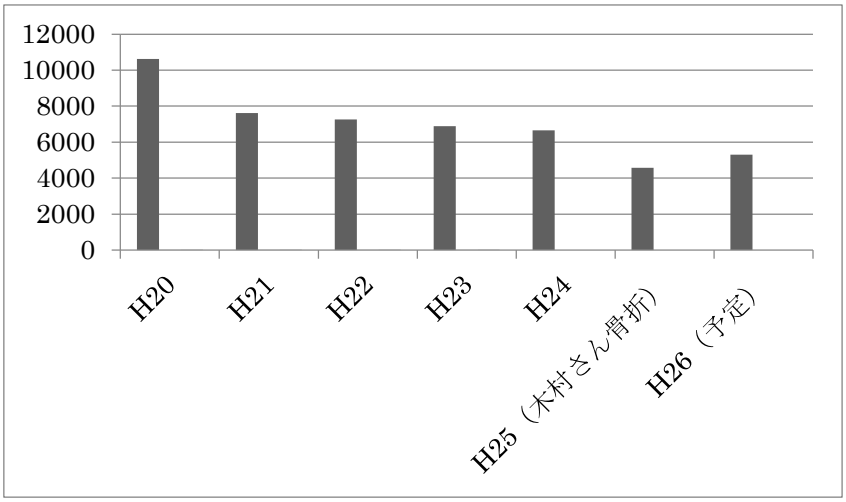

図 1.　木村さんの作る竹製笠骨の量の推移

笠縫い

笠骨を作るのが男性であるのに対して笠を縫う人は主に女性だった。かつては、「笠縫いが上手ければ上手いほどいい嫁だ」と言われ、福岡町中の女性が花嫁修業の一環で笠縫いを行っていたこともあった。その当時、笠縫いの道具が入った木製の道具箱・かさぼんこは嫁入り道具のひとつだった。

現在 3 代目で創業 120～130 年の岸野商店によると、以前は釣糸に似た笠縫い専用の丈夫な糸を作る業者もいたということだが、現在は、笠縫い用の糸を作る人もいなくなり、手芸用の木綿糸が使われている。それでも笠縫いを続けている 80～90 代の女性はかさぼんこをずっと使っている人も多い。100 年ほど前は笠縫いをする人は 500 人ほどいて、40 代以上の女性の内職であった。現在は 100 人ほどの 70～90 代の方が縫っている（このなかには冬だけ縫う人もいる）。

材料は、出来上がった笠骨、かさ紙、菅、糸である。使う道具はかさぼんこという木製の道具箱に、はさみ、指ぬき、すげこき、すげさし（スゲを割くための棒）、針、こ

ま（糸通し）の 6 種が入っている（写真 9-10）。

写真 9.　かさぼんこ

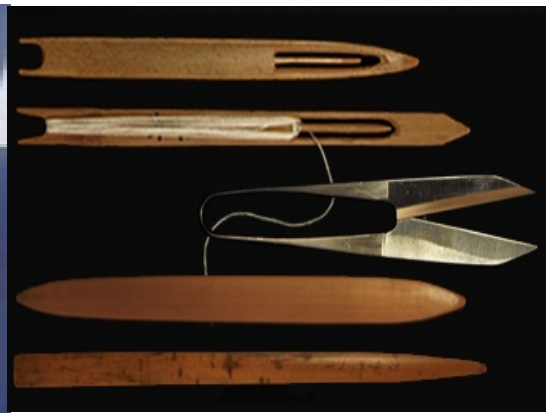

写真 10.　上から、こま（上 2 本）、はさみ、スゲこき、スゲさし

笠縫いの手順は次のとおりである。

①菅さし

まず菅さしという作業を行う。次の工程で使うしかけ用の菅をすげさしで二本に分けていく。

②しかけ

次に、笠骨の頭頂部にあたる部分にかさ紙を当てて、スゲで 7 角形の星型に固定する。菅さしで割いたスゲは、内側だった部分が上になるようにしながら右回りに一本ずつ巻きつけていく。途中でスゲを継ぎ足しながら巻いて、最後は中竹に巻きつけたスゲの間に差し込む。

③菅こき

笠の下部から頂点へ、すげこきで 3 回スゲをこする。こうやってスゲをこすることによって、スゲに光沢を出す。

④笠縫い

次に、針と糸を使って笠縫いを行う。スゲが骨にくっつくように、また、光沢が出るように、なでながら縫っていく。スゲ一本の左右に一目ずつを目安に、輪竹に近い下部から縫い、一周縫い終わったら 4～5 センチメートルほど間隔をあけて、頭頂部にかけて一周ずつ縫う。

縫い終わったら、頭頂部に飛び出たスゲの端をねじって 6 つの束にし、編みこむように結んで止めて、菅笠が完成する。

問屋

菅笠分業体制の最後にくるのが問屋である。問屋は農閑期の 11 月から 3 月にかけて、

笠骨職人から仕入れた笠骨や生産者から仕入れたスゲを笠縫い職人の家に持っていき、注文があった笠の種類と数に応じて作ってもらうよう笠縫い職人に依頼する。出来上がった笠を雪解けの時期に集荷する。

問屋はそれぞれ全国に得意先（荒物屋）を持っており、各問屋ごとに民謡用・農業用・祭り用というように取扱う笠の種類が分かれている。3～5 月に得意先に商品を送り、6 月に集金して回り、翌年の注文をとるという形をとっていた。江戸時代初めは金沢の問屋を通じて江戸や大坂へ卸していたが、江戸時代中期から町内に問屋ができ、東北から九州まで全国各地に流通させることができるようになった。

岸野商店によると、福岡町内の問屋は 1810 年には 11 軒、1865 年には 30～40 軒、1876 年には 90 軒（内兼業 18 軒）と推移してきたが、現在は 3 軒（岸野商店・寺島商店・山岸商店）しか残っていない。

2.　スゲの生産過程と現在の問題点

2-1.　スゲ栽培の要点

福岡歴史民俗資料館の展示によると、菅笠づくりに使用されるスゲは、カヤツリグサ科スゲ属の「カサスゲ」である（以下、「スゲ」と表記する）。スゲの主な特徴としては、葉縁にノコギリ状の切り込みがあること、葉にケイ酸質の結晶が多く含まれていて頑丈なこと、防虫・抗菌効果のある「コボフェノール A」が含まれていることなどがある。

スゲは重粘で透水性が低い湿潤な土を好み、かつて沼地などに自生していたが、現在は湛水管理のできる水田で栽培が行われている。

現在福岡町では、西五位、五位山、赤丸といった小矢部川左岸の地区で栽培されている。山沿いの谷間の田や小さな田、整形されていない昔ながらの田、稲の作り手が高齢になり手放された田などを有効活用している。次にスゲ栽培の工程を詳しく記述する。

2-2.　スゲ栽培の工程

苗の準備（9 月上旬～中旬）

前年収穫して 1 年置いた刈株から再生したひこばえ（切り株から生えてきた若芽のこと）を苗として抜き取る（写真 11 は天候を考慮したため 9 月下旬に行われた作業の様子）。その中から、根元が太くてしっかりしているものを選び、これを田に植え付ける苗にする。中旬にはトラクター等を使って田おこしを行い、代かきをする。

写真 11.　苗の抜き取り作業の様子（2014 年 9 月 30 日　鳥倉地区の試験田にて）

植え付け（9 月中旬～10 月中旬）

苗の葉先を切り、35 センチメートルほどの長さにする。手首くらいまでの深さ（およそ 10 センチメートル）まで苗を田に植える。冬場に積雪で苗が折れるのを防ぐために、45 度ほど傾けて植える。

写真 12.　植え付け後のスゲ田（2014 年 10 月 5 日　福岡新地区の福岡小学校田にて）

間引き（3 月下旬～5 月下旬）

雪解けから 5 月下旬にかけて、3～5 回に分けて苗を間引いていく。葉身元が広く、虫に食われておらず、まっすぐに育った苗を残していく。

刈り取り（7 月中旬～8 月中旬）

刈り取り後すぐに天日干しする必要があるので、梅雨明け後の晴天が続く時期に行う。鎌を使い、一株ずつ、根元から約 10 センチメートルを残して刈り取っていく。約 1.2 メートルに切りそろえて、約 90 センチメートルの縄にくくれる分をひと束にしておく。

天日干し（7 月中旬～）

刈り取り後に束ねたスゲを一度バラして、一日天日干しする（バラ干し）。バラ干しが終わったあと、再びスゲを束ね直し、扇状に広げて裏表交互に 4～5 日天日干しする（扇干し）。

スゲは天日乾燥することで、緑色から白色へと脱色する。きれいに脱色できたほうが、良質な笠に仕上がるため、天日干しは手間がかかるが欠かせない重要な作業である。そのため日当たりのよい栽培面積の 3 倍以上の広い場所が必要で、小矢部川の川原や中州が、日当たりの良さ・広さ・風通しの良さの好条件がそろっており、よく利用された。（参考　越中福岡の菅笠製作技術保存会作成『菅栽培マニュアル』）

3.　菅笠保存の取り組み・思い

菅笠製作技術とは、1 節で述べた、スゲの生産、笠骨づくり、笠縫い、問屋による流通という分業体制全体のことを指す。その分業体制と全工程が現在まで続けられているという点が決め手となり、平成 21 年（2009 年）3 月 11 日に、国の重要無形民俗文化財に指定された。それに先駆け、保護団体として、平成 20 年（2008 年）10 月 30 日に、越中福岡の菅笠製作技術保存会が発足した。

それでも、福岡町の菅笠生産枚数は今も年々減り続けている。主な原因は、後継者不足である。スゲ生産、笠骨づくり、笠縫い、問屋のどの分野にもこの問題は共通している。時代が変化してゆき、雨具の発達や流行の変化により、日常生活における菅笠の使用の場やニーズが減ったこともあり、菅笠の付加価値は下がっていった。そのため、菅笠を作っても、労働に見合わないわずかな収入しか得られず、菅笠作りに携わる人が減ってしまった。それに加え、コストの低い機械による大量生産の流通により、手作りの菅笠のコストが相対的に上がったのもひとつの原因になっているといえる。

それぞれの仕事に携わっている人々や、保存活動に取り組んでいる人々はどのような思いで、どのような取り組みを行っているのか、聞き取りによって得られたことを各個人・団体ごとにまとめていく。

3-1.　越中福岡の菅笠製作技術保存会

団体の概要

「越中福岡の菅笠製作技術保存会」は、高岡市福岡総合行政センター地域振興課内に平成 20 年（2008 年）に設立された。会長は現在唯一の笠骨職人である木村昭二さんで、スゲの生産者、笠縫いをする人々、菅笠問屋 3 軒、ボランティア団体等で構成されている。会員は平成 26 年（2014 年）現在約 250 名である。笠骨作り、笠縫い、問屋とし

て携わっている人は 100 名ほどで、平均年齢は 80 歳を超えている。

取り組み

年に何回も様々なイベントを主催したり、他の団体主催のイベントに出展している。毎年 11 月に福岡町 U ホールで行われる福岡産業祭では、職人が笠縫いを実演するなどのプロモーションを行っている。また、平成 25 年（2013 年）6 月 22 日に東京都の有楽町・東京交通会館の富山県アンテナショップや平成 26 年（2014 年）7 月 4 日に東京都荒川区で行なわれた「第 35 回あらかわの伝統技術展」では、笠骨職人と笠縫い職人が作業を実演した。いずれも 2015 年 3 月の北陸新幹線開業に伴い、観光客への PR や新規需要の開拓がねらいである。

菅笠の PR イベントだけでなく、後継者育成のためのイベントも行なっている。笠縫い講習会や笠骨づくり講習会を定期的に開いている（写真 13、14）。笠縫い講習会は、主に福岡町内の 50～60 代の女性が多いが、高岡市や小矢部市などの近隣市町村から訪ねてくる人や、石川県から参加している男性もいる。笠骨づくり講習会は、主に福岡町内の 70 代以上の男性が参加しており、スゲ生産組合に所属している人もいる。講習会は誰でも参加しやすいイベントになっているが、技術向上に意欲のある人には、後継者育成研修を通して更なるレベルアップを勧めている。

写真 13.　笠縫い講習会で使われたプラスチック製の笠骨とこま・針・糸のセット

写真 14.　笠縫講習会の様子

また、試験田を所有している鳥倉地区や向田地区では、高岡市や富山県（農林水産センター）と共同で効率のよいスゲの育成方法の研究を行なっている。これらの試験田の管理や農作業は、福岡町のボランティア有志団体 SUGET や、富山県内外から集まったボランティアなどが行なっている。

学校教育と連携した活動も始めている。福岡町新には、福岡小学校の学校田がある。この学校田を利用して、2015 年度から小学 4 年生が学習の一環としてスゲ栽培を行な

い、小学 5 年時に刈り取りを行なう予定だ。2014 年 10 月 5 日に行なわれた学校田でのスゲ苗植え作業には、学年問わず参加があった。地域の子供にふるさとの伝統に触れてもらうことが目的である。

写真 15.　福岡新の学校田で行なわれた、スゲ苗植え作業。SUGET の方が植えた苗をいつ刈り取るかを子どもたちに説明しているところ。この日は小学 2～4 年生 20 名ほどが参加した。（2014 年 10 月 5 日　福岡新の福岡小学校田にて）

その他に力を入れていることは、菅笠以外のスゲ製品の作成である。軽くて丈夫なスゲの性質を活かし、様々な製品への応用が期待されており、スゲを染色する工場を定期的に視察したり、前述のアンテナショップなどでの試作品の展示などを行なっている。今までの試作品は、小物入れ、サンバイザー、キャップなど、実用性のある雑貨や現代的なデザインの帽子が主である。

また「越中福岡の菅笠製作技術保存会通信」という広報誌を不定期に発行している（写真 16）。氷見市在住のデザイナー山下やすふみ氏が考案した「かさぼんこ」というゆるキャラも 4 コマ漫画として紙面に登場している。内容は主に試験田の視察情報と講習会の実施報告である。この広報誌は保存会員に郵送されたり、福岡町合同庁舎内に置かれている。

越中福岡の
菅笠製作技術
保存会通信

2013年6月　No.14

【発行】越中福岡の菅笠製作技術保存会

後継者育成研修

3月24日(日)、笠骨製作教室「角笠の笠骨づくり」がUホールで行われました。
元骨刺し職人の中島尋之さん・織田芳次さんの指導のもと、小刀などで竹を約1cm、厚さ約7mmに整えた後、固い竹の扱いに苦労しながら、長さ約1.5mの竹を丸めて笠の輪郭となる「ガワボネ」を作り、笠の骨となる6本の「ナカボネ」を取り付けました。受講者は外回りの「ガワボネ」が丸くならず奮闘していました。

1～3月に菅笠づくり経験者や体験教室修了者等の中で技術向上に意欲のある女性2名が、後継者育成研修に参加し、技術保持者の赤尾節子さん・上森春子さん・笹島かずさんが丁寧に指導しました。
受講者の一人はこれまでに富士笠・角笠・市女笠・一文字笠を完成させ、問屋さんからも高い評価を得ています。今年度は笠骨製作後継者育成にも力を入れ、菅笠製作技術を次代に伝えていけるよう努めます。

菅笠の技術で神具の修復

全国の弁天様の総本宮といわれる宗像大社(福岡県宗像市)の祭具「菅蓋」が、菅笠の製作技術を使い修繕されることになりました。
「菅蓋」は、社殿の修復「ご造営」と共に初めて修繕されるもので、スゲが縫い付けられた直径約45cmの円盤に、漆塗りの枠と柄が付いた神具です。
神官らが行列する際に、頭上や左右に顔を隠したり、日除けとして使用されます。

平らな笠骨を木村昭二会長が製作し、会員の赤尾節子さんがスゲを縫い上げました。
「菅蓋」は6月までに完成し、来年の12月の遷座祭で修繕が終わった宗像大社本殿に収められます。

写真 16.　越中福岡の菅笠製作技術保存会通信 2013 年 6 月発行 No.14

製作技術保存への思い

保存会は福岡総合行政センター地域振興課内の組織ということもあり、後継者育成に力を入れていることが、活動内容や保存会コーディネーターの橘美和子さんのお話から分った。橘さんは将来性があり、長期的な活動が見込めることから、20～30 代の若者にも講習会やボランティアに参加してほしいという思いを強く持たれている。まずは興味を持ってもらうことが大切ということで、富山大学農業ボランティアサークル TAG やグリーンツーリズムとやまなどと協力しながら、若者のボランティア受け入れに力を

入れている。

菅笠製作技術が国重要無形民俗文化財に指定されたことを受けて、橘さんは「全国的に福岡の菅笠の知名度が広がるチャンス」だと語った。文化財指定の受け皿となっている団体だけあって、後継者育成に責任を持ち、指定を最大限に活かそうとする姿勢がわかる。

3-2. スゲ生産組合

団体の概要

2013 年 8 月 28 日、スゲ生産組合が発足した。菅笠製作技術保存会が発足して 8 年がたったが、菅笠の生産枚数が一向に増えないことから設立された。個人や営農組合で菅を作っている方、農協の方で成り立っている。現在 27 名（うち 3 つが営農組合、1 つが専業の農業会社、残りは稲作をメインとする副業農家）が所属している。高齢者が多く、70 代の藤井さんが最年少という現状である。年をとってコメの田んぼを手放し委託しているケースもある。菅田を 100 平方メートル以上作ると高岡市から助成金がでるが、組合の会費も払わなくてはいけないため、100 平方メートル以下の菅田しか持たない人は組合に所属していない。そのため、実際に福岡で菅を作っている人は組合加入者より若干多いと考えられる。

取り組み

2014 年 2 月 27 日に第一回総会が行なわれた。記念講演として伊勢から菅笠に詳しい方を招いて笠の歴史などを話してもらった。式年遷宮の御笠用の材料を福岡から送ったため、そのお礼に講演をひきうけてもらえたのだという。富山県庁のプレスリリースなどに宣伝を載せたり、全町民に呼びかけるなどしたところ、聴衆が 100 人集まった。

現在、菅作りはすべて手作業で行われている（根おこしと代かきだけはトラクターを使用する）。特に大変なのが刈り取り作業で、スゲと同じ長葉を利用する作物である藺草（いぐさ）刈りの機械を改良して応用できないかと、石川県小松市の業者と協力して研究している。

組合は、広報紙「スゲ通信」を保存会とは別に独自に作成し、スゲ栽培で気をつけること（イノシシなどの害獣への注意喚起や、肥料のまき方など）や、前述の機械化への取り組みに関すること（藺草刈りの視察など）、講演会の実施報告などを盛り込んで、不定期に発行している。スゲ通信は福岡駅の掲示板にも貼られている。

組合の農家は、刈り取ったスゲの３分の１はそのまま自分の家で管理し、笠骨職人木村さんに笠骨をもらって、自分の家で笠を縫い、完成した笠を問屋に卸す。残りの３分の２はそのまま問屋に卸して問屋さんが骨とともに笠縫い職人のもとへ持っていき、笠を縫い上げてもらって再び問屋に卸す、という形をとっている。

製作技術保存への思い

菅笠づくりは手作業なので、二時間で一枚しか作れない。一枚 800～900 円で問屋に売るとして、材料費を引くと、収入は一枚につきたった 400 円にしかならない。昔は高くても売れたが、商権登録されていないため、ベトナムなどから輸入された安価な笠が売られるようになった。そのため、スゲ生産組合では、菅笠の付加価値を上げる活動を行っていかなければならないと考えている。保存会は笠以外のスゲ製品を作って全国に PR しているが、後継者が増えないのは、菅笠がお金にならないからではないかと推測している。

菅笠製作技術の役割分担の中で一番不足しているのは、原材料を作る人だと生産組合の組合員は感じている。現在、スゲ生産組合では 70 代の藤井謙二さんが最年少で、スゲを作る人々は高齢者が非常に多い。田おこし以外の作業はすべて手作業であり、通常の米作りや野菜作り以上に労力がかかるため、若者は嫌がって引き継いでくれない。そのため、会社を定年退職した後の比較的時間に余裕がある層を狙って菅を作る人をなんとか増やせないか考えている。しかし、農家も高齢になるにつれて、体力に限界が訪れるため、早めの機械導入が必要だという。

また、高岡市と合併してから、助成金が減った。行政とうまくやっていくのは難しい、と藤井さんは感じている。

3-3. ボランティア団体 SUGET

団体の概要と取り組み

SUGET は 2013 年に福岡町の住民たちで結成されたボランティア団体で、保存会の所有する試験田や学校田の日常的な管理を行っている。農作業は、富山大学のボランティアサークル TAG や富山県、高岡市の職員も参加するため、SUGET のメンバーが自宅の水道を貸して汚れを落としてもらうなどの協力も行う。

保存会とも連携を取り、新製品開発のため、スゲに色を付ける研究をしている工場見学なども行っている。

製作技術保存への思い

SUGET の会長は元高岡市副市長で、文化財指定により菅笠づくりが衰退し、いよいよ無くなってしまうのではないかと危機感を抱き、定年後に行動を起こした。協力したのは近所の住民で、その多くは定年後で時間に余裕があり、かつ何かふるさとのために行動を起こしたかった人である。

会長は、「文化財指定」はすなわち絶滅の危機にあることだと捉えている。菅の色を染めたり、シリコンを入れて強化する方法を開発して、スゲ製品が高く売れるようにし、笠の生産意欲を高めることが必要だという。

4.　問屋や職人の保存に対する思い

前節で述べたように、菅笠製作技術保存のために発足した団体は、後継者育成に積極的であり、新商品の開発のように、笠にとらわれずに知名度アップを図る活動を行おうとしている。文化財指定についてもそれぞれ前向きに受け止めたり、危機感を抱いたりと、様々な思いがある。

一方で、昔から菅笠作りに携わる人たちはどうだろうか。笠骨職人、笠縫い職人、問屋として、福岡の菅笠の隆盛と衰退を知る人々に聞き取りを行った。

4-1.　笠骨職人

木村昭二さんは現在笠骨を作り続けて 61 年になるという福岡町内で唯一の笠骨職人（骨さし）である。2008 年の第 26 回富山風雪賞（北日本新聞）など、受賞歴は数々あり、その功績が讃えられている。今も現役の木村さんは毎日 50 枚分 300 本の竹を削り、10 枚分の笠骨を組み立てる。また、越中福岡の菅笠製作技術保存会の会長も務めており、保存会主催の笠骨作り講習会等で技術を教えたり、笠縫い職人とともにイベント等で笠骨作りの実演を行っている。総会や菅笠を作っているほかの地域との交流会などにも参加している。

木村さんは菅笠は時代劇や民謡、観光資源に使われるため、発注数はゼロにならないと考えている。しかし、文化財指定を受け、保存会が発足しても、福岡で作られる菅笠の数は年々減り続け、枚数を現状維持しつつ商売をするのも精一杯という状況だという。保存会の後継者育成事業の一環として、2013 年末から 2014 年の 3 月にかけて、数人が笠骨作りを習いにきたが、全員 70 代以上であった。笠骨作り習得には 10 年かかってしまうため、しっかり習得する頃には体力的限界が訪れた 80 代になってしまう。そのため、将来性や張り合いがないのではないかと思っているという。一方で木村さんは、菅笠づくりは若者に薦められる仕事とはいえないと考えている。60 年前までは、菅笠作りで一般労働者と同じくらいの稼ぎを得ていたが、いまは儲かる仕事ではないため、生業にする人がいなくなるのは当然だと考えている。

保存会も新製品の開発などをしているが、スゲには向かない製品が多く、商品化には程遠いという。例えばスゲ製のキャップ帽の場合、サイズ調整ができないため、一つずつオーダーメイドとなってしまい、逆にコストがかかる。保存会会長として宣伝活動や後継者育成に励む一方で、職人としては、菅笠づくりが廃れていくのはしょうがないことなのではないかと語った。

4-2.　笠縫い職人

笠縫い職人の 80 代の女性にお話をうかがった。女性は保存会に所属し、定期的に開かれている笠縫い講習会の講師をしたり、イベントなどの笠縫い実演の PR に参加して

いるという。以前より作る笠の量は減ったが、今でも笠縫いの仕事は続けており、冬場に何十枚か縫って問屋に卸している。

女性の知る限りでも、いま笠縫いをしている人は 70 代～90 代の方がほとんどだという。笠づくりは今では小遣い稼ぎの内職という認識が強いといい、昔は女性なら必ずできなくてはいけなかった「仕事」だったので、今行われている講習会に来る人々が「楽しみだ」と言っているのを聞いて「時代が変わったな」と実感しているという。女性に「菅笠づくりを守っていってほしいと思うか」と尋ねたところ、「この仕事はもう若い人は誰もやってくれないだろうし、自分の子供や孫に笠作りに携わってほしいとは別に思わない」とのことであった。

4-3. 問屋

岸野商店の岸野有三さんにお話をうかがった。岸野さんは、保存会に所属してはいるが、とくに保存活動は行っていないという。

岸野商店は、全国各地に笠を発送している。主に取り扱っているのは、50 年前から導入したプラスチック性の笠骨だが、未だに竹製は根強い人気だという。

福岡町にある問屋は現在 3 軒で全盛期に組織された問屋組合は自然解散してしまった。岸野商店をはじめ、3 つの問屋の店主には、サラリーマンの息子がいるが、いずれの店主も店を継いでほしいと思っていないのだという。保存会は、自分たちのような菅笠づくりに携わる人々や菅笠商のために発足したと思ったので参加したが、菅笠づくりが廃れていくのは時代が変わったため必然だと思っており、保存会の様々な活動を評価する一方で、保存活動にとくに参加もしない。今は作り手の減少で品薄状態の笠の需要に応えるのに精一杯であるという。文化財指定は役所の観光課の人くらいしか恩恵を受けられないもので、問屋としては今までと変わったようには感じないという。

新製品試作は遊びのようなもので、商品化の可能性もまだまだ低いという印象を抱いている。最近は町の有志団体がボランティアで菅栽培などをしているが、昔はありえなかったらしく、むかしの菅笠づくりを見てきた人の中には、「時代遅れ」「もうやりたくない」「力もいる、労力と対価が不釣り合い、汚れるからいや」と思っている人も多いと聞くという。そのため、昔の菅作りを見てこなかった人のほうが面白そうだと感じるのではないかと思っている。

このように、昔から菅笠作りに携わっている人々は、後継者育成に積極的とはいえず、文化財指定もあまり評価していない。保存活動に一生懸命というよりは、全国からのニーズに応えなければと、今までどおり、あくまで仕事を全うすることを考えている人が多い。

しかし、講習会で講師をつとめたり、保存会に所属したりと、協力的でもある。保存活動に多少とも携わる傍ら、一歩引いて冷静に見守っているのがわかった。

5. おわりに

かつて福岡町で菅笠で富を得ていた頃は、菅笠作りは立派な生業であり、生きるためにしなければならないものだった。当然、スゲづくりも骨作りも笠縫も、力と時間が必要なものであった。昔から菅笠づくりに携わる笠縫いや笠骨の職人や問屋のなかには、「きつい、つらい、大変な仕事」という認識を抱いている人も多く、「菅笠づくりを仕事にする」という人は少なく、保存活動は難しいのではないだろうかという。

しかし、笠縫い講習会や菅田のボランティアに参加する人たちは、楽しみながら参加している。笠縫い職人やスゲ栽培農家には高齢の方が多い。参加者は、高齢者とコミュニケーションをとりながら、地域の伝統工芸に触れることを楽しみにしている。菅笠づくりは仕事から楽しみへと変化しつつある。保存会や SUGET が行っている講習会や学校田でのスゲづくりに参加する人々には、菅笠作りを仕事にしようとは思っていない人も多い。しかし、菅笠作りに触れるきっかけとしては非常にいい機会である。地道に続けていけば、知名度も住民の意欲も変わってくるだろう。

現在菅笠を作っている人たちはかなり高齢で、年齢を理由にやめてしまう人もいるため、民謡・時代劇用として未だに需要のある菅笠を注文数通り作ることにも精一杯な状態である。「体験してもらい、興味を持ってもらって、講習会にも参加してもらい、ゆくゆくは職人になってほしい」という保存会の段階を踏まえた PR 方法と、周りが高齢であるがゆえに「職人になりたい人は少ないのではないか。今から時間をかけて後継者を育成すると、生産の減少は止められないのではないか」という昔から菅笠作りに携わる人の思いの違いから、保存活動における熱意の差や文化財指定の捉え方の違いが生じているのかもしれない。

謝辞

今回の調査に当たって、作業や講習会、様々な方の紹介をしてくださった越中福岡の菅笠製作技術保存会の保存会コーディネーターの皆様には大変お世話になりました。

また、講習会でお話を聞かせていただいた笠縫い職人の皆様、お忙しい中お時間を割いて貴重なお話を聞かせてくださったスゲ生産組合の皆様、JA いなば福岡支店の皆様、岸野商店様、木村昭二様、グリーンツーリズムとやまの皆様、ボランティア団体 SUGET の皆様、富山大学学生ボランティアの皆様、福岡民俗資料館の皆様等、たくさんの方々にご協力いただきました。

皆様のご協力のおかげで無事調査を終えることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

岩崎照栄　1999 年　『日本の小さな町のロマン　福岡町鳥倉村の物語』

越中福岡の菅笠製作技術保存会発行、『菅栽培マニュアル』
越中福岡の菅笠製作技術保存会発行、『福岡町の特産　菅笠づくり』
日和祐樹　福岡町菅振興対策協議会教育部会発行　2002 年　『福岡町の笠と菅笠』
福岡町役場発行　1969 年　『福岡町史』

参考にしたウェブサイト

「洋遊会ブログ」
（http://youyukai.jugem.jp/　；　2015 年 1 月 26 日閲覧）

第 2 部　福岡町山間部の調査報告

福岡町小野の獅子舞の伝承

三島　紗弓

はじめに

富山県では獅子舞が現在も盛んである。そのため、私には獅子舞を調査したいという思いが私はかつてからあった。福岡町小野（この）の西照寺を訪れた際に、6 月 1 日に行われる法要で獅子舞が行われるという話を聞き、実際に獅子舞を見に行くことにした。私の地元の石川県小松市にも獅子舞はあるが、小野の獅子舞は大人が扮する獅子と天狗が舞う迫力のあるもので、地元の獅子舞とは大きく違っており、興味がわいた。また、小野の方々が獅子舞をとても楽しみにしているようで、たくさんの見物人がおり、獅子舞が始まるとその場が熱気に包まれた。こうして熱心に行われている獅子舞に魅力を感じ、小野の獅子舞を調査することにした。

実際には、小野に住む若者は減っていて獅子舞の存続が危ぶまれているという。そのなかで、この迫力ある獅子舞がどのようにして伝えられ、変化して現在まで残ってきたのかを知りたくなった。本章では、小野の獅子舞の現在に至るまでの変化を調査してまとめ、さらに今後どのように変わるのかについて考察していく。

1.　小野の獅子舞の概要

まず、富山県の獅子舞について簡単にふれる。『富山県の獅子舞』（富山県教育委員会 1979）によると、富山県は獅子舞の豊富な県で、1979 年時点で 1154 か所で獅子舞が行われていた。これらの獅子舞は、以下のように大きく 5 つに分けられる（図 1）。

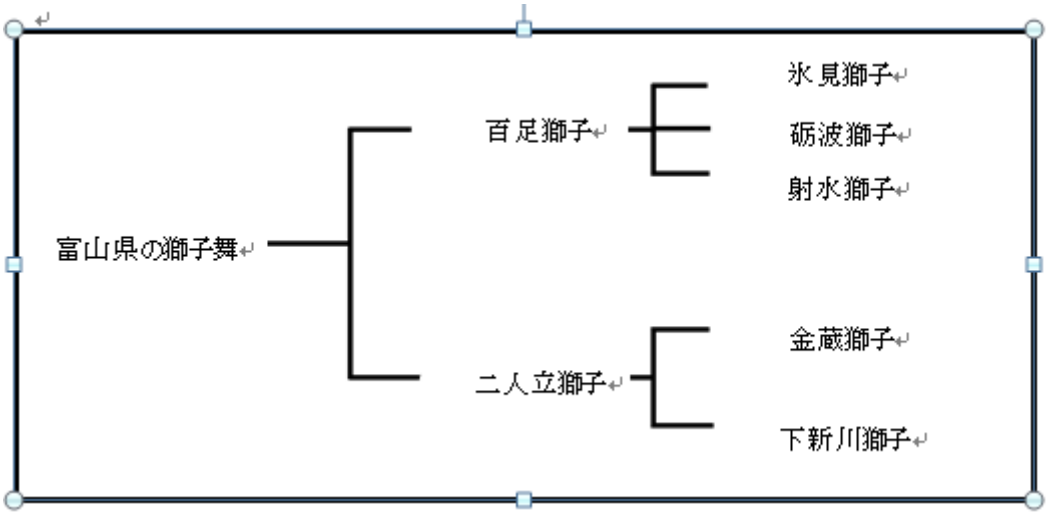

図 1.　富山県の獅子舞（『富山県の獅子舞』より作成）

この分類によると、小野の獅子舞は百足獅子の中の氷見獅子に分類される。氷見獅子の主な特徴は、1）テンポが速く快活、2）5～6 人でマワす（＝演じる）、3）胴体は手を挙げて張る、4）獅子に向かうのは青年が扮する天狗、5）リズムに合わせて獅子を討つ所作をするなどだ。実際に小野の獅子舞を見ると、この特徴に合致した。地理的にも氷見は福岡町の北に隣接しており、富山県のなかでも獅子舞のもっとも盛んな所として知られる。

次は小野の獅子舞の継承元と継承先について述べる。小野は明治 1887 年頃に福岡町三日市から獅子舞を習った。そして、大正や昭和になると、福岡町棚原（現在は五位）、福岡町上野（うわの）、小矢部市吉田町へと小野の獅子舞を教え、伝えたそうだ。これについては、高齢の方がさらに上の世代から伝え聞いて知っていた。中でも小矢部市吉田町は特に熱心だったらしく、小野で獅子舞が行われると聞くと小矢部市から人が来て、教えてほしいと頼まれたそうだ。80 代男性によると、現在の小野の獅子舞は昔から大きく変化しているが、小矢部市吉田町の獅子舞は熱心に何度も学びに来たぶん、昔の小野の獅子舞により近い形をとどめているという。

小野の獅子舞を担っているのは青年団という組織で、この組織については第 2 節で詳しく述べる。青年団が獅子舞の担い手の中心となっているが、現在は人手不足のため、青年団以外の人も助っ人として獅子舞を手伝いに来ているので、青年団が獅子舞をすべて担っているわけではない。獅子舞における役割と 2014 年の人数構成は、青年団長 1 人、カシラ（写真 1）約 6 人、天狗（写真 2）約 6 人、太鼓（写真 3）約 5 人、笛（写真 3）約 8 人、カヤ（写真 4）約 10 人であった。この人数構成は 50 年ほど前からほとんど変化していない。

これらの役の中で、笛とカヤは青年団以外の人がほとんど担当していた。青年団に入る前の子供たちが、笛やカヤを担当することもある。また、女性も基本的に笛を担当する。青年団以外の助っ人がこれらの役に就くのは、練習に来られる時間が限られているためである。青年団も実際は、小野に住む人よりよそに住んでいて通ってくる人の方が多くなっている。昔は小野に住んでいる人中心で獅子舞を運営していたとが、今では、小野に住んでいる人より、他の地域に移り住んでいる人の割合が大きくなっており、その点は変化している。

写真 1.　カシラ

写真 2.　天狗（写真右側）

写真 3.　囃子方
（笛：写真左側、太鼓：写真右側）

写真 4.　カヤ（獅子の胴）

最後に舞の種類についてみていく。50 年ほど前までは、「ゴン囃し」・「ふた足前」・「ふた足後」・「イソ振り」・「一刀振り（獅子殺し）」・「京振り」・「ヤツブシ」・「回チュウ」・「新切り」・「合無し」・「七五三」・「長振り」・「八つ橋」の 13 種類あった。

簡単に各舞について説明する。「ゴン囃し」は、ハナと呼ばれる祝儀をもらう前に行う舞であり、どの家でもまず初めに舞われる。「ふた足前、後」はもっとも簡単な舞であり、一番多く舞われる。「イソ振り」は宿をしてくれる家に対するお礼として舞うものである。宿では、ハナは出さず、その代わりに魚や果物、酒を振る舞うことになっていた。「一刀振り（獅子殺し）」は、一日の最後に締めとして行われるもっとも長い舞である。「一刀振り」という名前の通り、刀を使って舞う。刀を袖で拭い、磨いて、最後は獅子の喉元に刀を刺して殺して終わる。30 代男性によると、2014 年の獅子殺しは随分と省略したものだったという。獅子殺しをする天狗役の人によって舞に変化が加えられているようだ。「京振り」とは強く振る舞うもの、「ヤツブシ」は強く振る舞うものを繰り返しするものである。「回チュウ」は、獅子頭をからかって遊ぶ姿を表した舞だという。そのほか、「新切り」・「合無し」・「七五三」・「長振り」・「八つ橋」はハナが弾んだときや、盛り上がってきたときなどに舞われる難しく、長めの舞である。

じつは今では、13 種類のうち「長振り」と「八つ橋」が消えて 11 種類になっている。「長振り」と「八つ橋」が消えてしまった理由として、長年天狗をしていた 80 代男性によると「カシラをする人がつらいからじゃないか」とのことだった。長くて難しい舞から継承できる人がだんだんいなくなって、やがて消えてしまうらしいのだ。実際に現在でも、難しい舞とされる「新切り」や「合無し」は、「あの人くらいしかできない」ということで、特定の人が舞っていた。この人が現役で舞える間は良いが、引退したときに後継者が育っていなければ、「新切り」や「合無し」といった舞も消えてしまうのかもしれない。

2. 獅子舞を担う組織

第 1 節でも述べたが、獅子舞は小野の青年で構成される組織（青年団）によって行われている。青年団のメンバーは現在約 20 人である。そのうち小野に住んでいるのは 8 人で、そのほかの 12 人は小野以外に住んでいる。2014 年の青年団長は、小野に住んでいるメンバーだったが、小野に住んでいない人も団長をつとめることがある。獅子舞以外での青年団の活動は、6 月ごろソフトボール大会をすること、9 月の獅子舞のあとに旅行に行くこと、大晦日に西照寺に除夜の鐘をつきに行くことだ。昔は青年団が主催する青年報恩講というものもあったそうだ。2014 年は、25 歳から 40 歳までと幅広い年齢の人が獅子舞に参加していた。それだからといって、25 歳からしか青年団に入れないのではない。たんに 25 歳より若い人がいないだけである。50 年ほど前は、青年団は 25 歳までだったが、人手不足とともに、上限が上がっていき、今では 40 歳まで参加するようになったのだ。

青年団のなかで特に獅子舞を仕切るのは、青年団長である。本来、青年団長は長男でなければならないが、やはり人手不足のため昔から次男や三男でも団長を担うようになった。原則として、青年団長は毎年変わり、一度青年団長を経験したら二度はしないことになっている。しかし、過去には人数が不足して、全員が青年団長経験者になってしまったことがあり、その場合は隔年で交代しながら青年団長を何度も担当した。青年団長の主な仕事は、当日のハナ読み（ハナ紙という紙を大声で読み上げること）であり、団長が舞うことはほとんどない。そのため、青年団長は天狗やカシラの衣装に着替えるわけではなく、一日中スーツか袴を着て過ごす。どちらを着るかは青年団長の自由だが、最近ではスーツを着る人がほとんどである。まれに盛り上がってきたときや、めでたいことがあった家などで、団長がスーツのまま舞うことがある。今年も、結婚した人がいる家で、団長が実際にスーツのまま天狗として舞っていた。

さらに、ハナを受け取った後、その封筒を鞄に入れ、管理するのも団長である。獅子舞のときに集めたお金の管理も担当している。

他にも、タイムスケジュールを管理したり、公民館の鍵を開けたり、お菓子や飲みものを買い込んでおいたりする仕事があり、世話係のような側面もある。団長によっては、練習や本番で休憩するときのために、たばこをたくさん買っておく人もいる。今年の青年団長に話を聞いたところ、舞う方が大変だと思うから舞い手としてのプレッシャーは無く、時間がおしてくるのが不安とのことだった。団長自身も世話役としての役割を自覚していることが分かる。

なお、獅子舞の主体は青年団だが、昔は獅子舞を行うかどうか毎回自治会に伺いをたてていたようだ。基本的には行ってはいけないとされる理由はないが、一度だけ、小野で大火事があった年に自粛したことがあった。また、10 年程前に、獅子舞の開催日を 9 月 15 日から、9 月の 3 連休の中日に変えることを決めたが、このときも自治会の承認

を得て決定した。青年団だけでなく、決定権を持つ自治会も、獅子舞に関して大きな役割を果たしている。

3.　獅子舞当日の様子

2014 年の獅子舞は 9 月 13 日、14 日、15 日の三連休の中日の、14 日に行われた。以下その一日の様子を順に記していく。

（1）獅子頭の御幣付け　（7：40～）

小野にある八幡宮の神主が、小野に住んでいないため、福岡町の中心部に住んでいる神主の元へ獅子頭を持って降りて行き、御幣をつけてもらってきた。

（2）獅子舞準備　（9：00～）

小野の公民館にて、獅子舞をするにあたっての準備が始められた（写真 5)。この準備段階では、22 人ほど集まっていた。天狗の着付けを 70 代男性 2 人が手伝っていた。この男性は 30 代の頃から、つまり 40 年間ほど着付けの手伝いをしていると言っていた。カヤとカシラの装束は、天狗に比べて簡単に着られるようで、皆自分で着ていた。そして、皆が装束に着替え終わった頃合いを見て、囃子方の人たちが外に出て演奏を始めた。このように、囃子方の人たちが先に外に出て、演奏を始め、カシラや天狗の人たちが外に出るように促すことを、「呼び出し」という。実際にこの音を聞いて、中にいた人たちがぞろぞろと出てきて、獅子舞をする準備を始めた。このとき、獅子舞に使う獅子頭などを公民館から持って出てきた。

写真 5.　獅子舞準備の様子

（3）公民館、神社、寺での演舞　（9：30～）

最初の舞いが公民館前で行われた。ここでは中学一年生の男の子が、天狗をして、「ゴン囃し」が舞われた。その後一行は八幡宮神社に向かった。移動中はずっとお囃子が演奏されていた。神社でも同様に「ゴン囃し」が舞われた（写真 6）。このときはまだ、神主さんが小野に到着していなかったので、神事が行われることもなくあっさり終わった。

神社の後は、西照寺というお寺に向かった。お寺で、獅子舞が行われることは一般的ではないかもしれない。しかし、小野では、西照寺の住職の小野光人さんが獅子舞に参加していたり、青年団に獅子舞を教えていたりする関係からかお寺でも舞うことになっている。まず、お寺の方で「ゴン囃し」が舞われた（写真 7）。ハナ読みが行われて、その後、お寺の家の玄関に行き、「ふた足前」、「ふた足後」などが舞われた。このとき、光人さんの兄にあたる長男の方が、熊本から帰省しており、その方が飛び入りでカシラをした。この方は、小野にいたときにはカシラをしていたそうで、他のカシラの人に全く劣ることなくしっかり舞っていた。

写真 6.　神社での演舞

写真 7.　寺での演舞

（4）自治会長宅での宿と演舞　（10：15～）

寺での舞いが終わった後は、自治会長の家に向かった。この、神社→寺→自治会長宅という順は毎年決まっているが、その後の回り方は、青年団で「去年はこう回ったから、今年は逆にしよう」などと決めるようだ。深夜に回る家だと、その家はその時間まで起きていなければならず大変なので、それが重ならないようによく考えるという。今年は練習の後に、お酒を飲み、お菓子をつまみながら公民館で相談して決めていた。

自治会長の家では最初の休憩がとられた。これが一回目の宿である（写真 8）。小野では、休憩所のことを「宿」と呼んでいる。自治会長の家では、ビールやジュース、オードブル、寿司、赤飯おにぎり、焼きそば、焼き鳥などが振る舞われた。手作りのものと、できあいのものの両方があり、自治会長の家の方はそれらを運んだり、お酒を注い

だりするのに終始忙しそうに動いていた。買ってきたものがあってもこれほど忙しそうなのに、これが、全て手作りだったらさぞかし大変だったにちがいないと感じた。

料理がたくさん出されたが、まだ時間も早く、数回しか舞っていないので、オードブルなどは残るだろうなと思っていたが、ほとんど完食だった。この宿は獅子舞の担い手だけでなく、自治会のメンバーもいたので、とても賑わっていて楽しい雰囲気だった。お酒もたくさんふるまわれ、お祭りが始まったなという感じだった。私も、この場に参加させてもらい、ご飯とお酒をご相伴させていただいた。

宿での休憩時間は 45 分と決められているが、時間が少し押していたため、35 分くらい経ったところで、「呼び出し」が始まった。そして、自治会長の家で獅子舞が行われた。ハナがたくさん出されたのか（写真 9)、神社やお寺より長く舞っていた。また、お酒も入り、宿で盛り上がった後なので、獅子舞もさらに活気が増しており、青年団のメンバーから掛け声がたくさん上がっていた。自治会長の家の前には、多くの見物客が来ていた。

写真 8.　自治会長宅での宿

写真 9.　自治会長宅でのハナ読み

（5）家を回り始める　（11：50～）

いよいよ家を一軒一軒回り始める。一軒につき 15 分くらいの予定でスケジュールが組まれていた。自治会長の家で見物していた人が数人、獅子舞について回っていたが、そうする人はごく少数で、基本的には自分の家に獅子舞がやってくるのを待っているというふうだった。どの家の人も、縁側にみな正座して獅子舞を観ていた。「ゴン囃し」をして、次に家の人からハナを受け取り、ハナ読みをするという流れだった。ハナを受け取った後は、団長がその封筒をすぐに鞄に入れていた。ハナ読みの後は、ハナ紙（団長が読み上げる紙、写真 9 左側）を団長が広げて持ち、それに獅子が近寄り、獅子頭でこすっていた。このハナを受け取る一連の流れは昔とは大きく変わったようだ。それについては、後で詳しく説明する。

ハナ読みをした後は、主に「ふた足前、後」を舞った。ハナが弾んだ時などは、「七五三」や「新切り」なども行われた。獅子舞を見ていた 80 代の女性にお話を聞いてみると、「今は人が少なくなってしまって、山の獅子舞も情けなくなってしまった。昔の小野の獅子舞は勇ましいものだったが、今はおとなしくなってしまった」ということだった。どうして変わってしまったのかと問いかけてみると、「昔は（道が）泥でやりやすかったけど、今はコンクリートなので、痛いし疲れるし仕方ないかな」とも言っていた。昔の獅子舞を知らない私が見ると、勇ましいものに見える獅子舞も、昔から見ている人にとっては物足りないようだ。

笛を吹いているのはほとんどが女の子で、太鼓は男性だった。最初は、獅子殺しをする天狗役の人が太鼓を叩いていたが、東京に出ている 20 代男性が遅れて到着すると、交代して、この男性が太鼓を叩くようになった。

獅子について回る間に、カシラをしている男性 40 代の話を聞いた。この方は、中学生から獅子舞に参加し、カヤをしていたそうだ。そして、高校で笛などをして、青年団に入るときに、団長にカシラに振り分けられて、それからカシラをしているとのことだった。青年団に入ることが決まった時点で、空いているところに振り分けられたという。「やっぱり一回、回すとすごい体力を使う」と言っていた。

一行について回っていると家の人が飛び入りでカシラや天狗をする姿がよく見られた。普段は、県外などに住んでいる人でも、祭り当日になると実家に帰ってきて、自分の家で獅子舞が行われるときは、昔やっていたように獅子舞に参加することがよくあるようだ。昔やっていたのを覚えているのか、うまく舞っている人が多かった。

写真 10.　公民館での宿

1 回目の宿は自治会長宅で行われたが、2 回目以降は公民館で行われた（写真 10）。宿は自治会長の家を合わせて全部で 5 回あった。大体、3～4 時間に一度のペースで、宿で休憩をしていた。休憩時間はどの宿でも 45 分とされていた。2 回目の宿は、13：

15 からで、ピザ、ジュース、ビールなどが振る舞われた。これらは、青年団の家族が調達してきたものだ。その後の宿では、お好み焼きや焼きそば、牛丼などが振る舞われていた。公民館での宿は、自治会長宅と違って、もてなす人もおらず、できあいのものばかりなのであまり盛り上がってはいなかった。また、コップなども自分の名前を紙コップに書いて一日中使うので少し味気ない気もした。

（6）神社で演舞　（15：00～）

神社に神主が到着したので、自治会長ら自治会のメンバーも神社に集まり、中で儀式が行われた。また、獅子舞も舞った。神社で舞った後は、また、一軒一軒回り始めた。

（7）めでたいことがあった家での演舞　（18：45～、19：15～）

結婚をした人がいる家では、旦那さんがスーツ、奥さんが着物を着て縁側に座っていた。他の家ではそれほど人が集まっていなかったが、これらの家では 50 人ほど集まっていた（写真 11）。特別盛り上がって、掛け声が上がったり、水や酒をかけたりしていた。一度は新郎さんがスーツのまま舞い、団長もスーツのまま舞った。また、青年団のメンバーで全員で「島唄」という歌の替え歌を歌っていた。歌詞が獅子舞に関するものに変えられていたのだ。この家でのみ、団長以外の青年団メンバーもハナ紙を読んでいた。去年はこのような家はなかったが今年は 2 軒あった。

写真 11.　めでたいことがあった家での演舞

獅子舞も後半になるにつれて熱を帯びてきて、掛け声や手拍子が増えた。獅子をマワしている人にも熱がこもってきた。ハナも増えてきた。祭は夜が本番と聞いていたが、本当にそのようだった。「合無し」、「新切り」などハナが弾んだときにする舞を舞う回数も増えてきた。

（8）御幣外し　（25：45）

全員が神社に行くのではなく、数人だけで獅子頭を持って神社に上がっていき、すぐに御幣を外して降りてきた。ここでは、御幣を外すだけで、舞うことはなかった。御幣をつける意味と、外す意味については聞き取りをしたが分からなかった。

（9）獅子殺し　（26：30～）

獅子殺しは公民館の前の道路で行われた。獅子殺しを見るために、この時間に目覚まし時計をかけている人が多いようで、深夜にも関わらずたくさんの人が集まっていた。獅子殺しが行われる前に、一通り、全ての舞を舞った。獅子殺しを担当するのは一人だけだが、それまでの舞は他の人が交代しながら行っていた。最後に獅子の喉元に刀を刺して終わった。刀を振るう「一刀振り」は珍しいのではないかと思う。

獅子殺しが深夜に行われるため、寝過ごしてしまったり、起きていようとしても寝てしまったりして見たくても見逃してしまう人が多いようだ。「前みたいに朝方にやってくれたら見れるのに」（80 代女性）というように、朝方の獅子殺しを望む人の声を多く聞いた。しかし、獅子舞をしている側からすれば、朝方までするのは、体力的にしんどく、翌日の仕事にまで影響するため、朝までするのは今は難しいようだ。

（10）打ち上げ　（26：50～）

打ち上げは公民館でオードブルやビールを用意して行われた。この場では、青年団のメンバーと自治会のメンバー10 人ほどがそれぞれテーブルを囲んで楽しげに話していた。

「今年の獅子舞は長かった」（30 代男性、50 代男性）といったように、今年はハナが弾んだこともあり、獅子舞が長引いてしまったようだ。実際に予定表の終了時間より１時間くらい長引いていた。しかし、「短かったな、もうちょっと長くして欲しかった」（60 代男性）というように、短く感じている人もいた。獅子舞の長さは昔と比べると短くなっており、長いものに慣れている人たちの中には、夜明け前に獅子殺しが終わるのは短いと感じる人もいるようだ。

また、「宿はやっぱり家でしたいな」（60 代男性）という意見もあった。この方は公民館でする宿の様子を見たのだ。公民館で出来合いの物ばかりを食べるのは、確かに味気ないものであったが、準備などが大変なことを考えたら、公民館でするのも仕方がないのかもしれない。

他には獅子殺しについて、「今年の獅子殺しはよかった」（60 代男性）、「去年はへなちょこだったけど（演じるほうの）慣れだね」（60 代男性）といった様々な感想があった。「あと 20 年はやってもらわないと」（70 代男性）と言っている方もいた。

4.　昔から今日に至る獅子舞の変化

本節では、小野の獅子舞がどのように変化しながら継承されてきたのかを、項目ごとにまとめる。

4-1.　練習の変化

まず昔の練習の様子について説明する。80 代男性によると、昔から獅子舞の練習は、9 月 1 日から本番まで毎日行われた。小野では練習場所と、当日の休憩所のことをともに「宿」と呼ぶ。練習場所である「宿」は、青年団員の誰かの家と決まっており、必ずしも青年団長の家でするわけではなかった。この男性が獅子舞をしていた 60 年ほど前は、25 歳で青年団を抜けることになっており、青年団を抜けた 25～60 歳の OB が獅子舞を教えに来ていた。昔は教える人と教えられる人との上下関係が厳しく、間違えたら OB から棒で叩かれることがよくあったという。当時ここまで厳しくできたのは、人数が沢山いたからだ。厳しさのあまり練習に来なくなる人もいたそうだが、すぐに代わりの人を用意できたのである。「最近では教えられる人の方が偉いようなものだ」とこの男性は言っていた。

次は、現在の練習の様子である。今年の練習も 9 月 1 日から毎日行われる予定だったが、青年団長の都合が合わなかったり、仕事で多くの人が参加できなかったりする日があって週に 2 日ほど休みになっていた。練習の参加人数は日によって異なり、6 人くらいの日もあれば 9 人ほどいる日もあった。特に土日は、小野以外に住んでいる子どもたちが練習に参加するので人数が増えていた。

平日でも、小野以外から助っ人が練習に参加しに来ていた。石川県金沢市から来ている人、富山県南砺市福野から来ている人などがいた。これらの人は青年団メンバーの一人と同じ職場で、誘われたため参加したのだという。金沢から来ている人は、小野の獅子舞に参加するのは初めてで、カヤの練習をしていた。助っ人は遠方から来るため、あまり練習に来る機会がない。したがって簡単なカヤを担当することになっているのだ。しかし、練習の参加人数が少ない日には、助っ人 2 年目の人がカシラを練習している場面もあった。カシラや天狗もこのところ人不足になっており、青年団の人々は、将来は助っ人にもカシラや天狗といった重要な役割を担ってほしいと考えているようだ。

現在の練習宿は公民館だ。公民館の鍵は基本的に団長が持っていて、団長が開ける。練習時間は、20 時から 22 時くらいで、練習が終わったら、公民館の中でお酒とお菓子を出して少し話をしていた。この話の中で、当日どのような順番で家を回っていくのか、今後獅子舞をどのように運営していくのかなどが話し合われていた。実は練習後の時間は、獅子舞について話す重要な機会になっているのだ。

練習は 20 時からとはなっているが、20 時の時点では 2、3 人くらいしか集まっていない。それでも、練習の始まりを告げるため太鼓を叩いて、音を小野全体に響かせる。

その音を聞くと人がぞくぞくと集まってくる。そうして 30 分後くらいには大体の人が集まり、本格的に練習が開始される。練習に集まるのは、当日獅子舞に参加する人だけで、ほとんど教えに来る人はいなかった。たまに 70 代の男性が来て、獅子舞を見てアドバイスをしていたが、それも少しだけで教えているという感じではなかった。教える人がいないので、現在では青年団のメンバー同士で教えあっている。お互いの舞をみて、「足が逆だ」とか「ステップの踏み方はこうだ」とか気になるところを修正する作業が多かった。初めてカシラや天狗をする人は、初めての人はほとんどおらず、多くの人が小学生や中学生の頃から獅子舞に参加しているので、新しいことを覚えることはほとんどない。これは思い出すための練習なのだ。

練習の合間に休憩として雑談が始まることが多々あったが、そのたびに太鼓や笛の囃子方が演奏を始め、それを機にカシラや天狗の人が練習を再開するという形だった。このことから分かるように、囃子方は獅子舞のメンバーをまとめる役割を持っているのだ。

また、かつての練習の「宿」の家では特にもてなしをする必要はなく、バケツに水を入れておくだけでよかったという。練習に参加している人は、それで水分補給していた。しかし、しだいに練習後にもてなしをするようになっていき、お酒などを準備する必要が出てきたという。30 代男性の話では、もてなしが大変になるにつれて、家の人の負担が大きくなってしまい、そのため家で「宿」をするのが難しくなっていったという。昔は練習の後に、特にみんなで集まって話し合ったりすることはなかったが、それは普段から集まる機会が多かったので、獅子舞の練習の機会に特に話し合う必要はなかったからだ。それが今日では練習後に、祭りについて話し合うだけでなく、普段顔を合わせることのほとんどない昔の仲間と酒を飲みながら雑談する憩いの場にもなっている。

写真 12.　現在の練習の様子

4-2. 当日の様子の変化

獅子舞の当日の様子は、昔から現在まで大きく変わっているようだ。その変化を、項目ごとにみていく。

（1）開催日の変化

10 年ほど前までは小野の獅子舞は 9 月 15 日と決まっていた。一度だけひどい豪雨がきてとても獅子舞ができそうになかったので、開催日を一日ずらして、9 月 16 日にしたことがあったそうだ。このときは、小野の人から苦情が出て、ハナは例年の半分ほどしか集まらなかったという。それほど、15 日に開催することが重視されていたのだ。

現在は、第 2 節でも述べた通り、自治会の承認を得て、10 年ほど前に三連休の中日に行うようになった。このように変化した理由としては、まず、会社勤めの人が多くなり、平日に獅子舞に参加するのが難しくなったことが挙げられる。昔は農業を営んでいる家が多かったため、時間に融通が利いたのだ。また、獅子舞を深夜までマワすと、翌日に朝から仕事に行くのはつらいということもある。そのため、翌日も休みである三連休の中日に開催されるようになったのだ。しかし、80 代男性によると「昔の人は体力があって、朝まで獅子をまわしたその日にすぐ畑仕事をしていた」とのことだ。昔よりも、獅子舞の担い手の年齢が高くなったことで、体力がなくなっているということもあるのかもしれない。

（2）「宿」の変化

昔は、約 10 軒まわるごとに休憩する「宿」が 1 軒用意されていた。「宿」は、小野の誰かの家ですることになっていたが、獅子舞の参加人数が多かったので、その人数が入りきるよう、大きい家にできるだけ「宿」をして欲しいと頼み込んでいたようだ。しかし、毎年同じ家が「宿」を担当すると負担が大きいため、2 年連続では頼まないようにしていた。

「宿」では 1 時間くらい休むことになっていた。しかし、飲みすぎたり、盛り上がりすぎたりしてなかなか出発しないことがよくあり、1 時間を大幅に超えてしまうことも多々あった。そのため、当日は全部の家をまわるのに、午後 2 時くらいから始めて翌日の朝までかかってしまったという。当時宿からなかなか出てこない者たちを動かすために、「早く太鼓叩いて外に出せ」と言ってくる OB たちがいたそうで、囃子方が率先して外に出て演奏を始めたそうだ。その音を聞いて、カシラや天狗の人たちも次第に宿から出てきたという。

現在の「宿」は、基本的に公民館で行われており、買ってきたものが出されている。休憩時間は 45 分と明確に決められ、スケジュールが立てられていた。あまり盛り上がることはなく、45 分ほどでみな公民館から出てきた。しかし、一度だけ自治会長の家で宿が行われ、このときは非常に盛り上がっており、45 分を過ぎても休憩が終わることはなかった。どの「宿」のときも「呼び出し」が行われていた。

「宿」が家でできなくなった理由は、もてなしが豪華になっていき、家の負担が大きくなっていったためである。昔は各家々で、こんにゃくの煮たもの、サトイモの煮たもの、赤飯などが出されたらしいが、「あまり美味しくなかった」という話をよく聞いた。ところが他の家の「宿」より豪華な料理を出さなくてはいけないという見栄などから、もてなしはだんだん豪華になっていった。また、単なる見栄だけでなく、担い手の数が減り、担い手の存在が昔と比べて大切なものになったことで、豪華にもてなす必要が出てきたという側面もあるだろう。

（3）お囃子の変化

まずは、移動中のお囃子の変化についてみていく。獅子が舞うときだけではなく、囃子方は移動のときもずっと演奏し続ける必要がある。この移動中の演奏が変化しているのだ。

獅子舞当日、家から家への移動の間はずっと囃子方が演奏をしていた。カシラや天狗はこの間は休めるが、囃子方は休めないので非常に疲れるらしい。この移動中のお囃子は、昔 2 種類あった。一つは「山送り」という遠くへ移動するときのもの、もう一つは「道中」という近場へ移動するときのものだ。「道中」は「山送り」に比べて、少しテンポの速い曲である。今では、「道中」はなくなり、全部「山送り」になっている。現在 30 代の男性でも「道中」の存在を知らなかった。

距離によって演奏する曲を変えると、どちらを演奏するか考える手間がかかるので、簡略化され、いつのまにか「道中」が消えたと考えられる。また、今年笛を担当していた中学生の女の子に話を聞いた際、「舞の種類が多すぎて、ゴン囃しをするぞと言われてもどれのことか分らない。笛リーダー（30 代男性）のような人が笛を吹き出したら、それに続いて演奏している」という語りが得られた。ここから考えられるのは、笛を担当している人たちが、多くの種類の演奏をするのが難しくなってしまったということもあるかもしれない。

次は、舞のときの演奏の変化だ。昔の笛の演奏はとても複雑で、指がとても早く動き、目で追えないほどだったという。しかし、現在では、そのように複雑な演奏を出来る人はおらず、簡略化されている。昔の笛の演奏の後は、唇が腫れて、歯も浮いてしまうので、一ヶ月は食事するのが大変だったらしい。現在はそのようなことは無いので、吹き方も変わっていると考えられる。

また、太鼓も変化している。太鼓も簡略化されて、昔ほど複雑ではなくなっている。さらにはリズムが速かったり遅かったりと、昔獅子舞を担っていた世代が聞くと口を出したくなることがたくさんあるという。

80 代男性によると、獅子舞のなかでも囃子方はもっとも大切な役割であるという。なかでも太鼓が獅子舞全体のリーダーという認識だったようだ。カシラと天狗は太鼓の囃子方に合わせなくてはならない。特にカシラは、周りの様子がよく見えていないので、

太鼓の音をよく聞いて舞うようだ。現在では、太鼓のリズムが速かったり遅かったりすると上で述べたが、速いのはまだしも、遅いのはだめだという。リズムが速まれば、カシラと天狗が速く動かなくてはならず、体力的には大変だが、迫力や勢いがある舞いになる。しかし、リズムが遅いと、カシラや天狗は合わせづらく、また、迫力の無いおとなしい獅子舞になってしまう。このような理由から、速いほうが、まだましだとされているのだ。

（4）ハナの変化

小野の獅子舞では、「ゴン囃し」が行われた後に、ハナという祝儀を出すことになっている。獅子舞の日には、一軒に親戚がたくさん集まって、それぞれの家族がハナを出すため、いくつものハナが出されることになる。このハナを一般的には「固めて（＝まとめて）」出す。固めて出せばハナの数だけ舞わなくてはならず、大変だからだ。しかし、昔の小野の獅子舞のハナは固めずに出していた。そのため、一軒でいくつもハナが出されると、その数だけ何度も舞わなくてはならず、とても大変だったようだ。一軒で何度も舞うと、担い手の負担になり、時間もかかってしまうため、小野でも現在は固めて出すことになっている。このことについて、70 代男性は「今は人数が少なくなってかわいそうやから（ハナを）固めて出す」と言っていた。

しかし、当日の様子を見ていると、必ずしも全てのハナが固められているわけでもなかった。夕方になり、獅子舞が盛り上がってくると、一軒で何度もハナを出す家もあった。その家では、ハナの数だけ舞うのでとても時間がかかってしまっていたが、そのぶん、何種類もの舞を見ることができた。今では、ほとんどの家で一回しか舞わないので、「ふた足前、後」だけをすることがほとんどだが、昔は、様々な舞を舞っていたのだろう。今ではあまりたくさんの種類を舞うことがないので、今後しだいに舞わなくなってしまう舞も出てくるのかもしれない。実際に 13 種類あった舞がすでに 2 種類舞わなくなり、11 種類になっている。

また、ハナの受け取り方も変わってきている。昔は、ハナを入れた封筒を獅子頭が受け取る動作をしていた。そのため、獅子を殺さなくては、永遠にハナを取られることになる。獅子殺しをする意味の中には、もうハナを取られないようにするという意味もあるのだ。もちろん獅子頭が受け取るといっても、獅子頭がずっと預かっているわけではない。獅子頭が受け取ったら、それを団長が預かっていた。しかし、今は獅子頭が受け取る作業が省略され、ハナが入った封筒は団長が直接受け取り、すぐに鞄の中に入れてしまう。その様子に「味気ないな」という声を聞いた。

最後にハナ紙の変化だ。ハナ紙とは、目録が書かれており、ハナを受け取った後に団長が大声で読み上げる紙である（写真 13）。団長は「目録ひとつ」という言葉から始まる決まり文句で、目録を読み上げていく。昔は、団長が読み上げたあと、そのハナ紙を獅子が噛んでいたという。もちろん、何度も噛むと、ハナ紙は破れてしまうので、何枚

も予備のハナ紙を持ち歩いていた。しかし、現在では、ハナ紙に獅子がカシラをこするくらいしかしていなかった。獅子舞が後半になり、熱を帯びてくると、獅子頭がハナ紙に強めに当たってしまうことがあったが、その時には「ハナ紙が破れてしまうから」と言って、強く当たることを抑えていた。予備のハナ紙は持ち歩いていないようだ。獅子がハナ紙を噛むという動作が、しだいに簡略化されていき、その結果今のような動作になったのだろう。

写真 13.　ハナ紙（小野近くの沢川のハナ紙）

（5）衣装の変化

獅子舞の当日に着る衣装は、昔から大きく変わったということはないが、様々な点で変化してきている。まずは、天狗の衣装の変化だ。天狗の衣装の後ろには大きなリボンがある（写真 14）。このリボンの長さが変化している。昔は、一畳分ほどの長さが標準で、長ければ長い程格好の良いものだった。長いリボンを振り回しながら、舞う姿がよいとされていたのだ。しかし、今では、ずっと短いものになっている。今年、天狗の衣装を作った方は、リボンを長めに作ったようだが、着付けをするときに動きやすいようにと短く切ったという。

写真 14.　天狗の衣装

他には天狗の髪のかつらの紐の位置も変化している。昔は、口のすぐ下くらいに紐をかけていたが、今では、あごの下にかけている。その方が、紐が安定するからであろう。

着せ方が変化してきているが、昔の方がよくて、今はだめになってしまったというわけではない。実際に、衣装の着方の変化を教えてくれた 80 代の男性も「今は今の時代でいい」と言っていた。ただ、獅子舞を見てしまうと、いろいろと口を出したくなるので、できるだけ見ないようにしているという。

（6）夜道の移動の変化

小野には今も街灯が少なく、街灯の無い所では夜になると真っ暗になってしまい、ほとんど見えなくなる。獅子舞を舞うときは、家ごとに玄関にライトがあるので、ほとんど問題は無いのだが、問題なのは家から家へと移動するときである。昔は街灯もなかったので、代わりに大きな提灯を持って歩いていたそうだ。提灯の明かりのなかで舞う獅子舞は、幻想的で迫力のあるものだったという。

今年も、夜道を歩いていると、「これは暗すぎるな、提灯が必要だ」という声が上がっていた。実際に私も、夜道を歩いていると、足元が全く見えず、畑と畑の間を歩くときなどにつまずきそうになった。現在でも、街灯の数の少なさから、暗い夜道に対して対策が必要とはされているが、何も対策されていない状態だ。

4-3. 獅子舞の役割の変化

昔は家ごとに「筋」というものがあって、あの家はカシラの一家だとか、あの家は天狗の一家だということがあったようだ。「あの家の人がカシラを持つと獅子がいきいきと動き出す」ということがあったのだ。また、カシラや天狗は長男しかできないということになっており、次男以下は笛か太鼓かカヤしかできなかった。しかし、例外はあった。

中西広次さんという 81 歳の男性がこの例外だった。本当なら、天狗とカシラは長男だけができるものであったが、中西さんは特別に次男にもかかわらず天狗をしていたのだ。それについて中西さんの友人の 80 代男性は「広次は小柄で、とにかく天狗の動きがうまかったから特別なんだ」と言っていた。また、中西さんは、養子に行かずに分家を立てて小野に残るということを集落のみんなが知っていたので、天狗の役が出来たのではないかとも言っていた。つまり、かつてカシラや天狗の役が長男に限られていたというのは、カシラや天狗などの難しい役を習得した者がすぐに小野を出て行ってしまうということを避けるためだったらしいことがわかる。

中西さんは、小学生の頃から 50 歳くらいまで獅子殺しを舞う天狗を担当していたが、これは後継者がいなかったからではない。獅子殺しは難しく重要なものなので、昔から一人が長く続けることになっているのだ。

以上述べてきたように、獅子舞には家筋や、長男であるか否かで、担当できる役がお

よそ決まっていたが、現在はそういうことはない。家筋で選びたくても、人数が足りないので、選んでいる余裕が無いのだ。また、長男だけに制限する余裕もなく、次男以下でもカシラや天狗などの役に就いている。青年団に入ると、空いている役に振り分けられるのだ。

他にも青年団以外の人が助っ人として参加するようになったり、女の子が笛を担当するようになったりと変化が起こっている。

5. 変化の原因と今後について

小野の獅子舞は昔から現在にかけて大きく変化していると述べてきた。本節では、今まで述べてきた変化を簡単にまとめ、その変化が起こってきた原因を考察する。そして、小野の獅子舞の今後について考えてみる。

かつて獅子舞を担っていた世代に、昔と現在の獅子舞の違いを尋ねると、「練習がまず違う」とのことだった。元来の練習は青年団 OB の人から厳しく指導されながらするものだったが、現在の練習は、青年団のメンバー同士で教え合うものだ。現在も、青年団 OB の人が教えには来るが、指導は厳しい物ではなく、アドバイスをする程度にとどまっている。

また、練習するときの「宿」も変化している。以前、練習するときの「宿」は、青年団のメンバーの家ですることになっていた。その「宿」では特別なもてなしが期待されるということはなかったが、次第もてなしがエスカエートし、結局は家で「宿」をするのが困難になるほどになり、現在は公民館で練習をしている。

現在は練習のあとに、みんなでビールとお菓子を出して雑談したり、獅子舞の今後について話し合ったりしている。普段は、みんな仕事があったりしてなかなか集まって話すことが出来ないので、獅子舞の練習が、よい交流の機会となっているのだ。練習のときにも「(同じ青年団のメンバーとは）ほとんど獅子舞でしか喋らんもんな」という声を聞いた。今日は青年団のメンバーも半数以上が小野を離れているため、当然なのかもしれない。しかし、昔は、獅子舞以外にもみんなで集まって話し合う機会が多かったので、特別に獅子舞が交流の機会であったわけではないようだ。

当日の様子も様々に変化している。開催日、休憩所の「宿」、お囃子、舞の種類、ハナ、衣装などの変化である。開催日は 9 月 15 日に固定されていたのが、三連休の中日に変更された。休憩所の「宿」は、家ですることになっていたが、大半は公民館でするようになった。お囃子や舞の種類は、少なくなったり省略されたりしている。昔はハナを固めずに出していたが、現在は固めて出すようになった。衣装は、現在の担い手たちが効率的だと思うように変化している。

他にも、担い手たちがどのような役に就くのかという、役職の変化も起こっている。昔は長男しか、カシラや天狗ができないことになっていたが、現在ではそのような縛り

はなく、青年団メンバーは、青年団に入る際にカシラか天狗に振り分けられる。そこでは、家筋を見極められるわけではなく、空いている所に振り分けられるのだ。昔は筋を見て、カシラか天狗かと決められていたが、現在ではそのようなことをする余裕はない。

以上述べてきた変化の主な原因は、担い手の不足とライフスタイルの変化だ。青年の数が減ったことで、担い手の存在が貴重になり、大切にされるようになってきた。練習で厳しくすると、練習が嫌になり、来なくなる人がいる。担い手が多かった時代は、それでも代わりの人がいたのでよかったが、現在は代わりの人がいないので辞められるとむしろ困る。それで厳しくは言えないのだ。ハナを固めて出すようになったのも、担い手が少なくなり高齢化したことで、何度も舞うのが大変になりつつあるからである。

「宿」[12]が家でできなくなった理由も、担い手不足にあると考えられる。担い手が希少になるなかで、しっかりとしたもてなしが必要になり、「宿」を担当する家の負担が増えたのだった。また、「宿」を担当する家同士の見栄で、もてなしの豪華さが競われるようになり、負担が大きくなった面もあるだろう。

開催日が変更されたのは、ライフスタイルの変化からだ。昔は、農作業中心だったため、時間に融通が利いて、平日でも獅子舞をマワすことができたが、現在はほとんどの人が会社勤めで平日に休むことができないのである。

このように変化してきた小野の獅子舞であるが、2015 年からまた大きく変化する。まず、青年団長の不在だ。青年団長を経験するのは一度きりということになっているが、2014 年で青年団の全員が団長を経験した。翌年の 2015 年からは、青年団長を立てないですることに決まったという。団長には様々な仕事があり、大変であるため、二度はしないのだ。

青年団長がいなくなってしまうことと人手不足を理由に、青年団からは「来年（2015 年）からは青年団で獅子舞をするのはもう無理です」と自治会に丸投げする案と、そのまま青年団で獅子舞をするが、もっと 4、50 代の人にも手伝ってもらえるよう依頼する案が出て、結局後者を採用することに決めたそうだ。もはや青年団 OB の協力が必要なのだ。また、「現在は助っ人にはカヤしか任せていないが、そのうちカシラや天狗も担ってほしい」と青年団の 30 代男性は語る。練習に多く参加しなくてはいけないので難しいが、アルバイトとして大学生などに協力を要請するというのも、将来必要になってくるかもしれない。今後は、助っ人がカシラや天狗を担うこともあるだろう。

変化するのは、青年団長のことだけではない。休憩所としての「宿」も大きく変化する。現在は公民館で行われている「宿」だが、2015 年からは家で行うことになる。獅子舞が終わった後の打ち上げで、自治会のメンバーから「公民館でする宿は味気ない、やっぱり家でしたいな」という声が上がっていたが、それが実現することになった。「宿」を自治会のメンバーの家で回すのか、自治会でどこかの家に頼みに行くのかはまだ決ま

[12] 「宿」が家で行われなくなってきたのは獅子舞に限ってのことではなく、5 章で述べられているように、小野の様々な行事で起こってきている。

っていないが、次回からどこかの家で簡単に「宿」をすることになる。

昔の「宿」は手料理を振る舞うもてなしが過熱して「宿」をする家の人の負担が大きく、家でするのは困難になった。それを避けるために、2015 年からの「宿」では、できあいのものを買ってくるくらいでよいとするようだ。しかし、そうなるとやはり良いものでもてなしたいという欲求が出てきて、再びもてなしがまた過熱するかもしれない。そうしたら、また、公民館でするようになる可能性もあるだろう。

おわりに

いままでみてきたように、獅子舞は常に変化しながら今日まで存続してきた。その変化は、担い手の不足や、ライフスタイルの変化に対応するために起こっており、それらの状況に応じて変化することで存続してきたと言えるだろう。さらに今後、変化することが決まっている。人不足のため、小野以外から助っ人を集める必要性も出てきているのだ。人を集めるためには、実際に小野の獅子舞を見てもらう必要があるだろう。その場で見てそのかっこよさや熱気に触れることで、小野の獅子舞に参加してみたいという気持ちになる若者も多いのではないだろうか。私は小野の獅子舞にその魅力を感じた。これからも、小野の獅子舞は状況に合わせて変化しながら、受け継がれていくにちがいない。

謝辞

最後に、今回の調査でお世話になった方々に深くお礼申し上げます。特に、西照寺の小野さんには、獅子舞に詳しい方々を紹介していただき、興味深いお話をたくさん聞くことができました。また、中西広次さんご一家の方々には、昔の獅子舞から、現在の獅子舞までのお話を何度も聞かせていただきまして、お話を聞くたびに獅子舞への興味が湧いてきました。小野青年団の方々には、忙しい獅子舞の練習から、本番まで同行させていただきました。良い経験ができました。獅子殺しの際のハナ読みで、私の名前を入れてくださったことはとても嬉しい思い出になりました。みなさま、本当にありがとうございました。

参考文献

富山県教育委員会　1979 年　『富山県の獅子舞』

寺院と地域社会のつながり―小野の西照寺を例に―

馬川　法子

はじめに

私の生まれは富山県南砺市の旧福光町にある小さな寺院である。昔から父も祖父も二人とも、遠方へ法話をしに寺を空けることが多かった。子供の私はそれに対して特に何の疑問ももたず、寺のお坊さんとはそうやって各地を転々と回るものだと思っていた。

高岡市福岡町小野集落の西照寺を訪れ、そこで催される行事を観察し、地域の人々の語りを聞いたとき、今まで当たり前と思っていた寺院の在り方が、あっけなくくるりとひっくり返った気がした。多くの人が訪れ活気に満ちた法要、地域住民が見せる西照寺の方々への信頼、積極的に地域社会に働きかける住職。寺離れ、宗教離れが加速する現代にあって、これほどまで寺院と地域との触れ合いが色濃く残っていることに驚きを覚えた。

しかし調査を進めていくうちに、西照寺のある小野集落においても、時代の移り変わりとともに途絶えた行事、形を変えた行事があることが分かってきた。人も社会も激しく流動していく現代において、かつて村落社会の中にあった信仰による人々の繋がり、寺院が果たしてきた役割はどのように変化し、今どのようにあるのか。本章では西照寺の概要を述べたのち、西照寺周辺地域における仏教行事の断絶、変容から現代の姿までを順に追って記述していく。

1.　西照寺の概要 [13]

西照寺の由来は承久 3 年（1221 年）にさかのぼる。承久の乱により順徳天皇が佐渡国に流された。その随行に近江国の郡司であった小野良実が同行し、佐渡に渡ることとなった。仁治 3 年(1242 年)、順徳天皇が息を引き取ると、良実は順徳天皇の皇子・彦成親王に同行し倒幕の旗を掲げ上京しようとした。しかし越中国砺波郡の蟹谷峠において戦に敗れ、良実は逃れて現在の小野にたどり着く。宝治元年（1247 年）に城尾台地と呼ばれる場所に草庵を建立し、良実は真言宗の行者として小野に根を下ろすことになった。これが西照寺の起源である。

時は過ぎ文明 2 年（1470 年）、西照寺の現在地から朝夕に煙が立ち昇っていた。煙が上った場所には白樺の大樹があり、その根元を掘るとそこから一体の仏像が出現した。それから城尾台地から現在の場所に寺院が移されたという。またこの煙が大変良い香り

[13]本節の記述は主に西照寺記念法要実行委員会 2014「記念法要冊子」を出典とする。

で、この地は「香野(こうの)村」と呼ばれるようになり、それから現在の「小野村」になったという言い伝えも残っている。

その当時、蓮如上人が越前の北之庄にて教義を広めていた。蓮如上人とは室町時代、北陸を中心に浄土真宗の伝道を行っていた僧侶である。この影響もあって、現在でも北陸は「真宗王国」と呼ばれている。文明 3 年（1471 年）、その蓮如上人の教えを北之庄にて直に聴聞し、帰依を決め、蓮如上人から直接「城尾山西照寺」の山号・寺号と法名を頂いたのが、西照寺初代住職の小野正西である。こうして西照寺は寺号を新しくするとともに、真言宗から浄土真宗に転派することとなった。

やがて文禄元年（1592 年）、織田信長と敵対していた浄土真宗の本山、本願寺の顕如上人が没したことにより、信長への対応を巡り本願寺内部で抗争が起きる。このことがきっかけで本願寺は東西に分かれることになる。このとき、地方でもこのことに関する詮議が絶えなかったという。寺院、門徒がそれぞれ東西のいずれかに分派していった。当時の西照寺の住職であった元慶はこの分派を巡る秀吉の命令に従わず、その結果、本堂および多数の宝物が放火により焼失する。元慶は本尊などを抱え山へ逃れるが、この時共に山に隠れた村民が今の東門徒になったとされている。元慶はその後本堂を再建し、以来西照寺は東本願寺の門に入る。宗派は東本願寺の中の、真宗大谷派と呼ばれる宗派である。

現在の本堂は大正 3 年（1914 年）に再建されたもので、平成 26 年（2014 年）で 100 年を迎えた。西照寺の歴史は浄土真宗に転派してから 543 年、始祖である小野良実が小野にたどり着き根を下ろしてから 767 年になる。現在は 30 代目の小野光人さん（34 歳）が住職を務める。西照寺の門徒は約 130 軒ほどであり、小野集落では約 40 軒中 26 軒が西照寺の門徒である。他には近隣の五位集落や、福岡町の町中などに点在する。

2. 行事の変容

2-1. 途絶えた行事　尼お講と地蔵祭り

尼お講とは、かつて小野集落で門徒によって行われていた集まりのことである。仏教の教えについて書かれた消息(しょうそく)を代表者が拝読し、みなでそれについて語り合うというものだった。消息とは、本山の寺院から届けられた手紙形式で綴られた巻物である。基本的には男性が読み上げ、それを女性が聞くというものであったという。なぜ「尼お講」と呼ばれるのか詳細は不明であるが、尼お講はずっと昔から続いていた慣習であった。毎月 3 回、釈迦の誕生日である 8 日、親鸞聖人の入滅日である 16 日、28 日に行われていた。親鸞聖人の入滅日が二つあるのは暦の関係である。

当初は夜、それぞれ夕食を食べ終わった後、「宿」という名で一軒家を決めて寄り集まって行われていたが、近年になると参加者の大半が高齢となり、そのお年寄りが夜に出歩くのは危険であるという理由から午後からの開催になった。この会の中心である、

消息の拝読をする代表者の役を担っていたのは、彼らの中でも熱心に仏教を勉強し志す人であり、それは仏教の知識がないと務まらないものであった。尼お講は 10 年ほど前まで行われていたが、消息を読み皆に伝える人が亡くなり、その跡を継ぐ人が現れなかったので途絶えてしまった。また、これは私の推論であるが、尼お講の開催時間が夜から昼に変更されたことも、衰退した原因の一つではないかと考えられる。人の集まりというものは、夜が深くなればなるほど説明しがたい熱を帯びるものである。夜に行われることで得られていた高揚感や満足感が、昼の開催になることで減少し、結果、お講が途絶えることに繋がったのではないだろうかと私は考える。

尼お講について、生まれも育ちもずっと小野集落であるという 80 代の男性二人にお話を聞いた。「やっぱりお坊さんがいないお講はうまくいかないのかもしれないな」と二人は語ったが、隣でそれを聞いていた小野光人さんは「昔は下手な坊主よりも仏教に詳しい人がいた。そんな人がいたから坊さんは適当なお説教なんてできなかった。尼お講が途絶えたのは仏教を勉強する人が少なくなったから。あと若い人の中でも仏教に関心がある人はまだいると思うが、きっかけ、時間がないのではないか」と述べた。実際、小野集落に住む 20 代の男性に話を聞くと、「自分は子供のころからあまり仏事に参加することは無く、現在も仕事で忙しいため参加していない。しかし学校で仏教について学んだとき、面白さを感じたことがあるので興味はある」と語っていた。

その 80 代の男性二人は仏教を勉強する人が減ったことに関して、「昔は仏教を勉強することが楽しみだったからではないか」と語った。「今はテレビやゲームで一人でポチポチしていれば楽しいかもしれないが、昔はそういった娯楽がなかった。自分で勉強して、家に寄り集まって語らうのが楽しみだった」という。ほかにも、昔はそういった集まりごとに顔を出さないと村八分のようになったのも理由の一つにあるのでは、とのことだった。興味関心だけではなく、そういった「小野の人間だから」ということも関わっていた。

現在、尼お講のような仏教関連の集まりはあるのかという問いには、「ないなあ」とのことだった。集まることといったら囲碁仲間で集まることくらいであるという。

もう一つ、途絶えてしまった行事に地蔵祭りがある。小野での地蔵祭りはいつ途絶えたのか、年代ははっきりしない。80 代の男性に話を聞いたところ、「そういえば子どものときそんな行事があったかなあ。大人たちが 3 つのお地蔵様を西照寺に集めていた」とあまり覚えていないようであった。しかし『乎乃郷の今昔』のなかに地蔵祭りについて、「最近行われるようになる」という記述がある。『乎乃郷の今昔』が記されたのは 1988 年、今より 37 年前のことである。また西照寺の小野美知子さんが言うには「地蔵祭りがなくなったのは 30 年くらい前ではないか」とのことであった。

『福岡町の中世・近世の文化』によると、現在小野集落にある石仏は 4 体である。古い順に、江戸後期、明治、大正 15 年、昭和 50 年のものである。

聞き取りではっきりとした情報が集まらなかったので断言はできないが、80 代の

方々が子供の頃に行っていた地蔵祭りの際には、これらの中の古い 3 つが西照寺に集められ、供養されたという。そしていつの間にか途絶えていたが、昭和 50 年に新しく地蔵尊ができた折に、地蔵祭りが一時的に復活し、同じように 3 体を西照寺に集めて供養していたが、その後また途絶えたのではないだろうか。

なお隣の五位（ごい）集落では平成 25 年まで地蔵祭りが行われていた。現在五位集落には西照寺の門徒は 7 軒だけであるが、地蔵祭りは集落ごとの行事であるため、供養の際には一番近場の西照寺が呼ばれていた。どこのお寺の門徒であるか関係なく、集落全体の行事として、場所は公民館で行われていた。しかしここ最近は参加するのは 10 人ほどで、ついに平成 26 年には行事が行われなかった。中心となる人物の不在が原因であるという。「もしかしたら来年はやるかもしれない」とのことであった。こういった行事は必ず毎年やらねばならないというよりも、時間のある年にはやる、といった認識であるようだ。

2-2. 宿の変化　墓祠堂（はかしどう）と巡回

小野集落では「墓祠堂[14]」という、門徒主体で行う、代々の亡くなった先祖のための読経や説法を行う法座が今でも毎年行われている。4，5 月に、門徒側と寺側の都合のいい日時が話し合いによって決められる。この行事は、昔は寺ではなく村人の家で行われていた。墓祠堂を行う家は尼お講と同じように「宿」と呼ばれ、話し合いで決められた。僧侶と門徒 2，30 人はその家に集まり、法座が行われる。『乎乃郷の今昔』によると、かつてこの墓祠堂は 3 月の初旬に行われ、法座が終わると山仕事が開始されたという。

宿になった家は準備が大変だったと、小野集落の 70 代の女性は語った。お花の準備、仏壇の掃除、家の掃除、料理の準備、お坊さんのお世話などいろいろしなければならなかった。部屋の襖をあけ放って、村の門徒が皆集まれるようにした。こういったときはその家の人間だけでなく、親戚や周りの人が手伝ってくれた。その日食べるのは寿司や黒豆おこわなどであったという。他にはお酒やビールなどが振る舞われた。昔はこういったときにしかお酒は飲めなかった。「夜遅くになると男の人たちは麻雀を始め、女ばっかり働いていた。男は飲んでばっかり！」だったという。昔、料理はその家で作っていたが、近年になるにつれ、外に注文するようになったという。そして 10 年ほど前から、宿をする家が大変であるという理由で墓祠堂の宿は民家から西照寺になった。現在の墓祠堂で振る舞われる料理は外からの仕出し弁当と、参加者の手料理の差し入れからなる。

また門徒の家で行われていた行事に、別院からの布教師の巡回があった。もともと小野集落では城端、井波、伏木の寺院からの巡回があったが、現在は城端からだけとなっている。城端別院から布教に来た僧侶を門徒の家で迎え、そこに他の門徒も集まって法

[14] 現地で実際に使われている「祠」漢字の偏は「示」ではなく「ネ」である。

座を行っていた。5，6 年前まで法座の宿は門徒の家であったが、それ以降は西照寺で行われるようになっている。

70 代の女性に話を聞くと、巡回の宿になることはその家にとって自慢であったという。近年になってから宿になる家はくじ引きで決めていたというが、昔は宿になる家はほぼ決まった大きな家ばかりであった。布教師という客人を招き入れることから、宿になる家にはある程度の地位が要求されたのかもしれない。またその女性はたいそう人を家に招くのが好きであるらしい。巡回で家に布教師や村人が集まるのが楽しかったという。「ただ最近の若い人はそういう集まりを面倒くさがるから悲しい」とも語っていた。

現在、巡回の宿は西照寺に移されている。ただ宿になっているといっても西照寺の人が取り仕切るのではなく、主に門徒の人たちによって法座が運営される。小野さんなどはどちらかというと法座を聞く側の、ギャラリーのような心もちでいるという。また昔は巡回でやってきた僧侶は宿に泊まっていったが、近年は日帰りである。

3.　現在のお寺と門徒

3-1.　仏教婦人会

写真 1.　仏教婦人会の様子（平成 26 年 7 月 14 日筆者撮影）

仏教婦人会は毎月第 2 月曜日の 19 時半から西照寺で行われる座談会である。別名「正信偈（しょうしんげ）教室」ともいう。基本的に参加者は小野集落に住む女性である。西照寺 28 代住

職の小野薫雄により、35 年ほど前から「正信偈」を学ぶ場として続けられている。「正信偈」とは真宗の要義大綱を七言 60 行 120 句にまとめたものである。この「正信偈」は法要の際にはほぼ必ず読まれるお経の一つであり、多くの場合、僧侶だけでなく門徒も声を出して読誦する。

私が参加した平成 26 年 7 月 14 日には 7 人の婦人と西照寺の小野さん一家が参加していた。婦人方は皆 50 代以上の方々であった。最初は皆で正信偈のお経を 2，30 分唱え、それからお茶などを飲んで一息つき、住職が正信偈の中の一句を解説し、その後は各々が質問、意見交換をおこない、最後は本尊を向いて恩徳讃（讃歌）で締めくくられた。10 月 20 日には、住職によるギター演奏を伴奏にして、「しんらんさま」という歌を皆で歌っていた。

この仏教婦人会は、仏教の語らいをする場であるのは勿論であるが、それ以外にも女性たちの世間話、情報交換の場としての機能も大きい。参加者は大体同じような年代の者同士でおしゃべりしている。中でも年長である 70 代の女性が多くしゃべり、それを 5，60 代の女性が聞く場面が多かった。正信偈の解説の後の参加者の話題に耳を傾けていると、「誰々が病院へ行った」「誰々が病気になって」などといった健康に関する話題が多かった。特に 10 月に参加した際は、小野光人さんのお母様である小野美知子さんが少し体調を崩していた頃だったため、その傾向がより強かった。美知子さんの周りの婦人方はみなその体調を気遣い、言葉をかけていた。ここから西照寺の家族への、門徒の人々からの信頼、親しみが感じられた。また現在、西照寺には幼い子供が 2 人おり、婦人方はこのかわいい子供達に頬を緩ませ、その言動を暖かく、楽しげに見守っていた。

参加者それぞれに参加したきっかけを尋ねたところ、知人の紹介でという方や、漠然とした感じで友達と一緒にという人方、長男を亡くしてお経を習いたいと思ったという方、様々な方がいた。また、お姑の跡を引き継いで、という方が数名いた。お姑が夜出歩くのが難しくなって、嫁である自身が代わりに参加するようになったという。中にはお姑の経本をそのまま受け継いだ人もおり、その経本には何度もページを繰った跡がついていた。

一番の古参である女性は 27 年前から仏教婦人会に参加しており、この会を開いた小野薫雄さんの代から現在まで、3 代の住職を見てきている。その女性曰く、「今の住職が一番熱心で、お経の声も一番いい」とのことだった。

仏教に関わることについてどのような意識で取り組んでいるか、漠然とした質問だが一同に投げかけてみた。婦人方は少し怪訝な顔をして、「別にそんなに普段から熱心に仏教のこと考えてるわけじゃないよ」と答えた。日常の中ではいちいち意識して仏教のことを考えることはあまりない。それはあまりにも深く仏教というものが生活の中に溶け込んでいるためかもしれない。しかしこういった会が時々催されることで、あらためて親鸞聖人の教えと自分の生き方を考えることができるという。また中には毎朝仏壇前でお経をあげているという方もいた。しかしそうやって毎日仏壇の前で手を合わせてい

るときも、頭の中ではご飯のことを考えているなどという方もいた。また「仏教と触れ合うと、なんか懐かしい気分になる」と答える人もいれば、「あっちに逝くのが近いから」と冗談交じりに話す人もいた。

昔の仏教婦人会について尋ねると、美知子さんがいうには、始まったばかりの頃は15人ほどが参加するのが普通であったという。今は多くても10人である。10年ほど前、参加者の健康状態の悪化や、家族が町に出ていくなどの家庭の事情が多く重なった時期があり、仏教婦人会をやめにしてしまおうかという話が出たらしい。しかしその時、現在も参加しているある70代の女性が「続けたい」と強く要望した結果、現在まで続けられているのである。年配の参加者が多くを占める集まりは、同じ時期にバタバタとよくないことが立て続けに重なり、参加者の数が一気に減ることがたまに起こるという。

3-2. 報恩講

報恩講とは浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の忌日の前後に行われる法要である。親鸞聖人の命日の日付は宗派によって異なるが、西照寺の入る真宗大谷派では11月28日とされている。報恩講は一年を通した仏教行事の中でも特に重要なものとされている。参詣者は報恩講を通して、親鸞聖人の教えと自分の在り方を改めて見つめ直す。また大勢の門徒同士が集い、互いに交流する貴重な場でもある。

報恩講には本山の寺院（東本願寺）にて11月21日から28日にかけて行われる「御正忌報恩講」、それより前倒しで各一般寺院にて行われる「お取り越し報恩講」、数か月かけて各門徒の家で行われる「門徒報恩講」がある。小野や五位ではお取り越し報恩講と門徒報恩講を区別することなく、どちらも「ほんこさま」と呼んでいる。西照寺では毎年11月9日、10日にお取り越し報恩講が行われる。この日程は休日平日問わず毎年固定されている。私が参加させていただいた平成26年のお取り越し報恩講は日曜日と月曜日に行われた。

両日とも午前9時から「お勤め（お参りすること）」が始まった。時間通りに出席している人は少なく、1時間ほどかけて少しずつ本堂が埋まっていった。2日間とも、1日に約5，60人が参詣した。知り合いが入ってくると、先に座っている人が「こっち、こっち！久しぶりやねぇ！」などと声をかけ、隣に座らせていた。そのおかげでしばらく場内はざわざわしていた。不思議と本堂は本尊に向かって左側に女性、右側に男性が固まって座った。特にそういった決まりがあるわけではないが、友達や知り合い同士で座るとそうなったらしい。また男性の中には僧侶への接待などの役割がある人もいたため、出入り口に近い右側に固まったのかもしれない。真ん中の前方の席に誰も座ろうとしないのは、大学の講義室を髣髴とさせる。しかしこれは前方の席は座布団、後方の席は椅子であったことも関係しているようであった。座布団より椅子の方が疲れにくく、脚への負担も少ないため、「あんた椅子に座られ！」「いや、あんた座られ！」と譲り合っているのを何度か聞いた。

一通りお勤めが終わると、毎回一同は手を合わせ、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と唱える。皆前かがみになりながら、目を閉じ、一心に唱えていた。そして休憩時間になると周囲の人とおしゃべりが始まる。家族の近況の話や健康についての話などが多いようであった（写真 2)。

写真 2.　お取り越し報恩講当日の本堂の様子（平成 26 年 11 月 9 日筆者撮影）

お勤めの他に、石川県津幡(つばた)町の寺院から講師として招かれた渓内弘恵(たにうちこうえい)師の法話が何回かに分けられて行われた。社会情勢や日常生活における話題と浄土真宗の教えを結び付けた法話で、少し毒舌で皮肉の利いた話っぷりが参詣者の笑いを誘っていた。高齢の参詣者に向かって、「みなさん、もう少しですよ！ご用心、ご用心！」と、死ぬことさえも明るく、分かりやすく語っていた。挙手を求められるような場面では、皆恥ずかしがってかあまり手を挙げる人はいなかったが、笑い声は多かった。特に女性がよく笑っている印象であった。

お取り越し報恩講は毎年 2 日間行われるが、1 日目のお斎(とき)(精進料理)は町からお参りに来た参詣者が食べ、小野や五位といった近隣の参詣者はいったん家へ帰って昼食を食べてくる。小野や五位の参詣者は 2 日目にお斎を食べることになっている。小野集落の門徒の中には 1 日目、2 日目の両方に参詣する人もあるが、町の門徒にはお斎が出る 1 日目だけ参詣する人が多いようである。献立は 2 日間とも同じである（写真 3)。

写真 3.　昼食に振る舞われるお斎

写真 4.　食事の様子

お斎は門徒の中でお斎係となった地元の人が前日に調理する。お斎係に割り当てられるのはほとんどが 70 代の女性である。お斎の内容は白米、味噌汁、煮物や漬物には大根、人参、豆、筍、こんにゃく、椎茸、ゼンマイ、クサギなどが振る舞われた。特にクサギはそのままではかなり苦いため、長い期間の下準備がなされる。クサギは門徒の中でも山菜に詳しい、小野集落に住む中西さん、道徳さんの 2 軒の家の方が集めている。中西さんによると、クサギは五月に採集した後、水で茹で、煮た後に、カラカラになるまで乾かして報恩講の時まで保存するらしい。報恩講が近づくと、再び茹で、2 日ほど水に浸す。それから絞って水気を取り、細かく刻んで豆と混ぜる。このような手順を経て、クサギ特有の苦みが取れ、美味しくなるのである。

2 日間とも、配膳係にはお斎の調理係よりも若い 5，60 代の女性が割り当てられていた。役割分担は、主に年長の女性がお斎の調理係、それよりも若い女性が当日の配膳係、男性はお坊さんの接待係や掃除、鐘、受付係というふうに分けられているようであった。この役割分担は西照寺によって割り当てられたもので、たいてい毎年同じ人が同じ役割を担う。個人の適材適所を考慮した結果であるという。

配膳係の女性の中には小野集落以外に、隣の五位集落や高岡から来たという方もいた。話を聞いていると、10 年前に両親と同居するために五位集落に移り住み、3 年ほど前からお寺のお手伝いに参加するようになったという 60 代の女性もいた。よくお寺のお手伝いをしていた父が体を壊したため、その跡を継いで夫と共にお手伝いに来るようになったのだという。また小野集落にお嫁に来た別の 50 代の女性も、母がお手伝いに行けなくなったのでその跡を継いだと語ってくれた。2 日目の月曜日に配膳役で来ていた女性たちの中には仕事を休んで来ているという人もいた。

お手伝いに来るようになる以前に、報恩講にお参りに来たことはあるかという質問には「ない」と答える人が多かった。なぜかと聞くと、自身が忙しいのもあり、また「なんとなくお参りはお年寄りがするものというイメージがある」と語った人もいた。現に、当日本堂でお参りしているのは 60 代以上の方ばかりであった。20 代から 40 代の参詣

者は、私と友人以外にいないように思われた。子供は西照寺の子供以外見受けられなかった。時折休憩時間に、「あんたら若いがにえらいねえ。感心やちゃ」と話しかけられることもあった。よその若い人間がお参りに来るのは珍しいらしく、後ろの方で、「あの人らち何処の人け？」「ほら富山大学の・・・」「あ～・・・」といった言葉がよく聞かれた。

小野集落に住む 80 代の女性に話を聞くと、その方はお嫁に来てからずっと毎年お参りをしていると語った。お手伝いをするようになったのは仕事を辞めてからだという。昔から報恩講には若い人は来ないものだったのかという質問には、自身が若いころには 3，40 代の人でもお参りに来ていたと語った。

ある 80 代の男性は、「昔は若い人でもここしかなかったから。あと会社勤めの人もほとんどいなくて農家が多かった。生涯この寺が自分たちの寺なんだから、仕事を休んでくるのが当たり前だった」と語った。

また昔の報恩講には子供もたくさん来ていたという。お取り越し報恩講の日になると子供たちは学校[15]から西照寺まで走ってやってきた。彼らのお目当ては西照寺の前に並んでいる、「んまいもん売り」とよばれる屋台であった。屋台の話は 60 代～80 代の男性 4 人に別々に聞いたが、皆がそろって「あれが美味しかった！」と述べたのが、「えびす」または「べっこう」と呼ばれる、醤油、生姜で味付けした寒天であった。また、屋台では食べ物のほかにピストルや飛行機のおもちゃも売っており、子供たちはそれで戦争ごっこをしたり、鳴り物を鳴らして駆け回ったりした。お寺のお取り越し報恩講は寺ごとに日時が異なるため、「んまいもん売り」たちは報恩講の時期になるとたくさんのお寺を順に回ったのだという。

この屋台で買い物をするために、子供たちは親や祖父母からお小遣いをもらう。お金を使い切ってしまったら、本堂でお参りしている大人たちに催促しに行くのだという。また本堂で鳴り物を鳴らしたり遊びまわったりする子供もいた。そんな時は「雷おやじ」のような決まった人が毎度雷を落としたという。

そんな子供でにぎわっていた報恩講も、子供の減少に伴って屋台の数が減り、平成に入る頃には子供も屋台も来なくなった。

若者が来なくなったお取り越し報恩講であるが、活気がないというわけでは決してない。先述したように、しばらく会っていない者同士が集う場であり、それぞれ近況報告をしあい、交流を深めている。またお斎と共にビール、日本酒をたしなんでいる人もいた。女性でお酒を飲んでいる人は見られなかったが、男性の中にはお酒を注ぎ合い、大きな声で語り合っている姿が多く見受けられた。2 日目のお勤めは午前中で終了し、お斎を食べた後、後片付けの担当以外の人は解散していった。今回のお取り越し報恩講では約 50 名の門徒がそれぞれの役割を果たしていた。

お取り越し報恩講では各地の門徒一同がお寺に集うが、門徒報恩講では、反対に各門

[15] 現在の五位集落にある淵ヶ谷小学校のこと。2003 年に休校となっている。

徒の家を僧侶が一軒一軒回る。西照寺では 10 月から 12 月に町やその他の地域、1 月には五位集落、2 月には小野集落を回る。西照寺の小野さんいわく、昔は町の門徒の家へ行くときは、その家を宿として泊りがけで報恩講回りをしていた。しかし現在は自家用車があるため、日帰りで町と小野集落を行き来しているという。また現在、町の家でご飯が出されることはほとんどない。それでも五位、小野集落では、いくつかの決まった家で精進料理が振る舞われる。

かつて、この門徒報恩講は親族一同が家に集まり、語り合う貴重な機会であった。その日は山菜料理や黒豆、大根の酢のもの、人参とごぼうのおかずなどが振る舞われたという。お坊さんを家にお迎えして、みなで夕食を食べてから、仏壇の前でお経をあげてもらった。そのあとは親戚の男性たちが囲炉裏を囲んでお酒を飲みながら政治や経済の話で盛り上がる。女性は座る暇もなく動いた。女性にとっては忙しく大変なものであったのではという問いに、その話をしてくれた五位集落の 90 代の女性は、「それでも、ああいう集まりはいいものだった」と語った。今ではもう親戚一同が門徒報恩講のために集まることはない。確かに大勢が集まるのは大変ではあったが、ああいった集まりは貴重であったという。小野、五位集落の他の家でも、今では門徒報恩講のために親族一同が会することはなく、家にいる者だけで終えるという。しかしそれでも招いたお坊さんのために手作りの精進料理を振る舞うことは続けられている。

報恩講に限った話ではなく、かつて仏教行事は親戚同士が集まる機会としての機能を果たしていた。親族で集まり仏壇に手を合わせ、また時には親族以外の人を家に招き入れ、仏事を行った。しかし現代では平日は会社勤めの人が増え、家族は違う土地に散らばって暮らすようになり、また「おもてなし」自体に意味が見出されなくなっている。2-2 節で述べたように、人を家に招き入れることが好き、家に大勢で集まるのが好き、という価値観が世代が下るにつれ薄まってきているのかもしれない。

3-3. 親鸞聖人 750 回御遠忌（ごえんき）

平成 26 年 5 月 31 日（土）、6 月 1 日（日）、「親鸞聖人 750 回御遠忌」と「西照寺再建 100 年慶讃」の二つを記念して法要が行われた。親鸞聖人御遠忌は 50 年に一度行われる大きな法要である。1 日目には門徒によるオリジナル曲の合唱、ミュージシャンを招いての記念コンサートが行われた。2 日目には門徒による勤行法要、講師による講演、稚児行列、僧侶による勤行法要、獅子舞が行われた。私は 2 日目に参加した。

当日、西照寺の本堂は人であふれかえった。門徒一同で勤行を行った後、兵庫から来たという小児科医の先生の講演を聞いた。お昼には皆にお弁当が配られた。こういうものは受付でお布施を払った門徒の方だけがもらえるのだろうと思っていたが、近くのおばあさんに、いいよいいよと言われ、私ももらってしまった。

午後は稚児行列から始まった。遠くから祭囃子が聞こえてきた。お堂の中の人々はざわつきながら稚児の行列を待った。お囃子が近づいてくると、まず雅楽の一団が見えた。

お囃子を奏でながらゆっくりと寺の周りを回る。そのあとを稚児の子供たちが行列を作り、最後尾には僧侶の一団も続いた。寺の周りを一周した後、一団は境内へと入ってきた。稚児の親も付き添っていたので、相当の人数が境内にひしめき合った。稚児は約90人参加したという。私は本堂の縁側でこの光景を見ていたが、本堂の中からは「〇〇ちゃんや、いやーおおきいなってぇ」などといったお年寄りたちの声が多数聞こえた。この稚児行列には門徒の親族だけでなく、近場であったり、門徒の知り合いであったりという縁で参加している子供もいたという。

写真 5.　稚児行列が境内に入ってきた様子（平成 26 年 6 月 1 日筆者撮影）

稚児と雅楽、僧侶の一団は本堂に入り、そのまま雅楽の楽団が演奏を続け、さらにそこに僧侶による勤行が加わった。雅楽と僧侶のお経の合唱は珍しいように思われた。しかし後に話を聞くと、この雅楽と僧侶のコラボレーションはほかの宗派でも行われるらしい。このとき雅楽を演奏していたのは小矢部市の雅楽団体であった。なお福岡町の雅楽に関しては本多の報告書に詳しい記述がある。

その後、その調子で 1 時間半ほどずっと雅楽と僧侶による勤行が続いた。お年寄りたちは疲れはじめたのか、午前中の集中力はなく、後ろの方ではおしゃべりをしていたり、居眠りをしたりしている人が見られた。勤行が終わった後、再び兵庫からの講師による講演となったが、その時点でちらほらと帰り始める人がでてきた。お堂にはおしゃべりの声があちらこちらから聞こえ、講演をする側も少し気に障ったらしく、「ちゃんと聞

いて。すぐ終わるから」と呼び掛けていた。その後、関係者の挨拶が行われた。この行事は西照寺が単独で行っているのではなく、東本願寺高岡教務所、門徒から構成される西照寺記念法要実行委員会という組織が中心となって運営されていた。

講演が終わった後、獅子舞まで少し準備時間があった。外を見ていると、招待されてきた僧侶の中には獅子舞を見ずに帰宅する人も見られた。それぞれお土産をぶら下げて帰っていく。西照寺から出ていくとき、本堂に向かって一礼する僧侶、一礼しない僧侶の 2 パターンが見られた。

最後に 1 時間ほど長い獅子舞が行われた。当日は快晴で気温も高かったので、獅子舞の舞い手はかなり疲労していた。そんな獅子舞を取り囲んで、人々はカメラを構えたり、隣の人と談笑しながら見たり、真剣に舞いに見入ったりしていた。獅子舞を見守る人たちからはある種の連帯感のようなものを感じた。みな獅子舞の舞いを楽しみながら見ている様子であった。

住職である小野さんはこの法要の際の獅子舞では裏方に徹しているようであったが、9 月に行われる獅子舞ではカヤと呼ばれる獅子舞の胴体部分に入って参加していた。仏教関係者である自身が、仏教よりも神道に近いものである獅子舞に参加することについて尋ねてみると、自分は獅子舞が好きだから参加しているとのことであった。ただやはり何となく獅子のカシラをやるのはさすがに抵抗があるため、自分はカヤで十分だとも語っていた。なお、小野集落の獅子舞については、三島の報告書に詳しい記述がある。

また、この親鸞聖人御遠忌の年には門徒と寺の僧侶が連れ立って本山の寺院へ参拝するのが通例となっている。今年はバスで東本願寺まで参拝に行った。ある 79 歳の女性に話を聞くと、その女性は 50 年前の御遠忌と今年の御遠忌の両方を経験したという。50 年前には汽車で京都まで行き、その汽車の中で法話が行なわれていたらしい。「それだけ熱心な人が多かったんやね」と女性は語った。自身が 50 年に一度の機会に二度参加することが出来たことに関して、誇らしく思っているとのことであった。またその女性の夫は既に亡くなっており、その男性は 50 年前の御遠忌も、今回の御遠忌にも参加することが出来なかった。その事に関して女性は「こういうのは、縁がない人は本当に縁がないんやねぇ」と語った。

後日小野さんに今回の法要に関して伺ったところ、「門徒さんが主体である」ことを重視したとのことだった。従来のやり方と変わったのは、法要に参加する大勢の僧侶の席を門徒の人たちと同じ外陣（げじん）に設定したことであるという。

一般的に、お寺の本堂は内陣、外陣のふたつに分けられる（図 1）。内陣とは本尊が安置してある空間、外陣は参拝席のことを指す。昨今ではあまり見られなくなったが、かつては内陣と外陣との間には柵（やらい）で区切られた柵内という空間がよく見られた。現在でも本山などの大きな寺院では見られる柵だが、一般の寺ではすでに取り払われていることが多く、西照寺でもすでに先々代の時代に取り払われ、床下にしまわれている。

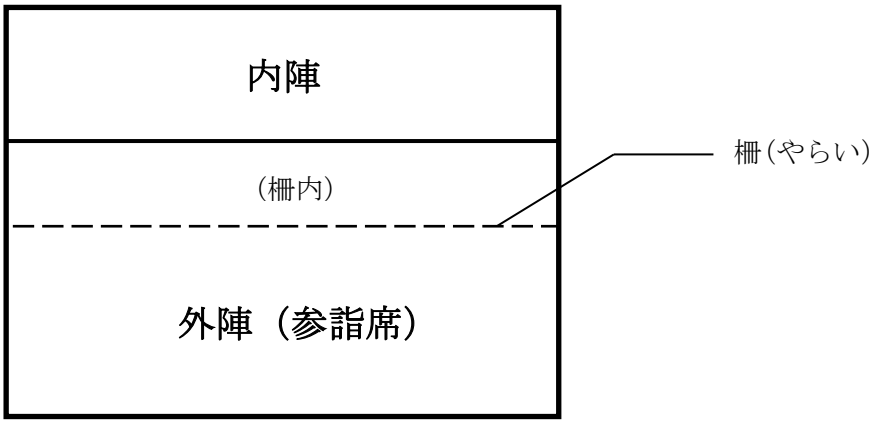

図 1.　本堂の簡略図

また本来、大きな法要の際は京都の本山から格の高い僧侶を招待するのが一般的であるという。この時、履物の交換や座席など、招待した僧侶に対する接待の仕方が事細かに決められているというのである。

今回の法要では、参加した僧侶全員が内陣の外である外陣の先頭、かつての柵内に当たる部分に座った。特に座席は指定されず、全員外陣へ、という指示に、戸惑う僧侶もいたという。さらに東本願寺の富山県西部支部である高岡教務所の所長を招待したが、その方の席も決めなかった。このことにも「それは決めといたほうがいいのではないか」とする声も聞かれたという。また京都の本山から誰かを招待することもなかった。

今回何故、このように従来のやり方を変えることにしたのかという質問に、小野さんと美知子さんは「法要はもともと門徒さんのためのものなのに、今までのやり方だと、どうしてもお坊さんたちへの配慮とかそういったことばかりに気がとられてしまう。お坊さんのための法要ではなく、門徒さん主体の法要がしたいので、このようにした」と述べられた。

また、今回の法要は親鸞聖人 750 回御遠忌でもある。ゆえに親鸞聖人の教えでもある「道俗時衆共同心（僧もそうでない人も一緒に）」という教えに原点回帰したかったと小野さんは述べた。もともと段差のない平座の道場であったのが、年月が経つうちに内陣の段ができ、柵ができ、格調高くなっていってしまった。そういう方向性は親鸞聖人の本来の願いとは違うのではないか、ということである。

ただ、他の考え方、意見があるのも無視してはいけないとも述べる。これまでのやり方を変えていくことに対して、「変える必要のある伝統というものもたしかにある。しかし全部が全部そうというわけではない。厳かであるべきものは厳かに。残していきたいものもある。ただ自分は門徒さんが主体であるということに重きを置きたいから、変える必要のあるところを変えた。バランスが大切」とのことであった。この考え方は西照寺の考え方であって、あくまで「うちはうち」ということであるらしい。またいますぐ変えるのではなく、様子を見ながらということであった。目指すお寺としては「垣根

をどうなくすか。誰でも気軽にこられるお寺がいい。お坊さんばっかりではなくてね」と述べられた。

4. まとめと考察

本章では西照寺と地域の人々とのつながりを、行事の変化と現在の様子から見てきた。集落の名前の伝説や東西分派におけるエピソードなどから、西照寺は長い歴史を小野集落の人々と共に歩み、深くその地に根付いてきたことが分かる。そしてその長い歴史のなかでも、変化が起きてきた。特に戦後以降、その変化の波はひときわ大きくなった。尼お講、地蔵祭りといった行事が途絶え、墓祠堂、巡回では宿が民家から西照寺へ移り変わった。これらについては小野集落を取り巻く社会の状況の変化、そして人々の価値観と生活スタイルの変化が要因としてあげられる。そして親鸞聖人 750 回御遠忌でみられたように、西照寺もまた、変化しているのである。

仏教、寺院に携わることは、個人的な行為である場合と、集団的な行為である場合とがある。一人で仏壇に手を合わせることもあれば、近隣住民、親族で集う機会として行われることもある。尼お講では、近隣の門徒が自主的に家に集い、仏教の教えについて語り合った。門徒報恩講は信仰の場であると同時に、親族同士が集まり、互いの近況を知る機会でもあった。しかし時代の変化とともに、それらの集いはなくなっていった。こういった変化について聞き取りをした際、多くの方が「そういう時代だからね」という言葉を口にした。しかし「そういう時代」とはどのような時代だろうか。

過去から現代への生活スタイルの変化という観点から言えば、核家族化、親戚付き合いの希薄化、また特に小野集落では、山中と町が整備した道でつながり、行き来が楽になったこと、人の出入りが多くなったこと、生業が近隣での農業から町中での会社勤めに移り変わってきたこと、子供が減り年配の方が多くなったことなどが考えられるだろう。

「最近は親戚付き合いとか、人をお家に集めるのを面倒くさがる人多いからねぇ」と語ってくれた 70 代の女性が言うように、かつてあった濃密な地縁関係、親戚同士の人間関係が重要視されなくなってきた。結果、その集まりにも参加する人が減ってきた。人が集まり、その集まりを家でもてなすという「おもてなし」への価値観が揺らいできていることが、墓祠堂、巡回の宿の移転につながったのかもしれない。ある 80 代の男性は、「昔はみんな自分の村がすべてだった」と語った。集会に参加し、周囲の人々と交流することが生活の一部であったのだろう。2-1 節で述べたように、「集まりに顔を出さなければ村八分のようにもなった」という話も聞いた。ある意味、仏教行事やその他の集まりには、その行事自体が持つ意味以外にも、「そのコミュニティに属する人間なら当然参加すべきである」という付き合いによる部分が暗黙にあったのかもしれない。

また仏教婦人会で「先代のお寺の奥さんは厳しい人だった。寺で集会の宿を許す人で

はなかった」と言う意見がきかれた。集会の宿の変化に関しては、西照寺側の意識の変化も理由の一つであると考えられる。寺のことは寺、門徒のことは門徒で行うという意識から、その境界を取っ払って共に協力し合う意識へ、寺側も門徒側も変化してきているのかもしれない。宿が個人宅から寺院に移ったことは、個人の「おもてなし」の価値観の変化だけでなく、寺と門徒の距離感が縮まったという見方もできるのではないだろうか。そして意外なことに、小野美知子さんが述べられるには、「最近寺離れっていうでしょ？でもこの寺はそうじゃないのよ。この人(光人さん)が頑張っているからかね、法要で手伝ってくれる人は全然減ってないのよ」とのことだった。これにはお寺のお手伝いをすることが、それぞれの家で次の代へと継承されていっていることが理由の一つとしてあげられるだろう。仏教婦人会の参加者や報恩講のお手伝いの方々に見られるように、お寺に関わることを親の世代から受け継いでいるのである。

そしてお寺のお手伝いが増えているもう一つの理由として、西照寺の御一家が門徒の方々から信頼と親しみを多く向けられていることが挙げられるように私は考える。聞き取りの際、「あの家の人らは皆いい人やよ」と述べる声がよく聞かれた。各家へのお参りに同行させていただいた際には、小野さんと家の方との楽しそうなおしゃべりや、家の畑で採れた野菜をどっさりと頂く光景を見た。私自身も野菜のおすそ分けを頂いた。法要の際にも、小野一家と門徒の方々の間で盛んに会話が交わされていた。

法要に参加した際、前かがみになりながら手を合わせ一心に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱える方々の姿が印象に残っている。信仰の場としての寺院の在り様を感じさせた。人々の信仰心と、本章で述べてきた寺院のもつ社会的な側面、この２つは今刻々と変化している。家族は遠方に散らばり、生活圏は広がり、現実以外の仮想空間で膨大な数の人間関係が構築され、個人はより個別化されていっているように私は考える。

そういったおびただしく慌ただしい変化の中で、小野集落の西照寺と人々の暮らしは穏やかに見える。しかしそれでも変化は起こっている。仏教を介したかつての濃密な人間関係の希薄化、参加者の高齢化、お寺と門徒の方々の境界を越えた関係など、徐々にではあるが、変化しているように思う。形を変え、途絶えてきたものがある一方で、また新たな考え方、在り方が寺と門徒の間に芽生えつつある。

調査の際に小野集落で見かけた、道端で歓談する人々、畑を耕す人々から感じた確かな生活感と、人々の繋がり、穏やかな日々の営みが、今後も末永く継続されていくことを願う。

謝辞

西照寺の皆様を始めとするご門徒の方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。度重なる訪問や拙い質問など、皆様には多くのご迷惑をおかけしたとは思いますが、優しく根気強く調査にご協力して頂いたことが、私にとって大きな励みとなりました。

法要や仏教婦人会、月忌参りで皆様が暖かく話しかけてくださったのも、大変うれしく思い出されます。本当にありがとうございました。

参考文献

岩崎照栄、2002 年、『福岡町の中世・近世の文化』
西照寺記念法要実行委員会、2014 年、『宗祖親鸞聖人 750 回御遠忌 西照寺再建 100 年慶讃 西照寺開山 770 年慶讃記念法要冊子』
山本善次、1988 年、『乎乃郷の今昔』、個人出版

小野集落における結婚式および結婚観の変化

鳥田　萌子

はじめに

私はもともと、結婚式やお葬式などの冠婚葬祭や年中行事について興味があった。私はお葬式に参列した経験は何度かあるが、結婚式は、物心がつく前の小さい頃に一度経験したのみで、式がどのようなものだったのかの記憶もほとんどない。そのため、私は結婚式について、映画やドラマの中で行われているシーンなどでの知識しか持っていなかった。今回、福岡町西部の小野集落を訪れた際に、昔の結婚式や年中行事などについてのお話を伺ってみたところ、私が知っている結婚式とはまったく違う式の挙げ方をしていたことを知り、関心が深まったので、このテーマで調査を行うことに決めた。本章では、結婚式の変化とともに見えてきた結婚観の変化を考察していく。

1.　かつての結婚式

70～80 代の方からお話を伺ったところ、小野集落では昔、以下のようにして結婚が行われていたとのことであった。

1-1.　結婚が決まるまで

50～60 年程前は、結婚は基本的に親同士が決めていた。年頃の娘がいる家の目星を何軒かつけておき、その家に仲人が夜に通い、娘を嫁にくれるよう、相手の両親を説得した。この仲人役は婿の親戚が行っていた。

嫁、婿には、結婚が決まった後に、「この日に式をやるので家におれよ」と急に言われるため、結婚式の当日までお互いの顔も分からない。婿の方は結婚することに特に抵抗はなかったが、嫁の方は嫌々嫁に行く者が多かったようだ。しかし、嫁入りが決まると、娘は拒否することは許されず、行きたくなくても親に従わなければならなかった。そのため、結婚が決まったときに、別に好きな人がいても、その思いを叶えることはできなかった。昔はそういうものだとみんな諦めていたという。

結婚した後も、嫌で嫌で逃げ出したいと思っている嫁が多かったが、逃げてしまうと実家の親に叱られるため、離婚することはなかったという。ある 70 代の女性は、「家の人や、集落の人が優しくしてくれたり、子どもが生まれたりして、逃げずにがんばろうと思うようになった」と話してくれた。しかし、姑などがとても厳しかったという方もおられたので、やはり、嫁いでしまうともう戻れないと諦めていた人が大半だったので

はないかと思われる。

また、ヤリガイトリガイと言って、家同士で嫁のやりとりをすることもあった。自分の家から嫁を出したら、今度は相手の家からその姉妹が嫁に来る。これは集落内でのやりとりが多かったようである。このヤリガイトリガイについては、行われていた当時を知っている方のお話を聞くことができなかったので、どのように行われていたのかなど詳しいことは分からないが、50 年くらい前まではあったそうだ。集落の人口が減ったことや、人の出入りが活発になったことなどから、外から嫁が来るようになり、いつの間にかなくなったと考えられる。

かつては、嫁は同じ集落内、もしくはもう少し山奥の方に入った棚原や栃丘、沢川(そうごう)といった集落からやってくることが多かったようだ。

1-2. 結婚式に向けての準備

結婚のときには、着物などを入れた箪笥(たんす)を嫁入り道具として持っていくため、その準備をした。ただし、戦後すぐの頃はまだ箪笥は売っていないし、家具屋に頼んでもできなかったため、「やなごおり」という籠のようなものに着物などを入れて持って行ったそうである。また、結婚式で使う花嫁暖簾(のれん)も、嫁ぎ先の家の家紋が入ったものを事前に用意する。この暖簾も、他に使うときはないので、貸し借りをしていたそうだ。

1-3. 結婚式

小野集落ではかつて、次のような手順で結婚式が行われていた。

① 夜、嫁が両親に連れられて嫁ぎ先の家へ行く。
② 嫁ぎ先の玄関先で、実家から持って来た水と、嫁ぎ先の水を仲人が一つの盃の中に合わせ、それを嫁が飲む。
③ 飲み終わった盃は仲人が石に叩きつけて割る。
④ 嫁が花嫁暖簾をくぐり、部屋に入る。
⑤ 嫁がその家の仏壇に参る。
⑥ 嫁とその母親は自分の部屋にこもる。
⑦ 親戚のみで朝まで宴会が行われる。婿は別の部屋にいる。
⑧ 朝になると、嫁の両親は、婿の両親からわらじ酒をもらって帰る。

以下、それぞれについて、詳しく説明していく。

① 夜、嫁が両親に連れられて嫁ぎ先の家へ行く。

嫁は、夜になると、実家から両親とともに嫁ぎ先の家に歩いて向かった。なぜ夜だったのかははっきりとは分からないが、ある 80 代の男性は、「嫁が実家に帰れんくするた

めに、暗くなって道が分からんくなってから行くんじゃないか」と話してくれた。

基本的には髪は島田髷（図 1）に結い、留袖を着たそうだが、戦後すぐに結婚した方などは、「ものがなんにもない時代やから、着物なんか気にしなかった」という方や、着物は姉妹や親戚から借りたという方もおられた。後に、白い着物に角隠しという衣装に変化するが、この白い着物には、「この家の色に染まります＝この家の者になります」という意味があるとのことであった。

小野集落では、結婚式が行われると、青年団の人たち（主に未婚者）がいたずらをした。歩く道に障害物を置いたり、婿の家の中まで入ってきて、戸を叩いたり障子を破いたりした。しかしお酒を渡すとおとなしく帰っていき、他の家で宴会をしていた。このことについて、「みんなは祝ってやっとるんやと言っとるけど、酒が飲みたいだけ。こっちにとっては迷惑やった」「（酒を）渡さんと自分らだけで飲んどると仕返しがひどかった」という語りを 80 代の男性から聞くことができた。

図 1.　島田髷

②　嫁ぎ先の玄関先で、実家から持ってきた水と、嫁ぎ先の水を仲人が一つの盃の中に合わせ、それを嫁が飲む。

③　飲み終わった盃は仲人が石に叩きつけて割る。

嫁が嫁ぎ先の家に着くと、玄関に入る前に、嫁が実家から持ってきた水を嫁ぎ先の水と合わせて飲み、仲人がその盃を石に叩き付けて割るということが行われる。この儀式がなんと呼ばれているのか聞いてみたところ、多くの方が「なんか言い方があったんやけど、なんて言うんやったかなあ･･･」と首を傾げていたが、なかに「水を合わせるから、合わせ水とか水合わせとかそんな感じやったような･･･」と言われる方がいたので、以降、この儀式のことは「合わせ水」と記述する。

この合わせ水は、自分が生まれ育った家の水と、嫁ぎ先の家の水を合わせて飲むことで、嫁ぎ先の家の者になるという意味が込められているそうだ。盃を割るのは、割れたらもとには戻らないという意味から、嫁が戻らないようにするためである。このとき、盃が割れないと縁起が悪いので、仲人は思い切り叩きつけて割った。また、盃も割れやすいいらないものを使用した。

④　嫁が花嫁暖簾をくぐり、部屋に入る。

嫁は水を飲み、玄関から家に入ると、実家から持ってきた花嫁暖簾を部屋の入口にかけくぐる。この花嫁暖簾には相手の家の家紋が入っており、花嫁暖簾をくぐることで、どんな気持ちであろうと、その家の者になる。前項でも記述したとおり、花嫁暖簾は嫁入り道具として、自分の家から持ってきたものを使用する。この花嫁暖簾は、結婚式のとき以外使われない特別なものだそうで、貸し借りをしあっていた。

⑤　嫁がその家の仏壇に参る。

花嫁暖簾をくぐって部屋に入ってから、その家の仏壇に参る。これは、「今日からこの家の者になります」と挨拶していると考えられる。小野集落の人は、信仰心が強いように感じられるので、そのことも影響しているのではないかと考える。

⑥　嫁とその母親は自分の部屋にこもる。

仏壇に参った後、広間で宴会が行われるが、その間、嫁は宴会に一切参加せず、自分の部屋となる部屋に母親とともにその晩こもる。

⑦　親戚のみで朝まで宴会が行われる。婿は別の部屋にいる。

宴会は親戚のみで行われる。夜通し続く宴会の間は、婿、嫁はそれぞれ別々の部屋に閉じこもっている。婿は宴会だけではなく、結婚式の間も姿を現さず、別の部屋に閉じこもっていたそうだ。60 年程前は、夫婦で一緒にいるのは「こんとんない」「かちこんとんない」（かっこわるい、恥ずかしい）と言われていたため、男のプライドを保つために結婚式のときは知らんふりをしていたのかもしれない。

⑧　朝になると、嫁の両親は、わらじ酒をもらって帰る。

夜が明けて朝になると、嫁の両親はわらじ酒をもらって帰る。「わらじ酒」は、昔からのしきたりのようなもので、宴会などが開かれて、客が帰るときに、玄関を出てから振る舞われる酒のことである。「あなたのために準備したものなので、残さずに飲んで帰ってください」という意味だそうで、残った酒をどんぶり一杯に入れて飲まされる。歩く前の酒なのでわらじ酒という。

小野からさらに山奥に行った沢川という集落では、酒だけでなく、余ったごはんも振る舞われていたという。

以上のようにして結婚式は執り行われていた。結婚式の間は、婿が別の部屋に閉じこもっているという話や、宴会は親戚だけで行い、その間は婿も嫁も別々の部屋にいるという話などから、結婚式は結婚する本人たちのためのものというより、家同士のための

ものであったと考えられる。特に、②の合わせ水の儀式は、両家の水を合わせるということが、家同士の繋がりを象徴したものであるように思われる。

70 代の女性は、「夫が（戦死や病死で）亡くなっても家からは出ていけん。夫の下に弟とかがおったらその人となおる（再婚するという意味か)」と語った。このことからも、女性は結婚することで、嫁ぎ先の家に入るということがわかる。

特に、②～⑤の儀式は、どれも「嫁ぎ先の家の者になる」という意味を持つことから、同じ意味を持つ儀式を玄関先や部屋に入る前など何度も行うことで、「この家の者になる」「もう戻れない」という気持ちを強く確認させていると考えられる。

1-4. チョウハイ

かつては、結婚してしばらくした頃に「チョウハイ帰り」と呼ばれる里帰りが行われていた。

『乎乃郷の今昔』には、次のように記述されている。

> 嫁が生家へ帰ることを「チョウハイ」（朝拝か？）と言い、結婚後初めての里帰りを「初チョウハイ」と言って二、三日で帰宅したのであるが、その他、次の様な日数で誰しも共通の日数が与えられたのである。
>
> 春チョウハイ　　一月五、六日頃から十日間位
> さつき　田植準備　五月上旬　三、四日位
> 田植休塵流し　　六月上旬　三、四日間位
> 盆チョウハイ　　八月盆後　九月上旬　三週間位
> 暮　チョウハイ　　十二月末　生家の報恩講兼ね三、四日位
>
> この様に嫁は、農閑の期間を利用して生家に帰り、莚織りや炭俵編みで現金の収入に勤み、親の生計をできるだけ援助したのであるが、「チョウハイ」帰りの節は、親戚へ配るお餅や、家族へのおみやげなどを持たせたので、親元の苦労は並々ではなく相当な負担に耐え忍んだのである。

上記のような時節に、嫁が一週間から一か月ほど実家に帰る。必ずしも文献に書いてある日数帰っていたというわけではなく、話を聞く限りでは個人差があったようである。嫁が実家に帰るときは、子どもも連れて帰り、着物や作業着などを直したり、散髪をしたりなど、ふだんできないことをする。口減らしの意味もあったらしい。帰ったら、実家の仕事の手伝いもあったようだ。チョウハイから帰るときは、里の親に米や餅などのおみやげを持たされた。

春チョウハイは、正月に帰るチョウハイのことで、嫁ぎ先で新年を迎え、嫁ぎ先での正月の仕事が終わると実家に帰る。冬なので炭焼きの仕事もなく、炭焼きの俵を編む手伝いなどをした。

田植え準備のためのチョウハイでは、田植えのときに穿くもんぺなどを実家で作るなどして、田植えのための準備をした。このときは 3,4 日から一週間ほど実家に帰る。

田植休塵流しは、田植えが終わった時期に帰るチョウハイで、小野の人には「ゴミ洗いチョウハイ」と呼ばれていた。田植えで汚れた体のごみを洗いに行くという意味がある。

盆チョウハイは、「盆ヂョウハイ」とも呼ばれており、お盆に帰るチョウハイのこと。田んぼが忙しくなったら嫁ぎ先に戻る。

しかし、分家の家だと、嫁がチョウハイに行ってしまうと夫が家にひとりで残されてしまうことになるので、姑に「チョウハイに行かないでくれ」と頼まれることもあったらしい。

1-5. 報恩講

新しく来た嫁は、結婚した年の報恩講に参っていた。報恩講とは年に一度行われる法要のことである[16]。このときは、いい着物を着て、髪型も島田髷に結って、実家の母親と嫁ぎ先の姑とともに参詣した。見世物のようなものであったらしく、報恩講に参詣した集落の人は、「あそこの嫁はどうだ」とか「あの家の嫁はこうだ」と評したりしていたようだ。報恩講は、年に一度、集落の人がほとんど参詣する大きな行事であったので、嫁をお披露目するという目的もあったのだろう。そのため、嫁は必ず参詣しなければならなかったようだ。参詣した嫁は、集落の人たちに噂されたため、「居心地が悪かった」「嫌な気分だった」など、あまりいい思いを持っている方はいなかった。

2. 結婚式の近代化、現代化

本節では 60 代から下の世代の方に伺ったお話をもとに、結婚式の執り行い方を中心にその変化を記述する。

2-1. 結婚が決まるまで

2-1-1. お見合い結婚、恋愛結婚

かつては、親同士が結婚を決めたり、ヤリガイトリガイといった形で結婚が決まったりしていたが、時代が下るにつれて、小野集落でもお見合い結婚や恋愛結婚が多くなっていった。現在の 60 代から下の人はほとんどお見合い結婚や恋愛結婚のようだ。

お見合いのきっかけは、お互いを知っている世話好きな方が仲人になったり、共通の知り合いの紹介があったりして決まったそうである。恋愛結婚の場合でも、共通の知り合いの紹介で知り合うこともあったようだ。「知り合いの紹介での出会い」ということがお見合い結婚と恋愛結婚の境界をあいまいにしていったのではないかと考えられる。

---

[16]報恩講については、本報告書の第 5 章に詳しい記述がある。

また、お見合い結婚がされる頃になると、嫁いでからは、集落にある婿の実家に一緒に住むのではなく、結婚した二人が集落を出て福岡町や、他の市などにアパートを借りてそこに住むというように変化していったようだ。

2-1-2.　通婚圏

結婚がどのように決まるのかの変化とともに、通婚圏も変化してきた。かつて、親同士が結婚を決めていた頃は、小野集落内や、小野より山奥にある現在の五位や、沢川といった集落から嫁が来ることが多かった。しかし、お見合い結婚や恋愛結婚に変化することにより、山を下りた福岡町や、高岡市の中心部、富山市、小矢部市などからも嫁が来るようになった。

通婚圏の拡大にともない、結婚に関する意識も変化してきた。かつては、小野よりも山奥から嫁に来ることもあったので、嫁に来る本人は嫌でも、両親は、「あの人の家は金持ちだから暮らしが楽になる」という思いがあったようだ。また、婿側も「小野の方が山奥より町に近いから、喜んで（嫁に）来るだろう」と思っていたそうだ。しかし、時代が下り、福岡町や他の市から嫁に来るようになると、嫁の両親や親戚は「小野のような山の中の集落に嫁ぐなんて苦労するから心配だ」「あまり遠いところに娘を嫁にやりたくない」という思いで反対することもあったという。

2-2.　結婚式の準備

かつての嫁入り道具は、着物を入れた箪笥や、結婚式で使う花嫁暖簾くらいであったが、年代が下るとさまざまなものを用意するようになった。箪笥は着物が入った和箪笥の他に、洋箪笥なども準備し、下駄箱、布団などの寝具、座布団、電化製品などもセットで用意していたようだ。また、結婚式を自宅で行うことがなくなったため、花嫁暖簾を準備することもなくなっていった。

かつてとおおきく違うのはやはり電化製品を嫁入り道具として準備することであろう。電気が普及した現代において、掃除機などの電化製品は新生活に欠かせないものになっていることがうかがえる。

また、新婚旅行に行くようになると、嫁が新婚旅行に行って家にいない間に、親戚などに箪笥の中身をすべて見られていたそうだ。

2-3.　結婚式

2-3-1.　結婚式の変化

1 節 3 項に記述したとおり、かつての結婚式は、以下の手順で行われていた。

① 夜、嫁が両親とともに嫁ぎ先の家へ行く。
② 玄関先で、実家から持って来た水と、嫁ぎ先の水を仲人が合わせ、それを嫁が

飲む。

③ 飲み終わった盃は仲人が石に叩きつけて割る。

④ 嫁が花嫁暖簾をくぐり、部屋に入る。

⑤ 嫁がその家の仏壇に参る。

⑥ 嫁とその母親は自分の部屋にこもる。

⑦ 親戚のみで朝まで宴会が行われる。婿は別の部屋にいる。

⑧ 朝になると、嫁の両親は、婿の両親からわらじ酒をもらって帰る。

年代が下るにつれて、結婚式の仕方も変化してきた。本項では、手順に沿ってその変化を述べていこうと思う。

① 夜、嫁が両親とともに嫁ぎ先の家へ行く。

50 年程前まではかつてと同じように、夜に嫁ぎ先に行き、朝まで宴会をするという形で結婚式が行われていた。しかし、40 年程前になると、朝早くに嫁が実家を出て嫁ぎ先に行き、日中に式を行い、宴会も夕方くらいに終わらせるようになった。なぜ日中に結婚式が行われるようになったかについては後述する。

② 玄関先で、実家から持ってきた水と、嫁ぎ先の水を仲人が合わせ、それを嫁が飲む。

③ 飲み終わった盃は仲人が石に叩きつけて割る。

④ 嫁が花嫁暖簾をくぐり、部屋に入る。

⑤ 嫁がその家の仏壇に参る。

これらはほぼ形を変えずに行われていたという。

花嫁暖簾は、廊下から部屋に入るときに部屋の入口にかけてくぐったそうで、図 2 で波線で示した部分である。この間取りはお話を伺った方に書いてもらった図を参考にしたものであるため、各家で間取りは違うが、花嫁暖簾をくぐる場所は基本的にどの家でも昔から変わっていないと推測される。

図 2. 花嫁暖簾くぐり

30 年程前になると、仏壇に参った後に、「さんさんくど（三三九度）」といって、巫女のような人が盃に三回に分けて注いでくれたお神酒を、一、二回目は飲むまねをして、三回目で飲み干すということを婿→嫁の順で行う儀式が行われた。この「さんさんくど」については、いつ頃から行われ始めたのか正確な聞き取りはできなかった。その後、お互いに指輪の交換もするようになったという。

⑥　嫁とその母親は自分の部屋にこもる。

⑦　親戚のみで朝まで宴会が行われる。婿は別の部屋にいる。

かつて結婚式に婿は参加していなかったが、この点は時代が下っても変わらない。しかし、かつては、結婚式に婿が参加しないことについて明確な理由は特になかったようだが、この時代になると結婚式の間は婿は隠れていなければならない決まりがあったという。

また、かつては嫁も婿も宴会の間は別々の部屋にいたが、宴会には嫁も参加するようになった。この宴会は親戚に嫁を紹介するという目的もあったので、嫁は参加していたようだ。もう少し年代が下ると、婿も宴会に参加するようになった。

⑧　朝になると、嫁の両親は、婿の両親からわらじ酒をもらって帰る。

宴会はだんだんと夕方くらいで切り上げられるようになっていった。また、わらじ酒をもらうことはなくなっていった。「わらじ酒」は昔の風習になってしまった。

また、50 年程前からは、宴会が終わるとそのまま新婚旅行に行ったという。「朝まで（宴会で）飲み食いして、そのまま寝ずに新婚旅行に行った」という方もいた。

先述した、日中に結婚式が行われるようになった理由には、この新婚旅行に行くようになったことにも一因があるのではないかとも考えられる。結婚式の後にすぐに新婚旅行に行くなら、朝まで宴会をしてからでは大変なのではないかと思う。そのため、日中に結婚式を行い、夕方くらいまで宴会をして、新婚旅行に出発するという流れになってきたのではないかと考えられる。

また、今の人たちの感覚では、「結婚式や結納は、午前中のうちにやったほうがいい」という考えがあるようで、そのために結婚式の時間帯も早まったのではないかとも考えられる。しかし 6 年程前に結婚式を行った方は、ナイトウエディングという夕方から行う形で結婚式を行ったそうなので、結婚式をどの時間帯に行うかというのも、現在では自由に選べるように変化してきているようだ。

2-3-2.　現在に受け継がれる儀式

ここまでは、自宅で行われていた結婚式について述べてきたが、20 年ほど前になると、式場で結婚式を行うようになっていった。最近では、神社で行う神前式や、お寺で行う仏前式、チャペルで行うキリスト教式など、さまざまな結婚式のスタイルがあり、結婚する二人がそれらの中からやり方を選ぶのが一般的といえるだろう。

6 年前に小野集落に嫁に来られた方は、結婚式は結婚式場で行い、合わせ水などの儀

式はまったく行わなかったという。結婚式の様式の変化によって、かつて行われていた結婚の儀式も行われなくなっているようだ。

しかし、平成 26 年に結婚された方は、結婚式は結婚式場で行ったが、結婚式とは別に、合わせ水の儀式を行ったそうだ。この方は小野集落の出身の女性で、福岡町の家に嫁がれた。合わせ水の儀式は、5,6 年前に結婚式をした兄夫婦も結婚式の前にしていたので、「そういう流れやしやっとかんなんやろ」という流れで行うことにしたそうだ。簡単に済ませようと思っていたので服装はスーツだった。午前中に嫁ぎ先の家に行き、玄関先で実家から持ってきた水と、嫁ぎ先の家の水を合わせて盃で飲んだ。このときは、仲人はたてていなかったので、婿の妹さんが水を合わせ、盃を割った。このようなことは相手方の家の者がやる決まりだということだ。このとき、料理屋さんが来ていて、玄関に入るときにお祝いの歌を歌っており、この歌の間に水を飲まなければいけなかった。この料理屋さんは、同じ町内の方で、この日の食事の用意を頼んだ方だという。料理屋さんはある程度このような儀式の知識があるようで、結納のときも（このときは別の料理屋さんであったが）、水合わせのときも指示してくれたそうである。

盃が割られて家に入ると、仏壇にお参りをする。しかし昔のように仏間に入るときに花嫁暖簾はくぐらなかった。仏壇に参ったあと、ご膳が出てきて食事をし、お酒を飲んだりした。その日は、嫁は両親と一緒に家に帰った。わらじ酒はなかったという。この儀式が行われているあいだ、婿もスーツを着てその場にいる。玄関先で水を飲むときも玄関で見ており、仏壇にも一緒に参る。特に隠れていなければならないことはなかったようだ。

このように、現代でも合わせ水の儀式は受け継がれている。しかし、ほとんどの人はこの儀式を行っていないという。ある 30 代の女性のお話では、「昔の儀式をやるかはその家や親しだいではないか。「（結婚式は）簡単でいいちゃー」と子どもに任せる親もいれば、昔のしきたりを守る厳しい家もある。ちょうど今の 50 代くらいの世代の人が分かれ目なんじゃないか」とのことだった。先述したように、現代では、結婚式の執り行い方もさまざまあり、そこから自由にやり方を選ぶことができる。そのため、個人個人の考え方がよりおおきく影響するようになったといえる。

2-4. チョウハイ

チョウハイは現在ではほとんどなくなっており、50 年程前に結婚された方は結婚して 2,3 か月目と、出産した後に行っただけだった。40 年程前に結婚された方は一回も帰ったことがないという。

チョウハイがなくなった理由として、結婚したらそのまま嫁ぎ先の家に入るのではなく、二人で集落を出て、町にアパートなどを借りて住むようになったことや、かつて行われていた炭焼きや田んぼの仕事がなくなったことなどがあげられる。以前は、嫁は嫁ぎ先の家に一緒に住み、田んぼなどの家の仕事を手伝っていた。そのため、なかなか実

家に帰ることができず、お盆や正月、田んぼの仕事が終わった頃などの節目にだけ、帰ることができた。しかし、時代が下り、アパートなどを借りて二人で住むようになると、田んぼなどの仕事をしなければならないこともなくなり、嫁は実家に帰りやすくなった。現在では、車も普及し、いつでも簡単に山を下りて実家に帰ることができるようになった。そのため、特別な時節に帰るチョウハイはなくなっていったと考えられる。

2-5. 報恩講

その年に集落に嫁いで来た嫁が報恩講に参るのは、40～50 年程前までは行われていたようだが、30 年前になるともう参らなくなっていたそうである。報恩講のときは、黒い留袖を着て、髪型も美容院できれいにしてもらう。実家の母親と一緒に参った。

報恩講については、ある 60 代の女性から、「式場で結婚式をするようになってから、報恩講に参るということはなくなったんじゃないか」というお話を聞くことができた。かつては、嫁は家に入るものであったため、新しく嫁に来た者は、集落の一員になるということだと考えられたので、報恩講で集落の人にお披露目するという意味があった。しかし、現代では、結婚式は結婚式場で行われ、家に入るというより、本人たちが一緒になるためのものというようになっている。そのため、結婚しても、嫁ぎ先の家に入るのではなく、二人で新居を構えることも多くなっている。このようなことから、報恩講には参詣しなくなっていったと考えられる。

また、現代では、結婚してからも仕事を続けている夫婦もおり、報恩講の日にあわせて仕事を休むことがかつてより難しくなっている。このことも、報恩講に参詣しなくなった一因であるといえるだろう。

3. まとめと考察

ここまで述べてきたように、結婚式は、結婚が決まるまでから式の執り行い方まで、おおきく変化してきていることが分かる。

かつて結婚を決めていたのは親同士であったが、時代が下ってくると、お見合いが行われるようになり、現代のような恋愛結婚の形になっていった。結婚が決まるまでの過程が変わるとともに、結婚式の仕方も変化してきた。また、結婚式も嫁ぎ先の家で行われていたが、現在では式場で行うようになっており、式の執り行い方も、キリスト教式や神前式など様々な様式で行われるようになっている。

以前は、結婚は本人たちの意思と関係なく親同士で決められ、結婚式も嫁ぎ先の家で行われていた。つまり、結婚は本人たちのものではなく、家同士のものであったと考えられる。しかし、現代では、結婚する本人たちが結婚を決め、結婚式もどのような形式で行うのかというところから衣装、演出までも本人たちが結婚式場の業者の人と決めて行う。現代では結婚は本人たちのためのものであるといえるだろう。

この違いから、結婚式に対する意識の違いを私なりに考えてみたいと思う。かつては親が結婚を決め、嫁はそれに逆らうことができなかったため、顔も見たことのない相手と結婚することもあった。また、一度嫁いでしまうと、なかなか実家に帰ることができなかった。このような背景から、この頃に嫁に来た方は、「嫌々嫁に来た」という方が多く、あまり結婚に対していい印象を持っている方はおられないように感じた。

時代が下り、恋愛結婚になると、本人同士が望んで結婚を決めているため、嫁本人はあまり抵抗なく嫁いできているようである。この点がおおきく違うといえるだろう。また、かつてと違い、嫁が家に縛られることがないということや、車などの交通手段が発達しているということなどにより、実家にもすぐに帰ることができる。このようなことから、嫁が嫁いでくることにあまり抵抗を感じていないと考えられる。

しかし、現代の嫁の親や親戚は、娘が小野集落に嫁ぐことについて、反対する場合がある。娘に嫁に行ってほしくないという気持ちはどの時代でも変わらなかったのではないかとは思うが、嫁ぐのが山の中の集落であるというところで、親は、「大切な娘に苦労をしてほしくない」という思いを持つようだ。反対にかつての親は、「嫁いだ方が生活が楽になる」と結婚を決めていたようだ。しかし、これは結婚を申し込む側の仲人が、婿の家のいい面だけを言って嫁の親を説得しているので、嫁の親もそう考えるのではないかとも考えられる。

このように、結婚式や、結婚が決まるまでの過程が変わるともに、結婚する本人だけでなく、親の結婚観も変化してきているのではないかと思われる。

おわりに

今回、小野集落で、結婚式について調査をして普段あまり聞くことのできない貴重なお話をたくさん聞くことができた。

現在では結婚に対して積極的なイメージを持っている方が多いのに対し、50 年程前までは結婚することについて、積極的というよりはむしろ断ることの許されないものという意識が強かったことが分かった。しかし、お話を聞いていると、それだけではなく、「小野に嫁いできてよかった」「住めば都」「小野の人はみんな優しいから、嫁にきてよかった」など今となっては小野に嫁いできたことを好意的に受け止めるお話もたくさん聞くことができたのでよかったと思う。

昔のお話を聞いていると、私なら顔も知らない相手と結婚するなんてとてもできないという思いが強かったが、「小野にきてよかった」と笑顔で話してくれる方々をみて、小野の人たちは本当にいい人ばっかりだと改めて感じることができ、本当によかった。

謝辞

今回、結婚式という非常にプライベートな内容にも関わらず、いろいろなお話をして

くださった小野集落の皆様にはとても感謝しております。特に、西照寺の小野さんご一家には、集落の方にお話を聞く機会を多く作っていただき、そのおかげで、調査をスムーズに進めることができました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

山本善次、1988 年、『乎乃郷の今昔』

中山間地の農業－沢川（そうごう）の過去と現在の稲作－

中島　佳祐

はじめに

福岡町の市街地から西へ、五位山へと車を走らせる。山道に入り、いくつかの集落を抜けると、しばらく周りは木々や草ばかりの深い山道が続いた。本当にこの先に集落があるのか、そう思ったとき突然、目の前に古い大きな民家が見えた。茅葺の大きな屋根で、トタンで覆ってしまってはいるが、とても立派な民家だ。それからすぐに、同じよ

調査を進め、現在は沢川の外に住んでいる人たちによって営農組合が組織され、農業うな建物がいくつか目に入った。木々が日差しを遮り、とても静かで、ともすれば少し不気味に感じるほどだった。それが初めて沢川（そうごう）を訪れた時の印象である。同時に、ここではどんな暮らしが営まれているのだろう、と深く関心を持った。が営まれていることを知った。筆者が農家出身であることもあり、農業、中でも稲作にテーマを絞ることにした。本稿では、大きく二つ、沢川の昔の稲作と現在の稲作について述べた後で、中山間地の農業の現状やそれに関わる人々の思いについてまとめていく。

1.　沢川の概要

沢川の概要については『富山県福岡町沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書』（福岡町教育委員会、2001）及び、『福岡町史』（福岡町史編纂委員会、1969）を参考にして記述する。

1-1　位置、地形、自然

沢川は福岡町の丘陵部の中で北西端に位置する集落で、福岡駅からは北西におよそ14km、車で 30 分ほどの距離にある。この丘陵部は「五位山（ごいやま）」と呼ばれており、沢川を合わせ五つの集落が存在する。沢川は、その五つの集落の中で最も山頂に近い、標高330m～350m付近に位置し、南方に長い長方形をなしており、周囲を山地が囲むようにして形成される。西は石川県宝達志水町に、北は氷見市の赤毛・土倉地区に接し、南は福岡町五位部落に接している。集落の一部が県境を超えており、集落内やその周辺では石川県側を能登沢川、富山県側を越中沢川と二つに呼び分けている。

集落内は福岡町からくる方から、ムカイデ（向出）、タンデ（谷出）、ナカムラ（中村）、キタデ（北出）と呼ばれており、お寺がある最も高いところにある北出が中心であった。

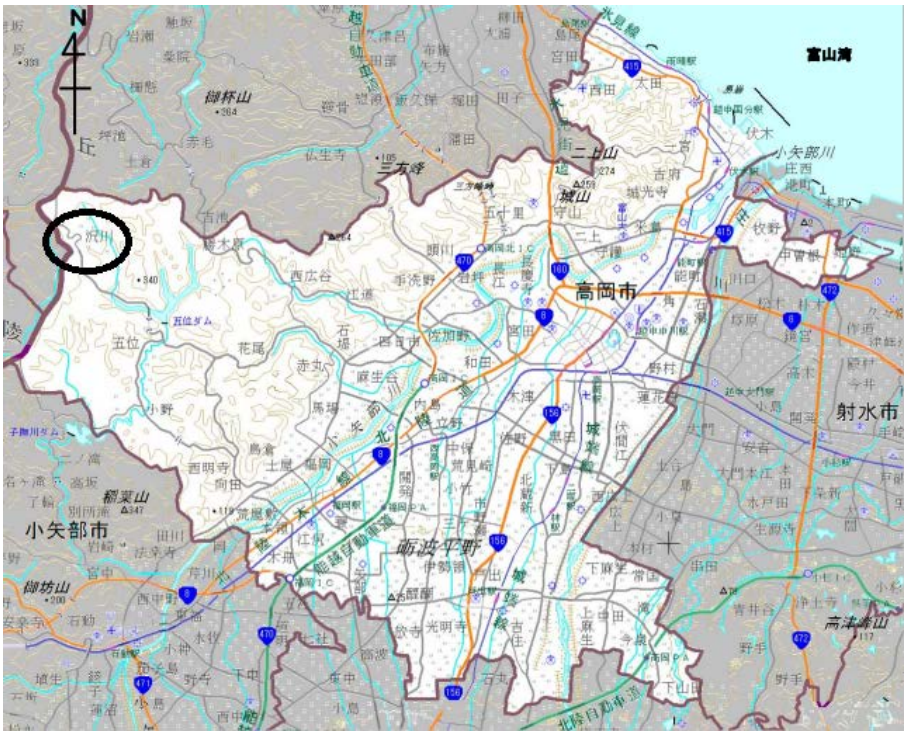

図 1.　沢川の位置　（高岡市生活環境部地域安全課、2012）『たかおかの環境』

図 2.　沢川の様子　黒丸はナカバタと呼ばれる主要な水田（google earth より）

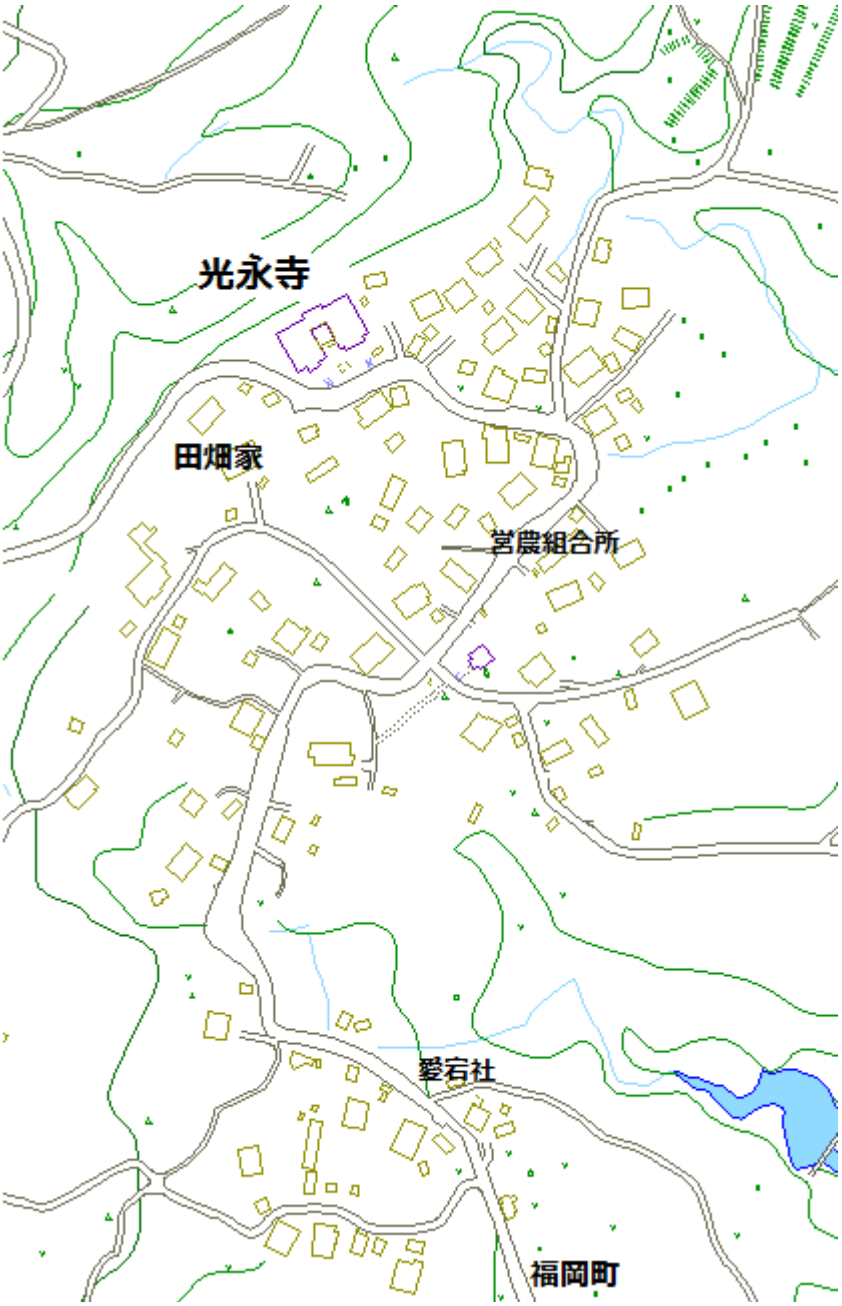

図 3.　沢川の様子 2（ゼンリン電子住宅地図デジタウン、富山県高岡市、2013 より）

次に沢川の気候についてであるが、沢川はとにかく雪が多い。同じ五位山の集落と比べても、沢川だけは別格であるという。そのため、昔は冬場、外に出て働くことはなかなかできず、屋内で藁仕事をやっていた。近年は除雪車が一番にとおるようになったため、冬場も外出ができるようになった。また、夏場でも朝晩は冷え込む。筆者が聞き取りを行ったのは夏場であったが、家には石油ストーブが出してあった。話によると「昼はいいけど、朝晩はまだまだ寒い。ここでは一年中ストーブは出している」とのことだった。

1-2.　人口、産業

町史によれば、1968 年（昭和 43 年）には人口 271 人、70 世帯であった。集落の人に聞くと、最も多い時で 100 軒ほどの家があったという。1956 年（昭和 31 年）には沢川に小学校の分校が建てられた。

現在の人口については『地区別世帯数及び人口集計表』（高岡市生活環境部市民課、2014）を参照した。これによると、男性 18 名、女性 27 名の計 45 名、世帯数は 29 世帯となっている。しかし、現地に行くと実際に住んでいる人はその半分以下の 20 人程度であった。住民票はそのままに、集落の外に暮らす娘や息子の家に身を寄せる人も多いようである。住民のほとんどが 70～90 歳くらいの高齢者であり、集落で見かける 70 代以下の人の多くは、山を下りて市街地に暮らしている人であった。分校も 1981 年（昭和 56 年）に休校となっている。このように、現在沢川は限界集落である。

次に、主要な産業についてであるが、これは水稲作である。前述したように、日中と朝晩の寒暖の差が激しいため、ここでとれるお米はおいしいと、集落の人の多くが自信を持っている。また、米の生産量も周辺地域に比べ大変多かったようである。戦時中、学校に白米の弁当を持って行ったため怒られたという話も聞いた。現在、集落の水田はほとんどが沢川営農組合によって管理されている。

かつての産業としては、炭焼きが盛んであり大きな現金収入源となっていたが、エネルギー革命や高度経済成長による出稼ぎの増加で消滅して久しい。

写真 1.　ナカバタと呼ばれる沢川で最も主要な田んぼ

1-3.　沢川の歴史

沢川の地名の由来は、川が多く流れ水量が豊富であるためだとされている。しかし、聞き取りでは、大きな川がなく水の確保には苦労していたと聞いた。『福岡町史』によれば、旧集落はおよそ 300 年前に発生した地すべり災害で被災し、現在の集落の場所

に移転したと記されている。旧集落が存在したとされる場所は、現在、水田になっており、蔵屋敷田・ごば田・お鐘田などと呼ばれていることから、集落移転の痕跡が名前からもうかがえる。

沢川集落の成立と展開については、次のような伝承や記録が残されている。

・沢川の始まり　「七軒百姓」の話

1177 年（安元 3 年）の鹿ケ谷事件[17]により鬼界ヶ島に配流された僧俊寛（しゅんかん）が、現在の小矢部市にある越中宮島峡に匿（かくま）われた。その時、八右衛門・七蔵・孫蔵・勘五郎・長次郎・九蔵・勘九郎と呼ばれる 7 人の従者も俊寛を慕って一緒についてきた。そして、彼らが百姓となり、沢川を開拓したという伝承がある。

集落にある愛宕社（あたごしゃ）の御神体は石動山伊須流岐比古神社（いするぎやまいするぎひこじんじゃ）の御神体と共通性があるといわれている。その神宮寺のある石動山天平寺は 750 年頃すでに繁盛しており、能登、越中の山岳地域は室町時代のはじめに石動山信仰の支配下であったと思われる。沢川の光永寺（こうえいじ）が真宗改宗以前、石動山天平寺（てんぴょうじ）と同じく真言宗であったことから、鎌倉時代から室町時代にかけて沢川の村作りが成り立ったのではないかと思われる。

五位山の集落の内、沢川以外の氏神は源氏系の八幡社であるのに対し、沢川のみが平氏系の愛宕社であることは俊寛説と関係があるのかもしれない。

・田畑兵衛の道案内

1584 年（天正 12 年）佐々成政が前田利家方の城である末森城を攻めた際、宝達山麓の山林を所領としていた田畑兵衛が成政軍の道案内を行っている。この時、兵衛はわざと成政の軍勢に道なき道を案内して時間を稼ぎ、前田方を勝利へと導いた。この功績により、前田利家からそれまでの所領を安堵され、代々加賀藩の御扶持人山廻役（おふちにんやままわりやく）に任命された。中世末期には沢川集落がムラとしてまとまりをもつ規模になっていたものと考えられる。

第二節、第二項に登場する田畑家は、この田畑兵衛の一族のことであり、田畑の姓は集落でこの一軒だけである。

また、沢川では 1958 年（昭和 33 年）に大火事があった。集落のお寺を含む 19 世帯、45 棟が焼失し、火元の幼児一名が焼死した。この火事では、お寺にあった貴重な資料

[17] 1177 年（安元 3 年 ）年 5 月、藤原成親、師光 （西光）成経、僧俊寛ら後白河院の近臣が、京都東山鹿ヶ谷の俊寛の山荘で行なった平氏討滅の密議が発覚した事件。平清盛を中心とする平氏政権の強勢に対して、これを倒そうと志した後白河院の意を受けて、上記 4 人のほか、近江中将成正、山城守基兼、式部大輔雅綱、平康頼、平資行らが参加し、摂津源氏多田行綱や北面の武士の武力に頼って清盛討滅を企てた（ブリタニカ国際大百科事典）。

や個人宅にあった歴史的な物品も多く焼失しており、これを境に伝統的な行事などが衰退していったといわれる。

1-4.　獅子舞

沢川の獅子舞は『とやまの獅子舞』百選に選ばれており、現在も一大行事として受け継がれている。当日は集落を離れた人たちも戻ってきて活気のある雰囲気となる。沢川の獅子舞は暴れ獅子と呼ばれるもので氷見市十二町から習ってきたものだ。以前は 9 月 24 日から 25 日にかけて行われていたが、現在は秋分の日の前日、9 月 22 日に行われている。獅子を舞うのは 6 人の男性で胴体は手を挙げて張る。獅子と天狗はにらみ合うように舞い、祭りが最高潮になるとぶつかり合って大変勇壮なものとなる。最後の獅子殺しでは大いに盛り上がり、獅子の頭が一回り大きな親獅子が登場し天狗も二人登場して激しく舞う。獅子舞を舞う順番は神社、お寺、田畑家の順序で三番目までは決まっており、それ以降は毎年話し合って決めている。2014 年には沢川の獅子舞を題材に市川徹監督によって『獅子舞ボーイズ』という映画の撮影も行われた。これは 2015 年春公開予定である。

写真 2.　獅子舞の様子とそれを撮影する市川徹監督

1-5.　その他

沢川のことを詳しく知る澤田宏さんから頂いた資料には、その他過去に行われていた行事として春祭りや新嘗祭、お座と呼ばれる仏教についての勉強会などがあった。春祭りは 3 月 30 日に行われ、その年の豊かな稔を祈念する祈年祭であった。新嘗祭は 11 月 18 日に行われ、その年の農作物の収穫を神様に感謝するとともに、農作物の品評会やセリも開催された。お座は年間を通じて 10 日おきに一問一答の方式で盛んに行われ、宿をしたくても順番が回ってこないほどであった。

また、沢川は方言も周辺地域とは少し違った特徴的なものがあるようだ。これは、沢川の人も周辺地域の人も感じていることで、おそらく沢川の成り立ち関わっていると推測される。

2. 昔の稲作

ここでは、主に第二次世界大戦前後の沢川の稲作、またそれに伴った馬仲間（ウマエッケ）という関係について述べる。沢川のことについて詳しく調査をしている澤田宏さんに伺った話と『福岡町鳥倉村の物語』（岩崎照栄・鳥倉英彦著、1999 年）を参考にしながら記述する。

2-1. 昔の稲作、作業の流れ

・稲作の始まり

稲作は春、雪解け前から準備が始まる。3 月中頃、まだ雪の残るノショダに灰を撒く。ノショダとは苗代田のことで、種を蒔き、苗を育てるための田んぼのことである。灰を撒くのは、これによって雪を早く解かすことができるからだそうだ。

4 月 10 日頃になると、ナガイケとよばれる池に種籾を浸す。そうすると、そのまま沈んでしまう種籾と、水面に浮かんでくる種籾に分かれる。後者は、質の良くない種籾として選別される。

4 月中頃、村人総出で一斉に田んぼの用水をさらう。沢川は標高が高いため大きな川がなく、そのため水の確保は重要だった。それから馬割りを決める。馬割りとは文字通り馬の当番表のことであり、沢川では一頭の馬を複数軒で飼うことがよくあったため必要な作業だった。このように馬を複数軒で飼うことは馬仲間といわれるが、沢川ではこれをウマエッケと呼んでいた。馬割りが決まると田おこしが始まる。

・田おこし

田おこしの手順は、まず田んぼに水を張って荒起こしと呼ばれる作業を行う。多くの場合、水を張る前に行うことが多いが沢川では前述の通り水の確保が難しかったため、このような方法がとられた。荒起こしは馬に犂を引かせ直線状に耕し、その後ろを女性がターリキ（四つ鍬）でならして歩くという作業だった。この作業はひとつの田んぼで三回行われ、それぞれ一番田、二番田、三番田と呼ばれた。そして、三番田が終わると畦塗りが行われる。

・ノショダの種まき

4 月 24 日、水を張ったノショダに種籾をまく。ここで、今年植える苗が育つ。当時

は気温も低く、凍てつくような水面に足をつけながらの作業だった。この日はちょうど石動町（小矢部市）の春祭りの日でこれを楽しみに頑張ったという。

・代掻き

代掻きとは、牛馬に馬鍬（まぐわ）という農具を引かせ、田おこしをした田んぼの土をさらに細かくし、表面を平らにならす作業である。沢川では牛を飼うところはなく全て馬だった。一般的に代掻きは荒代（あらじろ）、中代（なかじろ）、植代（うえじろ）の 3 回行う。牛馬を使うのは荒代・中代で、仕上げの植代は柄振り（えぶり）を使って人手で行われた。これを柄振押し（えぶりおし）と言う。この柄振押しは沢川ではイブリサシと言われていた。イブリサシでは、水が上手く田んぼ全体に行き渡るように、田んぼをよりきれいにならす。この作業は稲の出来栄えに関わる重要な工程で責任の大きなものだった。そのため、失敗したとしても誰からも責められない家の年長者が行った。話を聞いた際に
も「よそからから頼まれることもあったけど絶対にやりたくなかった」と語っていた。

写真 3.　代掻き用馬鍬

写真 4.　柄振り

（Agriknowledge 農機具データベースより）

・田植え

田植えは 5 月 20 日頃行われた。田植えの前日に男がワクコロガシを行う。枠とは、長さ 2～3 メートルの六角柱の形状のもので、これを田んぼに転がし等間隔の跡をつける。田植えの時はそのあとを目安に苗を植えた。

田植えの日はまず朝 4 時頃からノショダの苗取りを行う。エイ（結）を組んでいる 4～5 人の女性たちが集まりノショダから次々と苗をとっていく。男性の仕事は主にノショダから自分の田んぼへ苗を運ぶことであり、男性はその日、田植えをする田んぼの家の人だけが参加する。そしてノショダでの作業を終えた女性たちが、苗を腰につけた籠に 10～20 株入れ、前進しながら植えた。

10 時頃になるとコビル（小昼）といって小休憩をする。小昼ではホオバ（朴葉）マンマという、朴葉にきなことご飯を包んだものを食べた。正午になると昼休憩をとる。田んぼと家が離れている場合、近くにある簡便の小屋で昼食をとった。小屋には囲炉裏もありお湯くらいは沸かすことができたようである。当時の沢川には昼休憩の小屋がしばしば見られた。3 時ごろには再びコビルをとり、朝とは違ったものを食べて楽しんだようだ。小昼で食べるものは、田植えを手伝ってもらう家が人数分を用意していたそうである。

最終確認として、2、3 日後に田んぼを見回り、苗が抜けていないかを見る。その際、抜けているものがあると植え直す。

田植えが終わると稲が良く育つように畦に大豆や小豆を植えた。この小豆は祭りの時、赤飯を作るために栽培されていたようである。

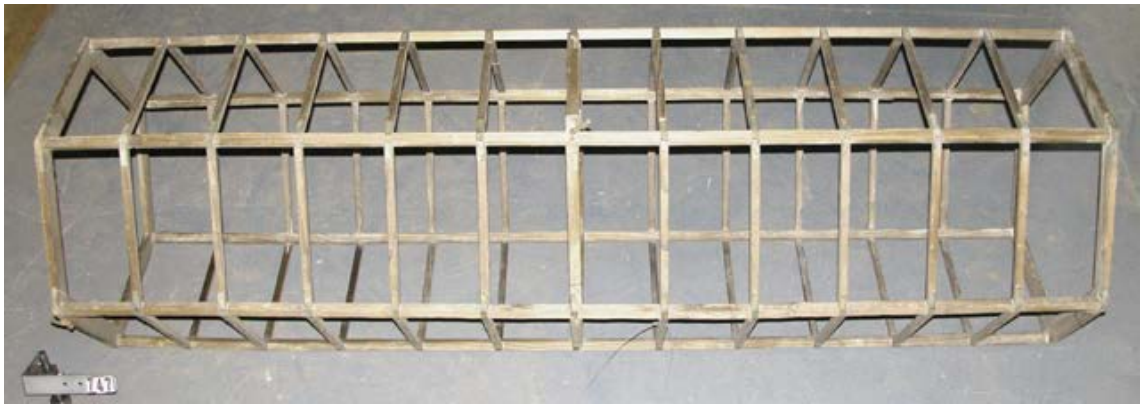

写真 5.　枠（Agriknowledge 農機具データベースより）

・草取り

草取りは、今は除草剤をかければ済むが昔は大変な作業だった。まず、ラチコロガシという作業から入る。ラチコロガシは、らちうち機と呼ばれる手押し式の農機具を使って稲の間の土を耕す作業のことで、田んぼの草をとったり土の中に空気を入れたりすることができる。誰でもできる簡単な作業だったため子供もやっていた。それから 4、5 日して様子を見、新しく生えてきた雑草や、ラチコロガシで取りきれなかった雑草の草取りを行う。これは女性の仕事で、素手で草を取り、手にいっぱいになると土の中に埋めるという作業を、腰をかがめたままの姿勢で長時間行うためとても大変だったようだ。「草取りのおかげで今こんなに腰が曲がっている」という声も聞かれた。雑草は日を置くとまた生えてくるため、全部で三回行われる。稲が育つと葉が目を傷つける恐れがあるため、網をかぶってやっていた。

8 月はじめになると、ヒエとりを行う。現在は雑草といえばもっぱらヒエだが、昔は他の雑草が多く、今ほどヒエは生えていなかったという話だった。

写真 6.　らちうち機（Agriknowledge 農機具データベースより）

・稲刈り

9 月になるといよいよ稲刈りの時期に入る。刈り取り前にまずハサづくりが行われる。ハサとは刈り取った稲を掛けて乾燥させるためのもので畦や自宅に作った。ハサ作りの手順は澤田さんからの聞き取りをもとに、『―日本の小さな町のロマン― 福岡町鳥倉村の物語』（岩崎照栄、平成 11 年、pp.324）も参考に、以下に記す。

ハサ木と呼ばれる縦の支柱を地面に垂直に立てる。ハサ木には栗の木を使い 2 メートルくらいの間隔で 15、6 本立てる。下から 1 メートルくらいの高さに横木として唐竹を結びつけ、その上約 40 センチの間隔で 8～9 段作る。このハサ作りは男の仕事で、しばしばハサの高さを競うことがあったが「台風が来ると高いハサは倒れやすかった」とも聞いた。

稲刈りは田植えの際に集まったエイのメンバーで行うことが多かったようだ。稲刈り鎌が生産組合から配られ、それを使って作業を行ったようである。当時は今のように、水を抜いただけでは田んぼがきれいに乾かないところもあり、そのような場所ではぬかるむ田んぼの中で作業を行った。そのためフネと呼ばれる板状の農具に刈り取った稲を載せ、畦まで運んでいた。

刈り取りのあとはハサカケを行う。この作業は男性が行うことが多く、男性がハサに登り、女性や子供が下から刈り取った稲を投げて渡した。乾燥の手段としてはその他にも地干しなどもあったが、沢川では刈り取った稲の乾燥は 100%ハサカケで行っていたようである。ハサにかける日数は十日間程度であった。

・脱穀

脱穀は足踏みの回転式脱穀機でハサの近くで行った。男性は足踏み、女性は稲束を持ってくるという分業でやっていたそうだ。脱穀した籾は、かますという藁製のむしろを二つ折りにして作った袋に入れて積み、藁を上からかけて雨で濡れないようにしておく。

その後、家まで運び、広間の隅にタテというむしろを 4～5 枚つないで円柱状にしたものの中にいれる。このタテは稲の種類別に作っておき、異なる種類の稲が混ざることがないように注意した。

・籾摺り

籾摺りは沢川やその近くでは「うすすり」という言い方をしている。これは籾を玄米にする工程である。うすすりは籾すり機とそれを動かすための発動機（ヤンマーディーゼル）の二つの機械で行った。この二つは集落全体のもので各家に二回、半日単位で回ってきたそうだ。この二つはいずれもとても重く、それぞれ大人 4 人で運んで回った。うすすりの場所を一箇所に決め、そこに籾すり機と発動機を常設しておけば良いように思えるが、米俵は一つ 60 キロあり、これを何俵も運ぶほうが辛かったようである。

次に、話を聞いた中で興味深かったウマエッケ（馬仲間）について述べる。

2-2.　ウマエッケ（馬仲間）

・ウマエッケについて

当時、農作業の中では馬や牛の活用がかかせなかった。しかし、動物を管理することは経済的な負担や身体的負担が大きいため、負担を軽減しようと馬仲間を組み、複数の家が持ち回りで管理し、活用していくことが一般的に行われていた。

沢川でも同様であり、沢川の場合は牛を飼っているところはなく、すべて馬であった。大体の家が二軒で一頭の馬を飼うようにしていた。馬仲間のことはウマエッケと呼ばれており、ウマエッケの家が変わることは少なく、大体が近しい親戚関係であった。

また、本家から分家して新しい家ができた場合、その家はどこのウマエッケに所属すればよいのかという疑問が浮かぶが、その場合は集落のまとめ役であった田畑家の一声で決まったという。田畑家は集落の人たちからオヤッサマと呼ばれており、集落で唯一の武家出身で、一目置かれる存在であった。

馬自体は博労から買う。博労は福岡の町のほうからやって来ていた。馬が高齢になる頃、博労が再びやって来て新しい馬を紹介する。そして買うことが決まるともとの馬と交換した。

・馬の持ち回り

忙しい時期、馬は仲間の間を頻繁に行き来する。忙しい時期とはもちろん田おこしや、代掻きの時のことであり、その間隔は一日や二日である。その後、田植えの時期になると一週間から 10 日になった。初雪が降るとその日から 2 月 10 日前後まで馬の行き来はなくなる。これはもちろん、大雪で外出が不可能なためである。2 月 10 日前後になると村中の馬が一斉に家を移動する。当時はこれを馬送りと呼んでおり、大変な一大行事であった。

馬送りは馬が雪に埋もれてしまわないように、2 月 10 日前後の雪が凍ってしまうような一番寒い日に行う。道沿いには莚を敷き、馬の足には草鞋をはかせた。馬が滑ってけがをしたら一大事だからである。そうして、馬を引き取った家はしっかり餌を食わせなければならなかった。これから働いてもらう時期が近付いてくるため、馬に元気でいてもらわなければならないからだ。時には、冬の間に馬が死ぬこともあったという。そういう場合は広い道で解体し集落のみんなで食べたそうだ。

・馬の管理

馬の管理は主に女性の仕事だった。特に冬場は長期間、馬が自宅にいるため管理が大変である。冬場、女性は朝早くから馬のエサを作り始める。藁をオシキリという飼葉切りと同様の農具で小さく切る。そこに豆の殻などを混ぜて大きな鍋で煮る。それに加え、家族の朝ごはんも作らなければならない。その後は馬小屋の掃除を行う。馬の糞はウマゴエと呼ばれ、肥料にするため一固まりにして外に置いておく。

夏場、朝は馬を引き連れ田んぼ周辺の草刈りを行いエサの調達も同時にする。その場で食べさせることもあるが、大体は刈った草をひとまとめにし、馬の背中にくくって自宅へ持ち帰ったという。

馬の世話は大変だったため、女性は馬に対し愛着がわくこともあった。新しい馬と交換するとき、涙が流れたという話も語ってくれた。しかし、馬に名前を付けるようなことはしなかったという。

3. 現在の農業

時代が進むと、農林産物の価格低下に伴う農林業経営の悪化や、市内において最も高いところ（標高約 350m）に存在する集落で、公共施設や商業施設等へのアクセスの面で平野部に比べ利便性に劣ることから人口が著しく減少した。これらによって農作業従事者の高齢化、担い手不足といった問題が深刻化してしまう。また、田んぼの多くが整備されておらず、機械の導入が難しかった。これらのことから沢川地区の田んぼの多くは荒れて行ってしまった。

そのような状況を改善すべく、2004 年に集落営農組織「沢川営農組合」が設立された。この章では沢川営農組合の構成や仕事内容、組合員の語りなどを述べていく。

3-1. 沢川営農組合について

まず、集落営農組織とはなんなのか。『集落営農が稲作の生産および費用に与える影響』（齋藤 経史、大橋 弘、西村清彦、2010）によると、

集落営農とは「集落など地縁的にまとまりのある一定の地域内の農家が農業

生産を共同して行う営農活動」を指している。集落営農では複数の農家が共同で農業経営を行うことで、より少ない人手でより広い農地を耕作することが可能となる。このため、集落営農は、我が国が直面している農業問題に立ち向かう方策として期待されている。

1999 年に農業基本法に代わって制定された食料・農業・農村基本法において「国は、地域の農業における効率的な農業生産の確保に資するため、集落を基礎とした農業者の組織その他の農業生産活動を共同して行う農業者の組織、委託を受けて農作業を行う組織等の活動の促進に必要な施策を講ずるものとする。」と集落営農への支持を表明している。また、2005 年度より集落営農実態調査が開始され、集落営農を促進する施策も実施されている。

集落営農は、農業従事者の減少と高齢化に立ち向かう方策としても、農業規模の拡大や効率化の方策としても期待されている。

とある。以上を踏まえて次に、沢川営農組合の詳細を述べる。

・結成

結成のきっかけとなったのは沢川に基盤整備の話が持ち上がったことだ。1996 年（平成 7 年）頃から話があがるようになったと聞いた。その後、1999 年頃に地域の負担金が 5%と軽くなったこともあり基盤整備が着工した。中心となったのは当時 50 代くらいの沢川出身者たちで、ほとんどの人は町に降りて会社勤めだったが、故郷の、先祖代々の土地が荒れていってしまうことに危機感を抱いていた。しかし、従来の小さく歪な形の田んぼでは管理が難しかったため基盤整備を行った。整備した田んぼは、ほかの人の田んぼと一緒になってしまうものが多く、そこは集落の人同士で売り買いして田んぼの分配を決めたそうだ。しかし、発起人の方や中心となった方は少し無理をして田んぼを貰うこともあったという。

そうして、整備された広い水田を手に入れたが集落に住む人は高齢の人ばかりである。町に降りている人たちも、まだ会社に勤めている人ばかりで、田んぼの維持管理は難しい状況であった。そこで集落営農組合を設立することになった。

・構成員

結成当初の人数は 16 人で最年長者の方は 55 歳だった。現在は 18 人であり　最年長の方で 67 歳、最年少の方で 45 歳であり、平均年齢は 50 歳前後である。メンバーは全員会社員、または退職者で、ほとんどの方が福岡町、そのほかは小矢部市や砺波市に住まいを持っている。沢川に住んでいる人は一人だそうだ。しかし、全員沢川出身者であり、みんな幼馴染のようなものだと語っていた。

・農地

現在、耕作を行っているのはおよそ 16 町ほどである。その半分ほどは営農組合に属していない沢川の方から借りている田んぼだそうだ。いずれも高齢により自分で耕作できないといった理由から借り受けている。

・栽培品種、作付面積、収穫量

主な栽培品種はコシヒカリ、てんたかく、新大正もちの三つで、そのほかは実験的に無農薬米の栽培を行っているということだ。それぞれの品種の作付面積はコシヒカリが 8 町、てんたかくが 7 町、新大正もちが 6 反ほどだということである。収穫量は年間およそ 72 トンで平野よりは収量は劣るらしいが味は抜群だと語っていた。

出荷先はほとんど農協であるという。その理由は、値段はほかの問屋よりも下がるが、余ってもすべて買い取ってくれるためだという。

・当番、給料

沢川営農組合では、日当制による給料を支給している。その日働いた人が一定額を受け取るというものである。なお、組合には農業専従者は一人もいない。当初は当番制が存在したが、当日に会社の仕事などで来られないといったことが多数あり、できる人がやるようになった。今は、平日はほぼ決まった 4 人が作業に出ている。その 4 人はすでに会社を退職した人たちであり、雨の日以外はほぼ田んぼに出てきて作業をしているということだった。休日は毎日 7～8 人は集まって農作業をしているようだ。

・法人化について

現在、沢川営農組合は法人化をしていない。その主な理由は、法人経営の場合、会計処理に複式簿記による記帳、決算が義務づけられることだ。これには専門の知識が必要であるが、沢川ではできる人がいないということだった。

次に、営農組合で行われている稲作について、一年間の作業の流れを述べる。

4-2. 一年間の作業の流れ

・田起こし

現在、営農組合で行われている稲作は 4 月のはじめ、用水の整備から始められる。これは草刈りや用水にたまった土を上げることが主な作業であり、広い範囲やらなければならないため人手がいる大変な作業である。用水整備が終わると田んぼに水を張る。そのあとからトラクターで粗起こし、トラクターのロータリーを代掻き用に替え、代掻きを行う。水を張ってから粗起こしをするのは、昔と同様に水の量が少ないからである。

・田植え

沢川では平野部より一週間程度遅れて、5 月 10 日過ぎくらいから田植が始まる。現在の田植えは田植機で行われるため、人手はそれほど必要ないように思えるが、苗箱を運ぶのに案外人手がいる。そのため、田植えの際は多くの組合員に協力が要請される。

田植機には苗を植えると同時に肥料を撒く機能が取り付けてあり、苗の側に肥料を撒くことができる。これによって、肥料の効果の上昇や、施肥量、労力の削減が可能になる。

・草刈り

それから法面の草刈りである。法面とは切土や盛土によって造られた傾斜地の斜面部分、すなわち、上下に位置する田んぼの間の斜面や道路と田んぼの間の斜面のことだ。この草刈も人手がいる大変な作業である。筆者も実家の手伝いでよく行うが、急な斜面に足を踏ん張らせ草刈り機を持ち、斜面に沿って上から下に腰を使って切り払う、同じような姿勢を長時間続けるため体ががちがちに固まってしまう。沢川の場合、山間部にある田んぼのため段々になったものが多く、したがって広い面積の法面がある。その負担は大変なものだと話していた。

・消毒

消毒は 8 月 10 日頃から行われ、一つの水田に 2 回撒かれる。2 回ともカメムシ対策を主としている。平地ではウンカ対策用の消毒薬を撒くことが多いようだが、山間部はカメムシの被害の方が多いようだ。

・水抜き

8 月の終わりに田んぼの水を抜く。水を抜く時期が早すぎると、玄米にヒビが入る胴割れという現象を引き起こす原因になってしまうので、慎重に時期を見る必要がある。また、水を抜くとイノシシが田んぼの中に入ってくるようになるので、電気柵を張る作業も行う。そして、電気柵を張ってからは草刈りが重要になる。なぜなら、電気柵に草が触れてしまうとそれがアースの働きをしてしまい、電流が地面に流れて効果が薄れてしまうからである。夏場は、草もすぐに伸びてきてしまうので稲刈りまでの一ヶ月弱の間に、電気柵の周りの草を三回は刈るそうだ。

・稲刈り

9 月中旬から下旬に稲刈りが始まる。コンバインという乗用の機械を使って刈り取り、脱穀を同時に行う。現在の稲刈りには機械の数も運転する人も大体決まっているため、それほど人手はいらないようだ。実際に筆者が見に行った時は 6 人ほどで作業を行っており、2 人が 2 台のコンバインを運転し作業を行い、3 人が刈り取って脱穀した籾を集

落の乾燥機へとトラックで運び、最後の一人は乾燥機の方で運ばれてくる籾を待ち受けるというように作業をしていた。

早生のてんたかくから刈り取りを始め、コシヒカリ、新大正もちと進めていく。

写真 7.　刈り取りの様子

写真 8.　刈り取った籾を乾燥機へ

・乾燥

刈り取った稲籾は乾燥機に入れられる。乾燥機は集落の人の大きな納屋を借りてその中においてある。その後、籾の水分量が 14.5～15%になると集落の営農組合所にある籾すり機で籾すりを行って玄米にした後、農協に持っていく。

・秋おこし、後片付け

刈り取りが終わると、来年のため田んぼに鶏糞を撒きトラクターで秋おこしを行う。それからは機械の整備や電気柵の撤去を行う。電気柵は大雪で壊れてしまわないように毎年刈り取り終了後に撤去し、また来年の初夏に取り付けなければならない。

・庭じまい、決算

1 年間の農作業がすべて終わると「庭じまい」といってみんなで旅行なり民宿なりその年の売り上げ次第で決めて反省会をしたりわいわい騒いだりする。

2 月から 3 月ごろに営農組合のその年の収支や収穫量をまとめた帳面ができると総会を開いて反省を行い、来年度の計画を立てる。

3-3.　稲作に関わる人たちの語り

ここでは、営農組合の人たちの語りを中心にまとめていく。営農組合での作業について聞いたところ、組合員の一人は「組合のみんなは全員が幼馴染みたいなもので、作業の中では敬称などは使わず呼び合えるし、意見もストレートに言える。こういうのは、

下の町で会社勤めしているときには味わえないから、ストレス解消になる」と語った。その他の人たちも、農作業が幼馴染同士で集まる場となっていることに楽しみを感じているようだった。しかし、やはり楽しいことばかりではないようで「農作業は大変なことの方が多い」と語る声は多く、「農業用機械がなければとても続けていくことはできない」「もう少し米が高く売れてくれれば」という声も聞かれた。

では、なぜ営農を続けるのかを聞くと「基盤整備の負担金もあるし、せっかくやったんだから続けていかないと」といった消極的な理由も聞かれたが「故郷の土地が荒れてしまうのは悲しい」といった語りや「きついことのほうが多いけど頑張らなければ田んぼもダメになるし部落もダメになる」といった語りも聞かれた。特に強く言われていたのが「田んぼを守ることで部落を守ることに繋がっていって欲しい」という思いであった。また、自分たちが作る沢川の米の味には確かな自信を持っており、これも営農を続けるモチベーションの一つとなっているようだった。

近年苦労している点として、イノシシ被害については、営農の人達だけでなく、沢川に住み畑仕事をしているおばあちゃん達からも聞くことができた。この地域には最近までイノシシはいなかったが、5 年ほど前から出てくるようになったという。理由について「もともと雪が多く、イノシシが住みにくい土地だったが近年雪が少なくなってきたことが原因ではないか」と語っていた。イノシシによる被害は畑の場合、土を掘り返され作物を荒らされてしまうことが大きいが、田んぼの場合は米に臭いがついてしまうことが挙げられる。イノシシは田んぼに入り、泥に体をこすりつける。その際に稲に臭いがつくようである。

写真 9.　イノシシの侵入により獣の臭いがついてしまったため刈り残された稲

これからの営農組合について聞くと「もっと若い人に手伝ってほしい。そうしないと続けていくことは難しい」と語っていた。そこで自分の子供には手伝ってもらわないの

かと聞くと「息子にも、息子の仕事があるから手伝ってくれとは言いにくい」ということだった。

その他に、営農の人たちと沢川に住む人たちとの関わりについて聞くと、営農の人たちは「年寄りからは農作業の知恵を借りている。代わりに畑に機械を入れてあげたり、電気柵を張ってあげたりしている」と話していた。逆に、沢川に住むおばあちゃんからは「田んぼをやってくれているだけでとても感謝している」と語っていた。沢川の実家に戻って暮らす気はあるかという質問に対してはほとんどの人が消極的であった。ある人は「自分が良くても母ちゃん（妻）がついてこない」と語っていた。

4. まとめ考察

沢川はかつて稲作と炭焼きが盛んであり、山奥の集落であるにもかかわらず 100 軒余りの家屋が立ち並ぶ集落として栄えていたが、時代とともに市街地へ人は流れていき現在は高齢化によって人口は最盛期の 1/10 以下に減少しもはや限界集落となっている。そのような状況の中、「田んぼを守る＝部落を守る」という思いから一度は沢川を離れた人たちが基盤整備の施行を進め、営農組合を設立し田んぼを維持管理していく体制がとられた。だが、現在営農の組合員自身も 50 歳を越えた人が多く、若い世代の参入が必要とされている。しかし、営農組合員の息子の若い世代の農業への関心は薄いようで、このままでは沢川の稲作を次世代へ継承していくことは難しい。

語りの中にあったように、将来、沢川に戻ろうとする人は営農の人たちの中にもほとんどいなかった。これでは「田んぼを守る＝部落を守る」という思いは実現不可能なことのように感じられる。しかしながら、集落営農を続けることで集落に人が出入りすることはなくならず、集落の住民と集落を出て暮らす人との交流の維持や集落出身者たちのコミュニティーの維持ができる。このことは、沢川という故郷を守っていくために重要なことであると考える。しかし、現状では若い世代の集落営農への参加がなく、今後営農を持続していくのは難しくなる。集落営農に若い世代の参加を増やすには何が必要なのか。

筆者は、子供の参加であると考える。筆者は実家が家族経営の農家であり、幼いころから畑へ手伝いにつれて行かれていた。そのため、幼いころから親が農作業をする姿を目にしたり、経験したりすることができた。これらの経験は、その農地が自分にとって特別なものであるという思いを持たせることに大きく影響を与えている。沢川営農組合の方たちも、幼いころからの思い出の残る特別な土地だという思いがあったからこそ集落営農を営んでいる。集落営農にとって即戦力となるものではないが、自分の子供や孫、その他近しい関係の子供を参加させることは将来的に若者の参加を促しやすくすることができると考える。

謝辞

調査にご協力いただいた沢川の皆様のおかげで執筆することができました。特に澤田宏様、沢川営農組合の皆様には貴重なお話、体験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

参考文献

岩崎照栄、1999 年、『－日本の小さな町のロマン－福岡町鳥倉村の物語』、p316-326

齋藤 経史、大橋 弘、西村清彦、2010 年、「集落営農が稲作の生産および費用に与える影響－大規模稲作経営のシミュレーション分析－」（http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/10j009.pdf ; 2014 年 12 年 26 閲覧）

高岡市環境部地域安全課、2012、「たかおかの環境」（http://www.city.takaoka.toyama.jp/chian/kurashi/kankyo/chosa/kankyo/documents/h24nen-all.pdf ; 2014 年 12 月 26 閲覧）

福岡町教育委員会、2001 年、『富山県福岡町沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書』

福岡町史編纂委員会、1969 年、『福岡町史』、p1012-1018

「平成 26 年 11 月 30 日現在　地区別世帯数及び人口集計表」（http://www.city.takaoka.toyama.jp/shimin/shise/gaiyo/documents/261130.pdf ; 2014 年 12 月 22 日閲覧）

農具画像

web サイト“Agriknowledge”農機具データベース（http://www.agropedia.affrc.go.jp/agriknowledge/noukigu、閲覧日 2015.01.26）

第 3 部　高岡中心部の調査報告

成功するB級ご当地グルメとは

―「高岡流お好み焼ととまる」を事例に―

山下 恵実

はじめに

実習で高岡市を訪れた際、2015年春の新幹線開業に向けて町を盛り上げようとする行政の様子と、それとは裏腹にシャッター街となってしまっている駅前の商店街の様子の違いに驚いた。高岡市は、「イオンモール高岡」の印象が強く、人の流れが出来ているイメージがあったからだ。しかし実際には、郊外のイオンモールの方へ若者をはじめとした人の流れが出来たことにより、中心部の商店街は衰退してきたようであり、そのため駅前の商店街を元気にしようと様々な団体が立ち上がっていることも知った。そんな様子を目の当たりにし、高岡市の町おこしについて調べてみたいと思った。また、もともと食文化に興味を持っていたので、この2つを組み合わせた「食の町おこし」について調査することにした。

「食の町おこし」でまず連想したものは、B級グルメであった。B級グルメが大ヒットしたことによる町おこしの成功例を耳にしたことがあったからだ。そこで、高岡市におけるB級グルメの町おこしはどのようなものがあるのか、また、成功するB級グルメとはどのようなものであるのか、という問いを立てて調査を開始した。

調査方法としては、高岡駅構内、駅前商店街、老舗グルメやB級グルメの店舗を訪れて聞き取り調査を行った。また、2014年8月24日の「第4回T-1グランプリ」、9月20日・21日の「食の祭典 in ぎふ郡上」に、ボランティアの販売スタッフとして参加した。このように、消費者と販売者の双方の意見を聞くことで、両者の溝を知ることができ、食の町おこしの現状や改善点を見出すことができるのではないか、と考えた。

1. B級グルメについて

1-1. 歴史

まず、B級グルメはどのようにして生まれ、浸透していったのか、その歴史を紹介していきたい。そもそもB級グルメとは、安価で、庶民的でありながら美味しいと評判の料理のことである。昭和60年(1985年)に、フリーライターの田沢竜次が雑誌『angle』に連載した記事を元に刊行した、『東京グルメ通信 B級グルメの逆襲』(主婦と生活社)で初めて登場した言葉である。その後、昭和61年（1986年）に文春文庫ビジュアル版で、田沢竜次もメインライターとして参加した『B級グルメ』シリーズが刊行され、

この用語と概念が広がった。

平成 18 年（2006 年）頃から、「B 級グルメ」といいながら、それ全般を指さずに、特定の地域に結びつけようとした料理、すなわち「B 級ご当地グルメ」に焦点が当たることが増えた。「B 級ご当地グルメ」とは、昔からその土地で食べられてきたものをまちおこしのために活用した「発掘型」と、まちおこしを狙ってここ数年で新たに開発された「開発型」の 2 種類がある。B 級ご当地グルメに注目が集まった原因といえるのが「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1 グランプリ」（通称「B-1 グランプリ」）である。ただし B-1 の B は、B 級の B ではなく「地域 BRAND」の B である。そもそもこのイベントは、B 級グルメの祭典ではない。まちを盛り上げ、地域ブランドを確立しようと日々活動するまちおこし団体の、年に 1 度の共同ＰＲイベントとして開かれたのである。よって、表彰はグルメにではなく、まちおこし団体に向けて贈られる。決して、食べ物を売ることを目的としたグルメイベントではなかった。しかし、B-1 の B を「B 級グルメ」と勘違いしたり、強引に結びつけたりされることが増えたのだ。（出典 :「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1 グランプリ公式サイト」）

第 1 回B-1 グランプリは、平成 18 年（2006 年）2 月に青森県八戸市で開催され、毎年 1 回行われるようになった。第 1 回大会は八戸せんべい汁研究所のメンバーが、「八戸を盛り上げるために何かやろう」と始め、開催した。現在は、全国のまちおこし団体で組織する「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」（通称「愛Ｂリーグ」）が主催している [18]。

表 1 にあるように、B-1 グランプリは今や全国区の大きな食のイベントになったといえる。そして B-1 グランプリに続いて、各地で様々な食のイベントが開催されるようになった。

表 1.　B-1 グランプリ　これまでの大会について（ウェブサイト「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1 グランプリ公式サイト」を参考に筆者作成）

回	開催地	開催年月日	出展団体数	来場者数	優勝団体
1	青森県 八戸市	2006/2/18,19	10	17,000 人	富士宮やきそば学会
2	静岡県 富士宮市	2007/6/2,3	21	25,000 人	富士宮やきそば学会
3	福岡県 久留米市	2008/11/1,2	24	203,000 人	厚木シロコロ・ホルモン探検隊
4	秋田県 横手市	2009/9/19,20	26	267,000 人	横手やきそばサンライ'S

[18] 2014 年 6 月現在で加盟団体は 71 団体。

5	神奈川県厚木市	2010/9/18,19	46	435,000 人	甲府鳥もつ煮でみなさまの縁をとりもつ隊
6	兵庫県姫路市	2011/11/12,13	63	515,000 人	ひるぜん焼そば好いとん会
7	福岡県北九州市	2012/10/20,21	63	610,000 人	八戸せんべい汁研究所
8	愛知県豊川市	2013/11/9,10	64	580,000 人	浪江焼麺太国
9	福島県郡山市	2014/10/18,19	59	453,000 人	十和田バラ焼きゼミナール

1-2. 富士宮やきそば

B-1 グランプリが、まちおこしを目的としていることからもわかるように、イベントなどで人気が出たグルメの影響でまちおこしに成功した事例もある。その代表例として、B-1 グランプリ第 1 回・第 2 回大会で優勝した、富士宮やきそば学会の「富士宮やきそば」を紹介したい。富士宮やきそばは、ご当地Ｂ級グルメブームの火付け役ともいえるグルメである。Ｂ－１グランプリでの優勝もあいまって、富士宮やきそばを市外から食べに訪れる観光客は、年間 70 万人を超えるまでになった。2001 年～2007 年の 6 年間のやきそばによる経済波及効果は 217 億円だという [19]。このように、富士宮やきそばは地域に大きな経済的効果をもたらしたといえる。（出典：『「食」による地域活性化に関する研究―山梨県大月市の郷土料理を事例として』）

富士宮やきそばは、もともとは地域のお好み焼き店などで提供されていた、その土地独特のやきそばであった。それを、2000 年にまちおこしのために設立された「富士宮やきそば学会」が着目したのが、ご当地 B 級グルメ化の始まりである。その後、話題づくりや食のイベントを主催するなどの精力的な活動の中で、富士宮やきそばは全国有数の地域ブランドに仕立てられていったのである。

1-3. 成功要因

では、富士宮やきそばのように、食による地域活性化が成功する要因には何がありうるだろうか。先行研究 [20]では、①Ｂ級グルメとしてのインパクト、②食と地域性の関わり、③地域活性化を推進する組織力、の 3 つに分類している（表 2）。

---

[19]田中章雄 2008 年 『事例で学ぶ！地域ブランドの成功法則 33』 光文社 p76-98
[20]佐藤茂幸 2011 年 『「食」による地域活性化に関する研究―山梨県大月市の郷土料理を事例として』日本経営診断学会論集 11 p110-116

表 2.　B 級グルメによる地域活性化の成功要因（先行研究「「食」による地域活性化に関する研究―山梨県大月市の郷土料理を事例として」を参照）

3 つの成功要因	内容
① B 級グルメとしての商品性にインパクトがあること	味のインパクトがある（素材自体の味の強さに加え、ソース、醤油、香辛料などの味付けの濃さなど）
	ユニークさ・意外性がある（食べ合わせ、珍しい食材、調理方法など）
	ファストフードで手軽さがあり、安価である
② 食の地域性が高いこと（地域に根付いた食であること）	地元の多くの飲食店で提供されている
	地域の特徴のある食材を使っている
	歴史やエピソードがある
	地域ブランド形成につながるネーミングがある
③ 地域活性化を推進する組織力があること	優れたリーダーが存在する
	話題作りとなる企画力とイベント展開力がある
	地域経営体制が構築されている

これを富士宮やきそばに当てはめてみる。まず、「B 級グルメとしてのインパクト」であるが、やきそばであること自体、「B 級度」の高いメニューであるといえる。また、ラードとその肉カス、辛口のソースを使った味付けはとてもインパクトのある味である。次に、「食の地域性」に関しては、やきそばに使用する麺を地元の 3 つの製麺業者に限定している。また、具材のキャベツや水は地域のものを指定して使用している。最後に、「地域活性化を推進する組織力」に関しては、渡辺英彦氏が牽引する NPO 法人富士宮やきそば学会がある。この団体は、イベント企画力と実行力があり、地元で B-1 グランプリを開催し、成功を収めるなどの実績も残している。以上から、富士宮やきそばは地域活性化に成功する B 級グルメとしての条件を満たしていることがわかる。では、この成功要因を高岡のグルメはどれくらい満たしているのだろうか。

2.　高岡のグルメ

2-1.　B 級グルメと老舗グルメ

高岡市には、後述する「ととまる」のように比較的新しく生まれた B 級グルメと、昔から長く続いている老舗グルメとがある。高岡駅周辺で「高岡のグルメといえば何ですか？」と聞き取り調査を行ったところ、老舗グルメを挙げる方がほとんどであった。時間帯の関係で、年配の方が多かったこともあるかもしれないが、どうしてこのような差が出るのだろうか。

老舗グルメからは、聞き取りで多く挙げられた、宮田のたい焼き・まじまの 10 段ソフトの 2 つを、B 級グルメからは、高岡コロッケ・グリーンラーメン・昆布スイーツ・ととまるの 4 つを取り上げ、それぞれの特徴や売り出し方を調査・比較した。

2-2.　老舗グルメ

まず、高岡に昔からある老舗グルメの紹介をしたい。1 つ目は、宮田のたい焼きである。創業は昭和 24 年（1949 年）で、現在 2 代目である。皮が硬くカリカリしているのが特徴で、小豆も硬めに粒を残してあり、尾の方はお口直しとして食べてもらうよう、あんこを入れていないという工夫をしている。通常のたい焼きと違って、人形焼のように 1 つ 1 つ丁寧に焼いている。また、販売しているのはたい焼きのみで、昔は配達も行っていたが、現在は予約と店頭販売のみとなっている。価格は 1 個 150 円だ。特別宣伝活動は行っていないが、県内外から雑誌やテレビの取材が多く、観光客も多く訪れるようだ。「基本的には口コミでお客さんが増えていくんです」と、店主の妻である宮田慶子さんは話していた。

写真 1.　宮田のたい焼き（ウェブサイト「食べログ」より）

2 つ目は、まじまの 10 段ソフトである。これは、創業 40 年の「ショップまじま」という駄菓子屋で販売されている。なお、この「まじまの 10 段ソフト」というネーミングは、お客が勝手につけたものだ。価格は 1 個 150 円だ。毎年 4 月～11 月のみ販売されており、店を訪れた 6 月には平日の昼間にも関わらず、お客さんはひっきりなしに来店し、全員がソフトクリームを購入していた。どうして 10 段ソフトの販売を始めたのか、店主のまじまさんに聞くと、「部活帰りの学生が何人かでソフトクリームを買っていて、『お前の方が多い』と言い争っていました。そこで、みんなに安くて大きなソフトクリームを食べてもらおうと思い、始めました」と話された。宮田のたい焼き同様、積極的な宣伝活動は行っておらず、フリーペーパーやテレビ・ラジオからの取材や口コミでお客さんが増えていくそうだ。

写真 2.　まじまの 10 段ソフトクリーム（筆者撮影）

この 2 つの老舗グルメは、「高岡のグルメといえば」という聞き取り調査を行った際に、地元の方がほぼ全員名前を挙げていたものである。このことから、浸透度はとても高いことがわかる。しかし、店主が広く発信していこうとしていないこともあり、高岡市外となると認知度はガクンと下がってしまう。よって、昔ながらの地域密着型のグルメといえる。

2-3.　高岡コロッケ

次に、B 級グルメの中では最も歴史の古い、高岡コロッケについて紹介したい。明治 33 年（1900 年）に「風玉堂」というパン屋（のちの「宝亭」）で出されたコロッケが高岡コロッケの元祖とされる。このころ、コロッケはまだナイフとフォークで食べる西洋料理と認識されていた。その後、戦後の食糧不足で十分な肉が手に入らなかったことから、ジャガイモと少しのひき肉で出来るコロッケを、高岡の中心部にあった神戸屋・西田本店・天狗乃肉林本店など 6 軒の精肉店が売り出すようになった。当時はタバコ 1 ピース（10 本）が 50 円だったが、コロッケは 1 個 7 円ほどであった。このように安価であったことから、コロッケは庶民の味として食卓に広がり、学校給食でも人気のメニューとなった。庶民の間で親しまれたコロッケは、ナイフとフォークで食べる西洋料理では、もうなくなっていた。（出典：ウェブサイト「高岡コロッケ～夢は揚げたて！」）

そんなコロッケが B 級グルメとして知られるようになったきっかけは、高岡市の若手職員の有志が運営するホームページ「カラーたかおか」だ。平成 16 年（2004 年）に、1 人当たりの消費量が全国有数であるコロッケで高岡のイメージアップをはかろうと、ホームページで発信を始めた。それに続いて、富山新聞が紙面に取り上げ、また平成 20 年（2008 年）に「高岡コロッケ実行委員会」が発足したことなどにより、高岡コロッケは一大ブームとなった。そして、高岡市出身の漫画家である藤子・F・不二雄の作

品『キテレツ大百科』のキャラクター「コロ助」がイメージキャラクターに起用された。

平成 25 年（2013 年）に茨城県で開催された「第 1 回全国コロッケフェスティバル」では、ブラックコロッケ（写真 3）とホワイトコロッケ（写真 4）で出場した。ブラックコロッケは、イカ墨と煮込みチャーシューを練り込んであり、富山ブラックラーメン風の濃いしょうゆ味である。ホワイトコロッケは、とろろ昆布とご飯を混ぜ込んであり、もちもちとした食感が特徴だ。この 2 つのコロッケは、来場者の人気投票で第 1 位を獲得するなど、イベントでの人気も博している。

写真 3.　ブラックコロッケ　　写真 4.　ホワイトコロッケ
（ウェブサイト「町屋 Café ASIAN えいじあん」より）

こうしてみると、高岡コロッケは B 級グルメとして順調に成功しているようにみえる。しかし、高岡駅周辺や商店街での聞き取り調査では、意外なことに「あまりコロッケは食べない」「高岡コロッケの基準がよくわからない」などの意見の方が多かった。高岡商工会議所経営支援課の石本真也さんにお話を伺ったところ、「高岡コロッケは市民に浸透する前に新聞などのメディアによりブームとなってしまいました。そのため、これが高岡コロッケという明確な定義がないので、他県から来られた方に『高岡コロッケはどこで食べられますか』と聞かれたときは正直困ってしまいます。高岡で売っているコロッケなら全部が高岡コロッケと言えてしまいますからね」と仰っていた。このように、イベントやメディアでは注目されるものの、市民に浸透していないことや定義の不確定さなどの課題があることがわかった。

2-4.　高岡グリーンラーメン

次に、高岡グリーンラーメン（以下グリーンラーメン）について紹介したい。企画・発案は、平成 24 年（2012 年）に高岡商工会議所青年部が行い、製造や販売は、翌平成 25 年（2013 年）に創業した合同会社グリーンプロダクツが行っている。グリーンラーメンとはその名の通り緑色のスープを使ったラーメンである。とんこつベースのスープに、ほうれん草をすりつぶして入れることでスープが緑色になる。ほうれん草は、高岡

市が県内シェア約 9 割を誇る野菜であることも使用の理由である。また、緑色は「高岡大仏」「高岡銅器」「古城公園」などを連想させることから高岡のイメージカラーであり、市のロゴマークにも使用されている。さらに、トッピングとして追加できる辛みそは、高岡の伝統産業である銅器を造る際の 1300℃の溶湯（ようとう）（液体状の金属）を前にしての作業で感じる暑さや発汗をイメージしている。（出典：「高岡グリーンラーメンホームページ」）

2014 年現在、高岡市内の飲食店 5 店舗でそれぞれオリジナルのグリーンラーメンを食べることができる。これらのオリジナルメニューは、グリーンラーメンの 3 つの定義、

①高岡産ほうれん草を使用すること

②見た目に緑であること

③名前を『高岡グリーンラーメン』とすること

を守って作られている。（出典：「高岡グリーンラーメンホームページ」）

他にも、食のイベントに参加したり、家でも食べられるようにパッケージ化して販売を行ったりなど、精力的に活動を行っている。しかし高岡コロッケ同様、市民の声は「聞いたことはあるが食べたことはない」「色が食欲をそそらない」などマイナスの意見がほとんどで、活動の成果が出ているかは疑問が残る。また、企画・発案を行った高岡商工会議所産業復興部の布村雅之さんにお話を伺ったところ、「グリーンラーメンはもはや高岡市だけでの取り組みではなくなっているのが現状です。富山県の取り組みで、『カラーフード』というものがあります。ブラックラーメンに始まり、グリーン・ブラウン・レッド・ホワイト・クリアなど、各市町村がそれぞれの特産品を使って開発を進めてきました。ですからグリーンラーメンはその一部であり、高岡のグルメというには弱いかもしれません。」と仰っていた。このように、グリーンラーメンは富山県のグルメという枠組みであることがわかり、高岡の町おこしや地域浸透には特化していないのではないかと思った。しかし、県全体でカラーフードという取り組みを行うことは地域おこしに有効であると感じ、また視覚的にインパクトがあるのでとても面白い発想だと思った。

写真 5.　高岡グリーンラーメン（ウェブサイト「富山県高岡グリーンラーメン」より）

2-5.　昆布スイーツ

次に、昆布スイーツについて紹介したい。高岡市、高岡商工会議所、高岡市農業協同組合などで組織する「高岡食のブランド推進実行委員会」が高岡市における新しい食のブランドづくりを目指し、「高岡昆布百選」という企画を進めた。その第 2 弾が、昆布スイーツだ。この企画は、北前船による北海道との貿易により生まれた富山の昆布文化にあやかって、平成 24 年（2012 年）に始められた。総務省の家計調査によると、富山県の 1 世帯当たりの昆布の消費額は、調査開始から 2012 年まで 53 年間 1 位を維持していたほどである[21]。（出典：統計局ホームページ）このことから、富山県に昆布文化が深く浸透していることがわかる。

「高岡昆布百選」の第 1 弾は、「高岡昆布飯」だ。昆布飯には、以下の 5 つの定義がある。

①高岡産コシヒカリを使っていること
②昆布を使っていること
③複数の品数で構成されていること
④地産地消にこだわっていること
⑤価格が 1500 円以内であること（ウェブサイト「高岡昆布百選」より）

この定義に従って、高岡市内の飲食店ではオリジナルの昆布飯を売り出している。例えば、「越中膳所 海の神山の神 高岡店」では 999 円で「高岡昆布飯定食」を販売している（写真 6）。中身は、昆布むすび・昆布冷やし茶碗蒸し・昆布〆刺身・山菜と五箇山豆腐の昆布〆・昆布シウマイ・吸い物・小鉢の 7 品だ。昆布飯は、高岡の伝統と歴史から生まれたおもてなし料理であり、少し格式の高い料理となっている。ターゲットとしては観光客や年配層であった。

写真 6.　高岡昆布飯定食
（ウェブサイト「高岡昆布百選 高岡昆布飯・高岡昆布スイーツ」より）

[21] 2013 年に京都府が初めて 1 位となった。

そして第 2 弾として、今回取り上げた『昆布スイーツ』が打ち出された。昆布スイーツの定義は、以下の 4 つである。
①高岡市内の店舗で提供すること
②和洋を問わず菓子に類するものであること
③昆布を使っていること
④地産地消にこだわっていること（ウェブサイト「高岡昆布百選」より）

これも昆布飯と同様に、各店舗でオリジナルの昆布スイーツが売り出された。昆布マカロンや昆布パフェなど、アイデア溢れるスイーツが多く登場した。中でも、「19HITOYASUMI（一休）戸出店」の「高岡昆布ジェラート」（図 7）は全国放送のテレビ番組で取り上げられたことにより大ヒットし、全国から注文が殺到したそうだ。スイーツとしての甘さと、昆布のしょっぱさが合わさった程よい甘じょっぱさが、ターゲットにしていた若者から年配の方まで幅広い世代にうけたようだ。

さらに第 3 弾として、「昆布弁当」が打ち出された。これは、北陸新幹線開業に伴い、駅弁として広げていきたいという狙いがある。また、「弁当にすれば昆布飯を家で食べたいという声にも応えることができる」とも、商工会議所の布村さんは話していた。

写真 7.　高岡昆布ジェラート　　写真 8.　高岡昆布愛彩弁当
（ウェブサイト「高岡昆布百選　高岡昆布飯・高岡昆布スイーツ」より）

これらの「高岡昆布百選」、特に昆布スイーツについて調査を行ったところ、市民の方から「おぼろ昆布や昆布だしなど、普段の料理にも昆布はよく使うし昆布文化は昔から高岡に染みついていると思う」「昆布のパンやラスクは美味しいけど、ジェラートは食べたいと思わない」という意見が出た。また、高岡に昔からある昆布店、「塩谷昆布店」の方に話を聞くと、「うちは昆布を昆布のまま売っているだけだから昆布コロッケとか昆布スイーツとかは知らない。グルメと言われてもコロッケとも言えないし、宮田のたい焼きくらいかな」と仰っていた。このように、市が力を入れて取り組んでいる熱量と、地域の生産者や販売者、消費者の反応度は大きな差があるように感じた。「高岡昆布百選」のように、毎年新しい企画を推進していくことは、どんどん勢いもつきター

ゲットを変えることもできる、などの利点もあるが、その一方で、逆に地域に浸透することが難しくなるという欠点もあるかもしれないと思った。

2-6.　高岡流お好み焼きととまる

最後に、ととまるについて紹介したい。「高岡流お好み焼きととまる」（通称ととまる）は、魚のすり身を使ったお好み焼きだ。富山県では、昔からスーパーなどで生のすり身が販売されており、食卓にもよく並ぶおなじみの食材として親しまれてきた。その魚のすり身の上に昆布をのせた、高タンパク低カロリーのお好み焼きとなっている。ととまるの「とと」とは魚の幼児語で、ととを丸くして焼くことから「ととまる」と名付けられた。ととまるの定義は、以下の 5 つである。

①商品名に「高岡流お好み焼きととまる」を使用すること
②すり身を使用すること
③昆布を使用すること
④鉄板で焼くこと（フライパン可）
⑤丸い形であること（出典：ウェブサイト「飲食店経営サポートとやま」）

この定義を守りながら、高岡駅周辺の飲食店ではオリジナルのととまるを提供している。例としては、高岡駅前ビルウイングウイング内「Jacasse」で出されているととまるである。このととまるは、イタリアン風にアレンジされており、見た目も味もピザのようだった（写真 9）。Jacasse では、ととまるは昼のメニューに載せず、需要の高い夜のみ出している。お好み焼きとはいえ、主食というより酒のつまみという感覚で親しまれているようだ。

写真 9.　Jacasse 風ととまる（筆者撮影）

このように、飲食店にととまるの提供を促すなどの普及活動をはじめ、ととまるを企画・運営している団体は、「飲食店経営サポートとやま」（以下飲サポ）である。飲サポは、富山県内に事業所を持つ若手経営者が集まった団体で、飲食店の企画・開発・デザイン・運営・PR などのプロデュースを行える環境を整えるなど、繁盛店創りのサポー

トを行っている。飲サポは、平成 22 年（2010 年）に発足し、同年にととまるが企画され、翌年に販売が開始された。新幹線開業に向け、「大阪のように飲食店が元気な街は人が流れてくるし、元気な街になる」という考えのもと、飲食店経営者が一丸となって高岡を盛り上げて人を呼ぼう、と企画されたのがととまるであった。

ととまるは、高岡の他の B 級グルメよりも PR 活動に熱を入れている印象を受けた。具体的には、

・飲食店でのオリジナルととまるの提供
・イベントの開催およびイベントへの出展
・テーマソング、マスコットキャラクターの作成
・ととまるマップの作成
・小中学校給食への導入

などである。特にイベント出展は、ほぼ毎月県内外で精力的に行っており、過去に優勝経験もあるほどの人気グルメになっている。こうした人気を得るために、様々なイベント戦略が考えられている。その詳細については、後の節で述べていきたい。また、イベント出展だけではなく開催も行っている。平成 23 年（2011 年）から毎年、「ととまるグランプリ」というイベントを行い、各店舗オリジナルのととまるの中からナンバーワンを決めている。ととまるマップとは、市内でととまるが提供されている店舗が記された地図である（図 1）。

図 1.　ととまるマップ（ウェブサイト「飲食店経営サポートとやま」より）

小中学校給食への導入は、平成 26 年（2014 年）5 月に開始された。現在、高岡市内の全ての小中学校で 5 月と 11 月の年 2 回行われている。通常のととまるではなく、市学校栄養職員研究会が考案した、「にこにことととまる」という直径 7cm ほどのミニととまるが出されている。子どもたちの健康の為に、キャベツ・にんじん・ニラ・生シイタケ・玉ねぎなどたくさんの野菜が使用されている。また、ととまるが出された日の給食

時間には、高岡出身の歌手、島かおりが歌う、ととまるのテーマソング「ととまるちゃん☆」が流れるという PR もされている。

このように精力的に PR 活動を行っているととまるであるが、市民への浸透度はどうなのだろうか。高岡駅周辺での聞き取り調査では、「すり身は昔から家で食べていたし、外で食べるほどではない」「聞いたことはあるけれど、高岡のグルメと言われてもあまりピンとこない」という意見があるなど、他の B 級グルメ同様まだあまり浸透しているとは言えなかった。しかし、イベントに来ている人は「新聞で見てととまるを食べに来た」という人も見られ、小学生は「みんなととまる大好きやし、ととまるの歌みんな歌えるよ」と話していた。イベント人気と、一般市民への浸透には少しずれがあるのかもしれないと感じた。

2-7. 老舗グルメと B 級グルメの比較

これまで紹介してきた、老舗グルメと B 級グルメを比較してみたい（表 3）。

表 3. 老舗グルメと B 級グルメの比較

	老舗グルメ	B 級グルメ
宣伝活動	行っていない	精力的に行っている
創業してからの期間	長い	短い
浸透地域	狭い（市内）	広い（県内外）
提供店舗	1 店舗	市内多店舗
地元の認知度・浸透度	高い	低い

表 3 にあるように、同じグルメといっても B 級グルメと老舗グルメとでは様々な違いがあることがわかる。B 級グルメは、創業してから間もないために認知度が低いという短所がある。その短所を補うために、提供店舗を拡大や、イベントへ出展したりなどの宣伝活動に力を入れている。逆に老舗グルメは、創業してからの期間が長いため、既に市内での認知度も人気も獲得しているので、宣伝活動を自発的に行う必要がない。また、ターゲットの違いもあることが調査を通してわかった。B 級グルメは、県内はもちろん、県外もターゲットにすることで高岡に人を呼ぼう、高岡の知名度を上げよう、としていることがわかる。そのこともあって、現時点では県外の知名度やイベントでの知名度が高まる一方で市内の知名度はいまいちなのかもしれない。逆に老舗グルメは、ターゲットが市内住民であるために、口コミで十分なお客さんが来るのだと考えられる。

このように、B 級グルメと老舗グルメは目的やターゲットなどが異なるため、市内の浸透度だけでは一概にどちらが良いかはいえない。しかし、どの店主も「高岡を食で元気にしたい」という思いは持っていたので、高岡のグルメが一丸となって街を元気にしてほしいという願いを持った。

3. イベントに強いととまる

3-1. イベントでの実績

この章では､3節の最後に紹介したととまるの宣伝活動について詳しく見ていきたい。先に述べたように、ととまるは高岡の他のＢ級グルメよりも、宣伝活動に力を入れていることが聞き取り調査を通してわかった。中でも、イベントへの出展は特に精力的に行っているように感じる。

表 4. ととまるのイベント入賞実績

	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年
T-1 グランプリ	準優勝	準優勝	優勝	準優勝
食の祭典 in ぎふ郡上	3 位	準優勝	優勝	
食の祭典 inTAKAOKA		優勝	優勝	

表 4 にあるように、ととまるは県内外のイベントで優勝経験があり、人気を得ていることが分かる。現在の高岡のＢ級グルメの中でも、イベントに強いという特徴を持っているといえるだろう。では、実際にイベントではどのような存在で、人気を得る戦略はあるのか。これらの疑問を解決すべく、2014 年の「T-1 グランプリ」と「食の祭典 in ぎふ郡上」にととまるのボランティアとして参加し、販売する立場から調査を行った。

3-2. T-1 グランプリ

イベント概要

私が参加した 1 つ目のイベントは、8 月 24 日（日）に富山県総合運動公園陸上競技場で開催された､「第 4 回　T-1 グランプリ～県内の 10 市町のご当地グルメ大集結！～」である。T－1 グランプリの「T」とは、富山の頭文字からきている。また、T-1 グランプリはカターレ富山が設定した「市町村サンクスデー」の中の、「ホームタウンデー」で毎年 1 回行われる。「市町村サンクスデー」とは、カターレ富山の J リーグ公式戦ホームゲームにおいて、カターレ富山と各市町村の連携を強化し、試合会場において当該市町村が PR を行うものだ。その中の「ホームタウンデー」では、県内全ての市町村を対象としている。

調査当日は、カターレ富山とロアッソ熊本の試合が行われ、多くのサポーターが訪れる中、試合会場前に各市町村の屋台がずらりと並んでいた。その中央に投票箱が設置されており、出店にて購入時に渡される金色のバーを、美味しいと思ったご当地グルメに投票する。その総重量が最も重かったご当地グルメが、優勝となる。結果発表は、試合

のハーフタイム時にグラウンドにて行われる。また、各市町村のマスコットキャラクターが集まっており、熊本県のマスコットキャラクター「くまモン」も会場に来ていた（写真 10）。

写真 10.　T-1 グランプリの会場の様子
（ウェブサイト「高岡流お好み焼きととまる　まちおこし委員会ブログ」より）

T-1 グランプリの開催は今年で 4 回目である。これまでの結果は、表 5 にある通りだ。

表 5.　T－1 グランプリのこれまでの結果

第 1 回 (2011 年)	優勝	深層水入白エビ どんどん焼き（滑川市）	準優勝	高岡流お好み焼き ととまる（高岡市）
第 2 回 (2012 年)	優勝	深層水入白エビ どんどん焼き（滑川市）	準優勝	高岡流お好み焼き ととまる（高岡市）
第 3 回 (2013 年)	優勝	高岡流お好み焼き ととまる（高岡市）	準優勝	深層水入白エビ どんどん焼き（滑川市）

このように、ととまるは第 1 回・第 2 回と惜しくも準優勝に終わっており、昨年悲願の優勝を果たした。今年も優勝すれば、2 連覇となる。また、第 1 回・第 2 回優勝、昨年準優勝の、滑川市の「深層水入り白エビどんどん焼き」は今年も出展しており、優勝奪還がかかっている。

出展グルメ

今回は、県内 10 市町村から 24 のグルメが出展された（表 6）。

表 6.　2014 年 T－1 グランプリ出展グルメ（50 音順）

市町村名	商品名	出店者	価格
射水市	ます寿司ロール	有限会社　丸龍庵	300 円
	笹っ子（ます）	有限会社　丸龍庵	150 円
魚津市	蜃気楼お好み焼き	魚津ごっつお倶楽部	300 円
	かまぼこ串焼き	魚津ごっつお倶楽部	300 円
小矢部市	火牛コロッケ	メルヘンコロッケ亭	200 円
	メルギューくん焼	越前町協同組合	150 円
	おやべホワイトラーメン	おやべ商店	600 円
上市町	薬膳カレーパン	上市町観光協会	200 円
	竹炭生姜アイス	株式会社ガスラ	300 円
	大岩メグスリノキアイス	大岩空感株式会社	300 円
黒部市	手盛りジェラート S/W	くろべ牧場　まきばの風	350/450 円
	宇奈月地ビール	宇奈月ビール株式会社	500 円
	宇奈月地ビールコロッケ	宇奈月ビール株式会社	300 円
高岡市	T-1 ととまるデラックス	飲食店経営サポートとやま	400 円
富山市	白えびコロッケ	岩瀬カナル会館	270 円
	三角どらやき	岩瀬カナル会館	200 円
滑川市	深層水入白エビどんどん焼	(有)とやまふるさとセンター	200 円
	深層水入甘エビどんどん焼	(有)とやまふるさとセンター	200 円
	深層水仕込み油淋鶏	(有)とやまふるさとセンター	200 円
南砺市	岩魚・鮎の塩焼き	道の駅福光	450 円
	どじょう・鯰蒲焼	道の駅福光	150/250 円
	冷やしそば・うどん	道の駅福光	300 円
入善町	入善ブラウンラーメン	合同会社善商	700 円
	入善レッドラーメン	合同会社善商	700 円

イベントに参加して

章のはじめに述べたように、私は今回ととまるのブースの販売スタッフとしてイベントに参加した。現在イベントで出しているととまるには、イカのすり身を使った「イカまる」、イカまるにベーコンと卵を乗せた「イカまるデラックス」、トビウオのすり身を使った「トビまる」の 3 種類がある。今回は、イカまるデラックスのみの販売で、通常価格 500 円を 400 円に値下げして挑んだ。ブースには、接客を担当する売り子・ととまる（魚のすり身）を茹でる人・ととまるを焼く人・ととまるに昆布や鰹節のトッピングをする人・列の最後尾に立ち、お客さんを呼び込む人、の 5 つの役割があった。私はその中で、売り子を担当した。

ととまるのブースの前に、昨年度優勝の看板とトロフィーがあることもあり、販売開始早々行列ができた。サポーターの方以外にも、家族やカップルで来ている方も多く、「ととまるが食べたくて来た」という方もたくさんいた。ホームゲームのイベント、というのはもちろん、T-1 グランプリ自体がイベントとして認知されていることが感じられた。

販売中は、お客さんを待たせないよう、なるべく早く提供できるように心がけていた。すると、飲サポの山澤規和さんに「行列が人を呼ぶから、できるだけ行列を絶やさないようにゆっくり提供してね。お客さんに早くしてって言われるかもしれないから、売り子は大変なんだけど」と言われた。そう言われて他のブースを見てみると、お客さんがいない所と行列ができている所に二極化していた。そして、お客さんは行列ができているブースに多く流れていた。よく、「行列のできるラーメン屋」が話題になることがあるように、どのグルメを食べるか迷っているお客さんからすると、行列は美味しさを表す指標になるのだと思う。山澤さんからの言葉を受けてからは、行列を絶やさないことに気を付けながら、ととまるに投票してもらえるように精一杯の接客をした。

写真 11.　ブースの外観（写真 11～13 筆者撮影）

写真 12.　茹で場と焼き場

写真 13.　トッピングの様子

イベントの途中、メインステージでクマもんと富山県内のマスコットキャラクターが集まって写真を撮るコーナーや、「クマもん体操」をマスコットキャラクターみんなでするコーナーがあった。それを見て思ったことは、クマもんの人気がとても高いということだ。お客さんは皆クマもんと写真を撮りたがっており、クマもんの集客力が飛び抜けていた。ゆるキャラに特別詳しくなくても、クマもんのことは知っている人が多い。どうしてここまで人気があるのか疑問に思ったが、実際にクマもんを見て、見た目が可愛いのはもちろん、「面白い」ことも大きなポイントであると感じた。クマもんは話すことはできないが、サポーターのお姉さんとの息ぴったりのやりとりがとても面白く、クマもんがお客さんの近くに行ったり、自由奔放な行動をとったりすると会場からは笑いが起こっていた（写真 14）。

写真 14.　クマもん体操の様子（筆者撮影）

ととまるにも「ととまるちゃん☆」というマスコットキャラクターがある（写真 15）。髪の毛が昆布・目が目玉焼き・頬がベーコン・口が紅生姜・髪留めが魚とイカでできている、という設定だ。ととまるちゃん☆は「ゆるキャラグランプリ 2014」にエントリーしており、結果は 703 位であった [22]。富山県のマスコットキャラクターの中で 100 位以内に入ったのは、28 位に「ジャンボ～ル三世（入善町）」（写真 16）、66 位に「メルギューくん・メルモモちゃん（小矢部市）」（写真 17）、99 位に「キラリン（滑川市）」（写真 18）である。この 3 つのマスコットキャラクターは、お客さんに積極的に近づいていったり、動きがコミカルだったりと人を引き寄せる魅力があるように感じた。また、マスコットキャラクターが店頭にいることによる集客力は大きく、特に子どもの目を引いている様子が見られた。

[22]総エントリー数 1699 体（ご当地ゆるキャラ：1168 体、企業ゆるキャラ 531 体）

写真 15.　ととまるちゃん（筆者撮影）

写真 16.　ジャンボ～ル 3 世（筆者撮影）

写真 17.　メルギューくん・メルモモちゃん

写真 18.　キラリン

（ウェブサイト「ゆるキャラグランプリ　オフィシャルウェブサイト」より）

投票が終了し、結果発表が試合のハーフタイム中にグラウンドで行われた。表彰式には各グルメのスタッフとマスコットキャラクターが出ることになっており、私も山澤さんと一緒にグラウンドに同行し、ととまるちゃん☆のサポートを行った。

結果は、ととまるは惜しくも準優勝に終わった。優勝は昨年準優勝の「深層水入白エビどんどん焼き（滑川市）」であった。山澤さんをはじめ、飲サポのメンバーは連覇できなかったことに悔しさを見せていた。

イベント後には高岡市の「Jacasse」にて打ち上げが行われた。打ち上げはここで行うことがほとんどらしく、お店の方ともとても仲が良さそうだった。その打ち上げ中に、飲サポ代表の鎌谷隆一さんが「どんどん焼きは単価 200 円、うちは単価 400 円。やっぱり安い方に客は流れる。でもこっちも材料費とぎりぎりでやっとるからなぁ。魚津の蜃気楼お好み焼きは 300 円で出してきたし、どうしたもんか」と話していた。やはり

価格や、お好み焼き同士、やきそば同士など同じ料理の場合に、他店と比較されることなどで売れ行きに影響が出てくるのだとわかった。価格の話が出る中でも、「それでも味は落としたくないし、味には自信を持っている」と話されていた。

今回富山県内のイベントに参加し、ととまるは1、2を争う人気グルメだと感じた。ととまる目当てに来るお客さんもいるほどで、イベントに関心のある方からの人気や知名度は上々であった。また、店頭に優勝トロフィーや優勝ボードがあることによる集客力が大きいことも感じたので、優勝できるかできないかは今後に大きく影響するのだとわかった。

3-3. 第6回食の祭典 in ぎふ郡上 2014

イベント概要

2つ目に参加したイベントは、9月20日（土）・21日（日）に岐阜県郡上市の郡上市役所大和庁舎前で行われた、「第6回食の祭典 in ぎふ郡上 2014」である。このイベントは、東海北陸自動車道沿線の市町村が自慢料理を持って集まり、人気投票で競い合うというものだ。投票は、美味しいと思ったグルメの投票箱に箸を投じるという方法で行われる。食のイベントの投票方法としてはよく用いられる方法である。投票箱がゴミ箱になっており、会場内に箸が捨てられることを防ぐ効果もある。グランプリは、東海北陸自動車道沿線部門と郡上市内部門からそれぞれ選ばれる。また、投票対象ではないスイーツコーナーや弁当コーナー、特別出店コーナーもある。ととまるは前回のグランプリのため、特別出店コーナーでの参加であった。

表7　食の祭典 in ぎふ郡上 2014 出展グルメ（50音順）

【東海北陸自動車道沿線部門】

市町村名	商品名	出展団体名	価格
愛知県			
一宮市	いちのみやサンド	一宮モーニング協議会	400円
富山県			
射水市	ます寿しサンド	有限会社 丸龍庵	300円
高岡市	ブラックコロッケ ホワイトコロッケ	町屋 cafeASIAN	2個 500円
南砺市	なんなんまぶまぶ	ゆたかーず	400円
岐阜県			
各務原市	豚キムチ焼きそば	キムチ日本一の都市研究会	400円
岐阜市	餃子丼	（株）イオス 餃子道	400円
関市	板取川（いたどりがわ）のニジマス唐揚げ 上之保（かみのほ）ゆず胡椒味	関サービスエリア	300円 300円

高山市	ピッツァ・フリット	（株）ポテンシャル農業研究会	400 円
富加町	黒米五平餅	半布里道場（はにゅうり）	300 円
飛騨市	ひだコロッケ	ひだコロッケ本舗	200 円
美濃市	伊作さんの鮎飯	瓢麓苑（ひょうろくえん）	400 円
美濃加茂市	美濃加茂やきそば	美濃加茂やきそば復刻会	300 円

【郡上市内部門】

商品名	出店団体名	価格
あゆ幸楽	郡上鮎の朴葉ずし普及会	400 円
インドカレー＆ジビエ（鹿肉入り）	郡上調理師会和良支部	300 円
郡上鮎にゅうめん	郡上調理師会白鳥支部	300 円
米粉クレープ	郡上調理師会大和支部	400 円
ジビエコロッケ	郡上やまと獣肉利活用推進協議会	200 円
猪（チョ）～ビンビン餃子スティック	山里の会	2 個 300 円
ひるがのパンケーキ	G Free Gujo	300 円

イベントに参加して

今回の出展では、イカまる・イカまるデラックス・トビまるの 3 種類、かき氷、スムージーを販売した。気温が高い時期には、かき氷やスムージー、ビールなども一緒に販売することによって売れ行きが伸びるようだ。今回は両日ともに気温が高く、かき氷とスムージーは初日で完売するほどであった。

私は、前回に引き続き売り子を担当した。販売は両日ともに 10:00～16:00 の間で行われ、販売開始とともに多くのお客さんが来場した。T-1 グランプリの時も行列はできていたが、今回はさらに長蛇のものとなり、お昼休憩以外はずっと販売作業が続くほどの人気であった。ととまるを買いに来たお客さんに、ととまるのことを知っているか聞いたところ、「昨日の新聞に載っていたから、ととまるを食べたくて来たよ。去年も食べて、美味しかったからね」と仰っていた。新聞を見て来た、という方や、毎年食の祭典に来ているためにととまるを知っているという方が多かった。また、ととまるを知らない方の購入理由は、去年のグランプリだと知ったから、人気があるみたいだから、魚のすり身のお好み焼きというのが気になった、という声があった。新聞に掲載されたのは、去年の実績があってこそのものであり、人気だと思われたのは長い行列があったからである。また、魚のすり身を使っているという珍しさもお客さんを惹きつける魅力の１つなのだと思った。

さらに、他の出店のスタッフの方もととまるを買いに来ることがあったり、スタッフ同士の繋がりも形成されたりもしていた。

写真 19.　行列最後尾からの様子（筆者撮影）　写真 20.　焼き場の様子（筆者撮影）

写真 21.　売り場テント内の様子（飲サポの方撮影）

食の祭典では、グルメ対決以外にも、ステージにて郷土芸能の演奏・キャラクターショー・カレー早食い大会・食育 PR などが行われた。このように様々なイベントを催すことにより、グルメを買って帰るのではなく、会場でイベントを見ながら食べることに繋がり、より多くのグルメの購入や、会場に長時間滞在することにも繋がるのだと思った。

2 日間のイベントが終了し、ステージにて結果発表が行われた。結果は、東海北陸自動車道沿線部門 1 位は「板取川のニジマス唐揚げ 上之保ゆず胡椒味」、2 位は「美濃加茂やきそば」、3 位は「ひだコロッケ」であった。郡上市内部門は優勝が「猪（チョ）～ビンビン餃子スティック」であった。また、特別賞には「ひるがのパンケーキ」が選ばれた。

ととまるは、1 日 600 食ずつ 1200 食見込みで準備していたが、初日だけで 755 食が売れた。そこで、2 日目にイカまるデラックス 300 食、イカまる・トビまるを 50 食ずつ追加したところ、2 日目は 845 食が売れ、2 日間合計で 1600 食を販売した。このイベントへの出展は今年で 4 回目であり、1、2 年目は 1300 食売り、3 年目は 1200 食売って優勝、そして今年は特別枠で 1600 食売ったことになり、飲サポの方々は予想以上

の売れ行きに驚きながら、もっと準備していればもっと売れたかもしれない、とも仰っていた。

食のイベントは、2 日間で 41000 人が訪れ、大盛況であった。また、県外の様々なグルメが集結する中で、他のグルメよりも価格が高いにも関わらず、ととまるの人気が高いということがわかった。価格も売れ行きに大きく影響するポイントではあるが、最重要ではないのではないか、と思った。

1 日目の夕飯と、2 日目の打ち上げで飲サポの方から様々な話を聞くことが出来た。打ち上げは、高岡市の「Jacasse」にて、同日に太閤山で行われていたイベントに出展していた方たちと合同で行われた。夕飯と打ち上げの際にお聞きしたのは、よく言われる苦情として「主食なのに大きさが小さい」ということだ。こうした声に対して、代表の鎌谷さんは「普通のお好み焼きならもっと大きくもっと安く出来るが、ととまるは魚のすり身だからどうしても単価が高くなってしまう。だから、これ以上大きくも安くもできない」と仰っていた。また、客引きの大切さについても話されており、「最後尾」と書かれたプラカードを持って行列の最後尾に立ち、客引きをすることによる効果はとても大きいようだ。

さらに、これからの課題としては、「続けることに意味があると思う。地元に浸透させるには時間が必要で、今までたくさんのグルメが生まれてはだめになっていくのを見てきた。続けていくのが難しい。それでもととまるを始めた時、1・2 年目は市からの目も厳しかったが、3 年目になると補助金が出るなどして認められてきたことを感じる。だから、続けることはこれからも大切にしていきたい」と鎌谷さんは仰っていた。

イベント戦略

いくつか前述したが、ととまるにはイベント戦略がある。その戦略を、「食のイベント in ぎふ郡上」での役割ごとに紹介していきたい。まず、店の外でお客様に声かけをする役である。これは、単なる呼び込みではなく、他店や他のお客様に迷惑がかからないような行列の整理や商品説明、日常会話などをしてお客さんを惹きつける役目だ。お客様が全く並ばない時や、炎天下、真冬は辛く大変な担当だといえる。当日は、飲サポの杉山知義さんが声かけをしていた。杉山さんはとても明るく話し上手な方で、初めて会うお客様とも楽しく会話を弾ませていた。杉山さんが外に出られない時は、行列も減っていたので、とても重要な役割だと感じた。

次に、私が担当した売り子である。鎌谷さんは、接客には女性を積極的に入れたい、と仰っている。元気な接客をすることが 1 番大事で、加えて親切さ、丁寧さが求められる。店頭の最もお客様から見える位置にいるため、そうした接客がお客様の目に映り、お買い求め頂ける結果に繋がる。

次に、鎌谷さんと山澤さんが担当していた湯煎場・焼き場である。ここで気をつけているのは、行列が行列を生むため、列が途切れないようにわざとゆっくり茹で、焼き上

げることだ。

最後に、店構えである。横断幕、のぼり旗、パネル、ＰＯＰなどを使って、どこよりも目立つように、ということを意識している。また、昼間でも照明を点けるなどの工夫もしている。他店と比べても、ととまるの店構えは特に目立っており、郡上のイベントでは会場に入ってすぐ見える位置にテントを設けることが出来たこともあり、集客の助けとなっていた。

このように、役割や店構えなど１つ１つに戦略を持つことによって、ととまるはイベントで人気を得ることが出来ているのだと思った。

4.　成功要因の検討

高岡のグルメの中で私が注目したととまるは、第 2 節で述べた B 級グルメの成功要因をどれくらい満たしているのか、検討してみる。

まず、成功要因①B 級グルメとしての商品性にインパクトがあること、から考えていきたい。1 つ目の、「味のインパクト」は、お好み焼きの味付けであることもあり、ソースやマヨネーズといった濃いめの調味料を使用しており、満たしているといえる。2 つ目の、「ユニークさ・意外性」は、普通のお好み焼きではなく、魚のすり身を使用していることや、馴染みのあるイカだけでなく、トビウオを使用したメニューも考案している点から、満たしているといえる。3 つ目の、「ファストフードで手軽さがあり、安価であること」は、すぐ食べられるくらいの大きさなので手軽さはあるが、他のＢ級グルメに比べると価格が高いため、この点は満たしているとはいえない。

次に、成功要因②食の地域性が高いこと、について考えたい。1 つ目の、「地元の多くの飲食店で提供されている」は、高岡市内の飲食店 35 店舗でオリジナルのととまるを提供しているため、満たしているといえる。2 つ目の、「地域の特徴ある食材を使っている」は、富山県が全国有数の消費量を誇る昆布を使用しているため、満たしているといえる。3 つ目の、「歴史やエピソードがある」は、ととまる自体は新しいグルメであるので歴史は浅いが、富山県で昔から親しまれている魚のすり身を使用しているため、やや満たしているといえる。4 つ目の、「地域ブランド形成に繋がるネーミングがある」は、「高岡流お好み焼き　ととまる」という風に、市名を入れていることや、あまり聞き馴染みのない「ととまる」というネーミングにしていることから、満たしているといえる。

最後に、成功要因③地域活性化を推進する組織力があること、について考えたい。1 つ目の、「優れたリーダーがいる」は、飲食店経営サポートとやまの代表である鎌谷さんがリーダーに当たる。鎌谷さんは、積極的に各地にととまるの PR 活動に行かれており、メンバーからの信頼も厚く、優れたリーダーであることが、ボランティア活動を通して実際に感じられた。よって、満たしているといえる。2 つ目の、「話題づくりとな

る企画力とイベント展開力がある」は、各店舗のオリジナルのととまるが人気投票で競う、「ととまるグランプリ」というイベントを開催していたり、イベント出展を精力的に行ったりしていることから、満たしているといえる。3 つ目の、「地域経営体制が構築されている」は、市からの補助金が出ていたり、県内イベントでのＰＲを行っていたりはするのだが、人々への浸透度があまり高くないので、満たしているとはいえない。

このように、ととまるは 10 項目中 7 項目を満たしており、B 級グルメとしては成功例に近いものだと考えられる。そして、価格や、地域への浸透が課題であると分かった。また、調査時に山澤さんがこれからの課題として、「お客様を飽きさせない新たな提案」を挙げていた。新しい企画の考案、価格の再検討、そして鎌谷さんが仰っていた、継続することが、地域への浸透につながり、B 級グルメで地域活性化が成功したと言えるようになるのではないか、と考える。

5.　まとめ

これまで、B 級グルメの地域活性化について調査を行ってきた。高岡には昔からある老舗グルメと、最近生まれた B 級グルメとがあり、それらはターゲットや宣伝活動、地元の浸透度などは異なるが、作り手の高岡を食で盛り上げたいという気持ちは共通していることがわかった。また、高岡の B 級グルメの中でもととまるは、イベント出展に力を入れており、県内外のイベントで高岡のアピールに励んでいる。また、これからのととまるには新企画の考案・価格の再検討・継続が課題であった。これらのことを、調査を通して知ることができた。

高岡の様々なグルメの調査や、ととまるのイベント出展への参加により、食は、イベントに出ることで人と人とを繋ぎ、その土地へ行ってみたくなるきっかけになる、ということを感じた。また、実際に飲食店経営サポートとやまの方と販売をはじめとするイベント活動に取り組んでみて、改めて人の優しさ、温かさを肌で感じた。いきなりととまるの活動に参加したい、と訪ねて行った私を受け入れてくださり、イベント中や打ち上げも、とても楽しく過ごすことができた。食の町おこしについての調査として参加したはずが、いつの間にか飲サポのメンバーの 1 人だという気持ちで活動している自分がいた。それもすべて、飲サポの方々が、明るく、チームワークや人の繋がりを大事にする皆さんであったからだと思う。

こんな素敵な方々の力があれば、高岡駅周辺に活気が戻る日もそう遠くないだろう。

謝辞

本調査を進めるにあたり、多くの方々から貴重なお話をお伺いすることが出来ました。特に、ととまる調査に協力してくださった飲食店経営サポートとやまの皆様には、本当にお世話になりました。他にも、商店街の方、商工会議所の方、駅周辺飲食店の方など、

調査にご協力いただいた全ての方々に、この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

参考文献

佐藤茂幸 、2011 年、『「食」による地域活性化に関する研究―山梨県大月市の郷土料理を事例として』、日本経営診断学会論集 11 p110-116
田沢竜次 、1985 年、『東京グルメ通信 B 級グルメの逆襲』、主婦と生活社
田中章雄 、2008 年、『事例で学ぶ！地域ブランドの成功法則 33』、光文社 p76-98

参考にしたウェブサイト

「飲食店経営サポートとやま」
（http://www.insapo.com/；2014 年 11 月 25 日閲覧）
「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1 グランプリ公式サイト」
（http://b-1grandprix.com/；2014 年 12 月 6 日閲覧）
「高岡グリーンラーメン」
（http://takaoka-greenproducts.co.jp/；2014 年 11 月 20 日閲覧）
「高岡コロッケ～夢は揚げたて！」
（http://www.taka-coro.com/；2014 年 11 月 20 日閲覧）
「高岡昆布百選」
（http://www.takaoka-konbu.net/；2014 年 12 月 6 日閲覧）
「食べログ」
（http://tabelog.com/toyama/A1604/A160401/16003954/；2014 年 11 月 20 日閲覧）
「統計局ホームページ」
（http://www.stat.go.jp/data/kakei/index.htm；2014 年 11 月 20 日閲覧）
「町屋 Café ASIAN えいじあん」
（http://asian.dqs103.com/；2014 年 11 月 20 日閲覧）
「ゆるキャラグランプリ オフィシャルウェブサイト」
（http://www.yurugp.jp/；2014 年 12 月 1 日閲覧）

地域コミュニティーが作る高岡七夕まつり

船越　楓

はじめに

高岡市の祭りを何か調査したいと思い、数ある祭りの中からこの「七夕まつり」を調査対象に選んだ。高岡にはほかにも、御車山祭りや高岡万葉まつりなどの特徴的な祭りがあるが、私がこの祭りを選んだのは、ながくこの地で行われてきた他のまつりに比べて、大々的に宣伝するわけでもない、その庶民的な雰囲気に魅かれたからである。宣伝範囲や知名度に関しては調査していく中で私の思い違いなども多々出て来たのであるが、ともかくも商店街の人々に聞いた第一印象はそんな風だったのである。

1. 高岡市中心商店街の歴史

高岡七夕まつりは、高岡市中心商店街で毎年行われる。ここでいう中心商店街とは、JR高岡駅の北側に位置する末広町商店街（写真 1）、御旅屋（おたや）商店街（写真 2）、末広坂商店街、片原町商店街の 4 つからなる商店街のことである（図 1）。

図 1.　高岡市中心商店街の位置（2015.1.31 google マップより作成）

写真 1．末広町商店街

写真 2．御旅屋商店街

1-1.　商店街の発展

はじめに、七夕まつりのメイン会場となる高岡市中心商店街の歴史を概観する。この節の記述は『末広町史』に依拠するものである。

表１．　高岡市中心部の歴史

1609(慶長 14)	加賀藩２代目藩主前田利長、関野ヶ原と呼ばれた台地を高岡と命名
1611 頃	高岡の外郭として、重臣たちの屋敷のあった台地に御旅屋（藩直営旅館）を建設（ただし約 100 年で使用停止）
1615(元和元)	町民の足止めを布令。城下町から商工の町へ（廃城により城下町がなくなると、残った城の濠・塁を役に立てられないため）
1898(明治 31)	高岡駅開業
1900(明治 33).	二番町の桶屋から失火し大火に。その後、街区整備や道路拡張がなされ、市街地の景観が一新。 駅前は類焼を免れ、他町から移住者続出。市街化が進む。
1904(明治 37)	末広町に商店が現れる。
1927(昭和 2)	駅前の大木、七本杉の伐採
1929(昭和 4)	光慶寺、庫裡を移転
1930(昭和 5)	高岡市初、30 基の鈴蘭灯（街灯）の設置
1951(昭和 26)	高岡市商店街連盟 結成
1959(昭和 34)	高岡駅前広場を拡張
1966(昭和 41)	高岡駅改築
1969(昭和 44)	地下商店街の完成。42 店舗が一斉開業。

大正末期から昭和初期にかけて、末広通りは繁華街へと成長した。ただし、大正時代、末広商店街が大規模に発展しなかった理由として、通りの両側に昔ながらの建物や施設が多く残っていたことが挙げられる。通りの両側に運送業や問屋などが立地しており、これらの間に立地する小売りの商店は 10 店に満たなかった。

昭和に入り、動きが出始めた。まず昭和 2(1927)年に高岡駅前に昔からあった大木、「七本杉」が伐採された。このことで駅前の通りの景観が一気に開けた。この頃から、末広通りにあった建物が移転したり、敷地を貸店舗に提供したりするようになり、昭和 10 年代後半までに、通りに店舗がいくつか出現した。こうして末広通りに商店街として発展していく兆しが見え始めた。昭和 12(1937)年に、駅前の高岡新報社を改造し、高岡映画劇場が開業した。また末広通りと御旅屋町通りの十字路に鉄筋コンクリート 5 階建の丸越百貨店がオープンした。なお、この当時、発展し始めていたのは末広通りであり、御旅屋町は商店街としては未発展であった。

こうして徐々にその様子を変えつつあった末広通りであったが、昭和 26 年 10 月、ついに高岡市商店街連盟が結成された。高岡市も、戦後の復興期である昭和 26(1951)年～32 年にかけて重要幹線街路事業に、末広通りの画期的な改善計画を立案、実行していった。昭和 32 年度中には、御旅屋通り・片原町通りの街路・アーケードを完成させ、ここ一帯の商店街は様相が一新された。

なお、「商店街」とは小売商店街のことで、問屋街と対照の名称である。高岡商人は卸売業を誇りとしてきた伝統があり、一方で小売業を軽視する傾向があった。そのため、商店街として発展する以前の末広町・坂下町・旅篭町は、卸売業者が主軸をなしていた。卸売業が小売業より上位と認識されていたのは、交通の便が良くない時代に、卸売で販売経路を広げる方が商売を大きくするのに向いていたためである。

しかし徐々に交通機関が発達し、小売業の商圏は拡大した。また、経済成長により生活水準も向上し、優良商品を中核都市に求める風潮が庶民の間に広がった。このことも手伝って、卸売業者が中心だった末広通りも、ついに全店舗が小売専業へと移行したのである。

つまり高度経済成長期は商店街の発展に重要な役割を果たしたといえる。一般庶民の生活水準が向上したことで、庶民の間に消費ブームが到来し、商店街は空前の盛況を迎えることとなった。

昭和 26 年の高岡市商店街連盟結成や、市の重要幹線街路事業の完成後、末広町では様々な行事が新しく誕生した。イベント、飾り付け、歩行者天国など全国共通のものから高岡市独特の発想のものまで多岐にわたり、商店街の風景も一変し、通りを大いに賑わわせた。なかでも七夕まつりはその好例であった。

2.　まつりの変遷

2-1.　七夕まつりの由来

日本における七夕まつりは、はるか昔、奈良時代に中国から伝わった「乞巧奠（きこうでん）」が、日本にもともとあった「棚機（たなばた）」という神事と合わさってできたものであるといわれている。「乞巧奠」とは中国で機織や裁縫が上達するようにと願う風習であり、今でも七夕に願い事を書いた短冊をつけるのは、この「上達するように願う風習」からきているようである。また「棚機」は古い禊行事で、乙女が着物を織って神さまにお供えし、豊作を祈ったり穢れをはらったものとされている。この棚機は、仏教の伝来の後はお盆を迎える準備として7月7日の夜に行われるようになったといわれている。これら2つの風習が合わさってできたのが、今の七夕（たなばた）という行事であるという。

こうして日本にできた七夕であるが、これは高岡においては男児誕生を祝う風習ともされており、その年に男児が生まれた家は、特に大きく立派な七夕飾りを立てたという。その飾りだけに何十万というお金を掛けたこともあったという話まで聞いた。

しかしそれもずいぶん以前の話で、前項で述べたとおり、商店街の発展と共に、この七夕という行事は高岡市中心部の商店街において、商店の宣伝や威勢の誇示として大きく派手に発展してきた。そのため、末広通りなどの商店街には各協賛会社の社名などが大きくはいった飾りつきの大きな七夕[23]がたくさん飾られるようになったのである。[24]

写真 3.　まつり当日の末広通り

[23] 本文中では、青竹に短冊などの飾り付けをしたものを「七夕」、飾り付けをしていない状態のものを「竹」としている。

[24] 本節の出典は、実行委員会の方からの聞き取りと、「京都地主神社　七夕の歴史・由来（http://www.jishujinja.or.jp/tanabata/yurai/）　2015年2月1日閲覧」による。

2-2. まつりを取り巻く状況の変化

現在、高岡七夕まつり全体を統括しているのは末広開発株式会社に設置された七夕まつり実行委員会である。しかしかつて、まつりのポスター製作依頼や宣伝等の売り込みも含め、まつり全体を統括していたのは役所と高岡市観光協会であった。その頃から末広開発株式会社の中に七夕まつり実行委員会は設置されており、当時は事務局として動いていた。そして役所や観光協会と並立して、七夕まつりは各自治会も主体となって行っていたのである。つまり町全体が、あちこちで思い思いにまつりを行っていたということである。

しかし七夕まつりの運営に関しては、2005(平成 17)年に観光協会から七夕まつり実行委員会に仕事が移譲された。その理由は、そもそも観光協会が高岡市の宣伝や PR 活動、他団体との交流を目的とした組織であり、まつりの準備期間にも、主たる目的である宣伝活動に力を入れられるようにするためである。七夕まつり実行委員会がまつりを運営するようになった経緯は以上のようであった。

また、七夕の立てられる場所についても変化がある。現在は、まつりの盛り上がりは末広商店街付近を中心としており、大きな七夕も駅前に集中して立てられている。しかしかつては、駅前から少し離れた川原町や博労町、金屋町あたりが最も盛んに七夕を立てていた（図 2)。以前はその地域で製造業や卸売業が盛んで、物流の拠点となっていたことが理由の一つに挙げられるかもしれない。しかし、昭和 30 年に末広通りの拡幅工事が終了し、昭和 36 年に駅前のショッピングモールが完成するなど、次第に駅前の商店街が発達し、駅前をもっと盛り上げようという機運が高まった。結果、昭和 50 年前後から、目に見えて駅前が人寄せを始めたという。昭和 48 年から末広町商盛会の発案で、15～20 メートルもある超大型の七夕を立てるようになったのがよい例である。この頃から、それまで各町内で各々自由に行っていた七夕という風習を、商業ベースのイベントに変えていく流れ、「すべてを末広周辺に集め、一括して七夕まつりをしよう」という流れが起きた。こうして徐々に末広町商店街や駅前に人が集まるようになり、まつりの賑わいも駅前に収束されていったのである。

もうひとつ、まつりに関して大きく変わったことと言えば、七夕流しが行われないようになったことである。まつり後の七夕をどう処分するかについては、ここしばらくでずいぶんと紆余曲折があったようである。七夕まつりで飾り終えた七夕は、以前は中心商店街の近所を流れる千保川（せんぼがわ）に流してそのまま放置していたのであるが、世間で環境問題や河川の汚染などが言われるようになり、七夕を川に流すことに対して批判的な意見が出されるようになった。そこで数年間は、七夕を千保川の上流で流し、下流に水上舞台を設置し回収するという、形式だけでも七夕流しを行える努力がなされた時期があった。しかし平成 10 年に、結局は「流さない」という結論に至り、現在はまつりが終わった後に、七夕は業者が回収し、竹の一部は再利用されるも、多くはトラックで処理場

へ運ばれていくようになっている。一時期行われていた、下流で回収するという方法がとられないようになった理由としては、「人件費などの費用がかかる」ためと、「そもそも七夕流しをする人が減ってきていた」ということがあげられるそうである。

また、現在まつりを行う費用は市からの補助金と、協賛各社からの協賛金でまかなわれている。

図 2.　かつての七夕まつりの範囲（google マップより作成）

3.　過去（20～30 年前より以前）のまつりの様子

ともかくも、そうやって駅前の商店街で盛り上がってきていた高岡七夕まつりであるが、末広町と御旅屋通り付近の人々に聞き取り調査を行った結果、得られた話から見えてきたのは、筆者が調査を行った 2014 年から数えておよそ 20～25 年ほど前、つまり平成になった頃から、徐々にまつりの規模が小さくなってきた、と人々が感じているということである。直接的な要因は、日本経済でバブルがはじけたからだ、という話をい

くつか聞いた。お金をかけて大規模な祭りを行っていた商店街にとって影響は大きかっただろう。

多くの人の話で共通するのは、「七夕まつりのときに通りを飾る七夕は規模も本数も、年々貧弱になってきている」ということである。「昔はもっとこう…わさあぁって、でえ～っかい七夕で、本当に『七夕のトンネル』が通りにできていたんやけどねぇ…」と、聞く人聞く人が皆、身振り手振りを交えて話してくれたのは興味深かった。

大半の七夕が五色の短冊で飾られている中で、ひとつだけ短冊も飾りも赤一色で統一されている珍しい七夕があった。店の方に聞いてみると、これは個人で立てたもので、「以前の高岡の七夕は赤かった！」と聞いて赤く飾ってみた、という話であった。

この赤い七夕は、商店街にある喫茶店の七夕である。ご夫婦で経営しておられるのだが、お二人とも高岡生まれの高岡育ちだそうである。奥さんの記憶でも、20 数年ほど前と比べて、やはりまつりの規模はずいぶん小さくなったと感じているらしい。「昔は七夕で、もう本当に赤いトンネルのようになっていて…」と、ここでも同じような話が聞けた。どの年代の方に聞いても、まつりの様子に関しては同じような印象を語ってくださる。冊子『写真で見る昭和の高岡』には、昭和 55 年の頃の高岡七夕まつりの様子が白黒写真で小さく載っている。末広通りに並ぶ七夕の様子を写した写真であるが、たしかに聞き取りで聞いたとおり、筆者が 2014 年に見た七夕より、七夕のサイズも大きく、本数も多いように思われた。

以降、この節の記述は、主に商店街での聞き取りの内容に基づいている。

2-1.　七夕飾り

高岡の七夕は「青竹に赤提灯」といわれた。加えて「あんどん」あるいは「はちまき」とも呼ばれる、紙製の箱が竹の下部に取り付けられる。このあんどんは、形は竹をくるむような箱型であるが、取り付ける数などに決まりはなく、飾り付ける人の好みで自由に飾り付けていた。冊子『写真で見る昭和の高岡』には白黒ではあるが、昭和 9 年に撮られた、初期の形態と思われる七夕の写真が載っている。青竹に丸い提灯が何十個も取り付けられ、他にはあんどんと短冊という、あっさりとした飾りつけである。しかし七夕の大きさは電柱よりも高く、質素というよりは豪快な印象を受ける。現在の七夕は、さらに派手な吹流しなども飾り付けられる。

また、次節で記述するように、七夕は男児誕生の祝いとして立てられるものであったが、誕生祝いに限らず、新築祝いとして立てたり、あるいは各町の大店（おおだな）さんが互いの七夕の大きさを競い合って、大きく立派な七夕を立てたりもしていた。

このように毎年の風習として立てられていた七夕であるが、商業イベントとして盛んになると、あんどんに各商店の店の名前を書いて宣伝とするなど、うまく活用していったようである。

2-2.　男児誕生祝い

高岡の七夕まつりは「男の子の誕生を祝うまつり」として行われていた。そのため、その年に男の子が生まれた家はひときわ大きく立派な七夕を立てた。聞き取りをした50～60代女性で「うちは長男の（生まれた）ときにやった（七夕を立てた）んだけども…」と話す方がおられる一方で、「私のところは女の子しかいなかったから、七夕は立てたことがない」という方もおられて、30，40年ほど前までは本当に「七夕は男児誕生の祝いの行事」だったのだということがうかがえた。ただし、今日の高岡ではそういった意味を込めて立派な七夕が立てられている様子は見られない。単に「七夕まつりの時期だから」という意味あいで立てているようである。「まあ、昔はそうだったかもしれないけど、私の家はあんまりそういう（男児誕生を祝うという意味を込める）のは、気にせずに立てるね」と快活に話す主婦の方もおられた。

2-3.　まつりの屋台

お茶屋さんをやっておられる老夫婦に聞いたところ、この店を含め商店街で店をやっている人たちは、まつりの期間、夜になると自分たちの店の目の前に屋台を出していたという。売るものは、今の祭りでは定番となっている「お好み焼き」や「カキ氷」などの特別なまつりの食べ物などではなく、普段店で売っている商品を、そのまま屋台に出していたそうである。服屋なら服を、靴屋なら靴を、お茶屋さんならお茶を、というわけだ。実際このお店では、茶店のようなことをして、お茶とお菓子を出していたそうだ。もちろんこの頃は、こういった屋台はまつりのあいだ、7日間ずっと出していた。まつりのあいだは人通りがあり、屋台の商品も面白いほどよく売れた、と懐かしそうに語る。

しかしそれも今から20年か、せいぜい十数年前までの話である。今では屋台どころか、まつり期間中でさえ、商店街の店は午後6時ごろに通常通り閉店となる。最初、実際に何年前から屋台を出さないようになったのかという質問に、曖昧そうな様子でかなり考え込んでおられたが、ご主人と相談しながら「20年前くらいだねぇ…」と寂しそうな、しかし割り切った様子の笑顔で答えてくださった。

2-4.　七夕流し

ある女性の話してくれた経験談では、40年程前、男の子が生まれたある家が大きな七夕を立て、まつりが終わった後にはその七夕を解体して組みなおし、神輿のような形に仕上げ直したという。それをどうするのかといえば、男たち数人で肩に担ぎ、缶（話から一斗缶かと思われる）をガンガン打ち鳴らして、千保川（せんぼがわ）までその組み直した七夕を流しに行ったのだという。まつりが終わった日の夜中に、手当たり次第に鳴り物を打ち

鳴らして騒ぎながら、男たちが川へ七夕を流しに行く様子[25]は毎年の風物詩であったそうである。この話をしてくれた女性方、お二人で「そうだそうだ！　そんなこともあったわぁ。うるさかったよねぇ！」と思い出しながらはしゃいでおられた。「最近は静かになったねぇ」と、思い出してふと寂しくなったのだろうか、それでも表情は懐かしそうであった。

ここでは男性が担いで行っていたようであるが、「川に流しに行くのは男の役目」というような決まりは特になかったそうだ。「だって私、子供の付き添いで、小学校で集めた七夕を川まで運ぶのに、保護者としてついて行ったことあるし」とは、上述と同じく女性のコメントである。「要は、まつりにかこつけてお酒飲んで騒ぎたかったのよ～、男たちは！」と、いたずらっ子のような顔をしてひそひそと話してくれたのが印象的であった。

七夕を神輿の形に組みなおす場面は、聞き取りをしたこの女性もそのときの一度きりしか見なかったそうであるが、七夕まつりが盛んであった頃には、各町内で何年も続けられていた習慣であった。まつりで使った七夕を何本か集め、切って井桁を組み、神輿の形にして上にあんどんを乗せ、複数人で担いで川まで運んでいた。七夕として飾っていたものをそのままの形で流すか、組み直して流すかというだけの違いである。これを実行していたのは、町や団体といった組織だったものではなく、「ある店の人々」や「ある会社の若衆グループ」といった、いわば有志のような人々であって、各自が好き好きにやっていたことである。

「昔は七夕まつりが終わったら、子供たちとそこの（近所を流れる）千保川に七夕を流しに行ってたんだけどねぇ」とは、これまた聞き取りをした方々のほぼ全員が口をそろえて語ってくれたことである。ただし聞き取り対象者は、基本的に 30 歳以上である。

3.　現在のまつりの様子

まつりは今も昔も、8 月 1 日から 7 日にかけての 1 週間行われる。まつりの飾りつけや屋台などメインは末広通りであり、ついで御旅屋通りにも七夕の飾りつけがなされる。七夕に使われる竹は、小さいもので高さ 5，6 メートル、大きいものは 15，16 メートルほどもあり、それぞれに赤い提灯とカラフルな短冊、さらに吹流しなど、各々趣向を凝らした様々な飾りつけがされている。

七夕が立てられる主な場所は、末広通り、御旅屋通り、末広坂、片原町通りのそれぞれの通りの両側、つまり歩道と車道の間、それと駅構内、駅前のバスロータリー、ウィングウィング前広場などである。駅前のバスロータリーには高さ 20 メートルの「ジャンボ七夕」が、ウィングウィング前広場には「願い短冊の杜」がある。提灯の灯りは夕方 5 時ごろに一斉にともされる。さらに夕方から夜にかけて、末広通りとウィングウィ

[25]太田久夫監修『ふるさと高岡 ： 保存版』(郷土出版社 ，2009.6)に写真掲載。

ング前広場を主として屋台が出る。お好み焼き、綿あめ、カステラ、たこ焼き、金魚すくい、飴細工、あんばやし[26]、射的など、よく見るお祭りの屋台である。また駅構内や通りの各所、御旅屋通りの広場などで様々なイベントが開催される。7 日間のうち、イベントは土日を含む 3，4 日間に集中して行われる。今年は 8 月 2 日と 3 日が土日であったため、イベントも一週間のうちの初めの 1 日から 4 日の 4 日間に集中していた。人出も最初の 4 日間に比べると後半の 3 日間はやや少なく感じられた。

また、まつりの当日になっても、まつりの案内などが書かれたビラが一枚も通りに貼られていないので、祭りに来た人は不便しないのかと気になったが、イベント案内チラシは北日本新聞のチラシとして折り込まれ、すでに各家庭へ配布されているとのことであった。つまり、外からの客のためのまつりではなく、町内の人が楽しむまつりの表れととれるだろうか。

駅前の「願い短冊の杜（もり）」と「ジャンボ七夕」は商工会議所が準備、設置したものである。現在、高岡七夕まつりの運営には前述した七夕まつり実行委員会と、商工会議所青年部地域活性化委員会が大きく関わっている。七夕まつり実行委員会はまつり全体を統括するとともに、「マイ七夕コンテスト」というイベントを開催している。このイベントに関しては後述するとして、まずは、願い短冊の杜とジャンボ七夕を用意した商工会議所青年部の役割について説明していく。

3-1.　「願い短冊の杜」と「ジャンボ七夕」

商工会議所青年部地域活性化委員会が関わるのは主に 2 つである。ひとつ目は「願い短冊の杜」を作ることである（写真 4、5）。

写真 4.　願い短冊の杜　外から（昼）

写真 5.　願い短冊の杜　中から（夜）

[26] あんばやし…薄い三角形の白こんにゃくを竹串にさし、生姜の利いた味噌ダレをかけたもの。富山県の郷土料理。

願い短冊の杜は、高岡市の全保育園･幼稚園･小学校の児童約 15,000 人から集めた合計約 2 万枚の、願い事の書かれた短冊が飾られたものである。この短冊は 6 月上旬に配布し、7 月上旬に回収する。その一方で笹の準備も進める。

まずは、作業がしやすいか、運搬車が入れるかなどの観点も含めて高岡で良い竹が切れる場所を調査し、候補地の土地所有者と交渉する。毎年違う場所を探すが、今年はたまたま去年と同じ場所（東海老坂（ひがしえびさか））での竹の採集となった。次に日付を決めて半日で竹 300 本を切る（2014 年は 7 月 20 日）。切った竹を、使えそうなものと不良品とに選別して、250 本を「願い短冊の杜」に使用する。杜に使うためには大きすぎるので、10m ほどもある竹は 3mほどに切りそろえる。こうして切り出した竹に各保育園などから集めた短冊を、委員会を中心に青年部会のメンバーで、2 日掛かりで飾りつける（2014 年は 7 月 26 日と 27 日）。飾り付けが終わった竹は、願い短冊の杜を組み立てる日まで、しばし保管される。

7 月 30、31 日に竹を保管場から運んでくる。高岡駅前とウィングウィング広場に、立体の上下 2 段ある足場を組む。この 2 段のうち、竹は上段に 120 本、下段に 160 本取り付ける。さらに提灯の明かりをともすため、電飾を取り付ける。そのうえでちょうちんや吹流しなどを飾り付ける。最後に「願い短冊の杜」と書かれた看板を立てて完成である。

さらに祭りの期間中も、駅前に訪れた人びとに短冊を渡し、願い事を書いてもらい、杜の七夕にどんどん飾り付けてもらっていた。

もうひとつは「ジャンボ七夕」である。これは去年までしばらく立てられていなかったのだが、今年 6 年ぶりに復活したものだという（写真 6）。

写真 6.　ジャンボ七夕の設置作業

ジャンボ七夕も他の七夕と同じように短冊、吹き流し、提灯で飾り付けられている。ここにつけられている短冊も願い事の書かれた短冊で、今年は氷見･砺波･射水の青年部、

高速道路が通っているつながりで、愛知県一宮、岐阜県関市の青年部、高岡の商工会議所メンバーという、かなり広い方面から集められた 800 枚以上と、空短冊 200 枚足らずの、計 1,000 枚がつけられている。

高さ約 20mのジャンボ七夕は、青年部が企画・短冊の回収・飾り付けを行い、業者が駅前への設置を行う。かつてはクレーンなどを借りてきて、設置も青年部が行っていたそうであるが、今は委託という形をとっているようである。

こうして用意された願い短冊の杜とジャンボ七夕はまつりの間の 7 日間飾られ、杜は最終日の夜に撤去作業が開始される。

今年は、まつりの最終日の夜 8 時ごろから急に雨が降り出し、9 時頃まで降り続いた。かなり激しい夕立であったために、祭りに来ていた人々も付近の屋根の下で雨宿りをしていたが、9 時頃雨が弱まると見るや、早々に帰宅し始めた。ちょうどまつりも 9 時で終わりであったため、人々が解散する中、商工会青年部で願い短冊の杜の解体作業を開始した。提灯を外して回収、電飾を消し、上下 2 段に取り付けられている七夕を男女十数名でひたすら外して回収する作業を繰り返していた。電飾と足場を残して七夕と看板のすべてを回収し終わるころには 11 時前になっていた。業者の方 2 名ほどが電飾の回収作業を行っていたが、今日の仕事を終えた青年部の人々はその場で缶ビールで打ち上げの乾杯をしていた。

夜が明けて翌 8 日は撤去作業のため、朝 6 時に集合。青年部会の構成員は昼間暇な人達ばかりではない。多少融通がきく人もいるのかもしれないが、みなで作業するのに都合のいいのは早朝なのかもしれない。現に石井さんも、夜に居酒屋を経営しておられるため、アルバイト店員がいる日はよいが、まつりの期間中で、夜まつりの運営に関わらなければならないときなどは、店を休みにした日もあったらしい。

8 日は、午前中からクレーンによって駅前広場のジャンボ七夕の解体作業が行われ、一方ではトラックで 7 日の夜に回収した、提灯以外の飾りがついたままの七夕を高岡のテクノドームという建物の裏の駐車場まで運搬する。七夕まつり実行委員会が撤収した七夕と一緒に産業廃棄物処理車両によって回収され運ばれていった。

一通りの仕事は青年部の人々で行うため、人件費はかかっていない。運搬車両やチェーンソー、のこぎりなどの必要な道具もできる限り青年部内で貸し借りを行い、できる限りの経費削減に努めている。

3-2. マイ七夕コンテスト

「七夕まつり実行委員会」は、御旅屋通りにある、末広開発株式会社　高岡町衆サロン　まちづくり事業部が担っている。今年は統括マネージャーの瀧根智志さんが中心となって運営しており、まつりの期間中、全体がうまく回るようあらゆる情報を統括している。実行委員会の動きについては、この瀧根さんにお話を伺った。

6 月ごろ、七夕まつりの飾りつけに関して、七夕まつり実行委員会が主催する「マイ

七夕コンテスト参加者募集」という行事のチラシを市役所で見かけた。参加費は、6 メートルのササ 1 本に付き 500 円で、参加者に年齢や人数、地域などの制限はない。七夕まつりのササの飾りつけは、基本的に商店街の人々や協賛各社の社員がやるが、「一般からも募集して飾り付けてもらおう」という趣旨のイベントで、2014 年が 3 年目である。

マイ七夕のために準備する竹は 40～50 本である。今年はほぼぴったりの申し込み数であったとのこと。私も参加することにした。以下、その日の様子を記す。

マイ七夕の飾りつけは 7 月 27 日に行われた。実行委員会は午前 10:30 に集合する。それとは別に、当日ボランティアで、マイ七夕の飾りつけと配置の手伝いをする人々がいる。この日は中学生と高校生が約 20 名、大学生 10 名弱、中高年の方が若干名の計 40 名ほどで、彼らは、実行委員の人から仕事の説明を受けるため午前 11:00 に集合する。すべての仕事が終わって解散するのは午後 5 時ごろの予定である。

ササは申込 1 団体ごとに 1 本ずつ配られる。飾り付け参加者は午後 1 時に御旅屋通りの@パーク（アットパーク）に集合し、各自ササに、実行委員会から事前に配布された 5 色の短冊 100 枚に願い事を書いたものと、それぞれ持参した七夕飾りを自由に飾り付ける。飾り付けが終わり次第、各自解散となる。

七夕 1 本の飾り付けにつき 1 人～30 人と、申込人数の幅は広く、参加者は個人、店、団体、学校など様々である。七夕の飾りつけには、参加者グループの人数の多少にかかわらず、ボランティア学生が手伝いと説明のために待機している。

写真 7.　配布前の竹

写真 8.　飾り付けた筆者のグループの竹

私は友人と 2 人で 1 本申し込んだのだが、1 人、2 人で笹 1 本というのはだいぶ人数の少ないグループであったらしく、事前の説明会の時に「特にここのグループと○○さ

んのところは人数が少ないので、よくサポートしてあげるように」と注意喚起がなされていた。私の実家がある大阪でも 7 月 7 日の七夕の季節には七夕の飾りつけをしたものであるが、もっと竹が小さいものであったためか、2，3 人で 1 本飾り付けることが普通だという感覚であったので、この注意喚起は意外であった。

ここで実際に飾り付け始めてみて、実行委員会側から心配されていた理由がわかった。ほかのグループは、何かのサークルや、商店の従業員らや、ひとつの学校という単位で、10 人～30 人ほどで 1 グループとして参加しているのが大半だったのである。しかし、私たちの飾りつけにも、他のグループと同様、学生ボランティアの方が 2 人サポートについてくれていたため、悩むこともなくすいすいと作業は進んだ。

飾り付けはまず、配布された電球を取り付けることから始める。そのうえに、同じく配布された赤い提灯をくくりつける。各竹に 10 個ずつである。ここでバランス良く、格好良く提灯を取り付けるには少し慣れが必要そうである。提灯を取り付けたあとは、各自が事前に用意してきた短冊や笹飾りを好きなように飾っていく。この飾りには各グループ個性が出ており、周りを見渡しているだけでも十分におもしろかった。

私も折り紙やカラーテープなどで、「こんな飾りを作っていたような…」と昔を思い出しながらいくつか作っていったのであるが、なにせ私の知っているものよりずっと大きな竹で、飾り付け終わって、飾り自体が随分小さく、数も少なかったな、と感じた。ほかのグループは毎年の常連参加者であるのか、飾りも本当に大きく、また派手で、吹流しなど、ひとつの飾りが人の身長ほどもあるものもざらであった。また各団体名を大きく書いた飾りもたくさん付いていて、なるほど商業まつりとして、宣伝効果もありそうだと思えた。私を含め、どのグループもだいたい小 1 時間から 2 時間ほどで飾りつけを完了していた。意外とあっさり終わるものである。ここまでで、マイ七夕の飾り付けに申し込んだ参加者たちは解散となる。

つぎに、こうして飾り終えた七夕は、順次ボランティアの学生たちによって末広通りや御旅屋通りなど、七夕の設置場所へと運ばれていく。ただでさえ 6 メートルという高さのある竹に、それだけ派手な飾りがわんさか付いているのである。1 本 1 本の重さはどれほどになるのであろうか。1 本の運搬に男女合わせて 5，6 人掛りであった。できるだけ持ち上げて運ぶ努力はしていたが、どうにも長くて重い。飾りも提灯のような小さいものばかりではなく、特に、笹の上部に取り付けられた吹流しなどは、それだけを持つ人で 2 人ほどは必要としていた。また、飾りつけをしてみて気づいたことであるが、笹の葉はチクチクと肌に刺さる。痛いというほどではないが、こそばゆいというか、痛痒いもので、飾りつけの最中も、葉をどのように避けて飾りつけようかということに苦労した。運ぶ時も同じであろう。なかなか大変そうである。

七夕の設置場所には男性が 3 人ほどで待ち構えていた。学生が運んできた七夕は彼らに引き渡され、慣れた手つきで、杭や柱に縛りつけられていく。七夕を立てる場所は、歩道と車道の間の柵や、アーケードの柱などで、車通りも多いため、ふらつくわけにも

いかない。男性 3 人で声を掛け合って針金やロープでしっかりと固定していった。1 本の設置が終わればまたすぐに次の七夕、次の七夕と、運ばれてくるものを次々に立てていっていた。彼らだけで何本設置したかはわからないが、少なくとも道路の片側の分は設置していたように思う。なかなかに体力の要りそうな作業だと見ていて思った。こうして立てられた七夕は、まつりの期間が終了するまでここに飾られる。

写真 9.　七夕の運搬（6 人がかり）

写真 10.　七夕の設置（4 人がかり）

ところでこのボランティアをしてくれていた学生の一部は志貴野高校の生徒で、私のグループの補助をしてくれたのは 1 年生の女子生徒 2 名であった。なぜこれに参加したのか聞いてみると、このボランティア活動は、学校の授業の一環であるという返事が返ってきた。当日の活動に参加し、その後報告書を提出することで、学校の授業の単位がもらえるらしく、学校から生徒に募集をかけ、任意で参加するというものらしい。運搬作業まで終わった彼女らに感想を聞いてみたところ、「単位になるならと思ってやったけど、こんなにしんどいとは…。来年もあるのかぁ、もーいやだなぁ！」と疲れた顔で、苦笑しながら軽口めいて友達と話合っていた。

このあと、この日飾り付け作業をした@パークや御旅屋通りの掃除と後片付けを済ませて、夕方の 5 時ごろ、この日の作業は無事終了した。七夕まつり実行委員会の人々もほっと一息である。この日飾り付けたのは「マイ七夕」という、イベントで一般に飾りつけを募集したもので、全体の七夕のほんの一部である。マイ七夕の設置場所は、末広通りの片側(写真 11)と、御旅屋通りの片側(写真 12)である。このあとの、8 月 1 日までの 2，3 日の間にすべての七夕の設置を完了させていくとのことであった。

写真 11.　マイ七夕（末広通り）

写真 12.　マイ七夕（御旅屋通り）

3-3.　七夕の設置

マイ七夕に参加した 2 日後に、再びこの通りを訪れてみると、飾り付けがされていなかった他の通りにも次々に七夕が立てられており、一気に街の風景が七夕まつりの雰囲気へと様変わりしていた。

マイ七夕に使われる竹を含む、全ての七夕用の竹は、七夕まつり実行委員会が一括で発注する[27]。毎年、5，6 メートルの小ぶりの竹は富山県氷見市や高岡市西山に、20 メートルの大きな竹[28]は九州に発注する。竹が各町の住民に配られるまでの過程は、まず各町内会が自分たちの町内に必要な竹の数を実行委員会に連絡、その数量に合わせて実行委員会が発注、届いた竹を実行委員会が各町内会に分配し、町内会から各町へ配られる。その配られた竹を町内の住民が飾り付けて店先に立てる、という流れになっている。

ある居酒屋の前にも、細いが 6，7 メートル程ありそうな高さの七夕が立てられていた。先日のマイ七夕の設置は、専門の業者らしき慣れた手つきの男性方がやっておられたので、これらも同じかと思ったが、店のご主人によると、この店の前の七夕も含め商店街の七夕は全部、その店の方々が自分たちで飾り付け、立てているとのことであった。立てるのは難しかったり大変だったりしないかという質問には、「いや～別に。毎年のことだからもう慣れている」とのこと。2，3 人もいれば十分できるそうである。

竹につける短冊に願い事を書いたり、吹流しなどの飾り付けを作ったりするのは商店側に完全に任されているため、店によって飾り付け具合にも差が出る。全体的に、マイ七夕で飾られた七夕に比べると少々飾りつけがあっさりしているという印象を受けた。あるお店の方は「最初に配られたササは大きくて立派でね…。『こんな大きいの、飾り付けできない！』って、こっそり小さいササと交換してきたのよ」と、困ったような笑みを浮かべて話してくれた。

---

27 但し、願い短冊の杜とジャンボ七夕に使われる竹は除く。これらは商工会議所青年部が用意する。

28 ジャンボ七夕以外の、末広町商店街に立てる巨大七夕用。

また、まつりは主に末広通りで行われ、七夕飾りも御旅屋通りまでが賑やかであるが、末広坂商店街や片原町商店街、坂下町商店街など他の通りにも、小ぶりのものが多いものの、七夕が立てられる。片原町商店街のあるお店で話を聞いてみたところ、「七夕まつり」に関して予想以上に「他人事」という様子であった。「毎年、笹が配られるから一応飾るけど…まつりはあっちの末広通りでやってるよ」という返答をもらった。たしかに七夕に付けられた短冊も空短冊が多い。近年ではまつりの熱は末広通りに集中しているというのは明らかである。

末広通りの延長線上の通りであるという点で、片原町商店街よりはまつりの中心地に近い末広坂商店街であるが、ここもやはり末広通りなどと比べると、飾られている七夕の規模が小さい。今年の末広坂商店街の竹は、町内会の決定で、去年より小さい竹になったとのこと。「今年はお金がないからか…まぁ理由はよくは分からないけれども…」という声も、ちらっと聞いた。マイ七夕は、そうやってだんだん小さくなってきている七夕まつりを、また盛り上げようとしてやっているのである。

こうして前日までに通りの飾りつけは大体終わったのである。

3-4. 高岡七夕まつり当日

表 2. 2014 年 高岡七夕まつりの日程（抜粋）

8 月 1～3 日	オタヤ通りフリーマーケット
8 月 1～4 日	ウイングウイング前広場「ビアガーデン」
8 月 1～7 日	ウイングウイング前広場「願い短冊の杜」、 オタヤ通り・クルン高岡・地下街・イオンモール高岡「願い短冊コーナー」、 駅構内「手作り行灯展示」
8 月 2～3 日	末広通り・午後 5:00～8:45「歩行者天国」 ウイングウイング高岡・クルン地下街「ホーウルウルの森＆ショップ」

8 月 1 日。高岡の駅前などにも特に「七夕まつり」を宣伝するポスターの掲示はなく、午後 3 時前から末広通りに屋台が設置され始めたが、まだまだ日のあるうちは人通りもまばらであった。

まつりの初日である 1 日目は、オープニングとして駅構内に幅 5 メートルほどの小さな舞台が組まれ、あみたん娘の挨拶や、七夕につけられた提灯の点灯式、ハープ演奏に、射水市のアイドルグループ「アイム Z」の出演など、様々なゲストが登場した。アイム Z のメンバーの保護者であろうか、母親らしき人々が押し掛けた瞬間が一番観客が多かったように思う。午後 6 時 30 分から始まったこのオープニングは、午後 8 時 10 分に終了した。

このオープニングと同時並行で、午後 4 時から午後 7，8 時頃まで@パークの舞台で

も、様々なグループによるダンスが入れ代わり立ち代わり出演し続けた。こちらは、出演者が学生らしき人々が多いためか、観客も中学生や高校生が多く、観客数もほぼ増減せずといった様子であったように思う。

夕方からの、ウイングウイング前のビアガーデンはなかなかの賑わいであった。屋台もそれなりに人だかりができていた。屋台の人に聞くと「今日は初日だし、金曜（平日）だし、まあまあやわ」とのこと。翌日、翌々日（土・日）が一番忙しいだろうという。

2 日目の 8 月 2 日、イベントとしては、のど自慢大会やストリートバスケットなどが行われた。8 月 2 日の土曜日と、翌 8 月 3 日の日曜日の午後は、駅の地下街でホーウルウルの森とそのほかのショップが開かれる。これらは地上に出される「屋台」とは少し違った趣で、「ホーウルウルの森」とは、福祉のお店、アーティスト、商店による、作品展示や販売、ワークショップイベントなどをおこなう団体のことで、「ホーウルウルの森」という名称はイベント名としても使われており、「ホーウルウル」という言葉には「みんなが集まる・楽しくわいわいやる」というような意味がこめられている。また富山大学芸術文化学部の学生も、そこでワークショップを開いていた。

一方、ホーウルウルの森はウイングウイングビルの 1 階にも開店しており、午後いっぱい客の呼び込みをしていた。店は昼過ぎからやっていたが、お客が増え始めたのはやはり夜であった。午後 8 時に閉店の予定であったが、思いのほかお客が引かないため、結局閉店は午後 9 時となった。

ホーウルウルの森の方々にとっては「ウイングウイングビル内のお店」と「地下街のお店」、どちらも屋外ではない場所に店を出しているところにどうお客を引き込むかが課題だと話しておられたが、結果はなかなか難しいようである。

夜 9 時ごろ、ホーウルウルの森の屋台の撤収作業後、末広通りの人通りの様子を見に行ったが、歩行者天国もあってか、昨日と比べてかなり人出があるようだった。屋台の人も「今日はっ忙しいですねっもう閉店時間なんですけど…っ（人が途切れなくて）店閉められないっ」と、見るからに急がしそうであった。

写真 13.　ホーウルウルの森

写真 14.　「願い短冊の杜」とビアガーデン

ちょうど歩行者天国もビアガーデンも終わる時間で、パトカーが「歩行者の皆さん歩道に上がってくださーい」と何度も呼びかけながら、通りを何往復もしていた。時間が区切られた歩行者天国であるため仕方がないのは分かるが、おまつりの夜としてはなんとなく興醒めする終わりかただ、と感じてしまう瞬間であった。屋台も大半が 21:00 に閉まるので、人の波も御旅屋通りや末広通りから一気に駅へと流れ出した。

このようにして 3 日目の日曜日は、Kirare-Ma2014 や民謡踊り街流し、サマーナイトカクテルフェスタに、末広坂フェスタと、ぞくぞくとイベントが開催され続け、4 日目の月曜日には、平日にもかかわらず、納涼祭や JAZZ-Live、北日本新聞花火大会まで催される盛り上がり具合であった。人通りも、イベントのあるところに人だかり有り、といった様子で、普段とは比べ物にならないほどの夜の賑わいであった。5 日目の火曜日にもなると、大きなイベントはなくなってくるが、夕方から夜にかけて、相変わらず屋台は出続けるのである。

しかし 6 日目の水曜日。御旅屋通りが特に顕著と感じたが、まつり期間であることにも特に関係なく、商店街の店は軒並み「定休日」となっていた。屋台も少し数が減り、ビアガーデンもなくなっていた。午後 3 時、通りを歩くのは、小学生の集団や子連れの家族、下校時刻の制服姿の学生が少々といった具合である。しかし減ったとはいえ、まだ屋台もある程度残っており、午後 5 時を過ぎた頃から人通りはそれなりに増えた。浴衣姿の人達も意外とよく見かけるので、この近所の人々や学生にとっては、このくらい人の空いたタイミングで来るほうが、気楽にまつりを楽しめるのかもしれないと思った。

最終日の 7 日目、木曜日である。この日は午前 10 時 30 分～11 時 30 分に、射水神社にて、まつりの 1 週間でまつりに出向いた人々に書いてもらった「願い短冊」の御焚き上げをしてもらう。しかしこれは「高岡七夕まつり」とは直接的な関わりはない、神社としての神事である。

まつり最終日は、この御焚き上げ以外にはこれといった催し物もないが、まつりの最終日であり、8 月 7 日という日付でもあるためか、夕方から夜にかけての人通りもそれなりに多く、学生や子連れで駅前や、屋台の多い末広通りは賑わっていた。ウイングウイング前広場に設置された「願い短冊の杜」にも続々と願い事が書かれた短冊が飾り付けられていっていた。しかし前述した通り、せっかくの賑わいも、夜 8 時ごろ急に降り出した夕立で 40 分ほど軒下に足止めを食らった人々が、雨の降り止んだ隙を狙って一気に帰宅したことで、あっけなく解散してしまった。

こうして一週間に及ぶ高岡七夕まつりは終了した。駅前のジャンボ七夕と願い短冊の杜は、前述の通り商工会議所が、また末広通りなど他の場所の七夕は七夕まつり実行委員会が、雨の中、夜 9 時～11 時ごろまでかけて解体回収作業を行っていた。

8 月 8 日。天候は朝から雨が降り続き、昼ごろには大雨ともいえる荒れようであった。そんななか、実行委員会や商工会議所の人々などにより、早朝から、昨夜のササの回収解体作業の続きが行われていた。

回収された全ての七夕は、イオンモール高岡の裏にあるホールの駐車場に集められる。そして七夕まつり実行委員会の方々によって、七夕についた飾りの取り外し作業、ちょうちんの回収がなされる。飾りつけは町や商店街の人々と共同で行われたが、回収はこういった一部の人々だけでされるようである。こうして大きな飾りのはずされた竹のうち、10m以上もあるような大きな竹は、この後の処理をやりやすくするためか、のこぎりで細かく切って解体されていた。この作業は大体午前中に終わり、実行委員会の方々はここで解散、この後は業者に任せるようである。しばらくすると産業廃棄物回収車と作業に必要な工事車両が到着した。巨大なクレーンを使って、解体された竹をトラックに次々と積み込んでいく。しかし積み込んでも積み込んでも、駐車場に並べられたササはまだまだある。昼休みを挟んで、約 3 時間ほどササの積み込み作業は続いた。

午前中から始まった作業であるが、全て完了し最後のトラックがいなくなったのは夕方の 6 時頃であった。想像以上に手間と時間のかかる片付け作業である。しかし、街を飾り付けて準備したからには片付けも必須。ここまで全てが完了してやっと、「今年もまつりがおわった」といえるのである。

写真 15.　提灯の取り外し作業

写真 16.　積み込み作業

4.　調査を終えて

4-1.　まつりを続けるということ

この高岡七夕まつりは、商業まつりである。商店の人々が競って大きな七夕を飾っていたのであるから、もちろんまつりをやる主体、七夕を用意したり飾り立てたり、まつりを盛り上げたりするのは、かつては商店街の人々が行っていた。商店街の人々、つまりはそれぞれの町の自治会である。しかし次第に商店街の活気がなくなり、それぞれの店の売り上げも落ち込み、七夕まつりに掛けられる費用も徐々に減少してきた。まつりを行うというのはなかなかに気合と体力が必要だが、まつりを主導する人々の年齢が高くなってきてしまい、このように高齢になってくると体が言うことをきかない。しかし世代交代した若い者たちが地域のまつりに全力を注ぐかというと、そういうわけでもな

い。次第にまつりをやる側に精神的にも経済的にも衰えが生じ、それでもどうにかまつりを続けて行っている、というのが現状である。

もちろん商店街の人々がまったく何もしていない、やる気がない、というわけではない。御旅屋通りのとある商店のご主人は、「どうやったらまつりの期間、人が商店街に来て楽しくわいわいしてくれるか、毎年飽きずに来てくれるか…。これを考えてちょっとでも実行していけば、まつりはもっと盛り上げられるんや！　もっとまつりに関する話し合いの場で積極的に意見交換していかないかんのや！　今は誰も何も言わんから…」と熱く語ってくださった。数年前のまつりのときには、この御旅屋通りにおもちゃの線路を敷き、列車を走らせるという案を実行してみた結果、子供たちはわりと楽しんでくれたというお話もしてくださった。

また別のお店の奥さんは、毎年まつりの 3 日目あたりに開催される「末広通りストリートバスケット」というイベントを主催しておられる。今年も含め、毎年それなりに多くの人数が集まって、結構な盛り上がりを見せるイベントであるそうだ。

さらに前述で紹介した「ホーウルウルの森」という団体も、現在の中心人物は末広通りのさらに北に続く末広坂商店街にある喫茶店のご主人である。彼らは「七夕まつりを盛り上げる」ことを第一の目的とした団体ではないが、それでもまつりにワークショップや屋台を出しているという点では、まつり作りの一端を担い、盛り上げているといえる団体である。

調査を進めていく中で、このように商店街のあちこちに、まつりに活気を出そうとがんばっておられる方々がいる一方で、そういった力が十分に発揮しきれずに、まつりの大枠を実行委員会に頼ってしまっているという印象を受けた。七夕まつり実行委員会の瀧根さんも、商店街の人々が以前の盛り上がりと今とを比べて「寂しくなった」と話すだけで、「これからは自分たちで盛り上げていこう！」とする雰囲気がないことを懸念しておられる様子であった。

4-2.　まつりを体感する人々

第 3 節で、20 年ほど前のまつりの様子について語ってくれた喫茶店の、まつり期間中の店の様子については、まつりのあいだ客の数が極端に増えるということはないが、歩行者でふらっと入ってくる人は少し増えるとのことだった。逆に常連客は「この時期は混むから」と、あまり来なくなるらしい。つまり七夕まつりは、常連のお客より新規のお客が増える機会となっていると思う、ということであった。

フリーマーケットに出店していた方に、商店の方がまつりで屋台を出さないようになったのは何故かと尋ねると、「あぁ、みんな見るだけで買わんからなぁ！　だめだめ！」という返事で、今ではまつりの屋台で日用品などを購入する人はまずいないだろうと思わせられる言葉である。まつりに来ていた女子中学生に、まつりの楽しみは何かと尋ねたところ、「…屋台！」という答えが返ってきたが、彼女らのいう屋台は、たこ焼きや

綿アメのことであろう。買ってくれないお客を相手に、商店がわざわざ夜店を出すわけはないのである。

「七夕まつりでは、その日１日限りのまつりのイベントを楽しむだけではなく、その地域のコミュニティーを楽しんでほしい。まつりをやっている、その時間と空間を共有していることを意識してほしい」とは、七夕まつり実行委員会の瀧根さんの語りである。

普段の買い物を商店街でする人々は減ってきているということは、平時の商店街を歩いて少し話を聞けば筆者にも実感できた。日用品や衣服に至るまで、大概のものは大型スーパーやデパートで買えるため、多くの人々が商店街ではなくもはやそちらを利用するようになったためであろう。かつては、まつりの当日に、各商店が自分の店の商品を並べるだけで売れていた。しかし今日、まつりに来た人々がまつりの定番と言えるたこ焼きなどの食べ物の屋台にばかり行くのは、普段から商店街とのつながりがないことも関連があるのかもしれない。

まつりのときだけ商店街へ来る人々は、そもそも商店街と自分たちを繋ぐ人間関係を持たない。そのことが、まつりの楽しみ方や盛り上がり具合に影響を与えているのだ、と瀧根さんは話しておられた。

普段商店街に行かない人々には、そこに行きつけの店があるわけでもなく、立ち話をするような顔なじみの店の人がいるわけでもない。そのことがまつりの屋台にも影響を与え、売られる品も変化させていったのではないだろうか。まつりは、普段からあるコミュニティーで、普段と少し違った浮かれた雰囲気を楽しむことで、より盛り上がるものだったのかもしれない。

しかし、普段は訪れない商店街にも「七夕まつりを契機として人に集まってほしい」という思いから、人が見て楽しいように七夕を沢山立て、コミュニティーのない空間でまつりを楽しめるよう、もしくはそこにあるコミュニティーに入るきっかけになるよう、実行委員会を中心に様々なイベントや舞台を準備するのかもしれない。

5.　これからの高岡七夕まつり

ここ高岡の七夕まつりが衰退してきている理由は何であろうか。ひとつには現実的な問題もあるだろう。かつては賑わっていた商店街が賑わいをなくし、売り上げが出ないからまつりにお金をかける余裕もない。それでも、今のおじいさんやおばあさんの記憶にあるころからすでにあった、昔から続いてきた高岡のまつりがなくなるのはいやだからと、何とか同じように飾り付けて続けている。しかし、実際にお金のかかるまつりにお金をかけられないようになれば、まつりは目に見えて小規模になってくる。これでは毎年まつりを楽しみにしている人々も、以前の様子と比べてしまい、見劣りがするからと、あまりまつりにも来ないようになる。まつりの小規模化と共に来客数も減ってさらにまつりは寂しくなる。これでは負の連鎖である。

この衰退に歯止めをかけようと、実行委員会や他の人々がいろいろと工夫したり、まつりの期間中にイベントを開催したりしているのである。瀧根さんの話によると、七夕まつりのやり方に関しても、毎年アイデアを出しては試し、改善を繰り返してきたのだという。七夕を川に流さないようになった代わりに、短冊に風船を付けて飛ばしてみたり、ゴミにならないよう短冊の代わりに植物の種を付けて飛ばしてみたり。平成 18, 19 年頃には、燃やすということに落ち着いたという。2014 年は採用されていなかったが、七夕につける商店の広告を、紙ではなく電光掲示板に付け替えてテレビ CM のように流すことで広告としてみたり。ここ数年は、七夕につける提灯の明かりに使う電球を少しずつ LED のものに替えてみている。7 日間風雨にさらしてどこまで持つものか試験中だという。話し出せばきりが無いようで、ここに挙げたのはほんの一例である。

しかし第 4 節で瀧根さんが懸念したように、どれほどさまざまなアイデアを採用してまつりを盛り上げようとしても、「七夕まつり実行委員会」という存在と、商店街の人々を含む「住民」とが、完全に「まつりの主催者」と「お客」に分かれてしまっているということに少々問題があるようである。

もともと七夕まつりとは民衆が毎年の習慣として自分たちで七夕を飾っていたものである。この「高岡七夕まつり」も例外ではなく、商業まつりとして盛り上がってきた経緯があったとしても、やはり町の人々が、自分たちがやりたいからやる、大きく派手な飾り付けにしたいからお金をかける、という気持ちを持っておこなっていたのである。だとすれば今のように、ごく一部の人たちで、ここはお金を出すだけ、ここが全部を企画する、ここに回収作業を任してしまう、という人任せの分担作業にしてしまうなら、しかもそのほとんどに多くの住民たちは関わらずただまつり当日に見て回るだけなのだとすれば、まつりに対する気概も生まれてこないのではないだろうか。

今まつりを運営している七夕まつり実行委員会の方も、「今はこういうイベントのようなことを沢山しているけど、歩行者天国は 7 日間のうちのほんの 2 日間。個人的な理想としては、もっとマイ七夕に参加してくれる人を増やして、町中にもっとたくさん七夕を立てて、7 日間まるまる歩行者天国にする、なんてこともしたいね。それがなかなか難しいんだけれども。この七夕まつりには、全国各地からの観光客は求めてない。この地域の人が、この『七夕』という年に一度の行事を機会にして、地元の人とのコミュニティーを楽しんでくれるといい」と話して聞かせてくださった。考えていることややりたいことはもっと色々あるが、現実的な問題との折り合いの中ではなかなか実現しないのが、開催する側の悩みであるようだ。

もうひとつ、今年のまつりの様子を見ていて気になったのは、住民がまつりの後片付けをしなくてもよいことである。住民がまつりの準備・飾り付け・片づけで関わるのは、配られた竹を飾りつけるという、ほんの一部だけである。以前はそれぞれが川に流しにいくという作業があったのだが、今はそれも禁止され、片付けと回収はこれまた一部の人々と廃棄物処理業者が行っている。川に流すのが禁止されたのは、時代の変化の中で

仕方のないことなのかもしれないが、それによって「片付ける」という気持ちが薄れてしまったのは大きな影響でないだろうかと思われる。

準備したからには片付ける、というのは当たり前の流れであろう。片づけまで済ませてやっときちんとひとつの行事が締めくくられるのである。飾り付けたら飾り付けっぱなし、やりっぱなしで、気がつけば「そういえば七夕が町からなくなっている」では気持ちが締まらないのではないだろうかと思う。短冊を飾り付けるのは楽しいが、くくりつけられたちょうちんを何十個も外す作業はつまらない、ということであろうか。企画されたイベントはどれも、準備や飾り付けのもので、片付けのものはあまり見当たらない。片付けは大体その主催者がまつりのあとに黙々とやっているのである。「マイ七夕」で飾り付けを募集したように、「マイ七夕片付け」も募集してみるのはどうだろうか。

まつりの期間中、願い短冊の杜に短冊を書いてくくりつけていた人々は、川に流すことがなくなった今、この短冊がまつりの後にどのように処理されているか知っているのだろうか。まつりに来る人々が、当日、赤く灯った提灯と屋台を見て回るだけでなく、自分たちのまつりがどう作られてどう締めくくられるのかをもっと知れば、今のまつりの様子も少し変わっていくかもしれない、と産業廃棄物回収車に乗せられて運ばれていく竹の山を見ながら思ったのである。

まつりは気合である。やろう、盛り上げよう、と強く思う意思の集まりである。そして、まつりが終わったあとに感じる、少しの寂しさが必要である。こうしてまた来年もやりたいと、なんとなく思う楽しみが生まれるのではないだろうか。

謝辞

最後に、お忙しい中、本報告書のために多くの貴重なお話を聞かせていただき、また貴重な資料を提供してくださいました高岡市の皆様、通りすがりの皆様、このようなつたない調査に様々な形でご協力くださいまして、本当にありがとうございました。

参考文献

神保成吾、2005 年、『写真で見る昭和の高岡』、文苑堂書店
和田一郎、1975 年、『末広町史』、出版者：塚本弘

参考 URL

「富山のおいしい朝ごはん」
（http://yado-toyama.jp/asagohan/?tid=100074；2015 年 1 月 30 日）
「高岡市　観光ポータルサイト」
（http://www.takaoka.or.jp/soshiki；2015 年 1 月 30 日）

金屋町の御印祭に見る祭り存続の意義

前畑　和彦

はじめに

はじめて高岡に訪れた際、古い建物が残る山町筋や金屋町の町並みが印象に残った。調査テーマを決めるにあたり、はじめは金屋町の町並みや景観の保存について調査をしようと思ったが、金屋町の人々から御印祭のことを教えてもらい、興味を持ち、調査するに至った。

調査をはじめてみると、御印祭は長い歴史を持ち、町の人々が積極的に取り組む祭りであることがわかった。主に聞いて回ったことは、御印祭とはどういう祭りか、どのような歴史を持つのか、どのような思いで取り組んでいるのかである。御印祭にどのような思いを抱いているかということについては、金屋町の人々だけでなく、外部からやって来た人からも話を聞いた。そこから、金屋町の人々と外部の人々の間にある意識の違いや、御印祭に対して金屋町のなかでも人々が異なる考え方を持っていることがわかってきた。

聞き取りで得られたデータや金屋町の人々からいただいた資料をもとにして、御印祭にどういう考えで取り組んでいるかを見ていき、考察していく。

1.　金屋町の概要

金屋町は、富山県高岡市の中心街、JR 高岡駅より約 1km、北西方向に位置している。高岡銅器発祥の地として知られている。約 460 メートルの直線的な金屋町通りに沿って、格子を付けた町屋が連なる町並みである（写真 1、図 1）。

写真 1.　金屋町の町並み

図 1.　金屋町の位置（丸囲みは御印祭で使用される場所）
（Google map より）

1-1.　金屋町の歴史

金屋町の概要については、金屋町開町四〇〇年記念誌発行委員会『過去・現在そして未来に継ぐ架け橋に　金屋町開町四〇〇年記念誌　鋳物のまち・金屋』、『高岡鋳物発祥の地・金屋町　御印祭』（2014 年 6 月 19 日・20 日に行われた御印祭のパンフレット）に依拠する。

金屋町は、加賀藩の初代藩主前田利長によって再建された高岡の工業の王座をしめた鋳物師たちが集った場所である。鋳物師とは、天皇家、藤原摂関家、大きな寺社に対して特別な奉仕をし、その見返りに税や使役の免除、全国を自由に往来し、行商販売や自由営業が保証されていた職能集団ことである。彼らに与えられた特権のなかで最大のものは、鍋や釜などの特定の製品の独占的な製造・販売・レンタルであった。

鋳物師たちは、河内（現在の大阪府堺市）から慶長 16 年（1611）に 7 人呼ばれた。1617 から翌年にかけてさらに 4 人の鋳物師たちを呼び寄せられ、鋳物師は計 11 人なった。招かれ鋳物師たちが千保川左岸に拝領地を与えられたことが金屋町の始まりである。彼ら高岡鋳物師の祖先たちのルーツは、河内国丹南郡狭山郷内日置庄、現在の大阪府堺市に発すると考えられており、その後、越前、加賀国、越中へと移ったが、利長高岡入城の翌々慶長 16 年(1611)に招かれ、高岡城下に金屋町を建てた。この由緒によって、藩初以来厚い保護と特権を与えられ、藩政時代を通じて、領内の鋳物業界を支配し、高岡の町を特色づけた。11 人の鋳物師たちによって興った鋳物業が、現在の高岡銅器の源である。その後明治に至るまで、前田家の手厚い保護を受けて江戸中期には日本有数の鋳物の産地となった。

1-2. 現在の金屋町

金屋町は、かつては、古町、上町、中町、本町、東町、西町、宮川町の 7 町で構成されていたが、開町 400 年を機に、7 町の自治会が解散し、一つの自治会のもとに結成されることになった。その理由は、人が少なくなってきており、一つの自治会あたりの負担が大きくなってしまうことを危惧したからであるという。

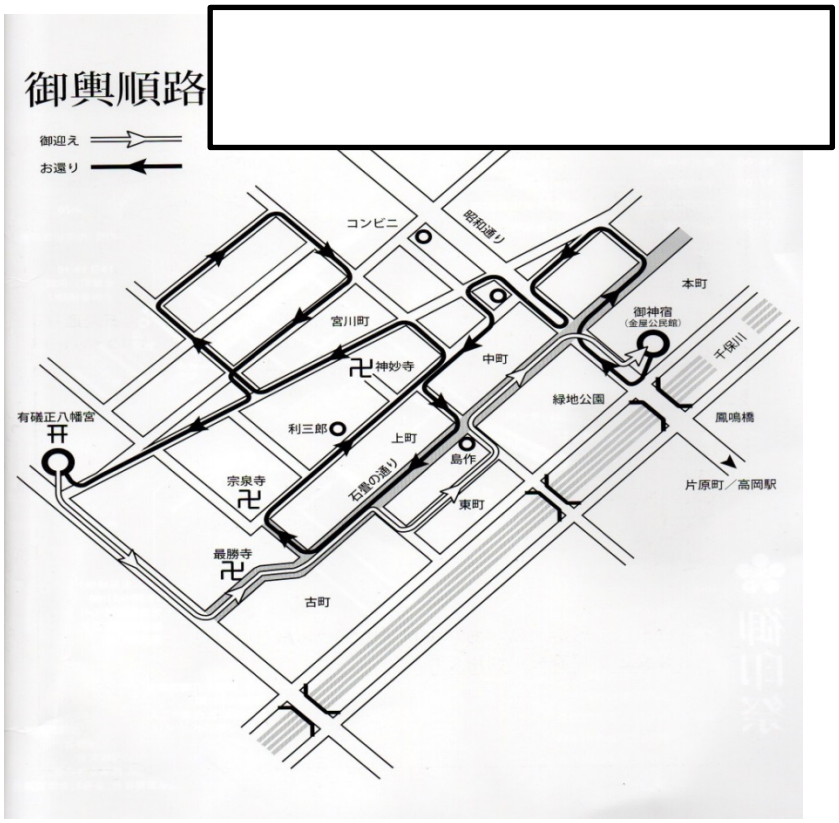

写真 2. 御輿の順路と旧町の位置（『高岡鋳物発祥の地・金屋町　御印祭』 2014 年 6 月 19 日・20 日に行われた御印祭のパンフレット）

金屋町の特徴は、千本格子のある町屋、石畳の通りである。千本格子は、金屋町の人々からは「さまのこ」とも呼ばれている。町並みだけでなく、鋳物の歴史を伝える高岡市鋳物資料館もあり、見どころは町並みだけではないのだ（写真 2)。

このように魅力が多い町ではあるが、問題もある。それは、人が出て行ってしまっているということだ。以下の表は現在の金屋町の人口である（表 1)。30 年ほど前は、2400 人、400 世帯が住んでいたという話を聞いた。その通りだとすれば、現在の人口はその四分の一以下に減っているということになる。

表 1.　金屋町の人口　（平成 25 年 3 月 31 日時点）

世帯数(戸)	男(人)	女(人)	合計(人)
188	253	297	550

高岡市統計書　人口
（http://www.city.takaoka.toyama.jp/kocho/shise/toke/tokesho/documents/251.pdf；2015 年 2 月 4 日閲覧）

この問題について、金屋町に住むある男性に話を聞いたところ、特に子どもが少なくなってきていると感じる、と語っていた。これは、4 章で詳しく述べる。

2.　御印祭の概要

御印祭の歴史について、金屋町開町四〇〇年記念誌発行委員会『過去・現在そして未来に継ぐ架け橋に　金屋町開町四〇〇年記念誌　鋳物のまち・金屋』、『高岡鋳物発祥の地・金屋町　御印祭』（2014 年 6 月 19 日・20 日に行われた御印祭のパンフレット）に依拠し、記述する。

御印祭は、曜日にかかわらず毎年 6 月 19 日、20 日の 2 日間にわたって行われる。奉納踊り、町流し踊りが目玉であるが、どちらの踊りも前田利長への感謝をこめて踊られる。奉納踊りは金屋町の子どもたちが踊るが、町流し踊りは金屋町の人々だけでなく、外部の民謡団体も参加して踊る。

2-1.　御印祭の歴史

御印祭がいつから始まったか不明であるが、おそらく前田利長の死後間もなく行われたものであると考えられている。前田利長の死後、7 人の鋳物師たちが、利長の手厚い保護に感謝し、命日にお参りをし、鋳物業の繁栄を誓い、恩に報いた。これが御印祭のはじまりである。金刀比羅神（ことひらのかみ）、石凝姥神（いしこりどめのみこと）、日本武尊（やまとたけるのみこと）、前田利長命（まえだとしながのみこと）を「金屋四神」と称し、御祭神としている。

御印祭では、鋳物職人作業歌である「弥栄節（やがえぶし）」にあわせて町流しが繰り広げられる。

これは、単調でありながらも重労働の「たたら踏み」の際、板人頭の青竹をたたく調子にあわせて自然に歌われ出したものである。「たたら踏み」は、板戸の仕事であった。聞き取りによると、昔は川や山からとってきた砂鉄をとかして金属にしていたのだが、必要な温度は 1100℃から 1200℃くらいであった。薪や炭を使うだけでは、700℃くらいまでしか上がらないため、絶えず酸素を送り込み、温度をあげなければいけなかった。そのため、たたらを踏み、温度をあげていた。たたら踏みは、重労働であり、20 時から 8 時までずっと働いたため、その際、板人頭の青竹をたたく調子にあわせて自然に歌われ出したものが「やがえふ」とされる。板戸たちは「やがえふ」を口ずさみ、疲れる身体を元気づけ、足踏みをそろえた。しかし、明治ごろから電気を用いた送風機によって、たたらを踏む作業が減っていったため、「やがえふ」も歌われることがなくなっていった。しかし、そのまま消えてしまうのは惜しいと考えた金屋町の人々が、踊りの先生にふりつけを考えてもらい、有礒正八幡宮で踊りとして踊り始めた。それが昭和 2 年（1927）のことであった。

2-2. 御印祭の変遷

御印祭に参加する人は、現在では 1000 名を超えており、御印祭は高岡で重要な祭りのひとつとなっている。ただし、参加者がこれほど大人数になったのは、ここ 10 年ほどのことである。かつては、町内の人々だけで前夜祭を含め祭りをおこなっていた。西条小学校、横田小学校、川原小学校などの金屋町の近くの小学校や、外部の民謡団体に弥栄節を教えに行くうちに、前夜祭の町流しに参加したいという団体が増え、今のように多くの人々が参加することになった。

また弥栄節もかつてと同じものではなく、少しずつかたちを変えてきた。現在のものは、昭和 32 年に歌いやすい曲に変えられたものである。ただし、歌詞は変わっていない。男性の踊りは鋳物師の仕草を取り入れており、女性の踊りは踊りやすさが重視されており、意味はあまり考えられずに作られたという。金屋町の男性は、法被を着て、竹の棒を持ち、女性は、豆絞り[29]を持ち、ピンクの着物を着ている。着物の色がピンクである理由も特になく、とりあえず暫定的にピンク色にしているそうだ。

踊りには、前夜祭町流しと舞台踊りがある。舞台踊りがはじまったのは 15 年ほど前からである。どちらも同じ弥栄節を踊るのだが、町流しは前進し続ける踊りであるため、動きに制限がないのに対して、舞台踊りは舞台で踊るため、踊る範囲に制限がある。そのため、踊り方や動きに少し違いがある。

2-3. 御印祭の運営と組織

御印祭の運営は、御印祭実行委員会がおこなっている。かつて金屋町が 7 町でそれぞ

[29] 豆粒大の丸い紋様を一面に表した絞り染め。手拭いや浴衣に用いる。（『明鏡国語辞典』より）

れ自治会を持っていたころは、7 町が 2 町、2 町、3 町とわかれて担当していた。しかし、2 つの町が担当するシステムでは大変であった。その理由は、当番町の自治会の人は自分たちの番が終わると安心してしまい、システム化しなかったからである。そのため、それぞれの町が担当するたびに困っていた。そういった問題を解消するために、御印祭実行委員会が平成 19 年（2007）に作られた。

御印祭実行委員会の役割は様々である。御印祭の準備は 3 月からはじまるため、御印祭実行委員会の中の自治会資金調達部が金属、鋳物業界から広告費を集める。自治会資金調達部のメンバーは固定である。その方が協賛金がもらいやすいから、と自治会資金調達部の男性は語っていた。他の部門では、警備班は警察に交通整理の書類を提出する、式典係は、6 月 20 日の式典の準備、祭壇作り、御輿の先導をし、放送係は祭りの際、どこでなにがおこなわれるかということを放送し、総務・庶務は、式典に呼ぶ人への招待状を作る、事務局長は、市役所に公園の使用認可をもらう、というように、各部門にそれぞれの役割がある。

御印祭には、パンフレットがあり、そこには、御印祭の説明、進行予定などとともに、協賛金を出してくれたところの名前を出す。パンフレットは平成 13 年に作り始めたのだが、その前は、ぼんぼりを出して宣伝するということで広告費、協力費を集めていた。しかし、それだけでは広告費、協力費を十分に集めることは不可能なのでパンフレットを作り始めた。

また、御印祭実行委員会とは別に、弥栄節保存会という組織もある。こちらは、外部団体に踊りを教えに行ったり、結婚式などの行事で踊ってほしいと頼まれて踊りに行ったりしており、御印祭に限らず活動をしている。御印祭の際は、踊りのお囃子をする。弥栄節保存会の方々の楽器は、胡弓、砧、太鼓(しめ太鼓、大太鼓)、鉦鼓などである。このお囃子のメンバーは、金屋町在住の人々だけで構成されているわけではない。金屋町の人だけでは賄うことができないので、代理として高岡や射水から人を呼んでいる。

3. 平成 26 年（2014）の御印祭

3-1. 練習の様子

私が訪れた 6 月 16 日は、金屋緑地公園で奉納踊りの練習がおこなわれていた。参加していた子供は 4 人であった。練習は、気を付け、礼で終わる。まわりにぶつからないように、止めるところは止める、目線をどこにやるか、腕の角度、上げ下げ、など、踊り指導員の大人たちから細かい指示が入っていた。ときおり、きびしい声もとんでいた。奉納踊りは、6 月 19 日の前夜祭でも踊るが、6 月 20 日の本祭でも前田利長墓所、金屋緑地公園にある高岡鋳物発祥地の記念碑の前でも踊るため、重要なものである。2014 年の御印祭で奉納踊りを踊る子どもは、男の子 4 人、女の子 5 人と、計 9 人いた。練習の際は、男の子 4 人が奉納踊りを踊っていた。

前夜祭町流しの練習は、財団法人北陸予防医学協会高岡総合健診センター(以下、高岡総合健診センター)の駐車場で 2 時間ほどおこなわれた。こちらは、大人が 8 人ほど参加していた。富山大学芸術文化学部の生徒も 3 人参加していた（写真 3)。

写真 3.　町流しの練習の様子

翌 17 日には、外部の民謡団体である「民友会」の方たちの練習が金屋緑地公園でおこなわれた（写真 4)。踊りの際に持つ豆絞りの色は青であった。豆絞りは、衣装の色とあわせているとのことであった。

写真 4.　民友会の方たちの練習の様子

この日は、金屋町公民館で行われていた太鼓の練習を見学することもできた。時間は 18 時から 19 時までだった。練習は、奉納踊りの練習と同じく、気を付け礼で始まり、気を付け礼で終わる、しっかりとしたものであった。私は、祭りの練習を見たのは、御

印祭がはじめてだったので、そういった風景を意外に思った。

男の子は、鐘を打つ係と大太鼓を打つ係を担当する。男の子は 10 人ほどいたが、全員が一度に大太鼓を打つことは不可能であるため、交代制となっている。女の子たちは横笛を吹く、もしくは長ばち（赤と白のストライプ）で太鼓をたたくということになっている。

また、この日も、前日と同じ場所で町流しの練習が 2 時間ほど行われていた。前日と同じく、富山大学芸術文化学部の生徒も練習に参加していた。

3-2.　前夜祭(6 月 19 日)の様子

2014 年の前夜祭は 6 月 19 日(木)におこなわれた。雨が降ることもなく、多少の時間のずれはあったものの、ほぼ予定通りに行われた。前夜祭の町流しには総勢 1100 名の踊り手が参加したと前夜祭終了後に発表された。進行予定、神輿の順路は以下のとおりである（表 2)。

表 2.　前夜祭進行予定

時間	活動	場所
18:00~18:30	神輿のお迎えの儀	有磯正八幡宮
18:30~19:00	御印太鼓	金屋緑地公園
19:00~19:10	宵宮の儀	金屋町公民館
19:10~20	奉納踊り	金屋町公民館
19:20~21:30	前夜祭踊り(町流し)	有磯正八幡宮～金屋町石畳通り
19:30~20:30	野外舞台	金屋緑地公園
20:00~21:00	前夜祭踊り(弥栄節踊り保存会メンバーによるもの)	金屋町本町通り

写真 5. 神輿お迎えの儀　有磯正八幡宮からお神輿を運び出す様子 1(左)

写真 6.　神輿お迎えの儀　お神輿を公民館へと運ぶ様子 2(右)

18 時に有礒正八幡宮で「神輿のお迎えの儀」が行われた。これは、金屋町公民館まで順路に従いお神輿を運んでいくというものである（写真 5-6）。有礒八幡宮の宮司の方もともに来ていた。お神輿は金屋町公民館に運び込まれ、祭りがおこなわれる二日間は祭壇に祀られていた。

18 時半から御印太鼓が金屋緑地公園で御印太鼓が始まった。公民館で練習していた子どもたちが演奏していた（写真 7）。

写真 7.　御印太鼓の様子

19 時から「宵宮の儀」が金屋町公民館で始まった。これは、前田利長をお迎えする儀式である。

その後、19 時 10 分から 19 時 25 分ごろまで、金屋町公民館前で奉納踊りが行われた（写真 8）。奉納踊りは、19 日の金屋町公民館前での奉納踊り、20 日の前田利長墓所での墓前奉納踊り、金屋緑地公園での奉納踊りと、2 日で計 3 回行われる。男の子は竹の棒を持ち法被を着ており、女の子は豆絞りを持ってピンクの着物を着ていた（写真 9）。

写真 8.　竹の棒を持ち法被を着る男の子たち（左）
写真 9.　金屋町公民館前での奉納踊り（右）

町流しは、19 時 20 分ごろに始まった。前夜祭踊りの列は非常に長かった。以下の写真 10 の有磯正八幡宮から終点まで続く点線矢印が町流しの順路となっている。

写真 10.　町流しの順路(2014 年御印祭パンフレット裏表紙より)

御印祭実行委員会の方によると、今回の御印祭で踊りに関わった人は 1101 人になるという。町流しには外部の民謡団体や富山大学芸術文化学部なども参加していた（写真 11)。各民謡団体の先頭にはプラカードを持ったジュニアリーダーの女子高校生が立っていた。プラカードを持つ係は市を通して、ボランティアとして小杉、氷見などの高校に募集するとのことだ。

写真 11.　町流しの様子

町流しに参加した外部の団体は以下の通りであった（表 3)。町流しをした 18 の団体のうち 8 つは地域の保育園から大学までの生徒で、特に小学生からなる。表 3 の数字で興味深いのは、6 つの学校の生徒の合計数が約 400 人であり、町流し踊り参加者全体の 3 分の 1 以上を占めており、外部からの参加者の約半分を占めていることだ。

表 3.　外部の弥栄節踊り団体(町流し踊り、舞台踊り含む)

団体名	人数
高岡市西部保育園	18
高岡市川原保育園	18
高岡市西条小学校	66
高岡市横田小学校	104
高岡市川原小学校	40
高岡市高岡西部中学校	116
富山県立高岡西高校	35
国立富山大学　芸術文化学部	45
高岡伝統産業青年部	45
西条女性の会	20
地域女性ネット高岡	31
民友会	65
薫会	36
豊笑会	50
藤久会	39
華の会	72
扇流　寿々蘭会	29
うしお新舞踊研究会	74
	計 903

19 時 30 分ごろから金屋緑地公園で民謡団体による野外舞台踊りが始まった(表 4)。その間も、町流しが止まることはなく、同時進行である。なお、金屋町児童クラブ奉納踊りメンバー、弥栄節保存会ヤッホーの会、弥栄節保存会ヤッホーの会の 3 団体以外は、外部の民謡団体である。また、金屋緑地公園と石畳通りポケットパークに設置されたスクリーンでは、高岡観光大使の「あみたん娘」というキャラクターが弥栄節を踊る様子が上映された。

表 4.　舞台踊りに参加した団体と踊りの時間

時間	所要時間	団体名
19:30 開始 団体合計時間 おおよそ 45 分	8 分	金屋町児童クラブ奉納踊りメンバー
	8 分	弥栄節保存会ヤッホーの会
	6 分	民友会
	5 分	薫会
	6 分	豊笑会
	6 分	うしお新舞踊研究会
	6 分	華の会
20:15 頃	あみたん娘によるやがえふ踊りの上映　おおよそ 7 分	
20:22 頃 団体合計時間 おおよそ 37 分	6 分	民友会
	5 分	薫会
	6 分	豊笑会
	6 分	うしお新舞踊研究会
	6 分	華の会
	8 分	弥栄節保存会ヤッホーの会
21:00	終演予定	
21:30 まで	あみたん娘によるやがえふ踊りと金屋町の写真の上映	

20 時からは、弥栄節踊り保存会メンバーによる前夜祭踊り（町流し）が、金屋町本通りで行われた（写真 12）。

写真 12.　弥栄節保存会メンバーによる町流し踊り

3-3. 御印祭当日（6 月 20 日)の様子

6 月 20 日(金)の御印祭当日は、前日とうってかわって観光客が少なかった。御印祭当日は金屋町の人たちが、静かに前田利長への感謝をあらわす祭りであるという印象を受けた。御印祭当日の予定は以下のとおりであった。

表 5.　御印祭当日の進行予定

時間	活動	場所
11:00~	祭典	金屋町公民館
16:00~	墓前奉納踊り	前田利長墓所
17:00~	奉納踊り	金屋町緑地公園
17:00~	子ども町流し踊り	金屋町各町内
17:30~	還御の儀	金屋町公民館

祭典は、金屋町公民館でおこなわれ、玉串を奉納する（写真 13)。祭典が終わると、16 時までは何もせず静かに過ごすということになっているそうだ。

16 時から前田利長墓所で奉納踊りが始まった（写真 14)。図 1 に示す通り、場所は金屋町から離れたところにある。　前田利長への感謝をあらわす祭りであるのだから、前田利長墓所での奉納踊りは、御印祭の中でもかなりの重要性を持つものであると思われる。

写真 13.　金屋町公民館での祭典の様子（左）
写真 14.　前田利長墓所前での奉納踊り（右）

17 時からは子ども町流しが各町内で行われた（写真 15)。参加するのは、金屋町児童クラブの幼児で、合計約 40 名であった。順路は、宮川町→西町→東町→古町→上町→中町→本町となっていた。

また、ほとんど同じタイミングで、金屋緑地公園の高岡鋳物発祥地の記念碑前での奉納踊りがおこなわれた（写真 16）。

写真 15.　子ども町流しの様子（左）
写真 16.　高岡鋳物発祥地記念碑前での奉納踊り（右）

17 時 30 分から、還御の儀が始まった。金屋町公民館から決められたルートをたどり、有磯神社へとお神輿をお送りするというものである（写真 17-18）。

写真 17.　還御の儀 1　　**写真 18.　還御の儀 2**

還御の儀をもって、御印祭は終了した。

一日目は、非常に多くの人々が集まり、にぎやかな祭りという印象が強く、二日目は静かで、金屋町の人々のための祭りという感じであった。聞き取りを行った際、金屋町のある男性は、「高岡は前田利長の領地であったのだから、一日目のお迎えには、高岡市民であるならば参加する資格があるのだと思う。」とおっしゃっていた。このことと、

一日目は平日ではあるけれど、夕方から始まるということが、一日目に大勢の人がやってくる理由なのかもしれない。それに対して、二日目は平日の日中におこなわれており、見物客はほとんどいなかったが、金屋町に住む人々のための祭りであるので、それは問題とはならないのだろう。

4. 御印祭に対する語り

この節では、御印祭に関する様々な人々の語りを、聞き取り調査をもとに書いていく。金屋町の人々だけでなく、御印祭を見に来た人、外部の民謡団体の方から聞いたことも記述していく。

4-1. 昔と現在の違いについて

御印祭の変遷について、祭りに詳しい 60 代男性は、「御印祭がここまで大きくなったのは 10 年ほど前からで、20 年前は地元だけでやっていた。祭りにやってくる人が増えてきたせいで、6 年程前から参加団体は招待制で招くようにして、数を制限し、増やさないようにした。しかし、結局 4 年前には 1000 名を超えてしまった。」と語っていた。

舞台踊りは 15 年ほど前から始まったものであり、町流し踊りと基本は同じではあるが、微妙に異なっている。上半身の動きは変わらないが、足の運び、重心の移動が違う。舞台踊りを見たいという声もあったので、始まった。外部の民謡団体が舞台踊りを始めたのはここ 10 年のことである。

また、富山大学芸術文化学部との交流がはじまったのは、同校が高岡短期大学だったころで、今から 20 年ほど前からである。武山良三現芸術文化学部長との付き合いもそのころからだそうだ。ノートパソコンを借りてホームページの作り方を教えてもらったという。先生と町の交流が始まり、町と学生の交流も始まった。そして 14 年ほど前からは学生が御印祭の町流しに参加し始めたということだ。

今の御印祭は、外部から 2 日目の本祭を見に来る人は少なく、金屋町の人たちの祭りという姿をとどめているが、前夜祭は大きく変わり、金屋町の祭りというより、高岡の祭りとなってきている。

4-2. 金屋町の人々と御印祭

金屋町の人々の多くは、御印祭に強い思い入れがある。ある 30 代男性は、「思い入れは強い。御印祭はなくしてはいけないものであるから、代が替わっていっても、伝えていかなければいけないものだ。もし御印祭の規模が小さくなってしまっても、金屋町の人々によって滞りなく進んでいけばよいのではないか。」と語っていた。また、別の 30 代男性は、「町内一帯の祭りであるから、他のみんなも自分も無事に成功させたいと思っている。また、御印祭は楽しい」と語っていた。ほかにも、生まれたときから現在ま

でずっと金屋町に住んでおり、物心ついたときから御印祭に参加しているという男性もいた。ずっと金屋町に住んでいるわけではなく、高校から大学、社会人の間は別の地域に住んでいて、実家を継ぐために金屋町に戻ってきたという 20 代の男性は、「金屋町に住んでいて踊れる人が減ってきている。だから、踊れる人が踊っておかないといけない」と語っていた。また、結婚してから金屋町にやってきたという 30 代の男性は、「最初は踊りを覚えるのに苦労したけれど、本番がいい勉強になるし、そういった経験をすることで踊れるようになった」と語っていた。ここでの踊りは町流しのことを指していると思われる。

このように、いつから金屋町に住んでいるか、何年金屋町に住んでいるか、というのは様々であるが、御印祭の練習に参加する人は御印祭に対する思い入れが強く、熱心に取り組んでいるという様子がうかがえる。

しかし、金屋町の人々の御印祭に対する考えは、このようなプラスのものばかりではない。御印祭の規模が大きくなるにつれ、問題もいろいろと出てきた。そのことに対する金屋町の人々の語りは、4-4 で記述する。

4-3. 外部からやってくる人々と御印祭

外部から御印祭を見に来ていた人は、どうして御印祭を見に来るのか、外部の民謡団体の人は、なぜ参加するのだろうか。

金屋町の近くの町から来ていた 70 代女性は孫が出ているからということで見に来ていた。子どもの友達が町流しに出ると聞いたから見に来たという子ども連れの 30 代女性や、小学生の子どもが出ているから見に来るという人もいた。高岡商業高校の女子生徒二人は、町流しに参加したことはないが、友達が参加しているので見に来たということであった。一番の楽しみは屋台と話しており、規模は小さいものの、屋台も御印祭前夜祭を見に来る人の楽しみとなっているようだ。

外部の民謡団体の方にも話を聞くことが出来た。「薫会」の 70 代女性二人は、「参加していると元気になる。練習を通して友人に会うことが出来るし、たくさんの人とのつながりを作ることも出来る。」と語っていた。また、御印祭の規模が大きくなっていることについては、「御印祭がよその人たちの祭となっていることには肯定的。昔に比べると、富山のいろいろなところから人が参加し、町が開け、町自体が商業化してきた。将来的には、もっとたくさんの人が富山じゅうから来てくれることを望んでいる。ゆくゆくは『八尾の越中おわら風の盆』のような全国的に有名な祭りになってくれるとうれしいし、そういう祭りにしたい。」と語っていた。

以上のように、御印祭には知り合いが出ているから見に来るという人もいるが、民謡団体に所属している人は、御印祭に対する思い入れがあり、祭りに対しての考えもあるということがわかる。今、外部の団体が御印祭の町流しに参加するためには、金屋町からの招待を受けなければいけない。外部から参加している人や参加したいと考える人に

とっては、御印祭の規模が大きくなることは、参加しやすくなるという利点があるから、よいことであるのだろう。

4-4. 御印祭に関する問題

御印祭もかつてと比べて規模が大きくなった。そういった変化は、金屋町の人々の御印祭に対する考え方にズレを生じさせた。また、現実的な問題として、準備に関する様々な問題が生じてくる。

まず、御印祭の規模の拡大についてだが、これは、金屋町の人々が大きくしようとして、今の状態になったというわけではないようだ。御印祭に詳しい 60 代の男性に話を聞いたところ、「御印祭は大きくしようとしたわけではない。近くの小学校などに弥栄節を教えに行っているうちに、御印祭で踊りたいという人が増え、参加希望者が多くなり、規模が大きくなってしまったのだ」と語っていた。この男性は、弥栄節の知名度がもっとあがってほしいとも考えているそうだ。だから、御印祭の規模が大きくなったことについては、悪いことと考えてはいなかった。祭りの規模が大きくなったことで、前夜祭はにぎやかなものとなったが、金屋町の人々からは文句やクレームがあったようだ。そういう問題点は、祭りの練習時や、本番の際も聞くことが出来た。金屋町の人はどのような不満を持っているのか。

御印祭には 28 年参加しているという 50 代の男性は、「御印祭が大きくなったこと、それ自体は悪いことではないと思うが、本来は自分たちの祭りであったのだから、見に来る人や町流しに参加する人のためのものでなく、自分たちのための祭に戻したい。祭りが大きくなってよいと考える人もいれば、それがいやだという人もいる。」と語っていた。また、祭りの規模が大きくなったことによる影響についても、「規模が大きくなることで、町内の人たちの自分たちの祭りだという認識が薄まってしまった。自分たちの祭りなのに、接待するばかり。あまり大きくなってしまうと困る。」と語っていた。

また、弥栄節保存会に所属する 40 代の男性は、「御印祭の趣旨が変わってきているような気がする。前田利長への感謝としてのものから、弥栄節を広めるためのものになってきているように思う。」と語っていた。このように、御印祭の規模が大きくなったことへの不満というものは少なからずあるようだ。

また、規模は大きくなったものの、金屋町の人が多くなったというわけではない。むしろ金屋町の人はこの数十年で大きく減少していった。また、子どもが少ないという話も聞く。そこで、出てくる問題が御印祭の奉納踊りを踊る子どもが足りなくなってきているということだ。奉納踊りは、元服の儀式であり、つまり、成人の儀式であるのだから、一度きりなのである。金屋町に住むある男性は、「かつて、子どもがたくさんいたころは、奉納踊りを踊ることが出来ない子どももいた。しかし、今では、子どもが少ないため、一人が二年連続で奉納踊りに出るなんてこともある。」と語っていた。このように御印祭だけでなく、金屋町全体に関わってくる問題もあるということがわかる。

5. まとめと考察

御印祭は、400 年もの歴史を持ち、金屋町の人々だけでなく、外部の人にも親しまれているが、近年では、少子化による子どもの踊り手の不足のような、時代の流れに伴う問題も生じてきている。かつては、奉納踊りは町内の選ばれた子どもだけが踊り、それも一度きりであった。しかし、現在では、子どもも少なくなってきているため、奉納踊りを複数回踊る子どももいるという状況だ。これは、今の規模の祭りを存続させていく上では、大きな課題となるため、何か解決策が必要となるだろう。しかし、祭りを今のように大きな規模のまま保ち続ける必要もないのかもしれない。

御印祭と金屋町の人々の関係は、以前の状態から変化してきた。以前は自分たちのための祭りであるということを自覚し、祭りを楽しんでいたということがわかる。しかし、祭りの規模が大きくなったことで、金屋町の人々の意識は変わっていった。外部の人たちのために金屋町内部の人々がいろいろと準備に追われて大変になっているという状況に変化したことで、祭りの本来の趣旨が忘れられるということはないだろうが、祭りへの思いは薄くなってしまっているのかもしれない。それならば、規模をかつてのようにし、金屋町の人々が、自分たちのための祭りと意識し、祭りを楽しむこともよいのではないだろうか。

そういったことを考え直すためには、金屋町の人々の間でのコミュニケーションが、より活発になる必要があるだろう。金屋町に住むある男性は、「今は、金屋町の人々の間でのコミュニケーションは少なくなってきている。話す相手はだいたい固定化されてしまっており、住民の集まりに参加しない人とは、ほとんどコミュニケーションがない。祭りに参加しない住民もいる。」と語っていた。個人主義的ライフスタイルを取る人が多い現代では、住んでいる町での祭りであっても、一定の意義を見出すことができない人々がいることも仕方のないことなのかもしれない。それならば、御印祭に関わる人々で話し合うということになるだろう。

しかし、そうすると今度は、御印祭をおこなう人々の間での意識の違いが問題になってくる。かつてのように、御印祭は町内の人間だけでおこなうほうがよいと考える人もいれば、今のように規模を大きくして、いろいろな人に御印祭や弥栄節のことを知ってもらいたいと考える人もいる。御印祭は町内の人間だけでおこないたいと考える人にとって、今の準備の忙しい御印祭は、意欲的に取り組めるものになっていないかもしれない。御印祭に対する考え方のズレも、やはり重要な問題となってしまうのだ。

だが、御印祭の規模が大きくなったことも、時の流れによるものであると言えるのかもしれない。金屋町、御印祭に興味を持った人々が増え、御印祭に参加したいという声が増えた。それを反映することは、祭りというものが固定的ではなく、町内の姿を表現するものであるということから考えると、自然な流れでもあると言えるのではないだろうか。

金屋町では、御印祭をかつての懐かしい町内の人々だけによる祭りと見る人もいれば、多くの人々が来ることで盛り上がる祭りと見立る人もいるのだろう。考え方の違いはあるが、祭りを存続させていきたいという気持ちは、どちらの考えにもあるのだろう。なぜなら、どういったかたちであれ、祭りを存続させていくということは、単に文化としての祭りを伝えるということではなく、人びとを繋ぐものでもあるからだ。金屋町の60代男性は、「祭りの準備期間は、人々のつながりや家同士の横のつながりを強くする。御印祭は感謝祭であり、それは思いやりの心を育むものだ。そういうことを意識すると、人との助け合いというものを考えることが出来るようになる。だから、町民にとって祭りで大切なのは、本番よりも準備期間だと思う。」と語っていた。

考え方の違いはあっても、御印祭を運営する金屋町の人々は皆、御印祭に対してだけでなく、金屋町への思い入れも強い。そういった人々の祭りや町への情熱、考え方が、祭りをこれからも存続させていき、金屋町をさらに発展させていくのだろう。

謝辞

調査を行うにあたって、金屋町の皆様には、資料の提供や貴重なお話を聞かせていただき大変お世話になりました。祭りの日程を教えていただいたり、祭りの様子を見学させていただいたき、大変貴重な体験をさせていただきました。ご多忙にもかかわらず何度もお話を聞かせていただき、どうもありがとうございました。

参考文献

金屋町開町四〇〇年記念誌発行委員会『過去・現在そして未来に継ぐ架け橋に　金屋町開町四〇〇年記念誌　鋳物のまち・金屋』(2011年　9月)

『高岡鋳物発祥の地・金屋町　御印祭』(2014年6月19日・20日に行われた御印祭のパンフレット)

高岡の鋳物文化の現状　―伝統と革新―

宮川　玲奈

はじめに

私は高岡市出身であるが、自分が生まれた土地についてこれまでよく知らなかった。高岡市の概要を調べていたときに、高岡銅器が全国随一の生産量を誇り、さらに最近になって新しい産業が成功し全国的にも有名になりつつあることを知って興味を持った。また、高岡市では小中学校で総合的な学習の時間が「ものづくり」の時間として利用され、子供たちに伝統的な鋳物文化に触れる機会が与えられており、私も中学生のときにすずを使って小さな梵鐘を作った。その経験も高岡銅器に興味を持つきっかけになった。本稿では、高岡市で伝統的にさかんである高岡銅器について、主に戸出工業団地に工場がある企業の方々に話を伺い、高岡銅器産業がこれまでどのように継承され、これからどのように変化していくのかについて調べて考えたことをまとめる。

1.　高岡銅器の概要

1-1.　銅器の歴史

本節では高岡銅器産業の成り立ちから近代の傾向まで、高岡銅器産業の発展の要因を『高岡銅器史』[30]に基づいて記す。高岡での銅器生産は、国内生産額の 95%を占めている。梵鐘（写真１）、銅像（写真 2）など大きいものから灯籠など細かい作品まで、その鋳造技術は全国的にも有名である。

写真 1-2.　高岡の企業で作られている梵鐘・古城公園にある銅像

[30] 『高岡銅器史』　責任編集、養田実　定塚武敏　発行者、高岡銅器協同組合
出版年、昭和 63 年 5 月 1 日

1-1-1.　高岡銅器の成り立ち

高岡銅器のはじまりは、当時関野原と呼ばれていた地の小高い塚に加賀藩主二代目前田利長が城を築き、高岡と命名して入城し、城下町を造成した慶長 14 年（1609 年）とされる。利長が高岡開町にあたって近郷砺波郡西部金屋（現在の高岡市戸出西部金屋）にいた鋳造師 7 人を呼び寄せ、幅 50 間、長さ 100 間の土地を与えて鋳造場を開設させた。その地が現在の高岡市金屋町である。この高岡金屋が次第に強大となり、梵鐘、燈籠の他に、小物の銅器産業にも手を拡げていった。活発になっていった金屋町には当時職人が住んでいた千本格子の家並みが今も残されている。

徳川封建体制の厳しい規則や義務が 18 世紀ごろから緩み、商業活動が盛んになり、高岡の職人たちはそれまで作っていたものに加え、仏具などの小物銅器を製造するようになった。その後高岡銅器の製造は商業資本と結びついて発達し、火鉢、かんざし、キセルなど、種類と生産量を増大させ、高岡の商人が関西地方にまで売り込み、文政年間（1818～30 年）には、藩公認の銅器問屋が生まれている。

江戸幕府の崩壊、そして明治政府の発足は、高岡の銅器産業に、免税などの保護政策がなくなり職人たちに大きな影響を与えた。それまで優れた技術があっても独立は許されず、下積みの職人たちは賃金も安く、当時「鋳物職人には嫁にやるな」と言われたほどであった中で明治維新を迎え、高岡銅器産業は混乱に巻き込まれた。

1-1-2.　近代の傾向

明治期にはウィーン、フィラデルフィア、パリなど数々の万国博覧会に銅器作品を出展して受賞し、技術向上と販路の拡大につながった。しかし、明治 16 年（1883 年）には高岡銅器生産額が前年の約 3 分の 1 に落ち込み、移転や廃業を迫られる業者が相次いだ。その後も日露戦争や第一次世界大戦の影響を受け、高岡銅器の生産は不振な状況が続いた。

第二次世界大戦後、空襲を免れた高岡には鋳造設備が無傷で残っていた。そして、軍需産業から平和産業への転換の中で、その設備と伝統の鋳造技術を駆使して生活用品の製造に新たに取り組んだ。そこで主な原料として使われたのがアルミニウムであった。戦時中の主要兵器である航空機製造用のアルミニウムの蓄積は終戦時でも相当大きく、鍋、火鉢、バケツなど、さらには灰皿や花瓶なども製造した。その状況があったため、現在高岡ではアルミニウム産業も盛んである。

その後、昭和 30 年代（1955～65 年）から 40 年代（1965～75 年）にかけての高度経済成長による社会、経済状況の変化に対応するために、工場用地の拡大や貨物運送の便利さが求められたため、銅鉄企業の大きな立地移動があり、問屋を始めとした中規模以上の鋳造業や研磨、着色業などの加工業も金屋町、定塚町、横田町などの高岡城下の町から、郊外に移動した。中でも、昭和 47 年（1972 年）から造成が始まった高岡市戸出栄町の高岡銅器団地にはもっとも多くの企業が移転した（図 1）。

図 1.　高岡市金屋町と戸出町栄の工業団地の地図

1-2.　問屋制

ここで、高岡の銅器産業のかたちとして現在も続いている問屋制についても触れていく。問屋制というのは、職人が製品の製造工程の一部を自己の作業場で生産し、販売業である問屋が全体を指導し統括する産業体制をいう。これと対照的なのが、井波町や庄川町の木彫工芸の工房制で、一つの事業所で丸太から完成品までを一貫して生産し、個々に販売している。高岡の銅器産業では、問屋が原料地金を鋳造業者に与え、鋳造業者は原料を溶解して鋳型に入れて成形し、ロクロで切削研磨作業をして問屋に返し、問屋はこれを彫金業者に渡し加工させ、加工した品を着色業者に色つけさせ問屋が販売する。つまり、問屋がデザインを決め、原料を鋳造業者、彫金業者、着色業者に順々に廻して製品化する体制をとってきた。高岡銅器は、明治 20 年代（1887～97 年）後半から、大正、昭和前期へ設備や技術の近代化をはかりながら、大企業化することなく、問屋制の完成度を高めてきた。

2.　近年の銅器産業の変遷

2-1.　近年の行き詰まり

銅器の販売額は 1990 年代はじめのバブル期に最高額を記録して以来、2003 年に減少はピークを迎えている。その理由として、核家族化が進み仏壇を置かない家庭が増加したり、学校に設置されていた二宮金次郎の銅像などがあまり置かれなくなったりしたことが挙げられる。

高岡市の鋳物産業は、前述したように、システム化した分業体制で行われてきた。できあがった製品は全て問屋の所有物で、それぞれの工場では販売することはなく、その

工程を一周して完成した商品を問屋が売りに出してきた。しかし、生産の絶対量が減少したためその分業体制の一部に組み込まれている一つ一つの事業所の経営が立ち行かなくなってきた。

2-2.　変化する伝統産業

生産が減少し経営が厳しくなってきた 2007 年頃から、問屋からの発注で商品を作るのではなく、それぞれの会社が、分業体制下でもともと専門としてやっていた製品や、部品以外の、クラフト品や美術品などの、新しい商業製品も独自に売り出すようになった。高岡銅器はこれまで長い間、分業制をとっていたが、時代の流れにあわせて産業体制を変化させることになる。次節からは現在自社製品を売り出して成功しているいくつかの会社を取り上げていく。

3.　新しい体制への挑戦

3-1.　能作

株式会社能作は最も古くから銅器生産を開始した企業の一つで、分業制のなかでは鋳造業を担当していた。鋳造とは、溶かした金属を型に流し込み、冷やして目的の形状にする製造方法をいう。そして、株式会社能作は高岡の地に 400 年伝わる鋳造技術を用いて 1916 年に仏具製造を開始した。創業当時は仏具、茶道具、花器を中心に、海上自衛隊の船のエンブレムなども問屋から発注を受けて製造していた（写真 4、5）。また、仏具の中でも細かな物品を製造していた。しかし、最近の家庭では神棚のように小さな仏壇を置く家が増えており、能作で製造する細かな物品や置物などの仏具商品が使われなくなってきていた。

写真 3.　株式会社能作

写真 4-5.　海上自衛隊のエンブレムの型と型の保管庫

そんな時代の流れの中で、四代目社長能作克治さんの代になり問屋からの受注生産だけではなく自社で商品を開発するようになった。そこで目をつけたのがすずという金属であった。すずは、他の金属に比べて低い温度で溶けて固まる非常にやわらかい金属である。電気回路をつなぐときに使用するはんだなどに主に使われている。やわらかい金属で、冷やして固めてもくねくねと曲がるため製品には向かず、それまでは他の金属と混ぜて製品の鋳造に使用されることはあったが、すずをメインで使用した製品は存在しなかった。そのため四代目社長がすずを使った製品を作ろうと言い始めたときは内外から反対の声があがった。しかし社長は諦めることなく研究を続け、10 年のあいだ試作品を作り続け、すずでできた食器を作り上げた。逆転の発想で、自分の好きなかたちに変えられると考え、さまざまな新しい製品を生み出していった。

写真 6-7.　家庭用コンロで溶かしたすずと冷えて固まったすず

すずは他の金属と混ぜる分量を変えることでやわらかさの程度を変えることができるのだが、その調合は簡単ではない。単に新しい型に金属を流し込むといっても、その金属の調合や、かき混ぜ方はとても複雑で、よくかき混ぜなければならないもの、かき混ぜてはいけないもの、銅は銅、すずはすずでそれぞれに適したやり方があり、そう簡単にできるものではない。この過程にマニュアルはなく、職人たちの勘でその繊細な作業が成功するのである。すずを使った製品は、能作の 100 年の歴史、100 年の伝統的な鋳造技術の蓄積があったからこそ、十数年の研究で完成させることができたのである。

さらに、すずの商品が完成したあとも、販売に至るまでには問屋からの反発があったり、販売ルートがそれまでの問屋からの受注生産ではないため、自分たちで模索し売り込みにいかなければならなかったりと話が簡単に進んだわけではなかった。現在では、テーブルウェアやインテリア雑貨、照明器具などを手がけ大きな成功を収め、東京や大阪、福岡の大手百貨店に直売店を持っている。富山県内でも富山市のショッピングセンター、デパートに直営店を持っている。

さらに、能作がある高岡には、能作の商品でケーキやコーヒーを楽しめる GALLERY NOUSAKU というカフェが 3 年前にできて、そこでも能作の商品を購入することができる。私が調査に行った際に、20 代後半の女性が商品を購入していた。話を伺うと、高岡市出身の女性で、テレビで能作を知り初めて店を訪れたという。奈良県から高岡に遊びにきた上司の方に、高岡で有名なものをプレゼントしたいということで能作の商品を贈ることにしたという。

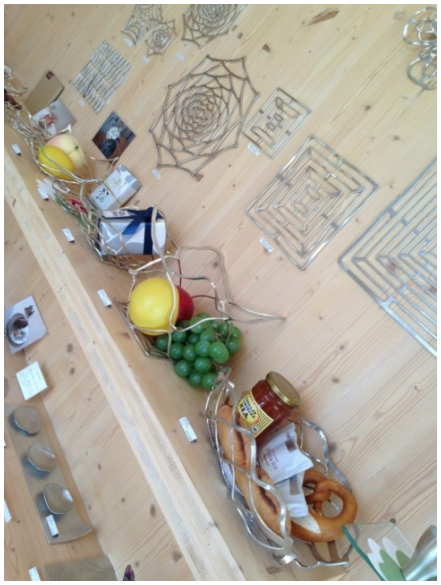

写真 8-9.　GALLERY NOUSAKU の店内と製品に盛られたデザート

それまで問屋からの注文を受けて製品の一段階を作っていただけで、能作がオリジナルの製品を作るということはなかった。つまり、能作のすず産業でそれまでと革新的に

違っているのが、能作は自分たちで製品を売るようになったことである。現在ではこのような商品販売のかたちをとる会社が能作をきっかけに増えてきている。

3-2.　高田製作所

1947 年に仏具の製造を開始した。高田製作所も、前述した株式会社能作と同じ、工業団地の中で鋳造を担当する企業である。高田製作所では、砂を固めて型を作るところから、金属をより純度の高い金属にして流し込み、仕上げの作業までを請け負っている。銅やアルミニウムを使った製品を製造しており、仏具の他にはドアハンドルやレバーハンドルを製造していた。近年では国会議事堂にドアハンドルを 2000 本収めている。

写真 10.　高田製作所

高田製作所は 2003 年ごろから新たな商品の研究を本格的にはじめた。現在では、個人や企業からの受注では仏具に加えて、ドアハンドルや電車の吊り棚、インテリア雑貨などを製作している。高田製作所のオリジナル商品としては、SHIROKANE という高田製作所が立ち上げたブランドラインから販売している、ビアカップやアクセサリースタンドがある。

写真 11.　SHIROKANE のアクセサリースタンド

さらに、時計部門の製造を主に請け負う別会社として、1984 年に設立されたタカタレムノスという会社からもさまざまなオリジナル商品が発売されている。タカタレムノスで商品の企画を行い、実際の製品はすべて高田製作所の職人が製作する。職人たちは千分の 1 ミリも違わずに設計図そのままに仕上げてくれるという。タカタレムノスから売り出されている商品の中で世界的に最も注目されているのが、アイスクリーム用のスプーンで、アルミニウムで作られており、アイスクリーム会社のハーゲンダッツや、ディズニーリゾートのホテルで公式に使用されているという。アルミニウムの熱伝導性に目をつけ、アイスクリームがほどよく溶けるそのスプーンはアイスクリームが最もおいしく食べられるスプーンとして有名である。

3-3.　小泉製作所

1889 年に創業し、1978 年に戸出工業団地に移転した小泉製作所では、仏壇仏具を専門に扱っていた。しかし、近年では大きな仏壇仏具が売れなくなり、都会のマンションに住む家庭では小さな仏壇を求められるようになっていた。そのニーズに合わせて、小さな仏具を製作することにしたが、製品が小さくなると個々の製品の値段が下がるため売上の減少は抑えられず、経営は深刻な状況に陥っていた。そこで小泉製作所でも自社製品を作ることになり、現在ではデザイナーがデザインしたクラフト品や美術品を生産、販売している。商品はインターネットや東京のデパートで購入することができる。デザイナーが製作した商品は仏具とは完全に違う商品として、小泉製作所から販売されており、製作所としては若い世代向けにインテリア雑貨として扱って欲しいという希望がある。しかし、仏具が有名なためおしゃれな仏具として扱われることが多くあり戸惑うことがあるという。そこで問題になるのが問屋との軋轢の問題である。仏具を販売するのであれば、問屋を通して販売するというのが工業団地での暗黙のルールであるため、独自で販売している商品が仏具として受け入れられ、購入されると問屋はいい顔をしないのだという。

写真 12-13.　小泉製作所

3-4.　平和合金鋳造所

平和合金鋳造所は今まで紹介した会社とは違い仏具ではなく、銅像を主に扱っている。現在では減ってしまったが、学校に設置されている二宮金次郎の銅像を多く製造していたという。問屋を通した委託の受注生産、問屋からではない個人からの直接の受注生産も行っている。中には漫画の作家からの依頼もあり、漫画の絵が描かれた記念碑のようなものも作ったことがあるという。そして、オリジナルの製品としては、銅で作られたマウスパッドや朱肉入れ、屏風などを作っている。他の会社が作っているものではない自社オリジナルの商品を作ろうと考え、ほかとは少し違った方向で新しい銅器製品を作っている。

写真 14-15.　平和合金鋳造所・製作した馬の像

3-4.　高岡銅器団地協同組合

1977 年に設立され、現在では上記の 4 社を含め 31 社が組合に参加している。高岡銅器団地協同組合では高岡銅器の経営の近代化と後継者の育成、生産性の向上などをかかげて、さまざまな事業を進めている。公害問題の解消にも力を入れており、鋳物の着色を行った際に出る有害物質の処理を行っている。さらに組合自身も製品の開発を行っており、銅で作られた洗面器や石鹸置き、灰皿などを製作している。

4.　伝統を継承する若い職人

高岡銅器の企業を訪れて、最も驚いた点は、その職人たちの若さである。高度経済成長期からの近代化、効率化の流れの中で、ある専門の分野において熟練された技術が必要な「職人」と呼ばれる人たちはどんどん減っており、後継ぎがおらずその技術が途絶えてしまうことが伝統産業において現在深刻な問題となっている。高岡の銅器産業が衰退していた理由は需要が減っているという外部からの問題もあったが、伝統的な技術を受け継ぐ職人が減っているという内部の問題もからんでいた。いつ潰れるかわからないという状況では若者たちに勧められないし、工芸関係の高校や専門学校を卒業した生徒

たちもその道に進もうという気にはならなかったのである。

しかし、高岡銅器の企業には若い職人が多く働いており、J-POP の音楽を流しながら作業をするなど現場の様子は私が想像していたものとは大きく違っていた。話を伺った能作の職人の平均年齢は 30 歳前後だという。高校卒業後にすぐに就職したという人や、他の会社に就職したが工場が潰れてしまい、移動してきたという人もいるという。夏には金属を溶かす熱で工場中が灼熱の温度の中で作業をしなければならず、嫌われる仕事である。にもかかわらず、伝統的な鋳造の技術と革新的なすずの技術の魅力に引き寄せられて今では多くの若者が働いている。中にはすずの技術を修得ために島根から来たという若い職人の方もおり、その方は元々万年筆をつくる会社で職人をしていたが、このすずの技術を知ってはるばる島根から富山に移り住んだという。

写真 16.　作業をする若い職人たち

5.　まとめと考察

400 年にわたる長い伝統を持ち、職人によって技術が継承されてきた高岡銅器、高岡の鋳物の文化は、近年時代の流れの中で生産量が減少し、経営破綻に追い込まれる企業も出てくるほど厳しい状況をしいられていた。現在日本の伝統産業では、多くの分野で後を継ぐ者がいない、新たな消費文化の中では伝統的な高級商品の需要が減っているといったさまざまな問題が生じている。そんな苦しい状況の中で、高岡の銅器産業は、それまでの伝統的なシステムに頼るのではなく、これまで培ってきた技術を活用しながら新しい発想でこれまでにない商品を作り出すことに成功しつつある。

ここまで紹介した革新的な商品は、ただ目新しいものに目をつけ、若者向けに商品を作ったのではなく、それまでの技術の積み重ねがあったからこそ完成させることができたのである。後退しかけた高岡銅器産業は今、すずやアルミニウムを使った商品、さらには職人たちのアイディアによって生まれ変わり、さらに発展していくだろうと思われる。

謝辞

今回調査を行うにあたり、仕事中にも関わらず戸出工業団地の企業の方々、職人の方々に貴重な時間を割いていただき、工場を見学させていただいたりお話を伺ったりと、大変お世話になりました。また、テーマを設定する際に市役所の方にも親切にしていただきました。この場を借りて感謝の意を述べたいと思います。

参考文献

北日本新聞社、1991 年 6 月 26 日、『高岡銅器　熱き心の系譜』
養田実･定塚武敏、1988 年 5 月 1 日、『高岡銅器史』、高岡銅器協同組合

参考にしたウェブサイト

「goo 地図」
（http://map.goo.ne.jp/mapb.php?MAP=E137.00.33.070N36.42.38.119&zm=6；2015 年 2 月 3 日閲覧）

「ものづくり・デザイン科」における伝統工芸と職人の想い

尾谷　沙霧

はじめに

私はもともと子どもが好きで、なにか子どもに関連したテーマで調査したいと思っていた。そこで高岡市のホームページを閲覧していたところ、「ものづくり・デザイン科」という必修教科が、市内の小学校・中学校・特別支援学校全 40 校で行われていることがわかった。私の出身地である富山県魚津市では、このような特別な授業は行っていないので、興味を持った。

事前調査の段階で、「ものづくり・デザイン科」では、地元の職人が実際に学校に訪れて授業を行っていると聞いていた。そこで私は、せっかく地元の住民である職人がこの企画に参加しているのなら、彼らがどのような考えや想いを抱えて、この取り組みに参加しているのかを知りたいと思った。また、「ものづくり・デザイン科」の授業を受けている生徒に話を聞いても、「楽しい」や「大変」などと言った、ありきたりな感想しか聞けないのではないかと思った。以上のことから、子ども（生徒）の目線ではなく、地元の職人の目線から見た「ものづくり・デザイン科」はどのように映っているのかが気になり、職人に話を聞いて調査を行うことにした。

1.　「ものづくり・デザイン科」の概要 [31]

1-1.　導入と開発の経緯

「ものづくり・デザイン科」が導入されたきっかけは、地場産業の活性化を図りたいという当時の市長からの要請であった。この要請により教育委員会だけではなく、すべての庁舎内関係部局から地場産業を活性化できるような、様々なアイディアが募集された。結果として教育委員会が提案した「ものづくり・デザイン科」の案が採用され、教科の設置が実現した。具体的には、2003 年 11 月に国の構造改革特別区域計画・第 4 次提案募集に応募し、2005 年に小学校 3 校、中学校 1 校をモデル校として試験的に実施して、問題点を探った。2006 年 4 月に内閣府より構造改革特別区域計画の正式認定を受け、市内の小学校・中学校・特別支援学校の全 40 校で「ものづくり・デザイン科」が新設された。2009 年度からは教育課程特例校制度を活用し、この授業を継続している。

[31] 本節の記述は『教育現場に革新をもたらす自治体発カリキュラム改革』（2014）を参考にした。

「ものづくり・デザイン科」は、小学 5・6 年生、中学 1 年生を対象にしており、小学校・中学校とも年間 35 時間、週 1 時間程度で実施されている。

表 1　高岡市の年間授業時数
(変更点のみ、下段は標準からの増減)

			新設教科
	図画工作科	総合的な学習の時間	ものづくり・デザイン科
小 5	40	45	35
	-10	-25	+35
小 6	40	45	35
	-10	-25	+35
中 1	-	15	35
		-35	+35

表 1 のように、小学校では図画工作科と総合的な学習の時間を、中学校では総合的な学習の時間（以下、総合学習とする）のみを削減し、「ものづくり・デザイン科」の時間に充てている。

中学校においても総合学習とは別に「ものづくり・デザイン科」を設置しているのは、地域の独自性を最大限に活かすことのできる教科を設けたいという教育委員会の思いがある。総合学習の中の 1 つの取り組みでは、授業を行っても総合学習全体の評価とされ、他の取り組みの中に埋もれてしまう可能性がある。そのため、教育委員会では「ものづくり・デザイン科」を 1 つの教科として設置することにこだわった。これまでちゃんと評価を行ってきた実績が文部科学省に認められ、特区から教育課程特例校へ切り替わる時も、中学校では教科を設置して実践を継続している。

1-2.　「ものづくり・デザイン科」に対する教育委員会の関わり

1-2-1.　外部講師の派遣調整

銅器・漆器の外部派遣講師は、各学校からの派遣要請を教育委員会が集め、伝統工芸高岡銅器振興協同組合、伝統工芸高岡漆器協同組合を通じて講師派遣を調整している。学校の希望日と講師の予定を調整するのはなかなか難しいが、年々合うようになってきているそうだ。これは、職人の方々が学校のシステムを理解してくれるようになったからではないかと、市役所の方は述べている。高岡銅器・漆器以外で地元の産品を扱う際には、各学校が直接地元講師に依頼する。

また、こうした各学校への支援・協力体制をつくるため、教育委員会では地場産業関係者・学識経験者・教育関係者の代表 15 名ほどで構成される「ものづくり・デザイン科運営委員会」を組織している。この「ものづくり・デザイン科運営委員会」では、「ものづくり・デザイン科」の実施計画及び評価に関すること、その他運営に関することについて話し合いが行われている。

1-2-2.　「ものづくり・デザイン科」の研修

「ものづくり・デザイン科」を新設するにあたり、教育委員会は市内の全小中学校、特別支援学校の教員を対象に、2005 年度から 2012 年度までの 8 年計画の研修を実施した。「ものづくり・デザイン科」の対象は、小学 5・6 年生、中学 1 年生であるため、本来ならばすべての教員が研修を受ける必要はない。特に中学校では、美術や技術家庭科の教員が授業を受け持つため、「ものづくり・デザイン科」を担当しない教員も多い。そのなかで、教育委員会が研修の対象を限定しなかったのは、市内の教員が「ものづくり・デザイン科」について理解を深め、高岡の良さを感情的に伝えられるようにすることが大切であると考えたためである。

したがって、すべての教員が授業を担当する可能性のある小学校は市内の全教員を対象とし、中学校においては授業を担当する教員だけでなく、担当しない教員であっても希望する場合は、研修を受けられるようにした。新規採用教員については初任者研修を優先し、2 年目に全員が研修を受けられるように配慮してある。

この研修は先程も述べたように、当初 8 年間の計画であったが、もう一度受けたいという要望が多いこと、また新規採用や他郡市から来る教員の受け皿としての役割も兼ね、2013 年度以降も継続して行われている。この研修は職人の方々が直接教員に指導するもので、2014 年度は銅器・漆器の職人が各 20 人ずつ、2 日間に渡って基本的なやり方を教えた。この研修を受けたことがあると言う市役所の方は、「子どもの目線を感じられるからよかった」と述べていた。

1-2-3.　予算

「ものづくり・デザイン科」には、年間約 1,800 万～2,000 万円の予算が計上されている。2011 年度の内訳は大きく以下の 4 つに分けられる。

① 児童生徒たちの製作する作品の原材料費

各学校には「ものづくり・デザイン科」に関して、児童生徒 1 人につき 1,350 円の予算と、学校への補助がつく。学校への補助は、「ものづくり・デザイン科」に関わる道具類の管理費として使われる。そのため、基本的に各家庭からの持ち出しはないとされている。

② 市内の施設等への見学に行く際の交通費

「ものづくり・デザイン科」では、高岡の伝統工芸や地場産業について学習するため、市内の関連施設へ見学に行く。これは「ものづくり・デザイン科」が教室の中で行う資料等による学習ではなく、実物を見ることを重視しているためである。具体的には、高岡市美術館（写真 1)、地場産業センター（写真 2)、鋳物資料館、鋳物工場、漆器工房などへ行き、様々な作品を見ながら話を聞いたり、実際の製造過程等を見たりする。その際の交通費には、半額補助がつく。

写真 1（左）.高岡市美術館（ウェブサイト「高岡市美術館 Wikipedia」より）

写真 2（右）.地場産業センター（ウェブサイト「高岡地域地場産業センター」より）

③ 非常勤講師として派遣される職人への報償費

講師として派遣される職人には報償費が出される。授業を行うには、準備にも時間がかかるため、それも考慮されている。2011 年度には報償費として 780 万円が計上された。

④ 教材費・道具費

「ものづくり・デザイン科」では、学習資料として「鋳造法と製作工程」「彫刻塗」「青貝塗」「高岡銅器と高岡漆器」の 4 冊（写真 3）を発行し、すべての対象児童生徒へ配布している。これらの資料はすべてカラーで印刷され、写真を用いてわかりやすくまとめられたものとなっている。

写真 3.　学習資料

（左から「鋳造法と製作工程」、「彫刻塗」、「青貝塗」、「高岡銅器と高岡漆器」）

1-3.　実施状況

1-3-1.　目標・内容・評価

「ものづくり・デザイン科」の目標は、1 つ目に高岡市の伝統工芸や地域の産業につ

いて見たり触れたり体験したりすることにより、豊かな感性と郷土を愛する心を育てることである。2 つ目に優れた技術をもつ地域の人々との交流を通して、ものづくりのすばらしさを感じ取り、より高岡市民としての意識を育むことである。こうした目標に基づいて、優れた伝統工芸や地場産業の見学、実技体験等による学習を、様々な分野から外部講師を招いて担任と協力して授業を行っている。実際に職人の技のすばらしさに触れることや体験学習が重視されている。こうした経験を通し、感動をもたらすことで児童生徒に郷土・高岡の良さを知ってもらうことを目標としている。

「ものづくり・デザイン科」では、教科が設置されて以来、評価項目を小中学校で共通にして行ってきたが、学校側からの要望を受け、2011 年度からは小中学校で項目を分けて評価を行っている。

1-3-2.　各学校で扱われる題材と作品

高岡市内の各学校において、「ものづくり・デザイン科」の授業で製作される作品には 2 つのポイントがある。第一に、題材について配慮されている点である。同じ中学校区の小学校においては、小学校間でなるべく題材の違いがでないようにするとともに、小学校と中学校間の繋がりも意識し、同じ内容にならないような工夫もされている。

第二に、学校のある地域によっては、その地域で有名な地元産業があるため、授業で扱う題材は各学校に任されている点である。例えば、旧福岡町にある福岡小学校では、その地域で菅笠の生産が有名なため、地域題材として菅細工に取り組んでいる。高岡銅器・漆器にこだわらず地元の特産を学ぶことを大切にしている。

1-3-3.　作品展の開催

製作した作品は、毎年 1～2 月にかけて行われる「ものづくり・デザイン科」作品展で展示され、一般公開される。この作品展は、市内の小学校・中学校・特別支援学校の「ものづくり・デザイン科」で製作した作品約 800 点だけでなく、市内にある高校生・大学生の作品や工芸作品も展示される（写真 4)。「ものづくり・デザイン科」の成果を披露する場であるとともに、教員や職人にとっては他の学校が行っている内容を知る機会となっている。

写真 4.　2015 年度に高岡市美術館で開かれた「クリエイティブ・高岡」のチラシ

2. 授業風景

実際に「ものづくり・デザイン科」の授業がどのように行われているのかを調査するために、高岡市の中心部にある博労小学校の 6 年生、1 組（27 名）、2 組（26 名）のそれぞれの授業を見学した。今年度の博労小学校の 6 年生は、漆器題材として青貝塗の置時計を製作していた。私が授業を見学した時には、すでに塗り工程まで終わっていた。前節でも述べたように、高岡の伝統工芸は分業制で作品を製作することが特徴である。ちょうど担当する講師が変わるところだったので、私は武蔵川義則さん・純子さんご夫婦が講師を務める、青貝工程の部分を見学した。

授業の流れは基本的に、1、2 時限続けて「ものづくり・デザイン科」の授業を実施し、最初の 1 時限を 1 組が、後の 1 時限を 2 組が行うという構成であった。ただし、第 3 回の見学時は簡単な作業で早く終わるということだったので、1 時限を 2 クラスで行っていた。

なお、青貝工程とは青貝塗の 3 つの工程の内の 1 つであり、ほかに木地工程、塗り工程がある。それぞれの工程をそれぞれの職人が行っている。青貝塗は漆黒の、深みのある光沢のなかに、鮮やかに虹彩色を放つ青貝を用いて、様々な図案を表現する独特の技法が特徴である。

2-1. 博労小学校における「ものづくり・デザイン科」の授業（第 1 回見学）

2014 年 6 月 13 日に行った第 1 回の見学では、以下の手順で授業が進められた。

① 図案を完成させ、トレーシングペーパーに描く
② 貝に鉛筆で図案を写す。図案の大きな部分から詰めて写していく
③ 貝の裏（鉛筆で写した裏）に絵具を塗る
④ 時計の板にチャコペーパー[32]を使って図案を写す

まず、あらかじめ生徒たちが考えていた、時計の周りに貼る貝の図案の最終確認を武蔵川さんが行い、物足りない場合などは「ここ寂しいね」、「なんか入れようか」などと生徒たちにアドバイスしていた（写真 5）。具体的に何がいいかなどとはあまり言っていなかったので、生徒たちの発想を引き出そうとしているように感じられた。武蔵川さんは生徒たちに、「図案を見た時に物語が見えるようにしてほしい。楽しんでやってほしい」と話しかけていた。

[32] 手芸等の図案写しや、ソーイングのしるしつけに使う複写紙。今回授業で使った「片面チャコペーパー」は、複写したい図案と素材の間に挟み、鉛筆等で図案の上からなぞるときれいにうつる。

図案が決まった生徒から貝に図案を写していくのだが、貝よりも大きな絵を描いていた場合は、パーツごとに分けて貝に配置するなど、貝を無駄にしないための工夫がなされていた。また貝が余った生徒には、デザインを再確認して、まだやりたいことがあったらやってみようと促していた。

写真 5.　図案のアドバイスをする武蔵川さん

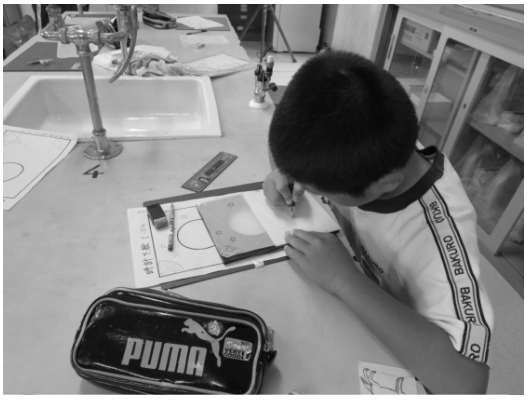

写真 6.　図案の確認をする生徒

全て写し終わった生徒から絵具を塗り始めた（写真 7）。貝が薄いため、鉛筆で写した線が裏からでも透けて見ることができる。時折、太陽の光にかざして確認している生徒もいた。皆はみ出さないように注意して塗っていた。生徒が絵具を塗る時も、武蔵川さんは「ここは違う色にしたらどうかな」などとアドバイスしていた。絵具を塗り終わったら、壁際の棚の上に置いて絵具を乾かした（写真 8）。その間に、どこにどの貝を貼るのかわかりやすくするために時計の板に図案を写すのだが、この作業は絵具を早く塗り終った生徒だけがやっていた。

写真 7.　貝に絵具を塗る生徒

写真 8.　塗り終わった貝

全員が④の作業まで早く終わった 1 組では、最後に少し時間を取って、生徒たちに図案の説明を発表させていた（写真 9）。「ものづくりする時の自分の想いは、デザインし

て計画を立てるということ。だからものづくりを説明していくことが自分の想いを説明するということになるから大切なんだ」と、武蔵川さんは語りかけていた。

生徒たちは恥ずかしがっていてあまり話してくれなかったが、ある女子生徒は、「テレビで見た時綺麗だと思い、自分でデザインしてアレンジして、もっと美しくしたいと思った」と発表していた。また、別の男子生徒は、「青貝塗を見に行った時、職人さんの図案がすごかったから、それを作りたいと思った」と発表していた。

写真 9.　図案の説明をする生徒

1 組は生徒全員が同じペースで作業が進んでいる様子だったが、それに比べると、2 組はペースの早い生徒と遅い生徒の差があるように感じた。図案の変更もなく、貝の一部しか色を塗らない生徒は、授業終了時刻の 30 分前には④までの作業が終わっており、残り時間は本を読んでいた。少し退屈そうな印象を受けた。一方、授業終了時刻いっぱいまで作業していた生徒もおり、早く作業が終わった生徒の中には、まだ作業している生徒の図案を見て「すごいね」と言ったり、「こうしたらいいんじゃない」とアドバイスしてあげたりする姿もみられた。個人差がこれほど出るのは面白いと思った。

2-2.　博労小学校における「ものづくり・デザイン科」の授業（第 2 回見学）

2014 年 6 月 17 日に行った第 2 回の見学では、以下の手順で授業が進められた。

① 貝を切る。工作板の上に貝を置き、左手でよく貝を押さえて、右手で針を使って鉛筆の線の上を切っていく。切った貝は図案の上のその位置に置いておく
② 板に写した図案の上に筆でにかわを塗り、その上に切った貝を置き貼り付ける。細かい貝はつけ棒を使って貼り付ける。割った貝は図案のとおりに貼る。余分なものは貼らない（貝むきが大変になるから）

第 1 回の見学時に色を塗った貝を切って、時計の板に貼る作業を行った。切る作業の時に武蔵川さんは、「心配な人は角の方からやられ。割れてしまった貝もちゃんと取っ

ておくこと。別のことに使えるかもしれんから」と声をかけていた。また、あまりにも細かいところや難しいところは、武蔵川さんがしてあげていた。

貝の切り方は、まず鉛筆の線を引いた方を表にして貝を置き、針を突き刺す。次にそのまま針を倒して、倒れている方向にゆっくり引いて切っていく。曲線状に貝を切る際には、針ではなく貝を回して切る。どうしても曲線状のところも針を動かしてしまう生徒もおり、そこが難しかったと言っていた（写真 10）。

生徒たちの図案の中には、桜の花びらや丸い模様をデザインしているものがあったが、これら 2 つには型があったので、武蔵川さんが金槌で打ち抜いていた。生徒たちは、最初は見ているだけだったが、次第に自分で金槌を持って、楽しそうに打ち抜いていた（写真 11）。また、特に 1 組では自分の貝が無くなると、他の生徒の余った貝をもらって、型で打ち抜いて自分の時計の板に張り付けている生徒もいた。生徒たちはこの作業に夢中になっているようだった。こうした生徒たちに対して、武蔵川さんは「余分なものは貼らない。そうすることで図案がわかりやすくなるからね。でも、なんか物足りないなと思ったら足していいよ」と声をかけていた。

写真 10.　針で貝を切っている生徒

写真 11.　金槌で打ち抜いている生徒

次に、にかわを時計の板に塗る作業も、「にかわを塗りすぎるとチャコペンの線が消えるから、数回だけ塗るように。5 分程で乾くから、また時計の板ににかわを塗って（貝を）貼られ。貝は重ならないように 1 枚 1 枚丁寧に貼ること。あと時計の周りは余裕を持って、少し間を空けて貼られ」と注意していた。今回の授業では、赤や青、黄色など色がついた細かい貝（写真 12）を武蔵川さんが用意してきており、生徒たちは自分のデザインに合った色の貝を選んで貼っていた。この時、説明を忘れていた生徒は貝を重ねて貼ってしまい、はがしてもらってやり直していた。

何人かの生徒に話を聞いたところ、「貝を切るのは難しかったけど、楽しかった」（男児）「自分が何かやりたいと言ったら、先生（武蔵川さん）がアドバイスしてくれた」（男児）「難しくなかった。楽しかった」（女児）とそれぞれの感想を聞かせてくれた。1 組は先程述べたように和気あいあいと作業を行っていたが、2 組は静かに自分の席に

座って黙々と作業をしており、クラスでも結構雰囲気が違うものだと感じた。合間に武蔵川さん夫婦に話を聞くと、「やっぱり嬉しそうにしてくれるとやりがいを感じるね。アドバイスをあげて上手にできた時、嬉しそうな顔しとったわ」と満足そうに答えてくれた。また、「男女で個性が出る。男の子はちょっと粗かったり、大きな動物をデザインしてるし、女の子はお花だったり、小さい細かいデザインが多いね」と面白そうに話してくれた。

写真 12.　色のついた細かい貝

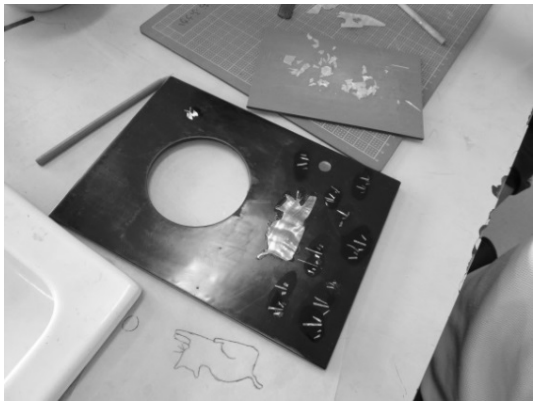

写真 13.　にかわで貝を貼りつけた時計

2-3.　博労小学校における「ものづくり・デザイン科」の授業（第 3 回見学）

2014 年 6 月 20 日に行った第 3 回の見学では、以下の手順で授業が進められた。

① 貝がちゃんと貼れているか点検する。浮いているところはコテをあてる。余分な貝は取る
② 毛彫り（貝の上の模様を針で彫る）
③ お湯でブラシを使いにかわを洗い流す。その後ハケで水を切っておく

この日の作業はとても簡単なもので、1 人 2～3 分で終わるらしく、流れ作業で行われた。まず一組に流れを説明してから、5 人 1 組のグループに分かれ、1 グループだけ作業をし、残りの生徒たちは教室に戻って自習をしていた。2 組も同様に行った。ただ、2 組は休みの生徒がおり、武蔵川さんがその生徒の作品を使って実際にやって見せていたので、1 組の時より説明がわかりやすかったように感じた。

武蔵川さんは、「貝がちゃんと貼れているか点検して、大丈夫やったらやすりで少し擦られ。さらっとして、つるつるになるから」と言っていた。貝の端が持ち上がってしまうと剝がれやすくなるので、コテをあてることによって端が丸くなりしっかり貼りつくそうだ。また鳥や魚などをデザインしていた生徒たちは、絵具では塗って表現できな

い羽毛や鱗の線を、貝の上から針で彫っていた。貝の最終的な点検やコテ、毛彫りの難しいところは武蔵川さんがしてあげていた（写真 14-15）。

写真 14.　コテをあてる武蔵川さん

写真 15.　毛彫りをする武蔵川さん

武蔵川さんの確認を得た生徒からお湯でにかわを落としていくのだが（写真 6）、純子さんが私に「ここ一緒にやってくれん？」と頼んでこられたので、ちゃんとにかわが落ちているか、私も確認した。生徒たちは、「あつーい」とはしゃいで楽しんでいるようだった。また、「これでいい？」と聞いてくれたり、「何年生なんですか？」と話しかけてくれたりと、生徒たちとも少し会話することができた。にかわを落とした生徒は、時計の板を水道水で洗い流し、ハケで水を切って（写真 17）、タオルで軽く拭いて、作業台に置いていった。「ハケをゆっくり動かすと水をよく吸うから。早く動かされんな」と武蔵川さんはアドバイスしていた。終わった生徒から教室に帰っていくのだが、純子さんが作業台にある時計の板を 1 枚 1 枚見直し、できていないものをやり直してあげていた。この日の作業で、見学は終了した。

写真 16.　お湯で洗っている純子さんと生徒

写真 17.　ハケで水を切る生徒

3. 職人の語り

「ものづくり・デザイン科」に講師として参加している職人の方々から、この取り組みについての語りを得ることができた。この節ではその語りについてみていくが、その前に、「ものづくり・デザイン科」の講師の 1 人である武蔵川義則さんの来歴を、簡単に記しておきたい。

3-1. 武蔵川工房・武蔵川義則さん

「ものづくり・デザイン科」の授業でお世話になった武蔵川義則さんは、武蔵川工房の三代目である。武蔵川工房では、高岡の伝統工芸である漆器の青貝加飾[33]の制作を中心に、建築、家具、金属製品への青貝加飾も手掛け、創作に励んでいる。工房は、1910 年に義則さんの祖父の代から始まった。義則さんは大学生の頃、建築やデザイン関係の仕事に興味があったが、当時は家業が忙しく、大学卒業とともに跡を継いだ。ただ仕事の内容は嫌いではなかったそうで、大学生の頃から家業を手伝わされていたこともあり、特に嫌々継いだわけではないとのことだ。とにかく無我夢中で、家業の技術は父親を盗み見て学んだ。父親の代はとても忙しく、蒔絵や錆絵、沈金等といった技術は、高岡市の育成スクールに週 1 回の頻度で通い学んだ。1988 年に現在の工房を設立し、義則さんが代表取締役となった。

現在は、義則さんの三男である剛嗣さんもこの工房で働いており、「ものづくり・デザイン科」に講師として参加している。また、義則さんが 30 歳の時に当時 19 歳の弟子を取ったそうで、その弟子は現在独立して活動しており、この方も「ものづくり・デザイン科」に講師として参加している。

義則さんが父親に技術を教わる時は、「ここはこうやってこうするんだ」というように細かく教わったわけではなく、「これやってみ」と言われ、とにかくやりながら覚えるという感じだったそうだ。義則さんが弟子や息子さんに技術を教える時も同じようにしたらしい。ただ、現在「ものづくり・デザイン科」で子どもたちに教える時には、「職人の感じと違うからね。発想を大切にして、なんでも決めつけないようにしている。はじめからうまくいくわけじゃないからね」と話していた。技術面で、上手にできているかどうか、やり方と違うことをしていないかどうかといったことよりも、子どもたちのアイディアを大切にされているようだった。

3-2. 職人の想い

「ものづくり・デザイン科」に講師として参加している職人の方々は、実際に活動していてどのような想いを感じているのか。

聞いてみると、「やっぱり、子どもたちが嬉しそうな顔をしてくれるのが自分も嬉し

[33] 加飾とは、器物の表面にさまざまな工芸技法を用いて装飾を加えること。

い。めっちゃ楽しいと言ってくれると元気をもらえる」という語りや、「教えとって楽しそうにやってる子とかわかる。そういう子に進んで教えたくなるね」といった語りが多かった。また、「上手にできなくて情けない顔をしている子もいるけど、アドバイスしてやって良いものができた時のあの（嬉しそうな）顔。上手くできてよかったわ」といった語りも得ることができた。ここから、職人の方々は「ものづくり・デザイン科」で子どもたちに教えることに対して、やりがいや喜びを感じていると考えられる。「大変だとは言っとれない。でも、孫に教える感覚でみんなかわいい。楽しいよ」と 60 代の男性の職人は語ってくれた。

また、「子どもから逆にアイディアをもらうこともある。勉強になるね。子どもならではの大胆さというか、常識を超える発想力がある」という語りや、「自分では思いつかないデザインをしている子もいて面白い」といった語りもあり、職人側が子どもたちから刺激を受けていることもわかった。一方で、「どっかで見たものを、そのままデザインする子が多い。自分の好きなものをデザインする子が少ないね。だから、（子どもにデザインを）変えたほうがいいよってアドバイスするけど。（『ものづくり・デザイン科』の授業で）何をしているのかよくわかってないんじゃないかな」といった語りもあり、子どもたちのデザインが画一化していること、授業内容の理解不足を残念がる職人もいた。子どもたちの中には、自分が何をしているのかよくわかっておらず、とりあえず他の子と同じようにすれば大丈夫だと思っている子もいるのかもしれない。

「ものづくり・デザイン科」で制作した作品については、「世界に 1 つだけのものだし、作った時の大変さもあるから、大事にしてくれているって聞いたよ」という語りや、「今は（何をしているのか）わからなくても、作品は形に残っているから。大きくなった時にこういうことやったんかってわかるやろ。それでいい」といった語りを得ることができた。さらに、「全員が全員上手に出来るわけじゃないから、とりあえず、ものづくりは楽しいもんやぞって思ってほしい」という語りや、「高岡にはこういうもん（漆器や銅器などの伝統工芸）があるんかと、子どもたちに知ってもらえるだけでいい。それで授業で聞いたことを、家に帰って親に話してねって言うん。そこから広まっていってくれたら嬉しいな」といった語りもあった。職人の方々は、「ものづくり・デザイン科」では、技術を覚えさせるというよりも、子どもたちに楽しんでやってほしい、高岡にはこんな伝統工芸があるということを知ってほしいという想いが強いと感じられた。それは、1-3-1 で述べたような郷土愛を育むなどという目標に繋がっていると思われる。

次に、授業のやり方については、「もう 8 年やってるから、職人側も学校側も慣れてきたんじゃないかな。やっていくなかで、工夫したりやり方を改良したりしてきたし、評価は上がってきてると思う」と語ってくれた。どのような工夫をしたのか聞いてみると、「時間の使い方だね。ここからここまでやったら次の段取りがやりやすいな、とか。この仕事は分担させてやらせよう、とか。技術面ではそんなに変化してないよ」と語った。

学校によっては、「問題のあるクラスもある。言うこと聞かんかったり、荒れたりしているけど、それはどうしようもない。あくまで職人が見るのは技術面だけで、教育面は教師が見るもの」と語っていた。ただ、「生徒の中にはキレたりする子もいる。その子にもアドバイスするけど、頭に血が上ってるからなんも聞かん。そういう時は諦めて自分の好きなようにやらせている。そしたら結構いい作品になったりするから、カーっとなって怒ったら駄目だなと思った」と、体験談を語ってくれた。

また、「授業の始めから終わりまでずっと椅子に座っていたり、黙って見ているだけの教師もいる。技術的なアドバイスはできなくても、デザインの案を出してあげたり、注意したりするぐらいのことはできるんじゃないかな。努力してくれてる人もいるけど、もう少し気を配ってくれてもいいと思う。それが生徒にも繋がってくると思うから」という語りや、「教師も全体の構成を理解して説明してくれればいいんだけど。うちらは足りない所を補助するみたいな感じでいいと思う」といった語りを得ることができた。

ほかにも、「兄弟がいる親とかに、毎年同じ作品なのかと言われるから、学校に違う作品を作りませんかと言うんだけど。学校は毎年担任の先生が変わるから忙しくて、一緒でいいよって言われるんだよ。だから変えようがないね」といった語りもあった。ここから、職人と学校の間には、まだまだ意志疎通が必要であるように感じられた。

「ものづくり・デザイン科」を通して、「将来、1 人でも 2 人でも職人になってくれれば嬉しい」といった語りもあった。そのためにも、市役所が当初計画していた 10 年間は、「ものづくり・デザイン科」を続けようかなという語りが多かった。しかし、一方で「職人の高齢化が進んでいる。今、学校に教えに行ってるのは 70 代がほとんどじゃないかな。7 割ぐらい。だから行政に要請して、学校に行ってる子を弟子に取ろうかな」と語る職人もいた。

また、別のある職人が言うには、金銭面でも課題があるそうだ。「『ものづくり・デザイン科』は、国のお金で運営されている。そのため同じことばかりしていたら国からの補助が減額されてしまうので、なにか新しい企画を持っていかなければならない。今は国が 8 割程度、市が 1、2 割程度を負担しているが、予算がなければ続けていくのは苦しい」と語っていた。それでも、「『ものづくり・デザイン科』は、高岡の伝統工芸を知ってもらういい機会だし、子どもたちにも誇りを持ってもらいたいので、形はどうなるにしろ続けていきたい」という、力強い語りを得ることができた。

4. まとめと考察

職人の方々は、子どもが相手であるが故に手を焼き、また可愛がりながら「ものづくり・デザイン科」を行っているように感じた。職人の高齢化が進むなか、孫のようでかわいいと思う方もいらっしゃり、微笑ましく思った。また、技術や手順を覚えたり知ったりしてほしいといったことよりも、「ものづくり・デザイン科」を通して、子どもた

ちに高岡の地場産業を知ってもらういい機会になっていると考えているようだ。そこから子どもたちの親、近所の人々に広がっていき、住民にも知ってもらうことができる。実際に、子どもから話を聞いた親が自分もやってみたいとのことで、職人の方々が近くの公民館でサークルなどを開いて教えたりもしているそうだ。

また、「以前まで全国的には、高岡の地場産業の認知度は低かったけど、『ものづくり・デザイン科』を始めてからは知られるようになった」という職人の語りからもわかるように、高岡市内、富山県内に止まらず、全国の人々にも知ってもらう機会になっており、より多くの関心を引き寄せるようになった。今後は新幹線が開業することによって、これまでより多くの観光客が高岡を訪れると思われるので、より一層知名度が上がるのではないだろうか。

子どもたちにとって、「ものづくり・デザイン科」で制作した作品は世界に１つだけのものであり、デザインも職人の方のアドバイスを受けて試行錯誤を繰り返している様子だったので、子どもたちの達成感は大きいのではないだろうか。そうやって制作した作品を、部屋などに飾ってくれていると聞いたことがあると話してくれた職人の方の顔は、とても嬉しそうだった。作品が大切に扱われ、形として残っていくことは、その子どもが成長した時に高岡の伝統工芸をより知るきっかけとなるだけではなく、職人の方々にとって誇らしく、喜ばしいことであるだろう。

さらに、「ものづくり・デザイン科」の授業を受けて、職人になりたいと言う生徒もいるようで、「将来、本当に職人になってくれたらな」と話す職人の方もいる。先程も述べたが、現在職人の高齢化が進んでおり、このままでは将来的に「ものづくり・デザイン科」のような活動を継続していけるか、わからない状態になっている可能性もある。それでも職人の方々は、「ものづくり・デザイン科」にとてもやりがいを持って活動しており、計画が続いていく限りは、形がどうなるにしろ続けていきたいと、積極的な様子であった。

おわりに

実際に「ものづくり・デザイン科」の授業を見学してみて、子どもたちがとても楽しそうに活動しており、「私もしてみたかったな」と思うことがたくさんあった。なにより、自分が住んでいる地域の伝統工芸を学び知ることができ、体験でき、１つの作品を製作できることは、一生の財産になるだろう。また、地元の職人の方々に直接教えてもらえるということにも、大きな意味があると私は思う。職人と職人、職人と子ども、職人と教師といったように、「ものづくり・デザイン科」の授業を通じて、高岡の中で人と人との繋がりが増えてきたのではないだろうか。そしてこれからも増えていくだろう。このすばらしい活動を継続させていくためにも、より改善できるところは改善していき、職人の後継者問題にも全力で取り組んでいくべきではないだろうか。「ものづくり・デ

ザイン科」のような活動が今後も続いていくことを、私は願っている。

謝辞

本調査を進めるにあたり、多くの方々から貴重なお話をお伺いすることができました。また、授業の見学に同行させていただいた武蔵川さんご夫婦、見学を許可していただいた博労小学校の教職員の皆さんのおかげで、大変貴重な経験をさせていただきました。他にも市役所や地場産業センター、職人の方々など本当にお世話になりました。この場をお借りして感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

参考文献

大桃敏行・押田貴久、2014 年、「第 9 章　富山県高岡市におけるカリキュラム改革への取り組み-「ものづくり・デザイン科」-」『教育現場に革新をもたらす自治体発カリキュラム改革』、学事出版

参考にしたウェブサイト

「武蔵川工房<伝統工芸高岡漆器 螺鈿>」
（http://www.raden-musasigawa.com/；2014 年 7 月 23 日閲覧）

本町における空き家と住民と意識

上野　慎司

はじめに

実習ではじめて高岡市を訪れた時、様々な特徴を持つ家や家々の間にある小道といった独特の景観が印象に残った。同時に、空き家や利用されていない施設など、住民に利用されていない空き物件が気になった。その印象から、様々な空き物件と隣り合って生活する高岡の住民が、空き物件に対してどのような印象を抱いているか、また、空き家に対してどのような行動を起こしているかということに関心を持ち、調査を行うこととした。ちなみに、本稿でいう「空き家」とは、利用されていない民家のことで、空き物件とは、空き家以外に利用することができる施設を含む利用されていない物件全般のことである。

調査を始めてみると、高岡市では、すでに「高岡まちっこプロジェクト」という住民団体が空き家に対して取り組みを行っていることがわかった。そこで、高岡市の住民及び「高岡まちっこプロジェクト」に聞き取り調査と観察を行った。主に聞いたことは、住民は空き家に対してどのように感じているか、「高岡まちっこプロジェクト」はどのような目的でどのように空き家に対して取り組んでいるかなどについてである。この章では、聞き取りと観察から得られたデータをもとにして、全国的に増え続けるまちの中の空き家に対してどのように取り組んでいくかということを、「高岡まちっこプロジェクト」の活動を例に考察していく。

1.　調査地の概要

高岡市の空き家の数は平成5年の5,050戸（住宅総数の9.0%）から平成15年には8,030戸（同12.8%）に増加している（旧高岡市）。特にまちなか区域の空き家は平成10年の320戸から平成18年の656戸と著しく増加しているが、有効活用が図られていないというのが現状である。

調査地として、高岡市本町という地域を選んだ。高岡市本町は高岡駅の北に位置し、南には路面電車の万葉線が通り近くには高岡古城公園がある（図 1）。人口は男性 331人、女性363人の計694人、世帯数は316である（平成26年）。

図 1.　高岡市本町の位置

2.　空き家について

現在日本において、空き家は増加している。5 年に 1 度行われる総務省の「土地・統計調査」(2008) によると、全国の総住宅数 5,759 万戸のうち空き家は 757 万戸であり、空き家率は 13.1%に達している。

空き家の問題点として、空き家に対する放火、隣の家への空き巣がしやすくなるといった治安の悪化がある。アメリカのデトロイトなどでは空き家率が 29.3%と高く、勝手に空き家に人が入り、薬物を乱用するなど犯罪の温床となっていた。日本でも、兵庫県加西市で空き家の民家と使われていない元皮革工場内の三ヶ所で、外国人グループが大麻栽培していたことが摘発され、逮捕に至った事例がある。また、空き家から遺体が発見されることもある。

また、空き家への不法投棄によって生まれる悪臭やホームレスが住み着くといったことが挙げられる。空き家は人が住まないことで建物の劣化スピードが早まるため、地震が起きた時に古い空き家は倒壊し、避難経路を防ぐこともある。

空き家が増えている最大の原因は少子高齢化である。加えて、空き家を更地にすると税制面での優遇措置がなくなることも挙げられる。空き家は税制上「家屋」として扱われ、その敷地は「住宅用地」となるため、更地に比べて固定資産税が軽減される。加えて、空き家を取り壊す解体費用は高額であることが、空き家が増えていることに繋がっている。

空き家は上に述べたように様々な問題を抱えているため、空き家強制撤去の条例を作った自治体は 401 と少なくない。しかし、空き家といえども個人の所有物であるため、強制撤去を行うと個人の財産権を侵すことになりかねない。また、行政が行った空き家強制撤去は新たな課題を生み出した。それは、空き家の持ち主に請求する強制撤去の費用が行政は回収できないということである。その理由は、所有者が土地を担保にお金を借りることが多く、その場合は返済が優先されるからである。前述のように空き家を撤去する費用は高額であり、自治体の財政を圧迫しかねない。そのことから今後自治体が空き家を減らすことは容易ではない。

3. 住民の意識について

まず、本町内の空き家の多さに対する認識、および空き家に対しての問題意識があるかという問いに対する住民の語りを世代別に見て比較していくこととする。今回の調査では 30 代以上の本町の住民に聞き取り調査を行った。

3-1. 30 代

ある専業主婦は、「空き家は多いなという認識です。住む人が少ないと交通量も少ないので、子どもが安心して道で遊べるのは良いことですが、一緒に家で遊ぶ子供が少なくなってしまうのはとてもつらい」と話している。また、別の女性は「このあたりは一方通行などが多く、車が入りづらい。車社会の富山では、このあたりはあまり魅力を感じないのではないか」と語るように、30 代では自家用車を持っている人が多いこともあって、この世代の人々は道路の狭さなどを空き家増加の原因に挙げる人が多かった。

しかし、別の男性会社員は、「本町で車に乗らないことにはもう慣れました。近所の人も優しく、それでいて、あまり深く関わろうとしないのでこのあたりに住んで良かった。小学校やスーパーなども近くにあり、車を使わなくても便利です」と語った。

3-2. 40 代から 50 代

50 代の男性は「40 年前に本町にやってきた商売屋さんが多く、今空き家になってい

るのはその時にできた家ばかり。若者が町に来ると活性化すると多くの人は語るけれども、商売が出来ない若者が来たところで、結局その若者は仕事が出来ずにどこかへ行ってしまう。なので、40 代の人達が魅力的なまちをつくらなければいけない」と語っていた。

50 代の女性は、「私はもうこのあたりに暮らして長いことが経ったため、不便さなどは感じないが、若い人たちにはあまり便利そうに見えないところがこのあたりに人が住まなくなった原因なのではないか」と語った。

3-3. 60 代以上

70 代の女性は「一人暮らしの老人が亡くなっていることで空き家が増え始めている。若い人があまりいなくて、小道で遊ぶ子供達が減ってしまっている。遊び声を聴けなくなってしまったのは悲しい」と語る。

80 代の男性は「一人暮らしをしているが、私の子たちが 1 週間に 1 度ほど来るが、私が亡くなったら私の住んでいるこの家はおそらく空き家になってしまうだろう。空き家は 10 軒のうち 2～3 軒ほどあるが、このままいけば、おそらくこのあたりに人は住まなくなっていく」と語っている。

70 代の女性は「このあたりに空き家が増えている理由として、生活の不便さを挙げている人が多くいらっしゃるが、私自身生活に不便を感じたことはありません。近くにスーパーがあるし、路面電車が通っていることで交通の不便さを感じたことはありません。このあたりであれば自転車があればどこにでも行けるし、なんだって買えます。冬であっても、歩いて行ける距離にスーパーやコンビニがあることで大抵の問題は解消されますので、むしろ便利といった方がいいのではないか」と語った。

3-4. まとめ

以上のように空き家が増えているという認識は共通しているが、世代によって空き家の増えた原因の考え方はさまざまであることが分かった。30 代から 40 代は引っ越してきてから日が浅く、生活の不便を理由に空き家が増えているという認識が多いが、40 代から 50 代は他の町に住む人から生活が不便に見えていることを原因に挙げられていた。それと同時に、家を建てることの金銭的負担によって、若者が空き家の多い本町に来ないのではないかと考える傾向にある。

60 代以上になると、空き家の話だけでなく、昔本町には子供が多かったという話をされる方が多く、人口減少が空き家の原因だと考える人が多い傾向にあった。その一方で、生活の不便さについて言及する人は少なかった。

世代間で空き家増加の理由として挙げるものが異なるのは、車を必要とするかどうかのライフスタイルの違いだということが分かる。

次の節からは生活の不便さについてもう少し掘り下げてみてみることとする。

4.　本町という住環境や雰囲気について

本町という町は多くの住宅が密集しているため、道路の幅が狭く、車にとっては非常に通りづらい地形である。大通りに面している場所もあり、そこでは、コンビニやスーパーといった生活必需品を買うための施設などが多く存在している。

写真 1.　一方通行の道路

古い空き家などがよくある一方で、比較的新しい家なども建っている。家の大きさは大小様々であるが、かつて商店などが多かった影響か個性的な建物が多く、敷地内に大きな蔵があったり、敷地内に高級な洋館がある建物なども存在する。

30 代の女性は「治安がとてもよく、近所づきあいも楽であることが魅力」と語っている。その一方で 30 代男性は、「10 代や 20 代といった若者向けの娯楽施設が少なく、郊外の施設の方が服の店や遊び場があり、その点では魅力があまりないのではないか」と語っている。また、60 代の男性は「この辺りは定年退職した人が多く、いろんなことに挑戦しない人が多い。若い人には来てほしいが、高岡は働き先も少なく、若者が来るためには就職先が必要」と語っている。

5.　高岡まちっ子プロジェクト

5-1.　高岡まちっ子プロジェクトについて

空き家に取り組んでいる団体として、市民団体であり高岡市本町を拠点としている「高岡まちっ子プロジェクト」が挙げられる。この節では、高岡まちっ子プロジェクトがどのように空き家に対して取り組んでいるかということを紹介するとともに、実際に参加した経験をふまえてその影響について考えていく。

高岡まちっ子プロジェクトとは、高岡の中心市街地の空き家を活用して若者の「まちなか居住」を促進していくことを目的に立ち上げられたプロジェクトである。メンバーは実行委員を中心に、イベントごとに富山大学芸術文化学部や東京工業大学の学生などに協力してもらっている。2012 年 11 月 30 日の設立時には富山大学芸術文化学部の学生とワークショップを行っている。

実行委員の一人であり、発起人である荒井理恵さんはこのプロジェクトを始めた動機を以下のように語る。

「日本では人口が減っていて少子高齢化が今後も続くと思うのです。特に地方は車社会のため、一方通行や狭い路地が多く、市内にわざわざ家を持たないほうが便利かもしれません。実際この辺りに住んでいる人はおじいちゃんおばあちゃんなど、ご高齢の方ばかりで、昔から住んでいる人が多いんです。そのおじいちゃんおばあちゃんも、ご自身の子供のところに引っ越しているし、所有権があるまま空き家となっている家が多いのです。その空き家はゴミや管理の問題から結局は取り壊されてしまう。資源が限られている中で、そんな風に資源を使ってててもいいのだろうかと思ったんです。

私がこのプロジェクトを始めたのは、町がなくなっていくのが嫌だったからです。また、もう一方ではなにか楽しいことをやりたいということもあります。つまり、楽しく社会貢献したいということですね。

私はドイツに留学していた時があるのですが、ドイツも若者が市内に住まないという同じような問題を抱えていました。しかし、同じように車社会だったドイツでは、市内で自転車利用を推進したり、公共交通機関をうまいこと利用して住みやすくすることで、市内に住む若い人たちを増やしたという実例があって、それを見て私もなにかできるのではないかというふうに思ったのです。

いまは、5 つの空き家を利用して、シェアハウス３つと宿泊施設とカフェをやっています。この空き家利用の方法はどれも利用者からお金を取るいわゆるビジネスの形で行っています。なぜかというと、空き家利用を持続可能にするためなんです。例えば、私がいなくなったら、そこでこの家に対して投資することができなくなって、維持することができなくなります。そうしたら、その空き家はいずれ取り壊されて、市内に人が住むことが難しくなる。むしろビジネスとしてやっていくことで、私でなくとも維持費などを捻出できる場所が提供できるんです。

また、空き家を利用して、人を住まわせることで、その人が空き家問題に目を向けて空き家に対してなんらかのアクションを起こしてくれることを期待しています。そうすることで、地域の人に空き家への問題意識が波及してくれればというふうにも思います」

この語りの最後の部分のように、高岡まちっ子プロジェクトは空き家に対する直接的な取り組みだけでなく、空き家という問題を地域の人や学生に気づかせるために幾つかのイベントを行っている。今回はその中で、3 つのイベントを見ていくこととする。

5-2. 地域の人と空き家利用のワークショップ

本町には、1935 年に建てられた延べ床面積が約 600 平方メートルの小杉邸という邸宅がある。この小杉邸という空き家を良い形で利用するという目的で、2014 年 6 月 14 日にまちっ子プロジェクトのメンバーと地域の人たちのワークショップが開催された。

小杉邸は維持されていない完全な空き家ではない。しかし、家主である小杉さんがアメリカに住んでいることもあり、小杉邸は現在二階がシェアハウスとして利用されているだけで、一階部分はほぼ空き家という物件である。このワークショップの目的は、主催者側の考えとして、地域の人の意見を聞くことと、地域の人に問題を認識してもらい、自発的に考えるようにすることである。

参加人数は３０人程度で、小杉邸の一階部分をどのように利用できるかということについて話し合った。行った手順は以下の通りである。

まず４つほどのグループに分かれ、グループ内で各人が自己紹介を行う。私が参加したグループのメンバーは、町内会長の島さん、東京工業大学の学生の大西さん、市役所に勤務されている角田さん、そして、小杉邸を管理されている津田さんという方であった。

その後に円滑に進めるグランドルールというものが発表された。それは、「みんなが話す」「みんなで聞く」「否定しない」「笑顔でいること」の４つであった。

次に、「アイデア出し」をグループで行った。これは、空き家をどのように利用できるかについて何でもアイデアを出すというものである。私のグループでは、寺子屋として利用する、映画館として利用する、保育施設などとして利用する、この家を背景に映画を撮るなどの意見が出た。特に最後の意見に関してはこの家を管理している、津田さんが感情を込めて述べていた。

次にそのアイデアをある程度絞り込むために、参加者全員で投票が行われた。参加者はそれぞれ３枚のシールを持ち、気に入ったアイデアにシールを貼り、その中で人気のある５つのアイデアが企画書として制作されることになった。今回選ばれたアイデアは「映画」「喫茶」「イベント場」「寺子屋」「囲碁将棋」であった。

それが終わると、自身が気に入ったアイデアのグループに入り、企画書を作成した。この企画書を作成するにあたって一番気にすべきことは、持続可能なビジネスとして展開できることである。私はイベント場というアイデアのグループに入り、企画書作成を行った。

その後、各グループ企画書を発表し、小杉邸の主人である小杉さんからの手紙が朗読されワークショップが終了した。

写真 2.　小杉邸でのワークショップの様子

5-3.　高岡まちあるき

その日、小杉邸でのワークショップが終わると、昼休憩を挟み、高岡市街地の大通りの一本道の隠れた魅力を探すための、高岡の町を散策する高岡まちあるきが開催された。主催は高岡まちっ子プロジェクトの学生委員である東京工業大学の学生たちである。参加者は、20 名弱で、まちっ子プロジェクトのメンバーを除くと、5 名ほどであった。

散策とはいってもルートは決まっており、本町を中心とした空き家市街地を巡る空き家ツアーのようなものである。東京工業大学の学生たちに話を聞くと、空き家と何かしたい人とを会わせるお見合いの様なものである、とのことであった。

見物した物件は全部合わせると 13 軒で、空き家は 6 軒であった。その他の物件は高岡まちっ子プロジェクトが管理しているシェアハウスや、高岡ホテルや銅器などを扱うアーティストの作業場など高岡らしい物件であった。

まちっ子プロジェクトのメンバー以外の一般の参加者の話を聞くと、新しい家が欲しいという方やなんとなく参加したという人など様々であった。まちあるき終了後に話を聞くと、高岡の新たな一面が見られてよかったなどという意見が大半であった。

5-4.　空き家蚤の市

2014 年 10 月 4 日と 5 日の二日間、前述の小杉邸にて第二回空き家蚤の市が行われた。空き家蚤の市とは、高岡の空き家に眠っていたものが出品される蚤の市のことである。まちっこプロジェクトが空き家を整理する際に見つけたまだ使えそうなものを売るというもので、出品されたものの値段は非常に安かった。例を挙げると、レコードや本は好きなだけとって 100 円という価格設定であった。高岡の町屋から出た本や服、雑

貨品などおよそ 300 点が出品された。

1 日で 120 人ほどの来客があった。物品の運搬費などが出費として挙げられていたが、市からの助成金もあり、その収益は学生のアルバイト代やまちっこプロジェクトの活動費として使われた。

写真 3.　第二回空き家蚤の市　出品された食器類（左）
写真 4.　第二回空き家蚤の市　出品されたレコード、雑貨類（右）

5-5.　町の人の認識

70 代の女性は高岡まちっこプロジェクトのことを「なにかまちのためにやっている団体」と認識しており、実際に何を行っているかということはわかっていない様子であったが、それでも「まちの活性化のためになにかやってくれているのは非常にありがたい。特に若い人が中心となって動いているように思うので、これからもがんばってほしい」と語っていた。

30 代の男性と 30 代の女性、50 代の男性は空き家蚤の市に行き、「町の中に眠っている空き家などの資源を有効活用しようという団体」という認識であると語った。しかし、50 代の男性はやや否定的な口調で「若い人たちが来ても、地元の経済は回らないよ」と語っていた。

5-6.　まとめ

高岡まちっこプロジェクトは、高岡市本町を拠点とし、若者が高岡のまちなかに居住することを目指しているが、代表者の語りのように、多くの活動が利用可能な空き家を再利用するという考えをもとに活動している。その一方で、ワークショップなどの高岡まちっこプロジェクトの活動に富山大学芸術文化学部の学生や高岡の若手工芸作家などの若い人たちが参加しているのが見られたりと、空き家への問題意識を若い人たちに認識させることにも貢献している。高岡まちっこプロジェクトは着実にその成果を伸ばしているといえるだろう。また、若い人たちだけでなく、地域の人達が進んでワークショップに参加したりと、空き家への問題意識を広げることに成功している。そのためか、

本町以外にも空き家を使った同様の取り組み（金屋町元気プロジェクト）が金屋町でも立ち上げられた。高岡まちっこプロジェクトが波及させた空き家への問題意識が今後広がっていく可能性はあるといえよう。

6. まとめと考察

高岡まちっこプロジェクトの活動の歴史はまだ日が浅く、町の人全体に具体的に認識されているまでとはまだいうことはできない。しかし、徐々にではあるが、町の人に空き家に対する問題を意識させている。空き家の問題は少子高齢化によるものが多いとされるが、それに加えてまちなかの空き家の存在は町の住環境の魅力を削ぐという課題が見えてきた。

町の人の語りを聞くと、他の地域に住む人は本町の住みやすさについて誤解している部分がある。その認識のずれをなくすことが、若い人に限らない多くの人が高岡市本町に居住するためには必要なことではないのだろうか。このことは高岡市本町だけでなく、空き家が増えているどの地域にも共通する課題である。もちろん、実際に住環境が悪いのであればそれは改善すべきである。しかし多くの場合、特に都市地域においては、まちなかの不人気は認識のずれによるものが多いようだ。住環境が整っている地域における空き家問題の重要課題は、その様なズレをなくしていくことであると考えられる。高岡まちっこプロジェクトの取り組みはこのような解決策の途中段階にあると言えよう。

おわりに

最後に感想を記したい。個人的な話になるが、私の住む富山県射水市（旧小杉町）は今後間違いなく過疎化が進行していくであろうと考えられている。その理由として、坂道が多いことと交通の便が悪いことが挙げられる。坂道が多いことは自転車を使うこと不便にし、交通の便の悪さは都市部へのアクセスを限定する。となれば、交通手段は自ずと車に限られていく。しかし、高齢化が進むにつれて、車に乗ることも困難になる人が多くなる。若い人たちはこのような町に住んで老後を迎えたがるだろうか。

このような問題を解決するためには、高岡市本町のようにズレをなくすことより先に住環境をよくすることが必要であるが、それは容易なことではない。

高岡市本町に限らず空き家問題が深刻化して、町の人が少なくなると、住環境もいっそう悪くなってしまう。

これはあくまで私の個人的な感想であるが、都市部にも住環境が良いところがなくなってしまうと、地方に良い住むことが難しくなってしまうのではないかとやや危惧している。そのためにも魅力あるまちづくりというものは非常に大切なことであると考える。

富大生の目線で
ふるさとを
再発見！

富山大学文化人類学実習成果報告会
（第 132 回　北陸人類学研究会）

日時：3 月 9 日(月)14:00～16:15

会場：高岡市ふくおか総合文化センター
（U ホール）第一研修室

＜プログラム＞

14：00　趣旨説明（富山大学人文学部准教授・藤本武）
14：05　伝統と観光が融合するつくりもんまつり（能登琴乃）
14：20　無形文化財の継承・保存活動―民間雅楽団体「洋遊会」を中心に―（本多梓）
14：35　菅笠制作技術の保存・継承の現状―様々な立場・視点―（中村則恵）
14：50　福岡町小野の獅子舞の伝承（三島紗弓）
――休憩――
15：15　寺院と地域社会のつながり―小野の西照寺を例に―（馬川法子）
15：30　地域コミュニティーが作る高岡七夕まつり（船越楓）
15：45「ものづくり・デザイン科」における伝統工芸と職人の想い（尾谷沙霧）
16：00　本町における空き家と住民の意識（上野慎司）
16：15　閉会の辞

どなたでもご参加いただけます。お気軽にお越しください！

問い合わせ：
富山大学人文学部文化人類学研究室（藤本武）
Tel：076-445-6185
E-mail：fujimoto@hmt.u-toyama.ac.jp

高岡市ふくおか総合文化センター（U ホール）へのアクセス

地域社会の文化人類学的調査 24
受け継がれる伝統と現在—高岡・福岡に生きる人々—

発行日：2015 年 3 月 1 日　第一版（印刷版）
2015 年 3 月 31 日　改訂第二版（電子版）
編　集：藤本　武・野澤豊一
発　行：富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555　富山市五福 3190
Tel.　：076-445-6185
E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
印　刷：（株）オダケ印刷
〒931-8453　富山市中田 45-63